

銀河英雄伝説

# ギャラルホルン・序曲

Giallarhorn Ouverture

猫屋 真

|             |     |
|-------------|-----|
| ある士官候補生の日常  | 3   |
| 距離の防壁／距離の暴虐 | 94  |
| 混乱          | 165 |
| 皇帝亡命        | 273 |
| ギャラルホルン・序曲  | 358 |
| 来訪者         | 402 |
| 信ずべき未来      | 449 |

## ある士官候補生の日常

「グレートヒエン——」

聞き覚えのある声。ごく近い、以前には毎日のように聞いていた声に呼ばれて、マルガレータ・フォン・ヘルクスハイマーは目を覚ました。ベッドに半身を起こして周囲を見回したが、視界は漆黒に塗りつぶされ、声の主の姿を見いだすことはできなかった。目を覚ましたというのは錯覚で、自分はまだ眠りの淵の中に全身を浸したままなのかも知れない。

思うと同時に、耐え難いほどの眠気が襲いかかってきて、マルガレータは再びまぶたを閉ざそうとした。

「起きなさい、グレートヒエン——」

また、声と呼んだ。

「誰——？」

もう一度目を開く手間を惜しんで、そのまま瞼を伏せたままで応えるという習慣は彼女にはない。睡魔に肩を押さえつけられるのを感じながら、今一度、上体を起こすと、マルガレータは闇に向かって誰何の声を放った。

「誰じや、妾を呼ぶのは!?」  
たれ わらわ

『グレートヒエン、わたしの声さえ聞き忘れたか?』

視界の中央、浮かび上がった凄惨な光景に、しかしマルガレータは僅かも目を背けようとはしない。見開かれたまま、血流を凍り付かせた赤黒い網の目を透かした両目。破裂した毛細血管からの出血と同じく赤黒く変色した皮膚、一瞬に皮膚から蒸発し凍り付いて霜となった水分が、死に化粧の代わりにその顔を縁取っている。安らかと言うには余りに隔たりのありすぎる、父ヘルクスマイヤー伯爵の死に顔だった。

普通なら恐怖を覚えて良い、酸鼻を極めた有様だったが、頬を流れるものをマルガレータは意識した。

「忘れはしませぬ、父上」

父の死と、それに先立つ母の毒殺。そうしたものが決して他人事ではなくて、いつかは我が身に降りかかってくるに違いない、帝国の貴族社会にとってごく日常的な出来事でしかないことを悟ったのは何歳の頃だっただろうか。

幼い頃から書物が好きだった。架空の世界を描く小説よりも、実際の人々の営みを記録した書籍が好きで、最初は父の書斎。学齢に達してからは専ら学校の図書館に入り浸っていた。

「ヘルクスハイマー伯のご令嬢ともあろう方が、そのように書物ばかりを相手になさってはなりません」

ともすれば伯爵邸の図書室や、学校の図書館につま先を向けがちなマルガレータに、ヘルクスハイマー伯の側近が眉を顰めて見せたのは、当然すぎることであった。

マルガレータの知るところではなかったが、彼女が生まれた当時、皇帝フリードリヒ四世の女性への嗜好が一変したことは、宮廷貴族

の間では余りに有名だった。マルガレータの父ヘルクスハイマー伯が、人並み以上の容姿に恵まれた我が娘に、いずれは第二のベーネミウンデ侯爵夫人の道を、と夢想しなかったはずはなかったからだ。

「では、どんなことをしていれば良いというのじゃ。仮に妾が新わらわ

無憂宮むゆうぐうに伺候することがあつたとして、書物の一冊も繙ひもといたこと

すらない程度の無知さでは、皇帝陛下や他のお歴々に無礼の極みというものではないか」

「高貴の女性に求められる知識なり、教養なりは、そのように文字を経て身におつけになるものではありませんぬ」

例えば、ワインや宝石に関する知識や蘊蓄であり、宮廷での流行に関する敏感さであり、良い馬を見分け、殿方の気を逸らさぬ巧みな会話術である。さらには、宮廷にあつてヘルクスハイマー伯爵家の体面を汚さぬだけのマナーと、身だしなみ、季節と場所柄に合わせた衣服の着こなしの術すべだった。

「これらは決して文字からは学ぶことも身につけることもできません。自ら試みられ、自らの身に覚え込ませぬ限り、なかなか以て我がものとなす事は叶わぬことにございます」

「そのような知識、何の役に立つというのか？」

納得できなかった理由は思い出せない。当時、自分はまだ一〇歳にすら間があった。自分が何者でありたいのかすら、明確には分かっていたいなかった。ただ、宮廷の貴婦人となるために要求される知識や技術、蘊蓄などと称するものに、どうしても馴染むことのできない違和感を感じていたことだけははっきりと覚えている。もちろん、貴族の子女としての嗜みに対しても単なる受容以上の態度を持って接してきたつもりだったのだが。

リップシユタツト戦役の開戦に際して、ラインハルト・フォン・ローエングラムが、四〇〇〇家にも及ぶ帝国貴族を嘲笑したとされる言葉がある。

『四〇〇〇余家、以て畏<sup>い</sup>するに足らず。敬するに<sup>あた</sup>価<sup>あ</sup>わす。ただ一女<sup>7</sup>

をもつて例外と為す』。

芸術家提督エルネスト・メッククリンガーが、その日記に伝える言葉であり、『一女』がマリーンドルフ伯爵令嬢ヒルデガルトを指すことは言うまでもない。ラインハルトの、旧勢力への評価を正確に示すものに違いなかった。

「ここで歴史を詳細に鑑みれば、逆接の接続詞を以て解説を続けるべきであるかも知れない」

これは、同じくメッククリンガーがその日記に綴った一節である。

「この時期の若き世代の貴族をつぶさに観察するならば、マリーンドルフ伯爵令嬢に比肩すべき識見の所有者、正史にその名を載せるには至らずとも、歴史の中で光芒を示す可能性を持った存在は、旧帝国貴族の間に皆無ではなかったはずである」

惜しいかな——メッククリンガーは言う。彼らは、時代を動かす主導の力と遂になり得ず、歴史の中、流れの中で一瞬だけ浮き上がり、消えていった泡沫としてのみ、存在を示したに終わったのだ。

そうした目で見れば、マルガレータ・フォン・ヘルクスハイマーは……もし、彼女がそのまま帝国で人となる機会を得られていたならば、メックリンガーの言う『歴史上の光芒』の一つとして史上に銘記されるべき存在となり得ただろう。

平たく言えば、マルガレータは、彼女の行状に顔をしかめる父や側近とはそれなりの折り合いをつけつつ、なんとか自らの嗜好を優先させる毎日を送っていたのである。彼女が一一歳の誕生日を数ヶ月後に控えた、とある一日までは。

「本当に突然だった。あんなことが起こるなど、思っても見なかった」  
た」

後、彼女が、後見人となつた人物にそう語っている。  
のち

「事が起こつたのは、父上が暫くぶりに帰宅なさつた、その一週間ほど後のことだった。覚えているのは、父上がすこぶる上機嫌で、グレートヒエン、これで我が家の栄達は思いのままだ、と仰つたこ

とだ。母上が亡くなったのは、その夜のことだった」

さすがにその辺りの記憶は混乱している。マルグレータの母、ヘルクスハイマー伯爵夫人は、伯が上機嫌で帰宅した三日後に突然の高熱に見舞われ、いかなる手当も受け付けず、一週間後に呆気なく亡くなった。

ヘルクスハイマー伯は『尊大な男』だったが、馬鹿ではなかった。

妻の急死が、決して偶然でも天然の病でもないことを悟るに十分なほどに賢明な人物ではあった。自身が探り当てた情報の意味を、それを探り当てるべく彼に命じた人物に伝える前に理解するまでの聡明さや狡猾さには欠けていたにしても、である。

「何人の刺客が送られてきたかまではわたしも知らない。でも、母上が発病されてから、わたしも外出を禁じられたし、人と会うことも許されなくなったのだから、もうその時には父上は、わたしたちが狙われていることに気づいておられたのだろうな」

ヘルクスハイマー伯がどのようなにして『指向性ゼツフル粒子発生

装置』のプロトタイプを、帝国軍技術総監部から奪い取ったのか。マルガレータの知るところではなかった。とにかく、ヘルクスハイマー伯は、新開発のこの兵器を手みやげに自由惑星同盟への亡命を図り、そして、失敗した。

マルガレータ……今は、自由惑星同盟市民の一人として、グレーチェン・ヘルクスハイムを名乗る身の上だった……は、もう一度闇に目を凝らした。

父の声はなく、その姿もない。

「夢か……」

大きく息を着いた弾みに、胸の辺りが微かな疼痛を伝えた。

「ん！——」

思わず、胸を押さえ、息を整える。気にしなければほとんど気にならない程度の痛みだったが、気にせずにはいられない。何しろ、彼女にとって戦場での最初の負傷の痕だったのだから。

耳を澄ませると、同室の士官学校生徒の穏やかな寝息が聞こえて

くる。同盟軍士官学校二年生徒の寮は、本来なら四人部屋だったはずだが、マルガレータ……グレーチエンのいるのは二人部屋。場所も、同盟首都星ハイネセンではなく、同じバート星系とはいえ第五惑星テルヌーゼンの同盟軍駐留基地に設けられた臨時士官学校生徒寮である。

宇宙暦七九七年に勃発した救国軍事会議の蜂起の際、グレーチエンのクラスはテルヌーゼン衛星軌道上で船外活動訓練中だった。クーデターに荷担していたテルヌーゼン衛星軌道基地司令官アルノルドシヨン大佐は、『良い帝国人は死んだ帝国人だけだ』と公言するほどの帝国嫌いだった。

「帝国からの亡命者は、これを帝国への通牒者と見做し、例外なく射殺せよ」

グレーチエンの同期生の何人か、彼女と同じ帝国からの亡命者が、この命令によって生命を奪われた。

後世『アルノルドシヨン大佐のこの命令だけでも、後世、いかな

る弁護を以てしても、救国軍事会議の行為に正義を見いだすのを不可能とした』として非難の的となる命令である。グレーチェン自身が重傷を負わされ、丸々一ヶ月の入院生活を強いられたのも、この命令によるものだった。

クーデターの発生は宇宙暦七九七年四月。救国軍事会議が最終的に敗北を認め、ヤン艦隊の軍門に降ったのが九月。トリューニヒト議長が、美辞麗句と自賛に満ちた演説で、『民主共和制度の勝利』を謳い上げたのが一〇月である。余波を被った士官学校の活動が、半年にわたって休止に追い込まれても不思議ではなかった。

「たとえば、国が滅びる寸前であつたとしても、学校の門を閉じることがあつてはならない。人を欠いては、国は再建できない。教育への投資を止め、人を育てることを放棄することは、国家という組織が壊死への道を歩み始めたのと同義だ」

アムリッツアの大敗北の責任を取って既に現役の座を退いていたシトレ元元帥が、テルヌーゼンを訪れたのが、テルヌーゼン政府が

クーデターからの離反を表明した六月のことである。テルヌーゼンに、グレーチエンを含む多数の士官学校生徒が避難していることを知ったシトレ元元帥は、自らが校長を代行して、士官学校の臨時分校を開いたのだ。

「私の行いは細やかこまかかも知れない。救国軍事会議のクーデターという、未曾有の大混乱の中、わずか一〇〇有余名の士官学校生徒に教育の場を与えることに、疑問の目を向けられてもやむを得ないことだ。ほんの小さな、しかし、これは灯火ともしびともいうべきものだ、私は信じる。どれほど些細で、取るに足らないものであったとしても、わずかの明かりすらない暗闇に勝ること数万倍であると、私は信じる」

シトレの言葉に応じる形で、ハイネセンの各種軍学校、および同盟各地の軍学校分校が次々に活動を再開した。

士官学校ハイネセン校校長のシェフェール中将は、当時も後世も、

軍人として、あるいは教育者としていかなるプラスの評価をも受けたことのない人物だった。にもかかわらず、この時の言動がシェフェールの名を同盟軍の歴史に銀の文字で刻みつけることになる。

「士官学校は、優れた士官を教育することで、同盟軍、ひいては同盟に対して貢献を果たすをもって任とする。優れた士官とは、単に戦術教科書を完全に暗記しただけの人間であってはならない」

一般教養課程の一切と帝国語のコースを全廃し、戦術教育と体力訓練教程をもってこれに代える。クリスティアン大佐がもたらした救国軍事会議からの要求を、シェフェールは断固として拒否したのである。

『スタディアムの虐殺』を引き起こしたことで知られる通り、クリスティアンは短慮で視界の狭い、狂信者と紙一重の軍事至上主義者である。顔面蒼白となったシェフェールには、複数の銃口が突きつけられ、その幾つかは安全装置を解除されて熱対流の陽炎を立ち上らせていた。

「無論、怖かった。拒否すれば、クリスティアン大佐のことだ。その場で射殺の命令を出していたとしても不思議ではない」

これは、その年の卒業式の訓辞でシェフェール中将自らが回顧して語った言葉である。

「しかし、士官学校が育てるのは士官である。クリスティアン大佐らが要求したのは、士官たるべき者に、下士官・兵と変わらぬ、ただ戦う方法だけを詰め込めと言うことなのだ。これは下士官・兵を貶めての言葉ではない。彼らを指揮し、戦いを勝利に導くには、単に戦い方だけを頭に詰め込んでおけばそれで済むというものではないのだ」

ヤン艦隊が勝利することを見込んで、一時的にでも救国軍事会議に屈したと言われるのを恐れたのだ。シェフェールを中傷する声は小さくなかったが、結果的には彼が同盟軍士官学校の歴史と矜持を守ったことは間違いない。

いずれにしても、負傷の身を癒して無事に退院した翌月、グレー

チェンは士官学校の教程に戻ることができたのである。

無論、良いことばかりではないのは確かなことで――

「迷惑と言えば迷惑なのは確かだけれど」

グレーチェンが、彼女の後見人に語ったように、既に彼女が入学した時点で士官学校の課程は四年から三年に短縮されていた。加えて、二ヶ月の休止期間が加わるのだ。グレーチェンたちが、それぞれ眠る暇もないほどの多忙さ、または一旦眠りに落ちたら容易のことでは目覚めないほどの疲労を余儀なくされるくらいに猛烈な詰め込み教育を受ける羽目になったのも事実である。

就寝時も外さない手首のクロノメータに視線を走らせる。午前二時一四分。宇宙暦七九七年九月一〇日の日付が、闇の中に微かに青白い蛍光を伴って浮かび上がっているのが見えた。午前五時の起床まで、まだ三時間弱は眠りヒュプノスの神の懷の中で目を閉ざしていることが

可能な時刻だった。

昨夜も結局就寝したのは消灯時間の一時よりもあとだった。許可を得てのことだったが、図書館で時を過ごし、居室に戻った時には一二時を過ぎていた。同室の……シャルロッタ・ゼーダーシュトレーム、通称ロツティ・セーデルは、厳しい課業と訓練の疲れからか、既に正体もなく眠り込んでいて、グレーチエンが帰ってきたことに気づかなかったようだった。

グレーチエンにとって、許可を得てまで消灯時間後も図書館に籠もるのはやむを得ないことだった。同盟の戸籍では、彼女は今年一六歳。しかし、実年齢はまだ一五歳でしかない。士官学校への入学を許可された時、彼女はまだ一四歳に過ぎなかった。一五歳という年齢は、士官学校が入学を認めている下限の年齢である。一般社会では大学に相当する教育期間である以上、通常はどんなに若くとも一六歳以上。普通は一七歳から一八歳、時には二〇歳を超えるのが、入学者の年齢なのだ。

グレーチエンは入国に際して年齢を一歳だけ詐称していた。その時は明確な意図はなかったにしても、その後、士官学校へ願書を出す際には最大限に、その年齢詐称を利用した。

とは言え、一五歳での入学。実年齢一四歳の身体にとって士官学校の課業・訓練は苦行に近かった。かつ、帝国では正規の教育を受け、帝国貴族の娘としては飛び抜けた知能の持ち主ではあったにしても、やはり知識の絶対量が足りない。特に同盟そのものの歴史や政治体制、経済の仕組み、および彼女の通っていた帝国のお嬢様学校では決して教えない、戦争や外交に関する知識である。

「それにしても信じられないことをする」

彼女の後見人であるヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリングに、グレーチエンが呆れて見せたのは、士官学校入学後直ぐのことである。

「戦史研究科が廃止されていて、戦史と歴史研究に関する情報や書籍は許可を得ないと閲覧できなくなっていた」

「予算の逼迫で、さしあたり必要でない学科を閉鎖した——そういうことよろうですね」

ヴエンツエル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリング。元帝国軍統帥本部情報部所属の少佐。ラインハルト・フォン・ミューゼル中佐（当時）と同行して、ヘルクスハイマー伯の亡命行を追撃し、ひよんなことからグレーチェンの後見人として、共に亡命者として同盟の住民となった。家族の総てを失ったグレーチェンにとって、唯一『家族』とも呼べる存在である。

救国軍事会議のクーデターに際してはヤン艦隊に付く形で働いたらしい。情報部出身の将校らしく、詳しい事情については口を閉ざして語ろうとしないが、つい先日には大尉から少佐への昇進を内示されたと言っていた。

ハイネセン

本来の勤務地は同盟首都だが、ヤン艦隊とともにクーデター鎮圧軍側に回ったこともあり、宇宙暦七九七年九月の時点では、テルヌーゼンの衛星基地にオフィスを持っている状態だった。

「ヤン提督やウランフ提督も、今回の騒ぎでは叙勲されるだけで昇進はない予定だそうです。何だか一人だけ目立っているようで、気が引けるのと、何だか悪目立ちしてしまったような気がします」

内示の件を話した時、ベンドリングはこう言ったのだ。

一人の後見人もなく、ただ一人、同盟で生きて行けた……グレーチェン自身、確信を持ってはそう言い切れない。ベンドリングあつてこそ、今の自分だし、クーデター事件の時は現実生命を救われてもいる。自分の後見人という立場でなかったなら、彼はもつと胸を張って少佐、あるいは更に上を目指せたのではないか。ベンドリングにとって、自分が重荷であるということはないだろうか。

ここ数ヶ月、ベンドリングのことを考える時、グレーチェンがわずかに胸の奥のさざ波を感じるのはそのことだった。

余計なことを言ってしまった……負傷の痕が軽い疼痛を訴えるごと、グレーチェンは彼女らしくもなく些か忸怩たる想いに囚われる。クーデターが鎮圧され、テルヌーゼンに訪ねてきてくれたベンドリ

ングに、つい負傷の痕が時々痛むことを告げてしまった。あんなことを言うべきではなかったが、どうしてもあの時は口にせずにはいられなかった。ひよつとして、ベンドリングに甘えたかったのではないかと思うほどだ。

——それはともかくとして、戦史研究科のことである。

昇進を祝った後、グレーチエンは入学直後に感じた疑問を再び口にしたのだ。

「士官学校の時点で歴史・戦史の研究に専任させる学生を教育せずとも、軍組織の中でそうした研究を行う部門があればよい。そうも考えられるでしょう」

「それはそうかもしれないが……だとしたら、戦略研究科などというコースがあるのは一体どういう事なのか分からない」

士官学校の三年と四年は数十の専門課程に分かれており、一年と二年の成績と本人の希望とを勘案して、専攻過程に振り分けられていく。最も人気があり、かつ上級士官への登竜門と目されているの

が戦略研究科であり、他の学科首席とよほどの成績の差がない限り戦略研究科首席が学年首席として待遇される。卒業生は、他の学科の同期生を尻目に統帥本部や艦隊司令部、同盟軍の中枢を担う地位へと駆け上がっていくのだ。

ただし、ここ数年、首席学生への評価はやや下降気味ではある。第五次イゼルローン要塞攻略戦で帝国軍の中央突破戦術に翻弄されて戦死したマルコム・ワイドボーン少将や、アムリッツアの惨敗を招いたアンドリュー・フォーク准将などが、彼らへの評価を急降下させたとしてやり玉に挙げられているのだ。その影響かどうか知らないが、昨年の首席であるクリストフ・ディッケルは他の士官学校卒業生同様、第一四艦隊での見習士官生活を送っていると聞く。

グレーチエンが疑問に思うのは、戦略研究科首席の卒業後の不振のことではない。この学科の存在そのものが、彼女にはどうにも不思議だったのだ。エリートとして遇せられる同期生への嫉妬ややつ

かみというのではない。彼女自身、二年の後期からは戦略研

セカンド・セメスター

究科に属する身だったのだから。

「何がいけないのですか？」

「帝国の士官学校ではどうだったのだ？ 帝国でも、戦略研究科と  
いうのはあったのか？」

当惑顔のベンドリングに、グレーチエンはたたみかける。

「一般的な戦略研究のコースがありました。帝国でも士官学校は四年制でしたし、三年からは専門課程に分かれはしましたが、同期の連中に聞いた限りではそれほどに課程の内容が違うと言うことはなかったような気がします」

私は情報処理と暗号関係が専攻でしたし、それも二〇年近く前のことですから、定かではありませんが……苦笑するベンドリングに、グレーチエンは鼻の頭に軽く皺を寄せるようにして笑った。

「更に上級の戦理・戦略の教育機関としては軍大学というのが別途に設けられていましたが、同盟では違うのでしょうか？」

将官への昇進が、そうした学歴よりも宮廷での地位や皇帝のお覚

え、あるいは有力貴族からの『引き』がものをいう帝国軍である。上級学校への進学は、将官昇進への条件ではなく、戦略的な識見のない貴族将官達に用兵のイロハを教えるための学校という色彩が強かったようだ。

「戦場での実績で昇進した人は、軍務の合間合間に聴講生として講義に出席していたようですし、そうした学校にまったく行かない人もままあるようです」

「上の学校のこととは知らない。そなたの方が詳しいのではないのか？ 少なくとも、ここの専門課程はコースがまるつきり違ってしまっているようだ」

一般教養の授業が減り、代わって大きな時間枠を割り当てられたのが、専門課程。つまりは、『戦略研究』のコースだった。寮の同室者であるロッティ・セーデルは航法課程に進んでいるのだが、そ

ファースト・セメスター

ちらでは二年の前期とそれほど課程の構成は変わっていないと言う。無論、専門教育としての航法や戦略関連の時間は増えてい

るが、戦略研究科での変化とは較べものにならない。

「例えばだ……敵は我がA星域に侵入しつつあり、その総兵力は概ね一個制式艦隊に、高速戦艦を中心とする打撃集団、およそ二分の一個制式艦隊を併せたものと推定される。その先遣集団は既にA星域の最外縁惑星に達しあるものと推定され、その一部に対し、わが索敵集団は六時間前から接触を維持しある。我が軍は、制式三個艦隊を動員して、敵艦隊の迎撃に向かわしめ、その意図を挫折せしめんとする……と、こういうのがテキストになっている。こう言うのを毎日毎日、何時間もやるんだ」

「よく覚えていますね」

「妙なところで感心しないでくれなにか、ヴェンツェル・ハインリッヒ」

気に入らない犬を見出した猫のように、グレーチェンは目を紫色に光らせた。

「——で何が気に入らないのですか？」

咳払いして、ベンドリングが話題を変える。

「敵がどうして制式一個艦隊と打撃集団半個艦隊の兵力を持ってきたと分かったのだ？」

「それは……偵察したからでしょう？」

「どうやって？」

「幾らでも……偵察部隊を出すでしょうし、同盟領内なら監視衛星もあります」

「偵察部隊が敵と接触できなかったらどうするんだ？都合良く、こちらが偵察や監視の網を広げている星域に敵が入ってきてくれればいい。それでも、ダゴンとかヴァンフリートのような偵察さえ難しいようなところも沢山ある。外宇宙はもっと広い。侵入してきた敵が、どの星域を指しているのか、そんなに簡単に分かるとは思えない。例えば、アスターテだ」

ラインハルト・フォン・ローエングラムが、ローエングラムの家名を嗣ぎ、上級大将に任じられて最初に行った大規模な同盟領侵攻

作戦の名を、グレーチエンは口にした。

「アスターテ……ですか？」

「あの時の、ローエングラム伯の意図が何だったのか、そなたには分かるか？」

「アスターテ星系への侵攻ではないのですか？」

「ふざけるのは嫌いだぞ、ヴェンツェル・ハインリッヒ。わたしはまじめに訊いているのだ」

グレーチエンはあからさまに不機嫌な表情で後見人を睨み据える。アスターテ星系への侵攻はラインハルトの行動であつて、その意図を示すものではない。正規の士官教育を受けているベンドリングがその程度を弁えていないはずはなかった。

「侵攻だけが意図だったと言えないこともないではありませんか、グレートヒエン。ただ攻め込み、同盟軍に大損害を与えるだけが目的だった……と言うことは？」

グレーチエンの表情が変わった。眉間から皺が消え、驚きに紫水

晶の瞳が大きくなる。

「分かるのか？」

「実は——受け売りです」

微笑つてベンドリングは白旗を掲げた。救国軍事会議のクーデター鎮圧に際して、彼はヤン艦隊と行を共にしている。旗艦『ヒューベリオン』ブリッジに同乗し、ヤン・ウェンリー大将の戦略観を目の当たりにする機会にも恵まれた。

帝国でもそうだったが高い階級にある軍人は、特定の幕僚以外は言葉も交わさなければ、食事への陪席すら許さないことが多い。同盟でも状況は似たようなものだったのだが、ヤンは違っていた。

『ヒューベリオン』では、ブリッジ要員の誰でもヤンと食事に同席できたし、ヤンの養子であるユリアンから紅茶やスコーンの『お茶』を振る舞われる機会さえ日常のことだった。食事やお茶の合間にヤンと、彼の幕僚はあけっぴろげに戦史や歴史に関する雑談を交わしていたし、そんな雑談の中、ヤンがアスターテ会戦について語った

事があつたのだという。

「あの時、同盟軍はローエングラム伯がアスターテ星系に同盟領への橋頭堡を確保する意図で侵攻してきたと受け取った。でも、実際に彼が望んだのは、自分自身を囿にして同盟軍を各個撃破するチャンスを得ることだったのじゃないか、そんな気がするよ」

既にまん丸になっていた目を、グレーチエンは更に丸くした。

「もし、各個撃破できるチャンスが得られなかったら、ローエングラム伯はどうするつもりだったのか……ヤン提督は何か言っていたか？」

「その時はさっさとアスターテ星系から脱出していただろうと、ヤン提督はそう言っていました。ローエングラム伯のことだ、アスターテなんぞ置き捨てて、アスターテに同盟軍が艦隊を集結させたのを良いことに、アスターテ以外の星系を荒らし回ったんじゃないかと」

「——そうか……やっぱり……」

「あなたもそう思ったのですか、グレートヒエン？」

「うん……このテキストだが、明らかにアスターテを題材にしたものだと思うが、信じられるか、ヴェンツェル・ハインリッヒ。原案<sup>正解</sup>は、三個艦隊での緩包囲だったんだぞ。三個艦隊で三方向からゆっくりと接近して、敵が兵力差に怯えて球形陣を布くのを待ってから一気に包囲して集中攻撃をかけるのが正解だと言うんだ」

「違う回答をしたのですか？」

「三個艦隊をまとめて、敵のいそうな宙域に突撃すると書いた」

「ほう、それで教官に何か言われました？」

「三個艦隊をまとめてしまえば、兵力差に驚いた敵が逃げてしまうではないかと言われた。冗談じゃないぞ、ヴェンツェル・ハインリッヒ。逃げてくれれば良いではないか。味方は損害を受けないし、敵は基地を作れない。もし、他の星系に攻め込むつもりだったとしても、一団になっていれば追撃するのだって容易い<sup>たやす</sup>」

つまり、そういうことだ……グレーチェンは言う。確かに、生徒は一〇代半ばの子供達であり、戦場の経験もない。彼らに実際の戦術・戦略判断をさせるべき戦場を仮想体験させるには良い方法かも知れない。グレーチェンが気に入らないとすれば、そのための情報総て『与えられたもの』であり、千変万化するはずの戦場での動きが一定の『正解』に収斂するものとして教育が行われていることだった。

結局、その演習でのレポートの成績はB+。『独創性には富むが、実戦での有効性に疑問がある。さらなる考察を要す』とのコメントに、グレーチェンはどうしても納得できなかった。

一方、『戦略演習Ⅰ』では似たような設定でシミュレーション演習が行われる。同期生と対戦したグレーチェンは、今度は艦隊を二分し、高速機動部隊で牽制攻撃を繰り返す一方で、敵の後方連絡線を遮断する作戦に出た。

「別に『戦略概論Ⅰ』でのレポートと同じ戦術を採用しなければな

らないという決まりもないし、第一、戦いは『高度の柔軟性を維持しつつ、臨機応変に対応』すべきものではないか？」

悪名高いアンドリュー・フォークの台詞をそのままに、つんとおとがい

頤を反らせたグレーチェンに、同期生たちのある者は苦い顔で沈黙を守り、他の多くは納得せずに吼え立てた。

「レポートで書いたのと違うじゃないか！」

彼らがグレーチェンを非難した言葉だが、シミュレータ、裁定者の教官達とも、判断はグレーチェンの勝利だった。

「なんて危険なことを……」

ベンドリングが眉を顰めるのを、グレーチェンは敢えて無視した。また心配させてしまった……と思わないでもなかったのだが。

「実際にアスターテやダゴンの記録も読んだ。その範囲では、あの『原案』だって間違っているとは言えないと思った。だけど、そうならあの者がああまで一方的に勝てるはずがないだろう？」

だからこそ、消灯時間を過ぎてまで図書館に入り浸る許可をもらったのだ。グレーチエンは言う。一度や二度の戦いを研究しただけでは、ラインハルト・フォン・ローエングラムという戦争の天才や、ヤン・ウェンリーという稀代の用兵者とならんで戦場に立つことなど、思いも寄らないことだ。

「わたしは天才じゃない。そのくらいのこととは知っている」

グレーチエンが集中的に読んだのは、戦史と歴史、外交に関する広範な記録である。銀河帝国の時代から銀河連邦<sup>U.S.G</sup>の時代、さらに遡って地球の古代にまで及ぶ膨大な参考文献を片端から読破しようとしていたのだ。夕食後の自己学習時間は確保されているとは言え、毎日の課業の準備と復習、さらには義務づけられている体育系課外活動への参加で時間は幾らあっても足らない。必然的に睡眠時間と休日での休養時間を削ることになる。

入学時よりも背は随分伸びた一方、身体は相対的にかなり細くなり、その整った顔立ちにも疲労の隈が薄い影を掃いている。それが

今のグレーチェンだった。

聞きようによつては、あるいはよらずとも大言壮語に類する言葉を、グレーチェンは平然として口にする。

「やはりヤン・ウエンリー提督は大した人物だな」

彼女がそう評するのは、ヤンが士官学校時代にまとめた図書目録のことである。戦史研究科の廃止への反対活動を展開したヤンに対して、当時のシトレ校長が与えた処罰が、戦史研究科に関連する書籍の整理と目録作りだったというのだ。

「それは——反対する方が正しい。まして、処罰するなどもつてのほかではないか」

ヤンを初めとして、ジャン・ロベール・ラップ、ダステイ・アツテンボローらが反対運動に加わっていたと聞かされた時の、それがグレーチェンの反応だった。

それはそれとして、グレーチェンは自ら膨大な戦史を学び、その中から自分なりの戦略研究を見出そうとしていた。その際の指針と

なったのが、彼らのまとめた図書目録だったのだ。この事実一つをとっても、戦史研究科の廃止は誤りであり、更に言えば戦略研究科をエリート扱いにする一方で、この『ヤン目録』の閲覧を許可制にしているなどもつてのほかである、というのも彼女の密かな憤懣だった。戦略研究科を名乗るなら、『ヤン目録』の一部なりとも目を通し、『戦略概論』だの『戦略研究基礎』だのと言ったコースでのレポートを義務づけるべきではないか。

要するに、戦略研究の基礎となるべき戦史・歴史の研究をなおざりにしておいて、過去の戦勝例……例えばダゴンであり、あるいは第二次ティアマト宙域……の結果だけを正解として教え込むというのでは、まるでものを考える必要はなくて、正解だけを暗記すればいいということにならないか。また、そうした人間だけを同盟軍の幹部として登用していくのは危険すぎるのではないか。

「本当にこの国は大丈夫なのか……？」

とは言え、ベンドリング以外にそうした不満を聞かせることの危

陰性を十分に察しているグレーチェンでもある。

「『ヤン目録』が危険視されるのも分かるんだぞ、ヴェンツェル・ハインリッヒ。一度、読んでみるか？」

「いいえ、遠慮しておきます。本人と会っていますから、どの程度の危険人物なのかは十分に分かっているつもりです」

「そうか、残念だな」

面会時間の終わりを告げるアナウンスに、グレーチェンはちよつと顔をしかめた。

「今度はいつ来てくれる？」

休日は外出も許されるし、家族や友人との面会も自由ではある。

しかし、ベンドリングも同盟軍大尉・情報士官として、さらには臨時ではあるがヤン艦隊の一員としての多忙な職務の中にある。そうそう休日ごとにテルヌーゼンの地表に降りることもできない。また、グレーチェン自身、図書館通いと、負傷後の検診で休日の大半を潰しているのだ。

そうは言っても、ベンドリングは彼女にとって唯一の『家族』でもある。図書館で一人、様々な書籍を繙ひもといている時、あるいは寮の自室でベッドに入る時、起床サイレンで目を覚ました時、ふと両親を喪った時のこと、あるいはたった一人、亡命希望者宿舎でベンドリングの亡命審査が終わるのを待っていた時のことを思い出す。思い出すと、とにかく、やっぱり会えないと寂しい。本音だった。

「そうですね。そろそろ、クーデターの後始末も最終段階ですから……半月ほどもすれば、また降りてこられると思います」

「そうか。じゃあ、その時はわたしも時間を空けるから、連絡してくれ」

「ええ」

「——そうだ、ヴェンツェル・ハインリッヒ、帝国の方の情報は何か手に入らないのか？」

「帝国ですか？」

同時期、帝国ではリップシュタット戦役が戦われている。ライン

ハルト・フォン・ローエングラムとリヒテンラーデ公による、いわゆるローエングラム・リヒテンラーデ枢軸と、門閥貴族連合軍による大規模な内戦である。士官学校には外部からの情報がほとんど入ってこないが、教官の一部や情報通の家族や友人から情報を得た同期生たちが、断片的な情報を持ち込んできている。ローエングラム・リヒテンラーデ枢軸が圧倒的優勢なままに内戦は進んでおり、貴族連合軍は間もなく全滅するだろう……

——ということとは、ジークフリードも息災ということだ。

五年の時を経ても、赤毛に穏やかな碧い瞳。長身の青年の姿は記憶に鮮明だった。当時はまだ少年と言っていい年齢だった。一六歳と言えば、今の自分と同じだ。思い、グレーチェンはそつとため息をつく。あの金髪の少年が帝国を二分して戦い、おそらくは帝国を手中に収める独裁者の座に駆け上ろうとしている。彼に『親友ともです』と呼ばれた赤毛の少年も、アムリッツアでは帝国軍の三分の一を率いて同盟軍を後背から撃ち、全面的な潰走に追い込む決定的打撃を

与えたという。

しかも——グレーチエンが調べた限りでは、ジークフリード・キルヒアイスが突撃路を開削するのに使ったのはどうやら指向性ゼツフル粒子。彼女をして、ラインハルトやキルヒアイス、あるいはベンドリングと巡り会わせ、同盟への亡命の道を開くことになった新兵器だった。

アムリッツアに参加した多くの将兵、上級指揮官に属する将官ですら、指向性ゼツフル粒子については『まさか、あのような兵器が実用化されているなど、全く予想外だった』と報告している。グレーチエンは思わず舌打ちしなくなった。

実証装置こそミューゼル中佐に奪回されたが、ベンドリングはこの装置に関わる尋問で一週間余り拘禁された。同盟軍は、帝国軍が近い将来に指向性ゼツフル粒子を戦場に投入してくることを予想できたはずだった。自ら実用化はできずとも、その程度の情報を実戦部隊に周知させておくことくらいは容易だったはずなのに、同盟軍

の上層部はそれを怠った。

余談になるが、アムリッツアの直後、指向性ゼツフル粒子については、ヤン・ウェンリーが同盟にとって恐るべき予見を示している。同盟首都の最後の守りである『アルテミス的首飾り』についてである。

「射程圏外から指向性ゼツフル粒子を誘導して、あの戦闘衛星全部を包み込み、それから無人艦なり、レーザー水爆ミサイルなりを突っ込ませれば、簡単に自爆させられるね。もう『アルテミス之首飾り』は時代遅れになった、ということかな」

無論、この発言は軍上層部によつて握りつぶされる。一方、救国軍事会議のクーデターに際して、ヤンは指向性ゼツフル粒子ではなく、氷の大群を使って『アルテミスの首飾り』が既に旧式兵器となったことを証明し、政府と軍の指導者を啞然とさせたのだ。

それにしても——とグレーチェンは思う。今の自分に、あの時の彼らと同じことができるのはとても思えない。本当に、彼らと戦場

で再び出会うことができるのだろうか。

金髪の少年には微かな畏れを含んだ敬意を、一方で赤毛の少年には、自身分析不能な心揺れる思いを抑えきれない。希にしか思い出さないが、思い出すとつい息が上がり、心臓が拍つ速度が自然に上がってくるような。

それが何と名付けられるべき感情なのかを、グレイチェンはとっくに知っていた。知っていて、なおはつきりとその名で、自らの心の赴くさまを呼ぼうとは思わなかった。まだ、早すぎる、と思っていた。

微かに頬を上気させるグレイチェンの表情の変化に、ベンドリングは気が付かなかったようだった。

「そうですね。かなりの情報は入ってきています。貴族連合軍は機動兵力の大半を失って、根拠地に立てこもった状態のようです」

「籠城か？」

「そうですが、これは持ちません」

「自信たっぷりだな」

「ええ。これは、新聞でも報道されましたが、フェザーンの金融機関が一斉に貴族連合軍側の在フェザーン資産を凍結させました。つまり、貴族連合軍は糧道を断たれた、ということなんです。戦争は金がかかります。資金を失って、あと何ヶ月も戦えるものではないし、籠城したとしてもどこからも援軍は来ません。帝国の貴族、ひいてはゴールデンバウム王朝は……これで終わりでしょう」

微かな苦渋がベンドリングの表情に浮かぶのに、グレーチェンは気づいた。それがあることを思い出させ、グレーチェンは顔面から血の気が引くのを感じる。愕然たる思いだった。

「ヴェンツェル・ハインリッヒ……そなたの家は、どうなったのだ？」

なぜ、今頃こんな事に気づくのだろうか。もっと早くに気づくべきではなかったのか……

苦い微笑を深くして、ベンドリングは頭を振った。かぶり

「まあ、常識的に言えば、貴族連合軍側についてでしょう。一応、伯爵家でしたし、父はローエングラム侯のことを良く思っているか  
ったのも確かですしね」

「……済まない、ヴェンツェル・ハインリツヒ」

「気になさることはありません。運があつて、フェザンへでも亡命して来てくれればと思います……私は戦死扱いですから、そう  
だとしても私に連絡が来ると言うことはないのでしょう」

「もし、連絡が付いたら……呼び寄せてもいいのではないか？ フ  
ェザンに手を回せば、消息をつかめると言うことはないか？ 費  
用が必要なら……」

「グレートヒェン！」

強い口調で返され、グレートヒェンは言葉に詰まった。

「あなたも言っておられたでしょう。帝国にいたら、ローエングラ  
ム侯に『賊軍』と呼ばれる立場になつていただろうと。あなたが同  
盟に亡命したのは偶然だったかも知れないし、それを追撃する任務

が私に与えられたのも、偶然です。でも、あなたの後見人として同盟に来る道を選んだのは私の意志です。後悔はしていませんよ」

「……済まない」

「もう一度謝ったら、怒りますよ、グレートヒエン・テレサ・ヘルクスハイム。私が後見人になったのは、ローエングラム侯に向かつて、パスコードを教えぬと言いつつ、あのマルガレータ・フォン・ヘルクスハイマーであって、私の家族のことでめそめそしているグレートヒエン・ヘルクスハイムではない」

「ヴェンツェル・ハインリッヒ……」

「あなたを見損なわせないでください、グレートヒエン。私の家族は……運があれば生き延びて、あるいはフェザンや同盟にたどり着くでしょう。ローエングラム侯に付かなかったのは彼らの選択です。彼らが連合軍の根拠地で全滅するとしても、それは彼らに運がなかったからです」

「……」

「グレートヒエン！」

「——わかった、もう謝らない。そなた、家族のことが嫌いなのか？」

「あなたはそうです、グレートヒエン。貴族の家庭というものはそうは変わらないと思います」

言われ、グレーチェンは思い出す。家族を失ったのは痛切な経験だったが、既におぼろになった記憶を思い起こせば、父にしても母にしても、彼女にとってはどちらかと言えば希薄な存在だったような気がする。父ヘルクスハイマー伯は、帝都の自宅には余り帰らず、母もグレーチェンの傍らにあることは稀だった。それが普通だと、かつての自分は思っていたし、指向性ゼツフル粒子発生装置のパスワードを問う赤毛の少年に、『断る！』と言い切った時には、家族を奪った仇への憎悪が一切を上回った。だが、今、自分がベンドリングのことを考える時ほどの強さで、当時の自分が両親の死に傷ついていたかどうか……

そして、ベンドリングである。ベンドリング伯爵家の三男坊で、家督を継ぐ見込みもないことから帝国軍士官を目指したと言っていた。情報部士官として、任官以来ほとんどの年月をイゼルローン要塞で送っていたとも。彼にとっても、家族は、ただ血がつながっていると言っただけの希薄な存在だ……ベンドリングはそう言おうとしている。

あるいはそう自分に思わせようとしているだけなのかも知れない。思わないでもなかったが、グレーチェンは無理矢理にでも頷いて見せた。俯いて顔色を隠したかったが、それが自分ではないことをグレーチェンは知っていた。

「——あ、ああ、そうだな。そうかも知れない」  
グレーチェンの表情を見つめていたベンドリングが、一呼吸おいた。

「——フェザーンの資産凍結のことですが……」  
「うん？」

「ヴェスターラント……ご存じですか？」

「知っている。ブラウンシュヴァイク公の領地だ。たしか、甥のシヤイド伯が治めていたな」

「そのヴェスターラントですが、ブラウンシュヴァイク公が熱核爆弾での絨毯爆撃を加えました。これが、フェザーンが在フェザーンの貴族資産凍結に踏み切った理由です」

「熱核爆弾！ 絨毯爆撃だつて!?」

『死の二三日間戦争』。銀河連邦が成立する遙か以前に戦われた大規模な世界戦争がそう呼ばれる。この時も熱核爆弾の応酬があり、その使用量はかなり限定されたものであったにもかかわらず、地球人類そのものを存亡の危機に立たせることになった。以来、有人惑星地表への熱核爆弾と質量爆弾攻撃は、人類同士の戦いでは不文律としての禁忌となっている。事実、一五〇年にわたる帝国と同盟の戦い、それ以前の帝国での内乱、さらに遡ってシリウス戦役でも、熱核爆弾による惑星絨毯爆撃と質量爆弾攻撃だけは一度も行われて

いない。

ブラウンシュヴァイク公は、一〇〇〇年近い人類のタブーを最初に破る悪名を、自ら選んで我が身に背負ったことになる。

恐るべき愚かさだ——グレーチエンは軽く唇を噛んだ。

「ヴェスターラントはどうなったのだ？」

「ローエングラム侯の軍が介入したとの情報もありますが、少なくとも二つのオアシスが全滅。死傷者は数十万に及んだようです」

「ローエングラム侯が介入したのに、駄目だったのか。間に合わなかった、と？」

「それが……」

ベンドリングの表情に、先ほどとは違った色合いの苦さが広がった。最初、不思議そうに見つめていたグレートヒエンの顔色が見える曇った。

「何とも分析しかねているというのが本音です。詳細な軍の配置状況などが入っていませんから、間に合わなかったのか間に合ったの

か、それも判断しかねるところですが……」

「が……何だ、ヴェンツェル・ハインリッヒ？」

ベンドリングがタバコを吸う習慣を持っていれば、ここで一服をしたところだろう。面会の許可時間がすでに一〇分ほど過ぎていることを示す壁面の時計に目をやり、言葉を探すように額にかかった髪をかき上げた。休日のことであつて、生徒が家族と話し込んだ挙げ句に、面会時間を一時間程度踏み出したとしても咎める者はいない。

ベンドリングの躊躇が、グレーチエンの不安を一層煽つた。

「どうしたのだ、ヴェンツェル・ハインリッヒ。何か、悪い知らせでもあるのか？」

「そうではないんです。ヴェスタラントの人口は二〇〇万ほどです。攻撃を受けたオアシスは、全体の一〇パーセント弱。死傷者も全人口の一〇パーセント前後で、惑星ヴェスタラントへの放射能汚染は何とか除去可能な範囲。核の冬による気候破壊の可能性もご

く低い。その一方で、ブラウンシュヴァイク公が、絶対にやってはいけないことをやってしまったという悪名ははつきり残るし、ローエングラム侯がヴェスターラントを救おうとして、犠牲はあったもののヴェスターラント全体としては救われた形になる」

言わんとするところを察し、グレーチエンの表情が更に陰しくなった。

「できすぎているというのか？」

「ええ、余りにもローエングラム侯に都合の良い結果になっています。その結果として、貴族連合軍は資産一切を失い、内戦を続ける資金を断たれたわけです。ローエングラム侯にとって最良の結果ですよ」

「……ローエングラム侯が敢えて、そう言う結末になるように、援軍の到着時間を調整させた？」

「そういう結論も引き出せる、ということですよ。証拠はありませんし、推論の上に推測を重ねただけですが」

淡い金髪が激しい勢いで左右に広がった。

「あり得ない。あり得ないぞ、ヴェンツェル・ハインリッヒ」

「ローエングラム侯はそんなことをしない、と？」

「そうじゃない。ジークフリードが、あの者の側について、そんな非道なことをさせるはずがない。そなたも知っているだろう、ジークフリード・キルヒアイスがそんなことをさせる男かどうか!」

ため息と共に、ベンドリングは頷いた。あるいはグレーチエンに問いたかったのかも知れない。『人は変わるものですよ。当時の彼は一六歳の中尉。今は、二〇歳そこそことは言っても、帝国軍屈指の驍将の一人です。その彼が五年前と同じ判断をすると、どうして言えるのですか?』と。彼がその言葉を口にすることはなかったが、「いずれにしても、ここ一ヶ月でリップシュタットの戦役も片がつくに違いありませんし、それにぴったり合わせたように、同盟のクーデターもこれで終わりです。あなたが仰ったとおりですよ、グレートヒェン。同盟の状況も、ローエングラム侯にとって思い通りに

なつたということです」

「そうだな。ローエングラム侯は子供ではない。必要があれば、どんなことでもやってのけるといふことか」

「キルヒアイス提督は別働隊を率いてローエングラム侯本軍とは別の戦域にあつたようですが……もう少し詳しく調べておきましょう。情報部の方にも更に情報が入っていることでしようし」

「頼む、ヴェンツェル・ハインリッヒ。また、半月か……待っている」

まだ強ばっていたが、笑顔を浮かべるだけの余裕を取り戻して、グレーチェンはベンドリングを見送ることができた。

☆☆☆

予想もしなかつた凶報がグレーチェンのもとへ達したのは一〇月に入つて直ぐのことである。

この日、同盟の主要メディアは救国軍事会議のクーデター鎮圧記

念式典の模様に併せて、リップシュタット戦役の帰趨を伝えた。普段は外界からの報道を公式には伝えない士官学校だが、この日は朝食後の三〇分を区切って食堂のスクリーンにニュースを転送した。

「なんだか嫌そうね」

グレーチエンの隣で小さく呟いたのは、彼女の同室者であるロツティ・セーデルだった。どう見ても旧式な、丸い眼鏡越しの視線が、トリューニヒト議長と握手しているヤン・ウエンリーの姿を捕らえている。

「同意」

こちらも小さく、ロツティの耳にだけ届くようにグレーチエンは呟くが、僅かに大きすぎたようだ。ロツティの更に隣に座を占めていた男子生徒が、やや陰悪な視線でグレーチエンを一薙ぎする。ブラントンの『取り巻き』を以て任じている一人で、トリューニヒト議長の熱烈な支持者だ。

グレーチエンは別に怖じる必要を感じない。紫水晶の眸が、弾き

返すように正面から視線を受け止める。きつい凝視に堪えきれなくなった相手が視線を逸らすと、何事もなかったように目をスクリーンに戻した。

隣で、ロツティが詰めていた息を吐き出した。

「なに？」

「怖くないの、グレーチェン？」

「何が？」

「だって……」

「怖がらなくてはならないようなことは何もしてないから。あなたこそ、怯えすぎだと思うけれど」

グレーチェンの目からは、ロツティ・セーデルは必要以上に自信を欠いて見える。フル・ネームはシャルロッタ・ゼーダーシュトリーム。ロツティはシャルロッタの愛称だから良いとして、苗字まで縮めて名乗ることもないだろうというのがグレーチェンの正直な感想だった。穏やかな、笑顔が愛らしいと言って良い顔立ちで、薄い

小麦色の肌にストレートの黒髪、ちよつと長めの前髪がよく似合う少女だ。年齢は一七歳になったばかりで、グレーチェンよりも一歳年上……実際には二歳の年長になる……が、グレーチェンよりも頭半分ほど小柄で、童顔と相俟って年下に見られることさえある。

ロツティ・セーデルを最も特徴づけているのは眼鏡だった。まん丸なレンズの、どう見ても今時流行<sup>はや</sup>らないとしか思えない眼鏡で、しかもレンズは度が入っていない素通しガラスなのだ。要するに眼鏡などかけなくとも十分な視力の所有者なのである。

にもかかわらず、ロツティは決して眼鏡を外そうとしない。野戦訓練や、甚だしきは宇宙空間での船外作業訓練でも眼鏡を置いて出かけたことはないらしい。一度などは、野戦訓練の最中、レンズに泥をかぶって視界を失い、教官に雷を落とされていたのを目撃している。

「馬鹿じゃないの、この娘<sup>こ</sup>？」

最初は呆れていたグレーチェンだったが、乾いた泥でレンズがまだらになった上に、フレームまでが歪んでしまった眼鏡をかけたまま、訓練終了の列に並んだ彼女に、いつそ天晴れとの感想を抱いたのだ。以来、同室の誼もあって、グレーチェンの数少ない友人のリストに名を連ねることになっている。

「どうしてそんなに自信一杯でいられるのか、あなたの方が不思議よ、グレーチェン」

「そうかな。そうは思わないけれど」

自信が服を着て歩いているような実例を目の当たりにしたから、とはさすがに口に出せない。亡命者、それも帝国の門閥貴族の娘という出自は、士官学校では余り公然と口に上せる素性ではない。あのラインハルト・フォン・ミューゼルに較べれば、自分は余りにも何もできず、何にも自信を持てないでいる。これで自信に溢れていると言われるのは、余り本意なことではない。

高等学校での成績優秀者枠推薦での受験で、それも一七歳で一発

合格だったというロツティの方が、よほど自分に恃むところがあつても良いはずだと思う。

「人はそれぞれだから」

それが結論。自分だけの価値観で何もかも判断してはいけない。亡命以来、同盟での生活でいつしか身につけた判断基準の一つだった。

ニユースは変わつてウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカツツ帝国軍上級大将の亡命を告げている。

「メルカツツ提督が……」

帝国軍の宿将と呼ばれた人物であることを、グレーチェンは知っている。そんな人物が同盟へ亡命してくる。つまり、ラインハルト・フォン・ローエングラムによる帝国の掌握はほとんど完全なものとなった。そういうことだった。僅かに意外の感があるとすれば、帝室への忠誠で知られたメルカツツ提督である。その彼が、ゴールデンバウムの帝室を見捨てて、我が身の安全を図った……ように見

える、その一事だった。

同時にわき起こったざわめきの一部は、確かにグレイチェンの胸裡に一瞬だけ浮かんだった思いをそのまま言葉にしたものようだった。曰く『宿将だなんだって言ってもやっぱり生命あつてのものだねって言うものじゃないのか』、あるいは『最初<sup>はな</sup>っから、最後は逃げ出すつもりで手配してあつたんだろう?』。

「どうなんだ、元帝国人として何かコメントないのか?」  
さっきの『取り巻き』だった。

「なんだかんだって偉そうなこと言ってるくせに最後は敵前逃亡だよ。もともとがルドルフのでっち上げ国家だからな。最後の最後まで味方を守って戦うなんて事はできねえってことだよな」

僅かに眉の端を動かしたものの、グレイチェンは挑発に応じない。怒らせようとの意図が見え見えで、付き合う気にもならなかった。五〇年以上も最前線に立ち続けた老将の判断を、二〇歳にもならない若造があげつらうのに、一々コメントするのも馬鹿馬鹿しいとい

うか、自分自身メルカツの年齢に達するまでに、いままでの人生の何倍もの経験を積まなければならぬ。何を言ったところで、敢えて亡命を選んだメルカツの真意を察し得るとは思えなかった。「——死んでしまうのは簡単かも知れないけれど、生き延びるのはもっと難しいかも知れない」

「——？」

最初、それがロツティの声だと言うことに、グレーチェンは気づかなかつた。

目の前の男子生徒がぎよつとしたように視線を転じ、その先がロツティに向かっているのに気づいて初めて、ロツティが彼に反論したことを察したのだ。

「降伏したら、裏切り者と言われるかも知れないし、敵前逃亡と言われるかも知れないけれど、どうしてもそうしなければならなかったら、降伏したり、脱出して亡命して、次の機会を探すというのは立派な勇気だと思う。メルカツ提督は有名な提督だけど、有名だ

って言うだけで何十年も有名ではいられないでしょ？　そう言う人の判断を、みかけだけでああだこうだって言うのはおかしいと思う」普段、滅多に自分の意見をはっきり言わないロツティだけに、完全に意表を突かれた形だったのだろう。男子生徒は目を白黒させたまま絶句し、口々にメルカツツへの批判を口にしていた他の生徒たちも一瞬に押し黙った。

意外の思いに言葉を失ったのはグレーチエンも同じで、余程に思い切って口を切ったらしく真っ赤になったロツティの顔を見つめているだけだった。

——その時だった。

グレーチエンは不意に顔を上げた。

ある単語が強烈なインパクトで、彼女の聴覚を刺激した……というより突き刺したのだ。

『なお、情報筋より伝えられるところによりますと、貴族連合軍の降伏に際して、ローエングラム侯自身に対するテロが行われ、ジ―

クフリード・キルヒアイス上級大将を含む複数のローエングラム侯軍幹部が死傷したのもようとのこと。詳しい内容は、情報が入り次第、追ってお知らせ致します』

でっぷりと太った『軍事評論家』がコメントを求められ、何かを答えていたが、もうグレーチェンの耳には入らなかった。

「ジークフリード……ジークフリード・キルヒアイスが……」

まるで頭頂から太い鋼の棒を身体に突き通されたような感覚だった。複数の銅鑼と鐘とを一斉に突き鳴らしたような音響が幾重にも重なり合うようにして鳴り響き、他のすべての音声をかき消した。視野が窄まるように小さくなり、『ローエングラム侯軍幹部へ、貴族連合軍の捨て身のテロ。死傷者多数』……そのテロップだけがフラッシュするように何度も何度も閃いて、呆然と立ち竦むグレーチェンの視界一杯に広がった。

「グレーチェン、グレーチェン、どうしたの、何かあったの!?」  
ロツティの声が遠い。

目の前のフラッシュが消え、視界が急激に昏くなる。身体から力が抜け、膝がゴムにでも変わってしまったようにぐにやりと折れ曲がる。視界がいきなり低くなり、暗転する。

「停電？」

言ったことさえ覚えていなかった。

「グレーチェン、グレーチェン、しっかり、どうしたの、しっかり……！」

ロッティの声がさらに遠くなる。山彦のように、遠く小さく掠れて消えていく。

意識が、そこで途切れた。

意識そのものは直ぐに取り戻した。正確には一瞬、視界がブラックアウトしただけで、完全な失神状態には陥らなかったようだ。一般の学校とは異なり、いずれも体力には一定以上の自信を持った

生徒の集まるのが士官学校である。女子生徒といえども貧血・卒倒事件などがそうそう起こるはずもなく、いきなり顔色を失って椅子からフロアに転げ落ちかけたグレーチェンに、女性特有の生理的な事象に関する野卑な揶揄の言葉が投げつけられる。

「うるさい、黙れ！」

その彼らも、身を立て直したグレーチェンの視線に、続く言葉を咽喉に突き戻された。紫の瞳の回りにくつきり現れた白い部分が、目の細かな赤い網が浮かび上がったように血走っていた。色白な頬が蒼白を通り越して土気色に血色を失い、正面から睨み据えられた何人かは、本気でグレーチェンの発狂を疑ったほどだった。

「グレーチェン、どうしちゃったの。酷い顔色よ」

ロツティがおろおろと、それでも冷水と、冷やしたタオルをもらってきってくれる。タオルを額に当て……全身が、耐寒訓練の時のように冷え切っているのに、額はひどく熱く、脂汗が頬にまで流れているのが耐え難いほどに不快だった。コップ一杯の冷水を一気に咽

喉に流し込むと、不快感がほんの少し和らぎ、手足の震えが治まってきた。

「今日は休んだら？ 加療願ひ、出してきてあげようか？」

「——大丈夫。心配しないで良い。ちゃんと課業には出るから、ちよつと休めば、大丈夫」

言つたものの、本当に大丈夫なのか自信が持てなかつた。ジークフリード・キルヒアイスがテロに遭つた。ジークフリードがテロの犠牲となつて亡くなつた——かも知れない。そう思つただけで、テルヌーゼンの引力が突然に何倍にもなつたようだ。肩を押さえつけられ、そのまま地に身体をねじ伏せられてしまいそうだった。

母が毒殺された時、父とヘルクスハイマー伯家の総ての者が自分一人を残して逝つてしまつたと知つた時のことをグレーチェンは覚えてゐる。身体の一部を切り取られてしまつたような、自分のどこかにぽかりと大きな穴が開いてしまつたような、踏んでいる足が自分のものでないような頼りない感覚。そして、叫び狂つてしまいた

くなる恐怖と衝撃。

あの時には、しかし、自分は耐えた。耐えることができた。耐えて、ラインハルト・フォン・ミーゼルに向かって毅然と振る舞うこともできたし、結果としてジークフリード・キルヒアイスの存在に心惹かれる想いを心の奥深く、そっと仕舞い込んでおくこともできた。

——ジークフリードが……

思い出した瞬間、グレーチエンは襲ってきた衝撃に再び目の前が昏くなるのを感じた。

今回は本当に耐えられるかどうか分からない。耐えられないかも知れない。本当に、自分はここから起きあがって、士官学校生徒としての日常に戻るのか、まるで自信が持てなかった。

「ええと、連絡取ろうか？ 家族の人に」

「え——？」

「だからあ……いつも、来てくれてる人、いるでしょ？ なんて言

う人だっけ？ 連絡先、くれたら……」

「ああ、ヴェンツェル・ハインリッヒ……」

自分が、食堂の椅子に半ば崩れ折れており、上体をロツティに支えてもらっている有様なことに、グレーチェンは漸く気づいた。

「ご免、ロツティ。もうちよつとだけ、休ませていて。大丈夫、ヴェンツェル・ハインリッヒなら、週末に来てくれる約束になつてる」  
「そうだ、ヴェンツェル・ハインリッヒ。ジークフリード・キルヒアイスの後見人に望んだ彼女の意志を知っていて、敢えて亡命行の同行者となつてくれた、今はグレーチェンの唯一の『家族』。グレーチェンを負傷させたクーデター側の兵士に本気で逆上してくれた、彼女の後見人。」

貴族の娘らしからぬグレーチェンの言動に一々驚きやら戸惑いやらを露わにして、あれで情報部将校が勤まるのか、彼女の方が時々心配になる。ベンドリングの表情を思い出した時、グレーチェンは身体のだこかに力が戻ってくるのを感じた。大丈夫、きつと立てる

だが、縁なしの丸眼鏡の奥から覗き込んでくる黒い目は、まだ安堵を示していなかった。

「いいけど、まだ週末までずいぶんあるしい……ねえ、グレーチェン。体調悪い時に無理に課業に出ても、良いことないよ。それに今日は、スパルタニアンのシミュレータ訓練もあるのよ」

グレーチェンは小さく唸る。ティフリー・ブラントンと戦略研究科首席を争う彼女にして、唯一の苦手科目が戦闘宇宙艇の操縦訓練だった。無重力状態での船外活動訓練でも、実際の船外作業でも、教官に『言うことなし』と満点を付けられた彼女だが、スパルタニアンの操縦とだけは最悪な相性から逃れられない。

だが、スパルタニアンのシミュレータ訓練は必須教科であり、欠席すれば必ず同じ週の内に補修を受けなければならない。今日、休んでも同じなのだ。それに、これ以上ヴェンツェル・ハインリッヒに心配をかけるようなこともしたくない。

まだくらくらする頭を押さえながら、グレーチェンは友人に笑い

かけた。

「大丈夫、出るって」

笑顔を浮かべるのが、これほどの努力を必要とすることに初めて気が付いたような気がした。

予想はしていたものの、スパルタニアンのシミュレータ訓練は記録的な酷さだった。宇宙空母からの発進と帰還の訓練だったが、二時間の内に発艦失敗四回、機位喪失三回、着艦失敗六回で内二回は母艦に激突との判定。

二時間の訓練が終わらない内に、教官の怒号がシミュレータ・ルームに轟いたのも当然のことだった。

「これまで一体、何をやっていった!! もう、今日は乗らんで良い。罰点二、それと腕立て伏せ一〇〇回だ。直ぐにフィールドへ出る。終わるまで帰ってくるな!!」

先に訓練を終わっていたブラントンとロッティが心配顔で佇んでいるのを無視して、グレーチェンはフィールドへ出た。何も考えずに腕立て伏せで汗を流せるのは、この時はかえってありがたかった。しかし、グレーチェンにとつての『最悪の一週間』の、これが始まりだった。週末までのほぼ一週間、座学系の課業は何とか切り抜けた。それでも、得意のはずのディベートや戦術立案実習でブラントンに一方的にやりこめられたり、戦術演習でも芸のない正面攻撃をまともに受けて立ってしまった挙げ句に、退却のタイミングを見失うまで気が付かないなど、普段の彼女にあるまじき失敗が続いた。二年生徒に課せられる肉体教練は、スパルタニアン（古ローマ式）の訓練に加えて、素手での格闘技、シミュレータによる無重力遊泳訓練やその準備としての水泳から、通常課業後の団体スポーツ競技……グレーチェンの選択はフライング・ボールだった……など多岐にわたる。年齢から来る体格差というハンデはあっても、こうした教練が不得意ではなかったグレーチェンだったが、この週ばかりは、これはもう

惨憺たる状況だった。

格闘技訓練でノックアウトされて失神しかかったのを皮切りに、遊泳訓練では宇宙酔いを起こして教官にシミュレータから助け出され、フライング・ボールでは取り損ねたパスを顔面で受け止めた挙げ句にタックルに吹き飛ばされた。鼻血で顔を真っ赤に染めた上に、フロアの上で数回転して意識朦朧となって伸びてしまった彼女に、さすがに教官達も青くなつた。

「死んだか……？」

あらぬことを咄く教官に、同期生たちが悲鳴を上げたほどだった。個人的な事情など勘案されないのは当然なことで、グレーチェン自身も不調の原因を詳しく語ると言うこともしなかった。必然的に、教官達からは『受講態度不良。矯正の要あり』と判断されて罰点を食らう。

「グレーチェン・ヘルクスハイム候補生、罰点一〇だ。罰点消化のために、半日の追加サーキット・トレーニングを命じる！」

なんとかたどり着いた休日の前日に教官から下された冷酷な裁定がそれだった。居並ぶ同期生たちがグレーチェンに悲惨な視線を送ったのも無理はなかった。

罰点消化のためのトレーニングを平日の課業時間内に行うことは許されない。休日の内の何時間かを潰さなければならないのだ。かつ、単に『サーキット・トレーニング』とは呼んでいるものの、これは実際には野戦教練である。既にぼろぼろな状態のグレーチェンにとっては地獄のような罰則だった。

「は……はい……了解致しました」

アイ・キャント・ヒア・ユー      ミッド・シッブマン

「声が小さい、候補生!!」

イエス・サー      ジ・オーダー・イズ・アンダーストゥッド

「はいっ、了解致しましたっ!!」

その日の午後、珍しくもテルヌーゼンの市街での待ち合わせを指定してきたグレーチェンを待っていたベンドリングは、現れた彼の被保護者の姿に仰天することになった。

「どうしたんです、その格好は。何があっただんです!？」

両腕とも腕から手にかけてリバ・テープだらけで左手首は簡易ギブスに固定されている。フライング・ボールを受け止めた痕がまだ消え残って、綺麗に通った鼻筋を薄青く染めている。顔色は僅かに回復したものの、まだ血の氣のない蒼白さをそのままに、過労と睡眠不足、そして食事が満足に咽喉を通らないことから来る体調不良が不吉なほどの濃さで目の下を隈取っていた。きつい光を湛えている紫の瞳までが、この時は紗をかけたような曇りに覆われているようにさえ見えたとし、金髪の毛先が洗い落とし損ねた泥の色に染まっていた。どれほど多忙であっても、身綺麗さを忘れたことのないグレーチエンにあるまじき有様だった。

それでも、グレーチエンは辛うじて笑った。頬にもリバ・テープが白く、本来なら色白の肌理の細かな肌にも無数の傷が目立ったが。「罰点を食らってしまったのだ。午前中一杯、罰点消化の追加トレ

ーニングを受けていたから、遅くなってしまった。知っているか、朝八時から一時半まで休みなしの野戦教練だぞ。ちよつときつかったけれど、何とか切り抜けた」

全然信じていない顔でベンドリングは鼻を鳴らした。

「――まずは休みましょう。今にも倒れそうだ」

ここはちよつと気の利いたものを食べさせるそうです……ベンドリングが案内したのは、小綺麗な造りの、こぢんまりしたテラス・カフェだった。

「ジークフリード・キルヒアイス上級大将ですね？」

前置きも何もない。いきなりベンドリングが突きだした言葉の槍を、グレーチェンは受け止めかねて目を閉じた。虚勢を張る気力もなく、一気に表情が崩れて伏せた瞼の間から涙が溢れそうになった。事実を報されたら泣き崩れてしまわない自信が、この時のグレーチェンには全くなかった。

「――亡くなつた……のか？」

聞きたいですか……グレーチエンの期待した応答を、ベンドリングは返さなかった。しばらくじっと我が被保護者の姿……グレーチエンに対する、これまでの彼の記憶からは到底想像もつかないようなひどい有様の……を見つめ、それからほっと大きく息を付いたのだ。

「亡くなってはいません」

ふたたび前置きなし。

「え？」

グレーチエンは目を上げて、彼女の保護者を視野に入れる。信じられないものを聞いた驚きが、その目を真円に近いほどに瞪らせていた。

「今、何て言った、ヴェンツェル・ハインリッヒ？」

紫の瞳が、うなずくベンドリングの姿を映す。

「亡くなっていないと言いました。ジークフリード・キルヒアイス  
上級大將は、ローエングラム侯へのテロを防ごうとして重傷を負い

ましたが、現在は入院加療中です。そのように帝国政府が発表しました。ヤン艦隊からの報告です。間違いないでしょう」

フェザン駐在のヴィオラ大佐は、情報の収集者としてまるでににならない。フェザン自治政府が彼らに都合良く取捨選択した後、飼い犬に餌でもやるかのように彼に投げ与えてくる情報の断片を、ろくに分析も判断もせずに伝えてくるだけなのだ。

帝国政府と帝国軍の公表した『ガイエスブルグの惨劇』の詳細を把握し、情報部へ伝えてきたのはヤン艦隊所属のバグダッシュ中佐。いつのまにかクーデター派からヤン一派に鞍替えしてしまった厚かしい男である。自ら電子索敵艦に乗り込んでイゼルローン回廊の帝国出口、さらには帝国領にまで入り込んで膨大な情報を傍受してきたのは、ほかならぬバグダッシュだった。ただ、厚顔無恥と評するだけでは気の毒かも知れない。

「ローエングラム侯は、キルヒアイス上級大將への暗殺未遂がリヒテンラーデ公爵によって指咥されたものと断定して、帝都を急襲し

たとのことです。この直前に、キルヒアイス上級大將が亡くなり、ローエングラム侯軍全軍をあげて、その喪に服すとの発表を行っています。それと、姉のグリュネワルト伯爵夫人に、ローエングラム侯自らが超光速通信でキルヒアイス提督の死を伝えた、と」

「——油断させるために……ジークフリードが死んだ、と偽の発表をした……そういうことなのか？」

頼りなげに震える声がまったくグレートチェンらしくなかったが、察しの速さはまさに彼女のものだった。

「そうです。かなりの重傷のようで、回復には半年から一年はかかるかも知れない……これは未確認の情報ですが、とにかく軽い怪我ではない。と言って、生命に関わると言うことはなさそうだというのが我々の判断です、グレートヒエン」

「そ……そうなのか。そうか、そうなのか……」

「喜んでいますか、グレートヒエン？」

「え……う、あ、いや」

張りつめきつていた緊張、というよりもこの一週間、肩から背にかけてのしかかつてきていた耐え難いほどの重さに、いつかは背骨を折られてしまうのではないか。そう思い続けてきた重さが、突然取り払われたようだった。拭い落としたように瞳から翳りが消え、頬に血色が戻ってくる。不意に新たな力を吹き込まれたような気がして、グレーチェンは自分が背を軽く丸めていたことに今更ながらに気づいた。背を伸ばしたが、もう重みは感じない。

同時に、本来の彼女らしい明晰さも戻ってくる。

「キルヒアイス提督の生存は、同盟にとって大変な不運だ……とそう言うことなのだろうか？」

「ええ。何しろ、アムリッツアで散々な目に遭わされましたからね。ああ、上の方ではローエングラム侯もキルヒアイス提督も、単なる『青二才』って無視する態度を止めてませんが、そいつは単なる虚勢です。ちよつとまともに情報を分析できる人間なら、ローエングラム侯一人と、ローエングラム侯プラス・キルヒアイス提督とで、

どれだけ帝国軍の力に差が出るくらい直ぐに判断できるといいうものです」

「それは……そうだな。悪かった」

「グレートヒエン」

ベンドリングが声を改める。

「何に謝っているんですか？」

「ジークフリードのことで、こんなひどいかつこうをそなたに見せてしまったことだ。そなたに心配をかけてしまった。でも、ヴェンツェル・ハインリツヒ、同盟にも同盟軍にも悪いとは思う。わたしも同盟軍の一員だから、自分への裏切りでもあると思う。でも、やつぱり——」

「嬉しいんですね？」

「悪いが——やつぱり嬉しい」

あるいはベンドリングは思ったのかも知れない。ジークフリード・キルヒアイスの健在を喜ぶ思いと、同盟軍の士官学校生徒とし

て近い未来、おそらくはローエングラム侯による同盟領侵攻時には同盟軍士官として彼らを迎え撃つ立場に自らを置こうとすること。矛盾としか言いようのない思いと行動が、グレーチェンの中ではどのような形で矛盾せざるものとして納得されているのだろうか、と。あるいは戦場の苛烈さを知らない少女が、現実からかけ離れた夢のみを見ているのではないか、とも。

オーダーした昼食のスープを口にしたグレーチェンが目を丸くした。

「美味しい。こんな美味しいスープは飲んだことがない」

当然だった。極度の心労が彼女から正常な食欲をすら奪っていたのだから。ただ、この時のグレーチェンはまだそのことにすら気づいていない。

育ち盛りの年齢の、かつ士官学校生徒という途方もないほどのエネルギーを日々必要とする立場の少女として本来あるべき食欲を示して料理に向かい始めたグレーチェンが、ふと視線を上げた。

「訊いて良いか、ヴェンツェル・ハインリツヒ？」

「はい」

「つまり……」

らしくもなく言い差して、唇を噛む。間を取るように、グラスの冷水を口に含んだ。

「私の家族のことですか」

その動作で察したらしい。ベンドリングが眉を曇らせ、それからゆっくりと首を左右に動かした。グレーチェンの表情がさっと曇った。

「……分らないのか？」

「ヤン艦隊からの情報に入っていました。ガイエスブルグ要塞でローエングラム侯に降伏した貴族の名簿に、ベンドリング伯爵の名がありました」

「では、生きておられるのだな、そなたの……」

「父と、おそらくは母と兄の内の一人は……ですね」

「良かったではないか」

「良かったと言えるのかどうか、微妙なところですよ」

降伏したからと言ってローエングラム侯が、彼に対立した門閥貴族達に対して何の処分も下さないはずはない。貴族としての特権の剥奪は無論、資産の没収は当然のこと。生き延びたとしても、ベンディング伯爵家は何もかもを奪われて、裸同然の姿で路頭に放り出される。

「なんとも楽しい未来図ではありません」

ベンドリングは、あるいは疲れていたのかも知れないし、何か別の屈託があったのかも知れない。皮肉っぽい物言いがいつものベンドリングらしくなく、グレーチェンは軽い驚きに目を丸くした。

「それは……そうだな」

いつものグレーチェンなら、『それでも生きているのだから亡くなってしまうより余程良い。生きていれば会える時も来るではないか』と応じただろうが、この時は口の中で呟いたに留まった。亡命

という偶然がなければ、彼女自身も父とともにガイエスブルグ要塞でローエングラム侯に降伏することになったかも知れない。一切合切を奪われ、裸同然で路傍に放り出される運命は、彼女自身のものであったかもしれないのだ。亡命に成功して、ヘルクスハイマー伯家の資産の大半はなお彼女の手許に遺されている。その上に、ヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリングという心強い……と今は心から信じているのだ……後見人まで手に入れた上でだ。

ジークフリード・キルヒアイスの訃報、それが意図的な誤報であったとしても、それを信じて茫然自失した余りに、あるまじき哀れな姿をベンドリングの前にさらしてしまった。グレーチェンをして言葉を濁らせたのは、自身の幸運と幸福への引け目と、身勝手さへの羞恥だった。

「謝らないのですね？」

「謝るなど言ったのはそなただ！」

「ええ、やっぱり、あなたはグレートヒェンだ」

笑ったのは和解のサイン。取り敢えずグレートチェンはそう了解することにした。

「あと、もう一つ聞かせてくれないか、ヴェンツェル・ハイน์リッヒ。どうして、わたしがこんなことになったのがジークフリード・キルヒアイスのことのせいだと分かったのだ？」

「バレバレですよ、グレートヒェン。あなたがキルヒアイス提督のことをどう思っているかくらい、一目では無理ですが、ずっと見ていれば分かります。幼くとも女子は女子じゃ——そう教えてくれたのはあなたですよ、グレートヒェン」

「——!!」

「あのニュースを聞いた時には正直拙いと思いました。それから、直ぐに調べ始めたんですが……」

そこで言葉を切り、ベンドリングは目を細めた。

「友達は大事になさってください、グレートヒェン」

何のことだ——反問しようとした時、運ばれてきたデザートとコ

ーヒーが彼女の注意を奪った。

疑問が蘇ってきたのと、回答が与えられるのが同時だった。

今夜の内に衛星軌道に上がらなければならないというベンドリングを、宇宙港行きシャトルバス乗車場に見送った時だった。

バスに乗り込む直前、振り返ったベンドリングが軽く眉をつり上げて、グレーチェンの背後を指差したのだ。

振り返った視線の先、慌てて物陰に隠れようとした黒髪と丸い眼鏡を、グレーチェンは見逃さなかった。

「ロツティ！」

小走りに後退りして逃げようとする同期生を、グレーチェンは慌てて掴まえた。

「そうか、ロツティが知らせてくれたのか」

「ご免、グレーチェン。ただ……心配で……事務監にお願いして、

あなたの様子だけでも知らせてあげてくださいって。あの、余計なこととして、その……でも、心配だったから、ちよつと気になって。別にスパイするとか、そんなんじゃないくて……」

自身わけの分からぬ衝動だった。

「わわわ、グレーチェン……何するの、人が見てるよっ!!」

不意にグレーチェンに抱き締められて、ロツティはびくりしたらしかった。

グレーチェンはロツティを離さなかった。突き上げてきた熱いものが目尻からじわつと溢れるのを感じていた。四年前、同盟辺境ポヌレト星系の惑星ゾーシム。亡命希望者宿舎で、無事に亡命を認められて還ってきたベンドリングを迎えた時の、あの時と等質な思いに突き動かされていた。

あの時は家族を得た。

今度は友人を得た。

「ありがとう、ロツティ。ありがとう、本当に！」

「ちよつと、ちよつと、ちよつと、グレーチェン、どうしたの、痛い、痛いったら！」

ラインハルト・フォン・ミューゼルと、ジークフリード・キルヒアイスの出会いとは比すべくもない。グレーチェンの人生にとって無視できないほどの意味を持ち、僅かではあっても、同盟と同盟軍の未来をも確かに左右した、グレーチェン・ヘルクスハイムと、シヤルロッタ・ゼーダーシュトレームの本当の意味での出会いだった。

その日、招かれて訪れたゼーダーシュトレーム家のことを、グレーチェンは終生忘れなかった。

もう一步でスラム街と呼んでも良いような、テルヌーゼン郊外の一角。ハイネセンの自宅で、グレーチェンが自分のプライベート・スペースで使っているのよりもまだ狭い二ベッドルームのアパートメント。そこに母親と、二人の弟が住んでいた。かつては、父親と

兄、そしてロツティも同居していたわけで、その手狭さはグレーチエンの想像を超えていた。

一家揃って紅茶好きだと聞いて、手みやげに買っていったシロン葉のティー・バッグを、ロツティの母親にほとんど押し頂くように受け取られ、グレーチエンはかえって恐縮する羽目になった。

狭いダイニングへ案内しながら、ロツティはいつものようにおどおどと落ち着かなかった。

「汚いところでしょ。こんな所に招いて、かえって悪かったかしら？」

「そんなことはない。お礼を言わなければならないのはわたしの方だから」

せつかくの良いお茶なのに、こんな淹れ方で申し訳ない。そう言  
って差し出されたのは、大きなポットでびっくりするほどに濃く煮  
出して、たっぷりのミルクと砂糖を入れた熱いミルク・ティーだっ  
た。よくて純度の低い小麦蛋白グルテン、さもなければ酵母培養の人工蛋白

の、齒触りの固い肉のはいったシチューや、混ぜものの多いらしいぼそぼそしたパン、色も形もバラバラなくず野菜の切れっ端の入った薄いスープ。士官学校寮の食事メニューが美味に思えても不思議ではない、粗末な夕食だったけれど、グレーチエンにはベンドリングと共にしたその日の昼食と並んで、忘れがたい記憶として残る食事だった。

夕食の席、ロツティは寡黙で、専ら母親が話し手だった。

夫と長男を徴兵された戦場で失った後、ほとんど女手一つで長女のロツティとまだ一〇歳前の弟二人を育ててきたこと。母子家庭への援助が急速にカットされ始めた昨今の情勢で、ロツティが大学進学を諦めて一六歳での就職を志望したこと。テルヌーゼン基地付属病院の准看護師である母親に倣い、軍付属の医学専科学校を志願するつもりだったのが、高等学校の進路指導教師が、成績優秀者枠を使つて勝手に願書を出してしまったこと。

「ホントにこんな不器用で、引っ込み思案で、とろい娘が軍の士官

さまなんぞになれるものかと思つたんですけれどねえ」

ロツティ自身も迷い、しかし、士官学校に入つた時点で下士官待遇としての給与まで出ると聞き、入学の意志を固めたのだと言う。

「そんなことはない。ロツティは優秀な生徒だし、わたしも何度も助けてもらっている」

嘘でも世辞でもない。たしかに『とろい』ロツティだが、専攻する航法では彼女に肩を並べられる候補生はほとんどいないのだ。教官達の間でも、ロツテ・セーデルがいずれ戦艦のブリッジに立つだろうとの評価で一致しているらしい。

「おかげで、何とかこの子たちを食べさせて、学校にもやらせることができてるんですよ」

母親は、なぜかグレーチエンを拝むようにして、そう話したのだ。

「本当にありがとう、ロツティ」

グレーチェンがもう一度、ロツティへの謝意を述べたのは、士官学校寮への帰路。既にテルヌーゼン市の上空が一面の星空に覆われていた。

「え？」

「わたしを励ましてくれるつもりだったんだろう？ あんまりひどく落ち込んでいたから」

「え……う、ううん、そんなつもりじゃ……」

「おかげで元気が出た気がする。明日からは元のわたしに戻れそうだ」

街灯の白い光を、ロツティの丸眼鏡のレンズが弾いて煌めいた。頷いたようだった。

「あの——グレーチェン。一つだけ、訊いて良い？」

「うん？」

「ジークフリード……ジークフリード・キルヒアイスって、グレーチェンにとってどういう人なの？」

「そのことか……」

つかの間、迷う。今や、同盟軍にとってローエングラム侯と並ぶ最大の災厄ともいうべき、帝国軍随一の驍将となった赤毛の少年。彼への想いは、同盟軍の士官を目指す者として禁忌と言ってもよい類のものだ。これまで、ベンドリングにすら明確な言葉としては告げたことはない。ベンドリングには、ずっと見ていればバレバレだとはつきり言われたが。

ロツテイに向かつて隠すべき理由を、グレーチェンは見いだせなかった。

「わたしの生命の恩人だ」

「恩人——？」

「そうだ。わたしを同盟へ亡命させてくれた。彼がいなかったら、わたしは殺されていた。多分」

「殺されて？」

眼鏡の奥の目がまん丸くなる。

「余計なことを知ってしまったから——そう、だからジークフリード・キルヒアイスは……」

微笑い、グレーチエンはもう一つの事実。彼女にとっての最大の秘密を、新たに『親友』<sup>とも</sup>となった、この少女に向かつて口にした。

「わたしの……大切な男性<sup>ひと</sup>だ」

## 距離の防壁／距離の暴虐

『距離の防壁』を唱えたのは、建国の祖の一人グエン・キム・ホアである。

「同盟首都星系バーラトから、帝国首都星系オーデインまでの距離は概ね一万年余に達する。最高速の恒星系間宇宙船によっても、直線で八〇日近い航行を余儀なくされるこの距離こそが、帝国に対する我が同盟の最大の防壁となり得るであろう」

最初にバーラトにたどり着いた一六万人余りの初代同盟市民、『長征一万年』と呼ばれる苦難に満ちた脱出行については多くの著作がなされている。だけでなく、アーレ・ハイネセン自ら、あるいはグエン・キム・ホア自身の手になる航行日誌の原文も刊行され、同盟市民であれば誰もが入手して読むことができる。

「帝国の弾圧を逃れ、指導者たるアーレ・ハイネセンを初めとする

多くの犠牲者を出すことで辛うじてイゼルローン回廊の危険宙域を逃れた人々の前には、安定期にある多くの恒星群が広がっていた」  
グレーチエン・ヘルクスハイムが熱心に視線を注いでいるのは、同盟政府の監修による『自由惑星同盟建国史』の第二巻。イゼルローン回廊を抜けた同盟建国の英雄達が、その本拠地について激論を交わしている辺りだった。

宇宙暦七九八年九月。グレーチエン・ヘルクスハイムは公的には

一七歳。同盟軍士官学校の三年生 後 期 に在籍する。テルヌー

セカンド・セメスター

ゼン臨時分校は七九七年末で閉じられ、年の明けた三年生徒 前

フアースト

・セメスター

期 からはハイネセン生活が復活した。本来なら、まだ一年余りを士官学校に在籍すべき年齢だったが、七九九年が明けて少しすれば、グレーチエンは士官の卵として任官し、いずれかの任地への赴任を命じられることになる。

グレーチエンの専攻科は戦略研究科。士官学校でもトップ・エリ

ートのみが所属を許されるとされる専攻課程である。ただし、グレイチェン自身は、戦略研究科の存在への疑問を抱いており、自分を『トップ・エリート』の一員と見なすのには抵抗を感じ続けている。教官たちと同期生とを共に驚かせたのが、専門課程が始まって三ヶ月ほどで行われた、最初の大規模な艦隊戦闘の作戦演習とシミュレーションである。この演習で、グレイチェンは、ブラントンと並ぶ秀才と目されていた男子候補生と対戦したが、大方の予想に反して、勝利者となったのはグレイチェンだった。

序戦、戦場に二倍以上の兵力を集中させた相手に、グレイチェンは常識外の敵前回頭を敢行。意表を衝かれた相手が対応に惑う隙を突いて、その左翼部隊を穿貫突破した。対戦相手の男子学生は、グレイチェンが当然そのまま背面展開に移るものと予想し、艦列を再編して左右に展開、彼女が展開する鼻先での両翼包囲を試みる。だが、グレイチェンは包囲完了を待っていなかった。艦隊を紡錘形にまとめ上げるや、一気に戦場を離脱。啞然とする相手を尻目に、今

度は彼の補給部隊、および補給基地に殺到したのだ。

「こんな戦い方があるか！　なんで、後方兵站線をさらけ出したまま、俺の補給基地を叩けるんだ！」

男子生徒は憤激して叫んだが、シミュレータと教官の判定は共に彼女の完勝だった。

グレーチェンの勝利はそれだけではなかった。次の対戦相手は、文句なしの首席候補と見做されていたティフリー・ブラントンであり、誰もがブラントンの勝利を予想した。

序戦、戦線を固めるブラントンに、グレーチェンが採ったのは、全艦隊を複数縦列に編成しての全面強襲。先頭集団が敵前衛集団と接触すると同時に、中衛集団を戦場に突入させて突破路を開削する。敵艦隊前衛に強引に切り広げられた間隙を、敵の予備隊が埋め直す前に、突撃した後衛集団が一気に敵艦隊の中枢部までの突撃路を切り開き、その指揮中枢部を直撃する。

「無茶だ……」

観戦していた誰もが同じ感想を抱いた。ブラントンは、グレイチエンが艦列を再編した時点でこの戦術を読んでいた。艦列を急速に収縮させて戦線を圧縮。常識外れなまでに縦深を深くして、グレイチエンの突撃縦隊を受け止めたのだ。さらには予め用意した予備集団を艦隊後方に控置し、万一の迂回突破に対しても万全の構えを整える。

「完璧な布陣だった」

教官の一人が、このシミュレーションを指してそう評しているほどである。そして、現実もこの教官の評価通りに推移した。グレイチエンがブラントン艦隊の分厚い防禦陣に繰り返した猛烈な波状攻撃は前後合計一〇波にも及ぶ。ブラントン側の損失も小さくはなかったが、攻撃側に倍する厚さで布陣した防禦陣は遂に崩れない。攻撃側の損失も大きく、グレイチエンは一〇波目の攻撃で遂に全部隊を戦場から離脱させるに至った。

ブラントンは控置した予備集団を動員、同時に前衛集団を動かして、後退するグレーチェンへの追撃を開始した。攻勢を挫折させられ、退却を余儀なくされたところの急追撃。グレーチェンは艦列を四分五裂させられ、這々の体で戦場から逃げ出すしかない——誰も  
がそう思った瞬間だった。

「馬鹿な……」

呻いたのが誰だったかは記録されていない。ブラントンの艦隊が追撃に移るべく、その布陣を大きく動かした瞬間、それは起こった。完全に挫折したかに見えた緒戦の攻勢だったが、グレーチェンにとつてはそれは予定の行動だったのだ。押し戻されたグレーチェンの艦隊は、戦場を逃げ出す代わりに、逆回りにブラントン艦隊右翼方向へ大きく迂回する。そのまま右翼部隊の右後方へ回り込むようにして突撃を開始したのだ。

「その手を食うか——」

ブラントンは、動かしかけていた予備隊を動員し、自軍の右翼側

面にさらにもう一重の防禦陣を布く。同時に右翼集団を引き戻し、予備兵力との間でグレーチェンの突撃を左右から両断しようと試みた。しかし、両断されたのはグレーチェンの方ではなく、ブラントンの艦隊だった。

ブラントンの失敗は、部隊間連絡のタイムラグへの見落としだった。予備隊と右翼集団が異なる指揮系統に属していること。さらに、既に右翼集団が、グレーチェン艦隊の後退への追撃命令を受けとつて動いており、そこへ全く方向の異なる後退と予備隊との連携を命じる命令が重なったことから来る混乱。グレーチェンは、その結果として生じる混乱を正確に見抜いていた。正確に右翼部隊と、その側方に展開する予備隊の接合点を叩く。命令の伝達の僅かのタイムラグで、二つの部隊に生じた連動のずれを、時間差を付けて各個撃破する巧妙さは、観戦の教官と学生達を驚嘆させるに充分だった。

「馬鹿な！」

ブラントンが叫んだ時、彼の艦隊は鋭利なハサミで薄紙が切り裂

かれるようにして、左右に引きちぎられた。予備隊が撃破され、手薄になった中枢部隊後背にグレーチェン艦隊の主力が突入する。

『旗艦被弾、指揮不能』

指揮スクリーンの上で赤くフラッシュして、ブラントンの完敗を示すまでにさして時間を要さなかった。

「なに、まぐれさ——」

「ヘルクスハイムは読めない。なんでもありでやりにくいっただな  
いぞ」

驚きをやつかみに包んで吐き捨てる男子学生や、彼女が教科書にも載っていない戦術を多用することへの非難を上げる同期生も少なくなかった。だが、戦術シミュレータがグレーチェンの指示を受け入れる以上、後者の声が多くと同調者を獲得することはなかったし、前者については言えば、その後の作戦演習やシミュレーション

でグレーチエンが同期生に後れを取ることはほとんどなかったのである。

一方、グレーチエンは友人のロツティ・セーデルに一度ならず囁いたものだった。

「これで本当に大丈夫なのか、この国は？」

グレーチエンとて、自分が用兵者などと呼べるレベルからはほど遠いことをよく知っている。奇跡でもトリックでもない。一年生の時から図書館に籠もって読み続けてきた膨大な戦史や記録をもとに、自分なりに整理したやりかたを、その時々々の状況で応用しているだけに過ぎない。敵前回頭にしても、第四次ティアマト宙域会戦でラインハルト・フォン・ミューゼルが使った戦術の翻案でしかない。彼女以上に戦場を読み、戦術に優れた同期生がいれば、敗者の苦杯を仰ぐのは今度は彼女になるはずだった。

ブラントンに対する勝利にしても、結果ほどの完勝でないことを彼女は知っていた。彼が右翼部隊の隣に予備兵力を独立部隊として

展開させず、右翼部隊そのものを動かして迎撃に出ていれば、さらに予備隊をその後背に展開させて、防禦を固めていれば、突破は不可能だった。ただ、グレーチェンは予想していたのだ。彼が、教科書通りに予備隊をそうやって展開するだろうこと、そして部隊は隣接していても、指揮中枢は数光秒以上も離れていることを失念しているだろうことをも。

ブラントンは兎も角、同期生たちは、考えるのを放棄して、教科書や演習課題での正解に固執しすぎている。グレーチェンはそう思う。

通常のエデュケーションであつても四年では、宇宙艦艇の操作と士官としての戦術指揮の基礎を学ぶだけでも限界に近い。三年に短縮された教育期間に伴い、専攻課程も一年半となっている。平日の授業時間を六時間から七時間、全土曜にも六時間の授業を設け、さらに長期休暇の三分の二を潰して追加の演習や実習が組み込まれる。

彼女の見るところでは、時間的には辻褄が合つていても、候補生

達の方が消化不良を起こしている。特に戦略論概説に始まる戦略系の講習やそれに伴う実習、シミュレーション演習などでそれが目立つ。自ら調べ、考え、識見を養うための時間が決定的に不足している中、これはやむを得ない現象であり、その結果としての今の自分の成績がある。それがグレーチェンの結論だった。結果として、ここ士官学校首都校の戦略研究科全体でも、ブラントンを抑えて首席を確保することになったのだ。

グレーチェン自身は知らぬことだが、教官室ではこうも囁かれていた。

「あれで、スパルタニアンでの被撃墜記録をどこかで断ち切れさえすれば、文句なしに二年続けて、亡命者が卒業生総代を務めることになるはずだ」

「いや、今のままでも充分総代の資格はある。可能なら、第一三艦隊に配属して、ヤン・ウェンリーの元で経験を積ませてやりたいものだ」

「それが可能なら、な」

「ああ、それが可能なら……」

グレーチェン自身は、教官達の囁き声からは耳を閉ざしている……  
：と言うか、彼女の後見人であり、保護者であるヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリングは同盟軍統帥本部情報部で少佐の地位を得ている。ある程度の公私混同を自らに許すつもりなら、士官学校の教官室での噂のすべてを集めてくるくらいのこととは朝飯前と言っている。だが、ある意味政治的な動きを彼女は敢えて断っている。

煩わしかった。

同期生ティフリー・ブラントンは、彼女と首席を争う立場にある。同盟軍将官の祖父と父を持ち、祖父はブルース・アッシュビー元帥に従って第二次ティアマト宙域会戦に参加している。血筋から言えばサラブレッド中のサラブレッドだ。

ブラントン自身には、グレーチェンは悪意を持っていない。好意

とまではいかないが、この優秀で融通の利かない同期生への感情は好感に属するものだ。

煩わしいのはブラントンではない。彼の『取り巻き』だ。ブラントン自身が募集したわけでも、歓迎しているわけでもないが、ブラントンの『親友』を自称する学生は両手でも足りない数に達している。まさか、七三〇年マフィアを真似て七九九年マフィアを名乗るつもりでもないだろうが。

ターミナルに見入っていた彼女に歩み寄ったのはトム・スミス候補生。そうした『取り巻き』の一人だった。

「ご精が出るな、フロイライン・ヘルクスハイマー伯爵令嬢」

研ぎ上げた宝剣を思わせる紫水晶の瞳が、陰悪な光を湛えて声の主を突き刺した。

「静かにしたらどうだ、トーマス・パトリック・スミス候補生」  
声は低いが、唸りをあげる猫科の猛獣の剣呑さを孕んでいる。

「ここは図書館だ。資料を調べる場所だ。声高に雑談をする場所で

はないぞ」

「これはこれは、戦略研究科切つての才媛様は、俺たちのような劣等生とは口も利きたくないってか。ご大層なもんだぜ、帝国の大貴族様のお嬢様ともなると」

「わたしは忙しいし、時間もない。用事があるならさっさと云つてくれないか」

「いえいえ、お嬢様。私どものような下賤の者が、お嬢様のような高貴の方に用事など畏れ多い……」

へらへらへら……そんな口調を保ったまま、スミスは離れていくとしない。グレーチェンには分かっている。用事というのは、彼女の資料調べを邪魔することだ。同盟軍の対帝国戦略に関する論文が、彼女を含めた戦略研究科三年生徒に与えられた、後期での必修課題だった。グレーチェンは入学以来、消灯時間以降午前〇時三〇分までの図書館利用を許可されていたが、今では三年になった戦略研究科の生徒全員が許可を受けている。だけでなく、他の専攻の生

徒、たとえば親友ロツティ・セーデルの黒髪が、少し離れたデスクの陰に見えているほどだ。

で、このミスター・スミスだ。

「ミスター・ブラントンの命令？」

「何のことかな。伯爵令嬢様のお言葉が難しすぎて理解できませんねえ」

ブラントンの『側近』を以て任じているらしい、この男。グレーチェンがもつと嫌う、その出自への揶揄を繰り返すことで、彼女の時間を奪おうとしている。そうすることで、ブラントンがグレーチェンを成績で押さえるための救けになると信じているのだから度し難い——馬鹿だ。

グレーチェンの視界の隅に、華奢で小柄な姿が静かに動くのが映った。

「ご免——」

口の中で小さく謝る。そうして付け加える。気を付けるのよ、口

ツティ……と、その言葉を呟き終わらぬ内に、やっぱりそれが起こった。

「わあっ！」

悲鳴は間違はなくロツティ・セーデルのものであった。グレーチェンは額を押さえて、小さく呻いた。

ロツティが、教官室、あるいはブラントンのところへ向かおうとしていたのは確かだ。スミスについての苦情を申し立ててくれるつもりだったはずだ。だが、ちょうど立ち上がった生徒がおり、彼女の進路に横合いから椅子が突き出される格好になったのだ。ロツティは宇宙船のブリッジでは最も優秀な航法専攻学生だが、残念なことに地表ではしばしば極度に要領が悪くなる。わかりやすく言えば、『ドジ』なのだ。

今も、横合いから滑ってきた椅子に下半身を攫われ、気がせいていたために上体が下半身の急激な動きについて行っていない。見事なまでに上半身が宙に浮き、そのままフロアに飛び込みでもするよ

うに身体が泳ぐ。

「危ない、ロツティ——!!」

グレーチェンは慌てて椅子を蹴った。

そのまま椅子を躍り超えてフロアにダイビングすれば、ひどくすれば大怪我だ。フロアを滑って、そのまま他のデスクに激突し、積んである資料架やメモ리카ードのケースの山が頭上になだれ落ちる。漫画の中でだけ見られるような、冗談のような光景が現出しないとも限らない。

奇跡が起きた。宙を舞いかけていたロツティの身体がそのまま空中に制止し、やがてバランスを取り戻すと両脚を揃えてフロアに着地する。

「一〇点……かな」

小さな囁き。ついで拍手と、それをたしなめる声。グレーチェンは親友の無事を確認し、二重に安堵の息を付く。髪を短くクルー・カットにした頑丈な長身の男子生徒。彼が奇跡の主であり、奇しく

も彼女とミスター・スミスの共通の友人だった。

「退席しろ、ミスター・スミス」

硬質な口調は一切の妥協も馴れ合いも拒否する。

「おい、ティフリー……」

「俺をそう呼ぶ許可をお前に与えた記憶はない。直ちに図書館から退出しろ。さもないと力尽くでも出て行ってもらうことになるぞ」

「同期に向かつてその言い方はないだろう。二年続けて××な帝国の亡命者が首席だなんて許せねえじゃないか。俺たちはお前に首席になってもらいたくてだな——」

「お前に心配してもらうことじゃないし、お前がミス・ヘルクスハムの邪魔をすることで俺が首席になれるとしたら、それこそ願い下げだ。俺は俺の力で首席を目指す。お前のようなやつヘルプは要らない」

「固いこと言うなよ、なあ、ティフ……」

言葉が途切れた。ブラントンがスミスの胸ぐらを掴み、宙に釣り

上げたのだ。ブラントンの厚い唇が怒りに捲り上がり、獰猛そうな頑丈な歯が白く覗いた。

「俺をその名で呼ぶな、ミスター・スミス！」

続いて鈍い音。くぐもった悲鳴。ブラントンの右拳が手首まで埋まった鳩尾を押さえ、スミスがフロアにはいつくばる。

「ミス・ヘルクスハイム！」

「何か用、ミスター・ブラントン？」

「今月は君が戦略研究科の先任指揮官だ。ミスター・スミスを図書館の外へ退席させたい。命令してくれ」

グレーチェンは弾き返すように応じた。

「指揮を代行して、ミスター・ブラントン」

士官学校とても軍組織に属する。成績優秀者が教官に指名され、月代わりでそれぞれの専攻科での先任指揮官を務める。今月はブラントンの言うとおり、グレーチェンが指名されていた。彼女への反感を持つ学生が少なくない中、彼女の指揮統制能力を測る意図もある。

つての指名だったのかも知れない。前任指揮官として、一〇代後半から二〇代前半の数百人の学生を『締める』のはなかなか大変だが、今のところグレーチェンは特にその役割に破綻を来していない。「了解した……ミスター・スミスを図書館の外へ退出させる。命令だ」

それはないだろう、お前の取り巻きじゃないか……一瞬、複数の男子生徒がそんな表情を示したのを、グレーチェンは確かに見ている。無視してブラントンが重ねて命じる。何人かの男子生徒がスミスをフロアから引きずり上げ、半ば引きずるようにして図書館の外へと連れ出していった。

「謝罪する、ミス・ヘルクスハイム」

「自分の責任でもないことに、なぜ謝罪するのか理解できない。あれは、ミスター・スミスが勝手にやっていたことだ。あなたの責任ではない、ミスター・ブラントン」

「ミスター・スミスは、俺のためにやったことだと主張した。俺は

そんな命令も依頼も出してないし、頼んでもいないが、あいつが  
そう言った以上、俺には君に謝罪する義務が生じる。謝罪を受けて  
くれ」

相変わらず生真面目な奴——それが、グレーチェンの、半ばは微笑を含んだような想い。本当に生真面目な、融通の利かないところは誰かに似ている。思い、気づいた。彼女とともに同盟へ亡命すると決めた頃の、彼女の後見人だ。ついでに言えば、グレーチェンはこうした頭の固い、真面目一方の人間が嫌いではない。ヘルクスハイマー伯爵令嬢だった頃、最も周囲にいないタイプの人間だから無条件に好感を抱いてしまうのかも知れないし、救国軍事会議のクレーダーで、文字通りに生死を共にした経験から、彼に同志的な信頼を抱いてしまっているのかも知れなかった。

グレーチェンの容貌の描写としては、硬質で端正という表現が最も近い。彫りのくつきりしたビスク・ドールを思わせながらも、硬く中性的な印象を与える顔立ちの中で唯一、そしてややアンバランス

スに女性的な、あるいは官能的なと形容して良いほどの柔らかさを帯びているのが唇だった。ちよつと厚めの、淡い珊瑚色の唇が微笑む形に動くと、居合わせた士官の卵たちの視線が一斉に彼女に吸い寄せられたようだった。

「謝罪を受ける、ミスター・ブラントン。できれば、ミスター・ミスとは友人の縁を切ってくれると有り難い。わたしにとっても、あなたにとっても」

「あいつは別に俺の友人ではない。気遣いは無用だ」

身も蓋もない、ブラントンの応答だった。ミスター・ミスとしては友達甲斐のないことだ、とグレーチェンは肩を竦める。まあ、ブラントンが友人を選ぶ目を持っているのは、彼にとって喜ばしいことに違いない。

「それより、何を調べていたんだ。教えてもらえないか？」

やや口調が緩むのに、グレーチェンは身体的位置をずらして『自由惑星同盟建国史』のタイトルを彼の視界に入れた。

「同盟首都がバーラトのハイネセンに決まった経緯を調べていた」

「イゼルローン回廊を抜けて、最初に見出した安定した恒星系群だったからじゃないのか？」

「ミスター・ブラントンらしくないと思う、その言い方は」

グレーチエンは言う。イゼルローン回廊出口から五〇〇光年余りを隔てた宙域にはエル・ファシルを初めとして、シヴァやアルレスハイムなどの地球型惑星を伴った星系があつたのだ。最初に発見した、安定した恒星系の群れに根拠地を置くなら、これらの星系であつて何の不思議もなかったはずではないか。彼らは、余りに長い遠征……逃避行に疲れ始めていたに違いないのだから。

「ここに書いてある。いいか、読むぞ」

『アルタイル星系を発して、後世『長征一万年』を称される一大逃避行も、この時点で八〇〇〇光年の余を超えており、指導者アーレ・ハイネセンは既に亡く、彼の後継者たるグエン・キム・ホアも人生の最晩年の日々に足を踏み入れている。帝国の弾圧を逃れ、自

由を求めた人々も日々深さを増していく疲労の中で、踏み出すべき脚の重さを自覚し始めていたのである』

グレーチエンは端末を操作して、同盟領の星図を表示させた。

「イゼルローン回廊の同盟側出口からバーラトまで三〇〇〇光年余りある。バラトプール、ファイアザート、シロン、どれもバーラトから二〇〇〇三〇〇光年の位置にある。多分、グエン・キム・ホアがそう主導したからと思うけれど、建国者達は敢えてイゼルローン回廊からの距離を十分に取り出したのだと考えた方が妥当な位置関係だ」

「帝国からの侵攻が怖かった……そういうことか？」

「初代の同盟市民は一六万人しかいなかった。帝国は、この時点でまだ三〇〇億を超える人口を誇っていた。もし帝国が気づいて、イゼルローン回廊を越えて追ってきたら……エル・ファシルやアルレスハイムでは迎撃しきれない。建国者達がそう思ったとしても全然不思議じゃない」

「故に、敢えてイゼルローン回廊出口から離れた宙域に根拠地を置き……なるほど、周囲の宙域を開拓するにしても、できるだけバーラトから離れていない宙域に留めた。だから、同盟の中枢領域は、帝国に比較すると異常なくらいに小さな宙域に集中した形になっている……わけだな」

「わたしもそう思う、ミスター・ブラントン」

いつの間にか、グレーチエンとブラントンの回りに他の生徒たちが集まってきた。わざわざ椅子を運んできて、二人の討論、あるいは意見交換に耳を傾けているのは、彼らにとっても二人の考察が無視しがたい内容を含んでいるからに違いなかった。三年生徒は、あと半年余りの内に任官し、その後二年近くを実戦部隊での候補生生活を送ることになる。対帝国戦略の立案、あるいは実施が、彼らの日々の職務となる日はごくごく近いのだ。文字通りに生命を賭けた職務である。真剣にもなろうというものだった。

「帝国政府はもともと辺境宙域の開拓に熱心だ。辺境宙域を新たに

開拓したら勲功爵や辺境伯の地位をもらえるし、うまく領地が發展していったら皇帝に領地を差し出すこともできる」

「せっかく開拓した宙域を……か？　引き替えに男爵様だ、伯爵様だと威張ったって、爵位じゃ食えねえ」

野次に似た声が割り込んだが、グレーチエンは生真面目に応答した。

「爵位には権限だとか特権だとか、そう言ったものがついてくるということを忘れて欲しくないな。一番一般的なのが、徴税の請負権だ。帝室に納める税金の何パーセントか、無条件で自分の懐に入れられる」

「税金の私物化を制度化してるってことか、何て腐ったやつらだ」

「金が入る。権力も、地位も手に入る。ちよつと資産があつて、でも地位も権限もない下級の貴族だとか、へいみ……一般市民なら魅力を感じても当然だと思う」

「同感だ、ミス・ヘルクスハイム」

「ありがとう、ミスター・ブラントン」

最近ではもう積極的に開拓を行い、帝国領を広げようとする貴族も少ない。辺境開拓が皇帝直轄の事業になってしまい、帝国政府の財政が枯渇してくると、その開発もほぼ停滞状態に陥っているのだが。

「だから、アムリッツアでの戦いの前、六〇余りの有人惑星と一億以上の住民を占領下にいれることができた。逆に、辺境にそれだけの人口があつたからこそ、帝国軍は焦土戦術を採ることができた」

「同盟ではできないというのか？」

「イゼルローン回廊、あるいはフェザーン回廊出口から半径八〇〇光年……これは、アムリッツアでの同盟軍の最大進出線に近いのだけれど、この領域にどれだけのある惑星があり、どれだけの人口があると思う、ミスター・ブラントン？」

「イゼルローン方面で言えば、せいぜいシヴァ、エル・ファシル、辛うじてハダト……か。フェザーン回廊方面なら、ポレヴィイトが回

廊出口から二八〇〇光年。有力な有人星系はさらにジャムシード星系まで入る必要がある」

伊達に首席候補とされていないだけの博覧強記ぶりを見せて、グレーチェンの問いに応じた。

「ざっと換算して、精々一〇〇〇万人がいいところだろう」

「正確には八八〇万人強。有力な生産能力のある星系もほとんどないから、帝国軍が敵中に糧を得るような、馬鹿な兵站計画を立ててくれば、なにもしないでも焦土作戦が成立するけれど、逆に言えば、帝国軍の後背を叩くための有力な補給基地も少ないということを用意する」

「——もつと言うなら、イゼルローン回廊へ有力な兵力を送ったり、あるいは近隣星系に常駐させるための補給路が細いということでもある。そう言うことだな」

小さなどよめきが図書館の中に走る。慌ただしく端末を操作する音、あるいはノートにメモを取る音が急に音量を増したようだった。

グエン・キム・ホアの言葉通りに、『距離の防壁』は、転じて帝国にとつての『距離の暴虐』となり、ダゴン宙域会戦以来一五〇年にわたって同盟領を帝国軍の軍靴から守り通す上での最大の障壁であり続けた。ところが、両国の抗争が長期にわたると同盟領の中枢と両国の前線、すなわちイゼルローン回廊宙域とが離れすぎたことが、同盟軍にとつての大きな足かせとなり始めていた。ブラントンが気づいたとおりだった。

「イゼルローン要塞が典型的な例だと、わたしは思う」  
グレーチエンは言う。

敵軍の侵入を拒止する軍事上の要衝となるべき巨大宇宙要塞の建造。ダゴン会戦直後、帝国と同盟両国がほぼ同時に行き着いた着想であると言われる。特にコルネリアス一世による『大親征』によつて存亡の淵に追い込まれた同盟にとつて、イゼルローン回廊の制圧は国防上の必須条件だった。

「帝国軍にイゼルローン回廊を制圧させてはならない。彼らに回廊

を支配される限り、我が軍は敵を我が領域で迎え撃たねばならず、永遠に攻撃の主導権を帝国に握られ続けねばならない」

これは同盟初期、同盟政府を指導したコーネル・ヤングブラッドの言葉とも伝えられる。

『大親征』以降、同盟も回廊宙域への進出と軍事拠点の建設を何度となく計画し、計画するだけでなく、実際の回廊制圧と拠点建設の軍事作戦が発起されたことも一度や二度のことではない。

同盟にとって不幸なことに、これら一連の作戦はその悉くが挫折する結果となった。失敗の原因は無論、帝国軍による執拗な妨害だった。が、同盟の意図を頓挫せしめる上での大きな要因こそ、ハイネセンとイゼルローン回廊との距離だった。

帝国にとって有利だったのは、イゼルローン回廊が旧太陽系やアルタイル星系など、旧銀河連邦時代から入植・開発されてきた宙域に近かったことだった。つまり、帝国軍がイゼルローン回廊制圧の上での十分な補給能力を比較的早期に確保できたのに対して、同盟

軍は回廊への補給を、極端な場合にはバーラト星域から行わねばならなかったのである。

「なら、どうして同盟はイゼルローン回廊方面にもっと積極的に入植していかなかったんだ？」

誰かが合の手……と言うか、議論に参加してくる。ミスター・スミス同様、ブラントンの『取り巻き』を自称する一人だが、口調はすでに野次の領域を脱して真剣だった。

「我々は、『叛徒』だからな。帝国から見て」

答えたのはブラントンだった。

「確かに、俺が調べた範囲でも、同盟がイゼルローン回廊宙域への入植に積極的でなかったのは事実だ」

「帝国が怖かったからか？」

「そうだ。正確には、帝国による非人道的な弾圧が怖かったと言っている」

「自由惑星同盟は帝国を打倒して、宇宙に正義の旗を立てるために

建国されたんじゃないなかったのか？ 帝国の暴虐を恐れて縮こまっているなんておかしいじゃないか」

「アーレ・ハイネセンは偉大な共和主義者だった」

グレーチエンの声が割って入る。再び一同の視線が転じて、強すぎるほどの光を湛えた紫水晶の眸と硬い言葉遣いが近寄りがたい印象を与える、彼らの同期生に集まった。

アメリスト

「そして、彼はアルタイルで奴隷労働に従事させられていた。建国者たちは、帝国に敗れると言うことの意味を自分の身体で知っていた」

「そういうことだ。帝国のやつらにとって、我々同盟の市民は全員が『叛徒』だ。対等な敵としては扱われていない。捕虜になった場合、連中は我々を『帝国臣民としての道を踏み外した狂信者』として扱う。待遇は捕虜ではなくて、『思想矯正』対象の要加療者というわけだ。一応、過去からの戦時国際法が準用されるとは言っても、帝国の奴らからみて、俺たちに人権などない」

「帝国の官憲だとか、有力貴族だとかが、気まぐれに捕虜を虐待したり、殺したりしても、帝国の法律では裁かれることはないということだ」

グレーチエンが捕捉し、さらに言葉を添える。だから、歴代の同盟政府の施策を、誤謬とするのは余りに短絡的な非難だ——と。

同盟はバーラト星域を中心とした中枢領域に、その人的、資金的資源を集中させすぎた。その結果としての現在の軍事情勢である。その反省は確かに同盟政府内にも存在し、結果として遅ればせながらイゼルローン・フェザーン両回廊に繋る宙域への入植・開発計画も立案・実施に至った。エル・ファシル、カッフアー、パルメレンドなどの宙域がそうして開発に着手されたのだが、残念ながら遅きに失したと言うべきだった。

言っても詮無いことながら——グレーチエンが思うのは、アムリ

ツツアでの同盟の失敗だった。イゼルローン要塞を抑えたあの時、同盟は回廊出口宙域からハイネセンに至る宙域の再開発と、後方連絡線の充実を図る、まさに千載一遇の機会を得ていたのだ。別に帝国と和平条約を結ぶ必要もなく、ただヤン・ウェンリーという稀代の用兵者を難攻不落のイゼルローン要塞に拠らせて帝国の侵攻をただひたすらに防ぐ。その間に、回廊出口からハイネセンに至る宙域を、戦略的な縦深として開発すべきだったのではなかったか。

しかし——これは、すでにこの場でのグレーチェンたちの議論を離れて、この僅かに後にヤン・ウェンリーをも悩ませる命題となるのだが——民主共和制の政治制度としての制約を論じることになってしまう。政権交代を、一般民衆による選択に委ねるという特徴。ヤン・ウェンリーが、皇帝による親政、あるいは貴族による寡頭政に対する民主共和制の決定的な長所として、決して積極的ではないにしても終生、その主張を枉げることはなかった点でもある。

「一方で、一步を誤れば、政治家が利益誘導による選挙民の支持取

り付けだけを政治のすべてと勘違いする、いわば『パンとサーカス』の状態で陥る危険を常に孕んだ政治形態でもある」

更に後年、ユリアン・ミンツが出版したヤンの言行録の中に見られる言葉である。利点と同時にその欠点をも見出してしまふ。ヤンが『矛盾の人』と呼ばれる所以だろう。

「政権の担い手が定期的、或いは不定期に交替し続けるのを常態とする関係上、一般には不人気であつても長期的な視野からは不可欠な政治的な判断が、常に短期的な流行や嗜好の後塵を拝するのをどうしても避けることのできない政治形態と言うこともできる」

まさに『政権交代』を民衆が選択できる手段として案出された制度である『選挙』こそが、イゼルローン要塞を帝国への防波堤ではなく、橋頭堡として利用した。その結果がアムリッツアであり、同盟にとつては最悪の選択をもたらしたのだ。

「それと、エル・ファシルがある」

グレーチエンが更に言葉を継ぐ。何人かが怪訝な表情になるのに

構わず、さらに言葉を続けた。

「この戦いで、同盟はコルネリアス一世以来最深の宙域にまで同盟領内に踏み込まれた。『帝国軍による同盟領の蹂躪』が現実のものとなったと言つて良いはずだ」

「だから、同盟政府が怖じ気づいたつて言うのか？」

過去一五〇年間、帝国の侵攻は常態だった。事実として、ダゴン以来、帝国と同盟の戦場は継続して同盟領のイゼルローン回廊出口周辺を移動し続けるだけで、ただの一度も帝国側へ移動したことはなかった。戦術の天才を謳われたブルース・アッシュビーですら、戦場をイゼルローン回廊の向こう側へ移動させることだけは叶わなかった。そして、同盟軍は帝国軍によるイゼルローン要塞建造をも遂に阻止することはできなかったのである。

我々には正義があるはずだ。帝国軍ごときの侵攻に怖じて祖国防衛の努力を怠るなど、あつて良いことではない——声を上げる学生に、グレーチェンの口調は平板だった。

「少しでも油断すれば、エル・ファシルが再現するかも知れないし、その時、そこにヤン・ウエンリーがいるとは限らない。違うか？」  
つまりは——これは、口にできることではないが、グレーチエンは思ふのだ。

同盟市民にとって帝国との戦いは『犠牲の多い義務』となつて久しく、『祖国防衛の崇高な戦い』と信じる市民は少数派となつていた。ヤン・ウエンリー中尉の活躍によつて、『帝国軍による全市民拉致』の危険を免れたとは言え、身の安全を保障され得ないエル・ファシル他の辺境宙域への入植希望を大きく削ぐ結果となつたのではないかと。

かつて甚だしく有効であつた、グエン・キム・ホアによる『距離の防壁』は、時間の浸食によつてその効果を大きく減じ始めていたとも言えるのだ。

「——それで、何を結論づけたいわけだ、ミス・ヘルクスハイム？」  
話が大きく脱線したことに気づいたらしい。ブランドンが濃い眉

を顰めてグレーチェンを直視した。

「それは君の論文のテーマに関わるのか？」

「関わるから調べていた。何を調べているのか、と訊かれたから答えたけれど、これ以上を訊くのは反則だと思う、ミスター・ブラントン。これ以上を話したら、あなたはわたしをカンニングしたことになる。わたしは、あなたをそんな理由で落第させたくない」

「気遣い痛み入る」

あくまで固い口調で応じ、それからブラントンは不器用そうに顔の表情を動かした。グレーチェンが自分の直感を信じるなら、それは笑顔だった。

「確かにこれ以上を訊くのは無礼だろう。有益な議論だった。感謝する」

天井のスピーカが、あと五分で消灯時間であることを知らせた。許可を得ていない者は直ちに帰室せよ。違反者は罰点一とする。繰り返す――

グレーチェンはメモ類をデータ・グリッドに待避させると、ターミナルの電源を落として立ち上がった。再び、ブラントンが眉の端を釣り上げる。

「珍しいな、ミス・ヘルクスハイム。まだ一時間半ある」

「当番だ。女子寮の夜間巡回の」

消灯時間過ぎまで外出し、夜間に塀を乗り越えて帰ってくる不埒者は、別に男子学生に限らない。男子寮同様、女子寮でも夜間巡回は学生達の義務の一つであり、この夜、グレーチェンはロツティと共にその義務を負うことになっていた。

ブラントンからはそれ以上の言葉はなかった。軽く、しかし、見事な敬礼で送られ、グレーチェンは、こればかりはどうしても彼には及ばない堅苦しい答礼でこれに応じた。

一旦、寮の部屋に戻って軍服の上着を身につけ、レイ・ガンで武

装する。不埒者は多くはないし、また、女子寮は外側も念入りに警備を受けているから、身の危険が及ぶようなアクシデントは滅多に起こらない。レイ・ガンの出力も麻痺レベルよりもやや強い、一撃では一時的な麻痺と軽い火傷程度を負わせるくらいの段階に固定されている。夜間、器用に急所を外すことなど彼らにできるわけがないし、誤射でもしたら大変なことになるというのがその理由だ。

女子寮も広大な敷地を持っている。首都校に所属する女子学生だけでも軽く一〇〇〇人を超えるのだ。消灯時間直後から巡回を始め、二時間ほどをかけて敷地をゆつくりと数周する。この程度で、『不埒者』を完全に防げるなどとはグレイチェンも思っていない。事実、これまで一〇回以上は巡回に出ているが、ただの一度も壁を乗り越えてくる学生に出くわしたことはない。この夜も平穩に終わるはずだった。

「監視カメラでも導入すればいいのに——」

眠いよ……と小さくあくびしたのはロッティだった。

「訓練だからね」

「こんなのが訓練になるのかなあ。睡眠時間削られるだけで……」  
もう一度おおくふわあとあくびをする。誘われて、グレーチェンもあくびをしかけ、慌てて口許を引き締める。

「時間の不足、睡眠の不足、タイムマネジメントも士官の心得だろう、ロツティ」

「そうは言っても、眠いものは眠いじゃない……でも、ホントに良くやるね、グレーチェン」

スミスをあしらひ、ブラントンは正面から戦略論を戦わせる。

眼鏡の奥の目がちよつと気弱そうに瞬いた。

「あたしにはできないなあ」

「できるよ、ロツティ。その気になれば、誰だつてできる」

「できる人はできる。できない人はできないの。できる人はできない人のことが分からないから」

「どうして、そんなに自信がないんだ、ロツティ。航法科の首席だ

ろう？」

「偶然、まぐれよ」

落第だけはしたくないから、と夜目にロツティの眼鏡が白っぽい光を帯びる。入学前はかなりの近視だったのを、学校からの命令で矯正手術を受けさせられたのだという。おかげで近視は完治しているが、眼鏡だけはどうしても外せないのだという。

「これはずしちやうと裸になっちゃったような気がして恥ずかしくて……」

そんなものか……眼鏡というものに縁のないグレーチェンには、それが親友のことであつてもどうしてもピンと来ない。あるいは自信を持ちきれない自分自身と外界を隔てる防御壁。そんな意味合いがあるのかも知れない。ロツティの眼鏡を、グレーチェンはそう解釈している。

「視界が制限されるし、万が一にも割れたら危ないだろう？」

「強化ガラスにしてあるし、このフレームも学校特製の特殊合金製

だから大丈夫。曲がったりしないし、これが折れるくらいの衝撃を受けたら、私の頭、卵みたいに粉々になつてゐる」

「不吉なことを言わないで、ロツティ」

「たとえよ、喻え」

寮を取り巻いている三メートル余りの塀にそつて小径が設けられ、LEDライトによる照明が足許を照らし出している。消灯時間を過ぎ、灯の灯っている部屋はない。唯一、消灯後も学生が起きていらるるのは図書館だけだが、図書館は寮からは離れた共通キャンパスにあり、その灯は遠い。

当然人影はなく、二人の足音だけが規則正しく敷地の中に響く。やや青っぽいライトからの光を複数の方向から受けて、二人の影がゆらゆらと幾重にも重なつて揺れて見えた。

「――？」

ふ、とロツティが耳をそばだてた。

「何？」

「あの音——」

「ん——ああ、あれは警察車輛のサイレンだ」

遠い。しかし、数が多い。幾つも幾つも、奇怪な生き物の遠吠えのような、甲高い金属音が互いに重なり合って遠く轟いている。

「最近、多いな……昨日の当番からも聞いたけれど、こここのところ、ずっと夜はあんな感じらしい」

方向から言えば、ハイネセンのダウンタウンだろう……言い、グレーチェンは眉間を寄せた。世間から隔絶された士官学校とは言え、多少の情報が入ってくる。ヴェンツェル・ハインリッヒも言っていないかったか、こここのところ、ハイネセンだけでなく同盟領全体の治安が急速に悪化していると。

「サイオキシン麻薬の中毒患者が増えているんでしょ？ 母さんもそんなこと言ってたわ。一般の人だけじゃなくて、基地の兵隊でも急性中毒で倒れたり、拒絶反応を起こしていきなり暴れ出したりって言うのが増えてるって」

「大丈夫なのか、お母上は？」

「大丈夫。母さんは私と違うもん」

腕っ節強いし、荒っぽい軍病院だものね——とありもしない力こぶを作ってみせるロツティに、グレーチェンはただ苦笑する。小柄で華奢に見えるが、ロツティも個人格闘技ではそれなりの力量の持ち主だし、身体だったただ細いだけではない。

「危なかったら直ぐにスタンガンで麻痺させちゃうんだって」

「荒っぽいな」

「だってそうしないとスタッフも危ないし、結局本人も暴れることで自分を傷つけるから。薬でも電気ショックでも眠らしてしまうのが一番なんだって……え、ちよつとグレーチェン、何だか近づいてきてない？」

ロツティの言うとおりだった。警察車輛のサイレンが急速に大きくなり、ぐんぐんと近づいてきている。一台や二台ではない。四方から十数台が士官学校の方向へ殺到してきているようだ。

グレーチエンが更に眉を陰しくし、同時に左右を見回して位置を確認している。小さく舌打ちしたのは、寮の出入り口からも門からも、ひいては警備員の詰め所からも遠く離れていることに気づいたからだ。士官学校であり、その女子学生寮である。滅多なことはないと思うが、万一の時に逃げ込む先も、助けを求める先も数百メートル以上を隔てた位置にある。

「どんどん近づいてくるわ！」

「どれくらいかな？」

「分からないけど、ドップラーが高くなってる。直ぐ近くよ」

サイレンの音が急速に甲高さを増している。間違はなく、目的地はこの士官学校だ。少なくとも、その方向だ。

「ロッテイ、走ろう」

「どこへ？」

「詰め所だ。あそこなら警備兵もいるし、万一の時の通信手段も十分だ」

ロツテイに否やはない。グレーチェンが走り出すと、間髪入れずについて走り出した。訓練を受けた身体だ。数百メートルの全力疾走くらいなら、ごく普通にこなせる二人だった。

その間も、サイレンは更に大きくなる。異変に気づいたのか、それとも通知が入ったのか。共通キャンパスの建物の窓の幾つかに灯りが点く。音こそ聞こえないが、何かしら騒然とした空気がにわかには辺りを包み込み始めるのが感じ取れた。皮膚がぴりぴりし、全身の神経がそばだっていくような感覚。グレーチェンは眦を険しくする。わずかな期間だったが、彼女も戦場に身を置いたことがある。経験のある兵士の言う、戦場が近づいてくる時の皮膚感覚は未経験のものではない。

「停まった！」

ロツテイの言うとおりで止まった。複数のサイレンが、今や耳をつんざく音響となって寮の敷地を取り囲む。と思った瞬間、車がクラッシュするような凄まじい轟音が響いた。

微かに足許が揺らぐのを感じ、二人は顔を見合わせた。

「なに、何なの——!?」

驚いている暇もなかった。ロッセイの悲鳴をかき消すように、音の動きが止まり、怒号と悲鳴、明らかな銃声が取って代わった。

「足を止めるな、ロッセイ！」

こちらでも半分は怒号で、半分は悲鳴に近い。

「あれは戦場音楽だ、ロッセイ」

「戦場音楽ってなによっ!?」

「戦争をしている音だっ。直ぐ、外で戦争をやっているっ」

「どうしてよっ、ここは同盟首都でしょ。どうしてハイネセンで戦

争なんか!？」

「理由は後！」

とにかく走れ……叫んだグレーチェンの脚が縫い止められたように停まる。信じられない者を見た驚きと不審に、両目が真円に近くなる。

「あれは——何!？」

ロツテイの声も戦慄わなないた。当然だった。高さ三メートル。普通なら乗り越えるだけでも大変な労力と時間を要するはずの、その堀の上に人影が現れる。一つではない。二つ、三つ……二人が立ち竦む内に、その数は五つに達した。一人が立ち上がる。シルエットは人間。

「まさか！」

グレーチエンにして声が震えた。立ち上がったかと思うと、その人影はひらりと身を躍らせた。三メートル下の地表へ。グレーチエンたちが啞然として見守っている、寮の敷地の内側へ向かつて、何の躊躇いもなく宙を舞った人影は、人と言うよりも、獰猛な獣を思わせる身のこなしで軽々と着地した。

続いてもう一人が堀から身を躍らせる。着地し、見回すその眸が異様な光を湛えているように、二人には見えた。人の目は光らない。彼らの目は光っている。喩えや錯覚ではない。本当に光っているの

だ。青白い、獣の目の光ではない。胸の悪くなるような気味の悪い光は血の色を帯びてほの赤い。

その目が、二人の姿を捕らえた。

グレーチエンは総毛立つのを感じた。ちょうどライトが斜め上からその姿を照らし出し、顔の輪郭がくつきりと浮かび上がる。極度のコントラストが闇と光の隈取りとなつて、その姿を奇怪な抽象彫刻のように見せ、しかも、それは生々しく息づいている。全身に冷水を浴びせられる恐怖は本能的なもの。理解を絶した未知の何かしらを目の当たりにした恐れと衝撃に、グレーチエンは硬直した。

「――!!」

いかなる獣のそれとも似ていなかった。意味をなさない喚声、複数の音響の入り交じった濁声、人には不可能なはずの、金属のねじ切れるような、聴覚を劈く軋み音。つんざ 思わず、グレーチエンが耳を塞いだ瞬間、人影がダツシュした。

信じがたい速度、凄まじい速さは、グレーチエンの理解を遙かに

超えていた。コマ落としの映像に似て、その姿は瞬時に視界一杯に膨れあがり、溢れ出て視野を塞いだ。

「えっ!？」

分かつていて動けなかった。余りの恐怖とショックで、脚が地面に貼り付いたように動かない。雄叫ぶように開いた口と、頸部を狙って振り下ろされてくる腕が、確かに見えていて、なお精神が理解を拒絶する。こころ

耳を聳する叫声と咆吼が轟く。塀の上でなおも敷地へ降り立とうとしていた人影の、その頭部が次々に爆発するように吹っ飛ぶ。頭部を失った人体が、バランスを失ってよろめき、ある者は塀の外で、ある者は塀の内側へと落下する。肉体が固い地面に叩き付けられ、筋骨がへしゃげ、内臓が潰れる異様な音響が、麻痺しかかっていたグレーチェンの神経を一気に覚醒させた。

ほとんど反射運動で後ろへ投げ出した、その鼻先を、きな臭いほどに凄まじい勢いを伴った旋風が駆け抜ける。巨大な猿人のように

手指先を折り曲げた猿臂が、彼女の頭部をへし折り損ねて空を切った。

気づく前に、グレーチェンは身体を投げ出すようにして二転三転させている。レイ・ガンを構えるロツティの姿が視野に入る。

「ロツティ！」

「グレーチェン、逃げて！」

ロツティの手許から再び閃光が宙を切り、男の……やっと、グレーチェンは相手が男性であるらしいことを見て取っていた……胸に吸い込まれる。一射ではない。二射、三射、四射、つるべ打ちだ。

が――

「効いてない！」

悲鳴は再びロツティ。成人男性でも二射を打ち込めば体の自由を奪うに十分な麻痺モードのレイ・ガン。それを十射近く打ち込まれ、なお男は倒れない。倒れないどころではない。新たな獲物を見出した歓喜なのか。人らしい表情をなくした中にも唇の端が釣り上がり

おびただしい涎が流れ出して地に伝い落ちる。

「な——んだ、こいつは……！」

男が身を撓めた。躍りかかる姿勢だ。獲物は——なおレイ・ガンを構えながらも、ロツティの両目は恐怖の余りに引きつり、噛みしめた歯が夜目にも震えて白い。しかも、その後ろからはもう一つの人影が……

考えている余裕はなかった。

レイ・ガンを引き抜く。安全装置を外す。

ロツティに当たるという心配はしなかった。当たっても気絶と軽い火傷で済むし、射撃には自信がある。だが、効くのか……これが閃光が走る。得意のパルス撃ち。数秒間に二十数射がロツティをかすめて背後の人影に吸い込まれる。続いて、身を躍らせかけた男の脚を薙ぎ払う。

金属を擦り合わせるような、耳を覆いたくなるような叫声が響く。さすがに多少は効いたらしい——と思う間もなく、グレーチェンは

文字通り必死に飛びすさる。その手許を男の腕が擦過する。異音と共に袖口が裂け、グレーチェンは全身に冷たい汗が吹き出すのを感じた。上着はアラミド繊維製であり、一定の防弾性能もある。人の指で裂けるような代物ではないのだ。一体、何者だ、彼らは……！

考えている暇はない。次々に襲いかかってくる横撃を、とにかく躲す。転がり、跳ね起き、横に飛び、後ろに飛ぶ。銃を構えている隙もなく、ロツティの安否を確認している暇もない。

「ぐう!!」

背中に衝撃を受け、グレーチェンは肺から息を叩き出された。僅かに肩口をかすめられたが、まるで鉄の棒で殴られたようだ。吹っ飛ばされ、寮の建物に叩き付けられて目の前に火花が散る。息が詰まり、力が抜ける。辛うじて握りしめていたレイ・ガンが右手から落ちて転がった。

気力だけで見開いていた目に、残忍な喜びに顔を歪めた男の異様な顔つきが大写しになる。両の手指を掴みかかる形に曲げ、吹き伸

びる勢いでその猿臂がグレーチェンの喉元へ飛んだ。

——殺される！

あの力で締められたら、グレーチェンの頸椎など一瞬に砕け散る。

「——！！」

（いっしょに）

窓ガラスが轟叫にびりびりと震えた。間半髪のさらに何分の一かの差でグレーチェンの細首を捕らえ損ね、勢い余って厚い壁に両拳を叩き付けたのだ。痛みなのか、それとも怒りなのか……狂吼に、レイ・ガンの発射音が重なる。一続きにしか聞こえない発射音は、数十射もの連射を伴っていた。

身体ごと地に身を沈めたグレーチェンが、レイ・ガンをすくい上げざまに男の顎の下に銃口を押しつけて連射したのだ。

（くちべり）

男の喉元が異様な、泡立つような軋るような異音を発し、口縁から溢れだしていたおびただしい涎の色が赤黒く変わった。麻痺モードとは言え、エネルギー・セルが切れるまで連射された光の剣が、

人体を破壊するだけの威力に達したのだ。ビームは男の下顎部を破り、口腔を貫いて脳の中央部を灼き、そこで力を使い果たした。が、グレーチェンを救うにはそれで充分だった。

異様な赤っぽい煌めきを帯びて見えた男の両目から光が失われ、力を失った肉体が地響きを立てて地に折り崩れる。全身が軋みをあげる痛みを無視して身体を転げさせ、グレーチェンはその下敷きになると言う、絶対に避けたい運命から自らを救い出した。

「ロッテイ！ ロッテイ！」

親友の名を呼ぶ。まだもう一人いたはずだ。

返事がない――

先ほどまでとは全く別の恐怖がグレーチェンを捕らえた。ロッテイも足は遅くないが、あの人間離れした凶悍さと素早さを兼ね備えた侵入者から長時間にわたって逃げ切れるほどの敏捷さと体力に恵まれているわけではない。航法士のコンソールを前にしているならともかく、地上では要領の良さや抜け目のなさといった属性とは全

く縁のない友人なのだ。

「ひ——」

不意に背後から抱きつかれ、グレーチェンは悲鳴をかみ殺す。反射的に、握りしめたままだった銃口を振り向けかけ、不意にその肩から力が抜けた。飛びついてきた、小柄だが弾力に満ちた身体は、彼女たちを襲った内の一人であろうはずはなかった。

「ロツティ……よかった、無事だったのか？」

ロツティはトレードマークの眼鏡を失い、顔は泥と涙、それと血の痕でぐちゃぐちゃだった。

「ええ、グレーチェンも？」

「これを無事と言えるのかどうか分からないけれど、とにかく生きている」

まだ、霞のかかったような頭を押さえながら、グレーチェンは漸く周囲に目をやる余裕を得た。

さつきまで、彼女たち二人と侵入者の四人しかいなかったはずの

敷地が人で溢れていた。ハイネセン・ポリスの市警だけではない。明らかに特殊部隊や、陸戦隊の将兵らしい姿も見える。人だかりは、どうやらもう一人の侵入者がそこに斃れているらしかった。サイレンが鳴り響き、スピーカーは繰り返し『侵入者有り、総員、戦闘配置に付け！』と叫んでいる。ほんのちよつと前、二人で巡回していた時のあの静寂が嘘のような喧噪だった。寮の窓も残らず灯りが点いていた。

「必死で逃げ回ったけど、追いつめられて、レイ・ガンのエネ・セルも切れて、もうダメと思った時、あいつの頭が吹っ飛んで……眼鏡が血で何も見えなくなったけど、ああ助かったんだって思っ、それからグレーチェンのことを思い出して……」

ロツティは歯の根が合っていない。はつきりと聞こえるくらいに歯が鳴っていて、しゃべるのも精一杯の様子だ。彼女を臆病と責めるつもりはなかった。人外の化け物に遭った恐怖はグレーチェンも



まったく同じだったから。

「何だったんだ、彼らは？」

「あれは……サイオキシン麻薬だと思う。サイオキシン麻薬中毒が末期になって、身体が突然拒絶反応を起こすことがあるの。その時に脳の新皮質が変質を起こす場合があつて、もう、そうなったらそれは人じゃない。獣と変わらないって」

「サイオキシン麻薬……だつて？」

なおも齒をかちかちと鳴らしながら、ロツティは呻いた。

「昔、見たことがあつて、母さんの病院で。その時、母さんから教えてもらつて、自分でも調べて……でも、本当にそんな事が起こるなんて、こんな所まで侵入してくるなんて」

まさか、と思つたが、ロツティは正しかった。

市警と憲兵隊、それに特殊部隊、狙撃部隊。物々しいメンバーの前に、彼女たちは事情聴取を受けたわけだが、苦渋に満ちた表情で逆に事情を説明したのは市警の捜査官だった。ここ数ヶ月、ハイネ

セン、特にダウンタウンではサイオキシン麻薬による中毒患者が急増し、禁断症状や拒否反応を起こした中毒者が起こす凄惨な事件が頻発しているというのだ。

捜査官は言葉を濁したが、どうやら今夜、サイオキシン麻薬売人の大規模なアジトを一斉摘発したもののようだった。事前に察知した売人の一団が脱出し、市警はこれを追跡したが、その途上、激烈な拒絶反応から大脳新皮質の変質症状に至った中毒患者が暴れ出した。

市警はなんとか独力で彼らを押さえようとしたものの、『新皮質の変質症状』が何をもたらすかの知識は全く知られていなかった。結果として、包囲網は瞬時に切り破られ、泡を食った上層部の依頼で陸戦隊狙撃部隊から特殊部隊までの動員がかけられた。

「でも、どうして士官学校へ？」

グレーチェンの問いに、捜査官は疲れ切った表情で首を振った。市警の車が奪われたという。普通なら運転者が即死するような衝突

事故を繰り返しながら、デタラメなルート選択の偶然の結末が、士官学校女子寮の外壁だったのだと。

大佐肩章の特殊部隊士官が、グレーチエンに彼女が中毒患者を倒した経緯を尋ねる。グレーチエンが答えると、信じられない話を聞いた驚きが、その面上を覆った。

一方、ロッティはとにかく敷地中を逃げ回り、遂に体力が尽きて倒れ込んだところを、間一髪、狙撃部隊の大口徑荷電粒子ライフルの一撃に救われたとのことだった。これもまた、聴取側の士官や市警の捜査官たちの驚きを誘ったようだった。

「何を驚いているのですか？」

ただ互いの顔を見合わせるだけの一同に、グレーチエンは語気を強めた。

「わたしたちは殺されなかった。少しは事情を聞く権利はあるはずです！」

重ねて主張すると、もう一度大きく左右に首を振りながら、市警

の捜査官が答えた。あなた方が生きているのは奇跡としか思えない。今度は、グレーチエンとロツティが顔を見合わせる番だった。何度も息を飲み込み、躊躇ってから、先に質問を放ったのはロツティだった。

「まさか……沢山、殺されたということなんですか？」

「ええ、そのまさかです」

口外無用です。既にハイネセンは混乱に陥り始めている。この上に、中毒患者が今回のような信じられない事件を起こすケースがあるなどという噂が広まれば、ハイネセンの、少なくともダウンタウンの治安は崩壊への道を辿るだろう。

「彼らを包囲した捜査官二〇名の半数が、彼らの手で殺されるか重傷を負いました。特殊部隊の隊員が二対一で戦い、一方的に二人ともが殴殺されました。今夜起こったことです。あなた方は、一対一で彼らと対峙して、無傷だったことになりました。奇跡と申し上げます。理由が、これでお分かりになると思うが？」

言葉はなかった。グレーチェンもロツテイも、二人がどれほどに稀少な偶然の助けを得て、今夜の事件を生きながらえることができたのか。初めて、事実として胸に食い入ってきたのだから。

☆☆☆

事実ですね——翌日、真つ青になつて駆けつけてきたベンドリングは、グレーチェンの質問を肯定した。ベンドリングがグレーチェンの保護者であることと、彼女の遭遇した事件を了解している士官学校の計らいもあつて、彼らは朝食後の一時間ほどの時間をもらつての面会を許された席である。

グレーチェンが訊いたのは、ハイネセンでのサイオキシン麻薬蔓延の状況と、中毒患者による事件の増加、そして拒絶反応に伴う一種の獣化ともいうべき事象が実際に起きているか否かだった。

「治安関係の情報収集は私の任ではないのですが——」  
それでも悪い情報は自然と集まってくる。敵を知ろうとすれば、

味方を知らないかどうかにもなりませんから。そう言うベンドリングが、どうやら対帝国の軍事情報収集を主任務にしているらしいことを、グレーチェンは敏感に察している。ベンドリングはグレーチェンの前では顔を余り上手く隠せないし、一方、グレーチェンは我が保護者の表情を読むが最も得意だ。七年近いつきあいである。当然かも知れないが。

「ハイネセンだけではないですね。どうやら同盟領全体でのサイオキシンの流通量が急激に増えているようです」

「どこから入ってくるのだ、サイオキシンは？」

「分かりません」

「分からないだって？」

「サイオキシンは長い間、帝国でも大きな問題でした。この麻薬に限っては、帝国と同盟が裏で手を結んで、シンジケートを摘発したという例もあるそうです。その時に、サイオキシンの製造工場は相当数潰したらしいんですが、この麻薬は完全な工業製品です。どこ

かで原料を栽培しているというわけではないので、製造元を突き止めるのは非常に困難だと言われています」

「だから、分からない？」

「そう言うことですが、それにしても異常なんです。ここ数ヶ月の状況は。流入量が増えていることは分かっている。中毒患者も増えている。ということは、組織的にこれを流通させている組織があり、それは同盟全域を覆うような大きな組織であるということになります」

「——なら、どんな組織が動いているのかくらいは分かりそうではないか？」

「それが分からない……と言うか、公式の情報としては一向に公開されてこない。これが何より変です」

噂ですが——ベンドリングは声を潜めた。情報部の、ほんの一部の士官の間だけで流れている噂がある。関与していると思われる組織は、実は判明しているのだ、と。

「何……だって？」

さすがにグレーチエンの目がきつく鋭くなった。その組織への強制捜査は、この半年の間に数度にわたって具申されている。治安委員長、および国防委員長に対してだ。にもかかわらず、具申はすべて却下され、あまつさえ捜査を進言した捜査官や憲兵隊員が、あるいは徴兵され、あるいは異動させられてイゼルローン要塞駐留部隊に送り込まれている例が一再ではないという。

「噂です。噂でしかないのですが、そうした異動は確かにありました。理由は分かりませんが」

「そうか……」

目をきつく光らせたまま俯いたグレーチエンに、ベンドリングは眉を顰めた。

「グレートヒェン、この件には深入りしないでください」

紫色の瞳が真っ直ぐにベンドリングを見返す。一七歳の年齢にしては強すぎる光が和らぎ、苦笑する表情に溶けた。

「心配性だな、そなたは、相変わらず。わたしはまだ一六、いや一七歳で士官候補生でしかないんだぞ。昨夜、殺されかけたのは事実だ。なぜ、あんな事が起きたのかを知りたいのも本当のところだ。でも、それと、自分で本当のことを調べ上げてやろうなどと大それた事を考えるのは、全く別のことだ。わたしはそんなに向こう見ずでもないし、自分を何でもできるスーパー・ガールだとも思っていないぞ、ヴェンツェル・ハインリッヒ。そなたは一七歳の時、麻薬の組織を一人で摘発できるほど自分が万能だと信じていたのか」

「とんでもない——でも、安堵しました、グレートヒェン」

「まったく、そなたはまるで娘は何でもできると信じている父親みたいだぞ」

「あなたの父親になるほどの年齢としは食っていないつもりですが」

ベンドリングとグレートチェンの間には、公式の記録では一八年、実際には一九年の年齢差がある。『四捨五入すれば二〇歳違いではないか』——ベンドリングをからかう時に、グレートチェンがよく使

うフレーズがそれだった。

「では、そういうことにしておこうか」

微笑い、グレーチエンは彼女の保護者を抱き締めて、その両頬に軽くキスをする。いつの頃からか、彼ら二人の間の習慣になった、別れの挨拶だった。昔、うんと背伸びしてもなかなか届かなかったベンドリングの頬が、今は軽くつま先を立てるだけで手の届くところにあるのが、グレーチエンには何か不思議に感じられた。

いつものように軽く困ったように眉を寄せ、それでも不器用な微笑を浮かべて、ベンドリングも彼の被保護者を抱き寄せ、そしてその両肩に手を載せる。濃いブラウンの目が、紫水晶の瞳を覗き込んだ。

「気を付けてください。ここも完全には安全ではないと分かったわけですから」

「気を付ける。そなたには心配ばかりかけてしまう。済まない」

「謝るなら、その前に気を付けてください、と言いたところす

が、今回はそうも行きませんでしたからね。警備は強化すると言うことですが、それでも気を付けるに越したことはない」

領き、グレーチエンは敬礼する。応じるベンドリングの敬礼は、彼女の古い記憶の通りに堅苦しく、生真面目だった。

こともあろうに士官学校女子学生寮に、サイオキシン麻薬の末期中毒患者の侵入を許し、巡回中の学生二人が危うく犠牲になりかけた。国防委員長と、その上司たる同盟評議会議長には絶対的な従順さを維持していた士官学校長シェフェール中将も特別に声明を出して、『断固たるサイオキシン麻薬の取り締まり』を同盟政府に要求したほどだった。

「堅固に警備され、学生にも護身の心得のある我が校ですら、学生二人が身の危急に曝された。万が一、一般の教育機関に対して同様の事件が生じた場合、その結果は肌に粟を覚えるものがある」

シエフエール中將の声明が直接的な要因ではないにしても、同盟政府もまたトリユーニヒト議長の声明を出し、『サイオキシン麻薬組織撲滅に向けて、全政府組織を上げての活動を展開する』と宣言した。グレーチェンたちが夜間巡回中の事件に巻き込まれて一ヶ月ほど後のことである。

だが、同盟政府が全政府組織を上げてサイオキシン麻薬流通阻止のための動きに出ることは遂になかった。

麻薬どころではない、巨大な歴史的変動が自由惑星同盟を襲ったのである。

## 混迷

この時期、グレーチエン・ヘルクスハイムが察したように、ヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリング少佐の主要任務は、帝国軍に関する軍事動向情報の収集だった。

「帝国軍はどうやらリップシュタット内戦後の兵力の再編と、編制の変更を完了したもようです」

統合作戦本部での定例会議に、ベンドリングがその報告をもたらしたのは宇宙暦七九八年の七月初旬。グレーチエン・ヘルクスハイムが士官学校寮でサイオキシן麻薬の末期中毒患者に襲撃される事件の、三ヶ月ばかり前のことである。

「ご存じの通り、帝国軍は、機動部隊として機能する制式宇宙艦隊と、個々の宙域の治安維持を担当する貴族私兵軍をその兵力の主要な二本の柱としています。内戦の前、制式宇宙艦隊の編制上の個数

は一八。我が軍との戦闘で戦力を失い、再編に入っていた艦隊が二個、ないし三個あり、実質的には一五個制式艦隊前後を保有していました」

喉元のスカーフを僅かに緩め、ベンドリングは出席者たちに視線を走らせた。

実戦部隊の長たるアレクサンドル・ビュコック大将に並んで、参謀長のオスマン中将、ビュコック大将副官ファイフェル准将の姿がある。同盟軍の保有する五個の制式艦隊の内、四個艦隊の指揮官、パエッタ、ウランフ、カールセン、モートンの四提督が、それぞれの艦隊参謀長、作戦先任参謀らが実戦部隊からの参加者だった。

楕円形の机を挟むようにして、ロックウエル後方勤務本部長、辺境警備艦総隊司令本部長、人事局長ら軍政部の主要メンバーが列席し、両者を左右に従えた議長席に座を占めるのが統帥作戦本部長のクブルスリー大将だが、その顔色はすぐれなかった。

昨年の救国軍事会議のクーデターに先立つ、フォーク元准将によ

る暗殺未遂事件。クブルスリーは辛うじて生命を取り留め、退院後に作戦本部長の席に戻ったが、健康状態は決して良好なものとはいえない状態が続いていると伝えられる。肉体的な負傷の重さもさることながら、彼の左右に席を占める人物二人が、彼の座席の座り心地を極度に低下させていると言われていた。

軍服姿が居流れる中、一人スーツ姿で端座する中年の男性の印象は、一見して『倨傲』であり、子細な観察は彼が周囲に張り巡らせた『尊大』のオーラを見出すに違いなかった。

ネグロポンティ国防委員長。同盟政府の軍事面の総責任者であり、室内に座す軍人たち全員の、組織上の上司に当たる人物である。

今一人は、薄い茶色の髪の人で、髪と同じ色の口髭がどことなく不釣り合いな印象を与える人物だった。あだ名は『ジャガイモ野郎』、あるいは『伍長』。前者の名付け親は、ヤン艦隊のアッテンボロー分艦隊司令官らしかったが、後者の方は不明である。精々、伍長程度の器だとする人物評を表すという説もあり、さらに穿<sup>うが</sup>つた

意味を持つのだと主張する人物もいる。要するに不明と言うことである。

統帥作戦本部副本部長ドーソン大將が、その人物の名前と肩書きであり、クブルスリー大將の遭難後、一時的に副本長を代行したものの、救国軍事会議のクーデターでは身柄を拘束され、為すところがなかった。

容姿の上ではほとんど共通点のないネグロポンティ国防委員長とドーソン副本部長だったが、両者が共有しているのは、現同盟評議会議長ヨブ・トリューニヒト氏への傾倒、あるいは忠勤ぶりだった。トリューニヒト議長は、剛直な軍人であり、実戦部隊の信頼の篤いクブルスリー大將を煙たく思っており、口実を設けて更迭を狙っていると言われ、国防委員長と統帥作戦副本長は連携してクブルスリー大將への理不尽な圧力や、意図的なサボタージュを繰り返している。クブルスリー大將の心労の大半は、彼ら二人への応対から生じるとさえ言われる所以である。

良い例が、第一四と第一五艦隊だった。クーデター直前から編成が始まり、既に一年半を経過してなお、両艦隊はなお編成途上にある。定数一万四〇〇〇と定められた艦艇数は、やっと一万隻を超えたところで、それも辺境警備艦隊からかき集められた旧式艦艇や、

シエイクダウン・クルーズ

竣工したばかりで慣熟航行も済んでいない新造艦艇が半数近くを占める状態だった。ネグロポンティが、様々な理由をつけて新造艦艇の建造予算執行を差し止めたり、両艦隊への艦艇・人員の配属拒否を繰り返したりする一方、ドーソンが艦隊編成の命令発令を毎度のように遅延させている、その結果だった。

「そんなことは分かっている」

いらだたしげにベンドリングの説明を遮ったのも、ドーソンだった。

「我々は忙しいのだ。一介の少佐の報告ごときに時間を割いてはいられないのだ。さっさと結論だけを報告して、退席したまえ」

気づかれないようにそつとため息を吐き出し、ベンドリングは画

面を切り替えた。最初は反発も覚え、ドーソンやネグロポンティに敵意を隠しきれなかったものだが、今はもう馴れてしまっていた。まあ、クブルスリー大将のように、彼らと毎日顔を合わせねばならないと言うのでは、胃に孔の二つや三つ開いても不思議ではないが。「情報部の結論としては、宇宙暦七九八年七月現在の帝国軍現有制式艦隊兵力は一四個と見積つています。内戦でローエングラム一派についた九個艦隊に、五個艦隊を新たに編成したものと思われまゝ。また、貴族の私兵部隊についてはそのほとんどを解体する一方、新たに我が軍の辺境警備艦隊に相当する部隊を設けて、旧貴族領の治安維持部隊としたとの情報が入っております」

「一四個制式艦隊だって？」

わざとらしい、驚いたような口調はネグロポンティだった。

「いささか過大ではないか。いや、私は過大だと思う。帝国の内戦が集結したのは僅か一年半前ではないかね。そのローエングラム陣営だが、ローエングラム陣営に付いた九個艦隊とて、帝国を二つに

割った戦いで無傷であつたはずはないだろう。許容可能損失は普通三割以内と言われているが、少なく見積もつても二割、つまりだ、二個艦隊が消滅する程度の損失はあつたはずとみるのが軍事的な常識というものではないか」

「そのような見方もありますが、しかし——」

「一年半で、五個制式艦隊を完全整備できるものなのか、これは甚だ疑問だ。我が国でさえ、一年半もの時間を使つても、二個艦隊すら整備できていないのだよ。君は、我が同盟軍が余程に無能な軍隊だと言いたいようだな？」

「そのような意図はありません。しかし、閣下」

その通りである。逆に言えば、敗れた貴族連合軍の艦隊も完全に全滅したわけではなく、五割程度の艦艇が敗残部隊として帝国の各地へと潰走したのである。一部がフェザーンへ同盟し、おびただし量の艦艇や武器がフェザーンから同盟の市場に流れ込んだ。大半はフェザーンの商人が買い取つたのだろうが、一部は同盟国内にも

流れ込んできている。そのまま闇に流れて、帝国の双頭鷲を海賊船の髑髏マークに塗り替えられたものも少なくないようだが、同盟軍もまたこうした市場の巨大な買い手だった。

安く買い取った貴族連合軍の中小艦艇を辺境警備部隊に回し、同盟軍の標準型艦艇を制式艦艇に回す。第一四と第一五の二個艦隊の相当部分はそうして整備されたものののだ。武器や装備、部品などは長い戦いの間に帝国・同名の双方が相手の規格を調べ合い、互いに流用可能な設計に改めてきていたから、同盟軍の将兵も帝国軍の艦艇をいきなり与えられて狼狽えることはない。

一方、敗残部隊の相当部分がローエングラム軍に回収されたのも確実である。情報部の試算では、九個制式艦隊の四割が戦後再建された戦闘部隊に組み入れられ、それだけで四個艦隊近い兵力である。これに、貴族連合軍の私兵部隊の兵力が加わる。更には、旧貴族の資産を収公することで、ローエングラム公ラインハルトの帝国政府は飛躍的な財政の健全化に成功し、膨大な余剰資金を得た。既に破

綻状態の同盟政府の懷具合とは、比較すること自体が誤りなのである。

ベンドリングの説明に、しかし、ネグロポンティは耳を傾けようとはしなかった。

「大体だね、同盟の国防方針を決定する神聖な議論の場に、どうして一介の少佐ごときが報告に現れるのかね、ええ。しかも、帝国からの亡命者と来ている。帝国軍の再建が急速に進んでいると我々に錯覚させるような報告をするとはもってのほかではないか。あの暴虐極まるルドルフの似非国家から、この大義と正義の、自由と平等の国への亡命を認めてやった、その恩も忘れて、こんな利敵行為とも言えるような報告を行うとは、一体君の忠誠はいずこを向いているのかね、ああ？」

ネグロポンティの、このかさにかかった物言いにも、ベンドリングは既に慣れっこだった。要するに氣にくわないのだ。何だかんだと理由を付けて第一四、第一五艦隊の整備を遅れさせている。目的

はクブルスリー大将を精神的に追いつめて、統帥本部長の座を投げ出させることに違いないだろう。

帝国軍が急速に再建され、一四個制式艦隊もの機動兵力と、帝国領内の治安維持部隊の再編が完了したとすれば、同盟軍にとって機動部隊戦力の強化は必至の最優先課題となる。その場合、利敵行為を難じられるのは、ネグロポンティ国防委員長ということになる。

ゆえに、ネグロポンティとしては、帝国がまだ内戦の傷から立ち直れず、同盟への攻撃を再開できるだけの国力と戦力を取り戻していない。その結論に固執したい……と言うよりも、それ以外の報告は、国防委員長の主観的視野の中では総て虚偽の色彩で塗り上げられていることになるのだ。

「この報告書は、統帥本部情報部で半年をかけて調査し、まとめ上げた内容です。小官個人の主観をご報告しているわけではありませんせん」

無駄とは思いつつ、ベンドリングはできるだけ穏やかな口調で反

論を試みた。ちらと走らせた視線の隅に、ビュコックが眉根を寄せ、頭を振り、ウランフが同情に満ちた目で頷いているのが映った。カールセンは不愉快そうに口許を歪め、モートンは目を閉ざして表情を消している。パエッタですらうんざりした表情を隠していなかった。

「主観ではない、か。これは恐れ入ったことだ。大体、報告のソースは何かね。ヤン艦隊が帝国領に出した偵察艦による通信傍受、帝国政府、ローエングラム元帥府の公式発表、人為異動の情報、国内メディアの報道やアングラのうわさ話。どれもこれも信ずるに値しない、非公式情報ばかりではないかね。いいかね、少佐、我が同盟の帝国に対する正式の情報ソースを、どうも君は知らんようだ」

「はあ……」

ベンドリングは表情を隠すのに苦勞した。これも毎度、同じである。そして、ネグロポンティの言葉は彼の予想から一ミリも外れてはいなかった。

「知らんなら教えてやるが、フェザーン駐在同盟領事館の駐在武官。これが、我が国に於ける、正式の情報入手ルートなのだ。現地には専任の情報収集担当官と、熟練した情報分析のスタッフが置かれている。君の、この報告書を見るに、在フェザーンの駐留武官からのデータをほとんど分析しておらんではないか。これは怪しからんことだぞ。正式のルートも手続きも無視し、手前勝手なやり方で取捨した情報をもとに、不正確で歪んだ内容を、国防の最高決定機関において堂々としやべり散らす。これは、もう国家に対する叛逆と言ってもよいことだ。違うかね、副本部長？」

ドーソンの声が、悪意に満ちた色合いと共に室内の空気をかき回した。

「は、まことにもって、仰る通りかと愚考致す所であります、閣下。まったく、統帥作戦本部はどうなってしまったというのでありませんようか。クーデター以来、統制は失われ、組織の箍はゆるみ放題で、まったく嘆かわしい状態でありますな」

ドーソンがクブルスリー大将を見上げる。クブルスリーは小さく唸ったが、明瞭な反応を返そうとはしなかった。顔色がますますどす黒く翳って見えるのは、この反抗的な下僚との会話が既に彼にとつて苦痛以外のなにものでもないことを物語っていた。健康でさえあれば、ドーソンごときの小役人など、その一喝で吹っ飛んでしまふだらうが、あいにくクブルスリーの負傷後の健康は悪化する一方だった。

「では、この報告書は却下したくあります、国防委員長閣下」

「よろしい。却下だ。ベルドリンク少佐——」

「は——」

必要以上に胸を反らせ、ネグロポンティはあからさまに見下ろす視線でベルドリングを見た。客観的な観察者がいれば、ある種の滑稽さを感じただろうことは、国防委員長席の床が一段高くしつらえられ、ネグロポンティは列席者と報告者の全員よりも高い位置に視線を維持できることだった。更に胸と顎をことさらに反らせる癖が

長大な上半身と相俟って、ほとんど喜劇的なほどの傲慢さを他者に感じさせる。本人は、他者一切を見下ろすに足りる自らの賢明さを信じているのだろうが、距離を置いてみれば子供じみた愚かさにか見えないのだ。

「一ヶ月後にもう一度、報告書を出し給え。ちゃんと、客観的で正式の資料を分析した結果に基づいた内容をな。まったく、私の寛容さには自分で呆れてしまう」

「は、まったく国防委員長閣下のご寛恕のお心には、我らもかくあらねばならぬと、日々誓いを新たにしておる次第であります」

「うむ、貴官のような人間ばかりだと、本当に私の仕事もやり易いのだが——何をしている、少佐。もう用は済んだ。さっさと退出し給え。私は仕事がつかえているのだ。下らん報告で時間を潰してくれて、本当に困ったことだ。一秒でも半秒でも速く君が姿を消してくれば、その分、私は別のもっと重要な仕事に貴重極まりない私の時間を当てることができるのだよ」

大袈裟でわざとらしい身振りを伴った自らの無意味な饒舌が、より多くの時間の無為な費消を他の列席者に強いている。そんな自省は、ネグロポンティにとつては完全は無縁であるようだった。

まったく、これが自由と平等の国の軍隊の、それも最高首脳たちの姿ですよ。あなたには見せたくないものです、本当に——脳裡の、自らの被保護者である少女の姿に向けて、ベンドリングは肩を竦めて見せた。無論、動作に出してではない。

仮想の視界の中で、少女は淡い金髪を閃かして振り返り、閃紫の光をその眸に走らせて笑った。

『馬鹿だな、ヴェンツェル・ハインリッヒ。人の言うことに耳を貸さないから、そやつは愚者と呼ばれるのだ。愚者に向かつて、お前は愚者だと言ったところで、聞きいれるはずはないではないか？』少女にしては鋭すぎる笑顔と共に、ぼやきを弾き返されるのがそのまま耳に聞こえたような気がした。ベンドリングとしては応じるしかない。『まったくその通りです、グレートヒエン』——と。

会議室を退出し、情報部へのオフィスへ向かいながら、ベンドリングはふと胸裡に不安の兆すのを感じた。

在フェザーン駐留武官、『歩く風船』とあだ名されるヴィオラ大佐。ヴィオラ大佐の公式報告は、まさにネグロポンティの好みの通りの内容だった。曰く、ローエングラム元帥は、依然として蠢動の続く旧貴族連合軍派の抵抗を鎮圧するのに忙殺され、帝国軍の再建には手が回っていない。

ヴィオラ大佐が、ネグロポンティらの好みを忖度してそうした報告を出してきているならまだましである。ベンドリングの見るに、大佐はフェザーン自治政府から渡される帝国情報を、ろくな検討も裏付け調査もせず、そのままハイネセンに送っている節があった。そうであるとするれば、国防委員長の欲する主観的景況を把握しているのはフェザーン自治政府であり、同盟政府は帝国方面に向けた目と耳を、フェザーンの黒狐にコントロールされているということになる。

情報士官としてのベンドリングの直感に触れる部分があるとすれば、ヴィオラ情報が帝国内の不安定さをのみ強調している点である。帝国の立ち直りを目隠しし、同盟政府首脳に仲間内の政争にのみ視線を集めさせようとしている、その裏にフェザーンが何からしらの意図を隠していないと言い切れるだろうか。

グレーチェンなら、あるいは彼の気づかなかった別の視点を示してくれるかも知れない……思い、ベンドリングはその思いを否定する。情報部少佐ともあろうものが、一六歳の少女に判断を頼っていてどうするのか。グレーチェンも言っていたではないか。人にばかり考えさせていると老化が早くなるぞ、と。それに、目の前に見える情報の分析と結論付けは得意だが、目に見えない裏事情や、これからどうなっていくのかという推測は苦手だとも。

ベンドリングの見るに、それはどちらかと言えば韜晦か謙遜に類する認識だとは思うのだが、確かに彼女の視野が他の人々を圧して長いかと言えば必ずしもそうではない。イゼルローン要塞の司令官

以上に、そうした分析を掌を指すように指し示すことのできる人物はどうやらいなさそうだった。

ブロンズ中将の罷免と軍法会議への訴追に伴い、情報部からも中将の子飼い士官は一掃されている。それで風通しが良くなればよいのだが、事態はむしろ悪化している。新たに着任した部員の悉くが、ベンドリングから見れば、一体どっちを向いて仕事をしているのだ、と問いつめたくなるような連中ばかりだった。

「要するに、みんな小ドーソンです」

席に戻ると、ビュコック司令長官のオフィスに出頭するようにとのメッセージが待っていた。『今日の会議での報告内容につき、審問を受くべく直ちに出席すべし』——譴責を匂わせる文面は、周囲に同情ではなく嘲弄と軽侮を呼んだようだった。無論、ビュコックが、周囲のそうした反応を予想の上で文面を残させたのだらうこと

は、ベンドリングの想像の範囲内にある。

「そうじゃろうて」

剛毅な老将は吐き捨てる口調になる。

「皆、トリューニヒト議長の息のかかった連中ばかりじゃからな」

「本音を言えば、貴官も異動させたかったところだろうが……」

ウランフが、浅黒い顔にやはり苦渋の表情で補足した。

「貴官は、あのクーデターでの我が軍の被害を抑える上で無視したい功績があつたからな。第一艦隊がヤンに敗れて無為に消耗することなく、兵力の大半を維持できたのも貴官の功績だ。議長一派も無闇には手を出せない。生者の二階級特進は許されないが、ヤン・ウェンリーのような時間差昇進という例もあることだ。中佐の肩章を付けてもらつても過賞ということはないと思うのだが、何しろ、制服組のトップがあのだーソンだ」

「前例のないことや、前例があつてもそれがヤンにかかわることは特例中の特例じゃからと、耳を貸そうともせんのだ、あのジャガイ

モ男は」

「閣下……」

フアイフェル准将が注意を促すように声を潜める。

「盗聴器のことなら知っておるよ、准将。何がかなしうて、男同士の密談などにこそ聞き耳なぞ立ておるのか、まったく理解の外じゃよ」

「ベイのイタチ野郎ですか？」

「儂の悪い真似をする必要なぞなかるうに」

殊更に声を高めたかに見えるウランフに、ビュコックは僅かに頬を緩めた。どう見てもおもしろがっているとしか見えない。

「イタチで悪ければ、変態盗聴男……ですか？」

「貴官にはそういう言葉遣いは似合わんな——で、少佐の報告が事実を告げておるとして、我が軍の態勢をどう整えていくか、じゃが……」

「当初通り淡々と進める以外にありません。策を弄しようにも、時

間も人も金もありません」

編成途上の第一四、第一五艦隊の戦力化を急ぐこと。イゼルローン回廊出口宙域から、エル・ファシル、シヴァ、シャンプール、エルゴン、ドーリアなど、同盟中枢領域につながる宙域に散在する有人惑星。これらの補給基地を強化し、イゼルローン要塞への兵站補給のパイプを拡大し、同時に少なくとも二個制式艦隊の駐留を可能にすること。極めて近い将来に予測される、帝国軍による本格的な攻勢に対して、イゼルローン要塞を絶対的な防壁として防備を固めさせる。第一三艦隊の消耗を素早く埋め合わせ、帝国軍に継続的な出血を強いることが叶えば、戦争の天才ローエングラム公爵といえども、無理押しのイゼルローン要塞攻略は、その選択肢から外してしまうに違いない。上手くいけば、数年以上の擬似的な平和状態を招き寄せることも、不可能ではないかも知れない。僅か数年の継続的な大規模軍事活動の中断。それこそ、今の同盟が絶対に必要とするものだった。

「本来、政治が考えるべきことです」

ウランフの苦笑が深くなつた。現時点では、まだ二個艦隊の常駐など望めず、せいぜい半個艦隊が交替で駐留する程度の整備状況である。

「政治レベルでの失敗を、戦略レベルで補おうとして成功した例は、人類の歴史上存在しない——」

「歴史研究家にでも転職するつもりかね、ウランフ提督？」

「いずれ、生きて引退できれば回顧録の一冊も書きたいものではありませんが、今のところは転職の希望はありません。なに、私の独創ではなく、ヤン・ウェンリーからの受け売りです」

このご時世です、回顧録を自分で書けるとは思っていませんよ——ウランフの微笑はほろ苦かった。

「なるほど——まあ、その通りじゃが、そうだといって戦略を担当する我々として何もしないで明日のお天道様だけを祈ってるわけにもいくまいよ」

「——そうは言っても、なかなか難しいですな。国防委員長閣下はあの通りですし、クブルスリー大將も最近すっかり参ってしまっています。医師から休養を進められてもいるそうですし、早晚、辞表を出さざるを得ないでしょう」

「すると、こんどは我々はジャガイモ閣下に向かって敬礼せねばならんということか」

盗聴されている可能性を口にしながら、ビュコックはまったく意に介する様子を見せなかった。

「今度、うちの家内に言つて、ジャガイモの煮込み方でも習つておこうかの」

目の前に滑つてきたメモ用紙に、ベンドリングは目を瞠った。ビュコックが殊更に大声を出したのは、ウランフがペンを走らせる間の不自然さを盗聴者に気づかれる危険を避けるためであつたらしい。『報告書のコピーを一部、オフラインで寄越せ。ヤンに送り、意見を聞く。それと、貴官の被保護者ヘルクスハイム候補生がトップー

○以内の成績で卒業するようなら、第一一艦隊に引きたい。ただし、この話題は他言無用。知られると、彼女に不利になる。次回報告は歩く風船の報告のままとせよ。これ以上、事実を報告すると貴官が危険になる。一読焼却のこと』

了解のサインの代わりに、ベンドリングはメモを取り上げて火を付ける。一瞬に燃え上がった薄いメモ用紙は、直ぐに灰皿の上で灰に変わった。まだ熱いそれを指先にはさみ、文字通りに粉々になるまで揉み潰す。本当に機密を要する事項は総て筆談。それが、ビュコックのオフィスに集う時の暗黙の了解事項だった。

「ジャガイモ料理なら、我が家での定番メニューです。今度、ご招待しましょう」

ウランフの声が高くなるのは、ベンドリングがメモ用紙とペンを手にするのに気づいたからだだった。ベンドリングがメモにしたのは、ランデス・ヘル ヴィオラ大佐に対してフェザーン、正確には自治領主ルビンスキーが仕掛けているかに見える情報操作への懸念だった。

一読し、ビュコックとウランフが目を見交わす。一瞬に空気が冷え、さつきまで豪放磊落な老人にしか見えなかったビュコックの眸が鋼を思わせて硬くなり、ウランフの筋肉質の顔からも微笑が掻き消えた。両将の表情に気づき、ファイフェル准将が棒を飲んだように背を硬直させた。

「有り得ると思うかね？」

「有り得ます」

もう一度、メモ用紙の燃える焰がオフィスの中を彩る。

「こういうことは有識者の意見を求めるべきです。いずれ、こちらの方で公聴会を計画しましょう」

「ああ、宜しく頼む」

それで会話が終わった。不得要領だったが、彼らの言う有識者がヤン大将を指すのであろうことを、ベンドリングは疑わなかったが、具体的に彼らがどう処理するつもりなのかは想像の外である。とは言え、情報士官にとって『知るべき者のみ、知るべし』の原則は、

ニーズ・トゥ・ノウ・オンリー

絶対に従うべき、第二の天性だった。

ネグロポンティやドーソンの主観はどうあれ、帝国軍の状況に対するベンドリングの報告は、ほぼ正確な事実を捉えたものだつた。

宇宙暦七九八年、帝国暦で言えば四八九年の七月。リップシュタット戦役での損失からの再建を完了した帝国軍制式艦隊は、修理整備中、および就役予定のものまでを加えれば、艦艇数約二〇万七〇〇〇隻に上る。艦隊搭乗員だけで三五〇〇万人を上回る膨大な兵力の内、キルヒアイス、ロイエンタール、ミッターマイヤーの三上級大將を首将とする三個戦闘艦隊集団に配属されたのは一三個制式艦隊。加えるに、ローエングラム元帥直属艦隊と、総予備艦隊で全一四個艦隊半に達する。

すでにガイエスブルグ宇宙要塞に対する移動要塞化工事も進められており、一〇月五日にはワープの実証実験が成功している。

「要塞をして要塞を攻めしむる——ガイエス・ハーケンを以てイゼルローン要塞の防壁を撃たしめよ」

ラインハルトがガイエスブルグ要塞に対してイゼルローン回廊への侵攻を命じるのではないかとの推測は、帝国軍首脳の間でも広く囁かれた。特に作戦の実施を熱望したのは、一人は要塞の恒星系間航行技術を開発した、技術総監シャフト大将自身であり、もう一人は要塞の改装工事を主導したカール・グスタフ・ケンプ大将だった。特にケンプは、この年の初め、麾下の分艦隊がイゼルローン回廊宙域でヤン艦隊に敗れたこともあり、その復讐を望んでやまなかった。しかし、ラインハルトが彼らの希望を容れることはなく、ガイエスブルグ機動要塞とその駐留部隊の制式化を認めると共に、キルヒアイス上級大将麾下の艦隊集団に編入するに留めたのである。

ビーヴエグリッヘ・フエストウンゲ

「今、直ちに機動要塞を使う意志はない」

ラインハルトの命に落胆を隠せなかったケンプだったが、ラインハルトの次の言葉に喜色を取り戻した。

「卿は艦隊と共に機動要塞に入れ。卿を機動要塞の前任指揮官に任ずる。次席指揮官には引き続きミュラー大將をその任に充てる。一旦緩急ある際には、機動要塞は貴重極まる戦力となろう。卿らに期待するや大である」

「は——必ずご期待に添うてご覧に入れます!!」

ラインハルトは満足気に頷き、改めて要塞改装の難工事をやりおこせた功績を賞し、賜暇を告げる。偉丈夫の部下は感激に頬を紅潮させ、主君と仰ぐ金髪の若者に何度も謝意を述べて退出した。

「宜しいのですか？」

ラインハルトに声をかけたのはオーベルシュタインだった。

「ケンプをそのままガイエスブルグに据えたことか？」

「ガイエスブルグの改装を首尾良くしおおせたことで既にケンプ大將の功績は十分。機動要塞を駆つての更なる戦功を見れば、その勲功は他にぬきんでることになります」

「ケンプもミュラーも一年近くをこの工事に費やしてきた。決して

高い優先順位を与えたわけではない。器に欠ける者ならさらに時を要するか、あるいは実証実験の際に馬脚を現すこととなつただろう。これで要塞の指揮権を与えなければ、ケンプも納得するまい。それに――」

ラインハルトは薄く笑う。キルヒアイスや、姉アンネローゼに見せる者とは全く異なる、酷薄な印象すら与える皓い笑いだった。

「ケンプが機動要塞をして、ヤンの矢面に立つのを期待しているとすれば、随分と失望することになるだろう。なるほど――」

ラインハルトの表情と言葉が、白刃を思わせて鋭さを増した。

「卿はケンプと機動要塞をキルヒアイスに委ねるのが気に入らないのだな」

「御意」

オーベルシュタインの声は、微塵の動揺をも示さなかった。義眼が無機質に白っぽく光った。

シユートルメン

「『嵐』集団はイゼルローンではなく、フェザーン回廊制圧を

主任務とするはずです」

キルヒアイス直率の艦隊集団の暗号名を、オーベルシュタインは口にした。

「作戦が同盟に漏れるとは思いませんが、我が軍の内側から見れば閣下の意図は明白です。他を欺くのであれば、まず内よりとは使いた古された箴言ではありませんが、真実を指す言葉でもありません」

「この編成はまだ固定されたものではない。いずれの方面へ機動要塞を動かすか、まだ決めたわけではないのだ。キルヒアイスであれ

シユネー

ばいずれの場合への対応の柔軟さも期待できる。『雪』集団へ加えても、卿は苦情をいうだろう。キルヒアイスにしても、ロイエンタール、ミッターマイヤーのいずれにしても、これ以上の功を上げるのは望ましくない、とな？」

フロスト

「それもまた御意です。機動要塞は、当初の計画通りに『霜』集団として独立部隊編成とすべきと考えます。ケンプとミュラーの両

艦隊と機動要塞があれば、他の二集団に全く遜色のない兵力編制となります」

「考えておく——何だ？」

光の尾を引いてラインハルトの金髪が宙を舞う。視線の先に主席副官シュトライト少将の姿があった。

『ガイエスブルグの惨劇』事件でキルヒアイスが病床に伏してから、ラインハルトはマリィンドルフ伯爵令嬢ヒルデガルト……ヒルダを、政戦両面における貴重な助言者として重用している。宰相府に於ける首席補佐官としてだけでなく、元帥府においても事実上の副官の役割を彼女に依存する期間が長かったのも、キルヒアイスを除けば、ヒルダ以上に彼の期待するレベルの判断能力と、ラインハルトとの精神的な波長の同調を期待できる存在を他に見いだせなかったからである。

キルヒアイスが長い病床生活から復帰し、元帥府にその赤毛と目立つほどの長身を目にしない日がなくなってから、ラインハルト

のヒルダへの信頼ぶりはいつかな衰えようとはしなかった。軍事上の重要な内容についても、ラインハルトは元帥府の他の部将より先にキルヒアイスとヒルダとに諮問することがしばしばだった。

「——そうであれば、マリーンドルフ伯爵令嬢には元帥府で正式の任を受けて頂くべきではありませんすまいか？」

これもまたオーベルシュタインの進言であり、既にヒルダの存在が単なる副官という範疇を大きくはみ出していることに気づかぬラインハルトではなかった。アルツール・フォン・シュトライトに、キルヒアイス以来初めて信頼し得る副官の資質を見出したのも同時期のことだった。

「どうせ、あのオーベルシュタインのことだ。マリーンドルフ伯爵令嬢が具体的な職名を持たぬままに、ローエングラム公への影響力を大きくしてゆくのをいやがったのだろうさ」

シュトライトが主席副官、若いテオドル・フォン・リュッケ中尉が次席副官に任じられるとの知らせに、苦々しい思いを吐き捨て

たのはミッターマイヤーだった。

「前はキルヒアイス、今度はフロイライン・マリンドルフか！」  
ミッターマイヤーの気性は、他者の行動を否定的な言葉に代えるのを潔しとしないのだが、唯一の例外が、オーベルシュタインだった。彼は、ヒルダの知性のみならず、その美貌や気質にも早くから着目していた。最初に『ローエングラム公に伴侶が存在し得るとすれば、マリンドルフ伯爵令嬢以外にはあり得ない』と言い出したのはミッターマイヤーであるとされるほどである。

「そもそもキルヒアイスがガイエスブルグで重傷を負ったのも奴のいらぬ差し出口のせいだった。奴が参列者の武装を禁じるなどと言う愚かなことをしなければ、アンスバッハはハンド・キャノンを構えるチャンスすらなかったはずではないか」

そのミッターマイヤーの表情は、しかし、ラインハルトがヒルダに与えた地位を耳にすると同時に莞爾とした笑顔に変わった。曰く、『幕僚総監代理』。統帥本部の下にあり、作戦立案を統括する幕僚

総監部だったが、現在ではローエングラム元帥府がすべての機能を代行してしまっている。現在では幕僚総監部に所属する士官すらおらず、名ばかりの組織となつて久しい。

事実、ヒルダをその長に任じた後も幕僚総監部は、ヒルダが唯一の構成員のままだった。ラインハルトがヒルダに期待したのは作戦幕僚の統括などではない。類い希なその知性から導き出されてくる、あらゆる方面にわたる助言。帝国軍組織に囚われない自由な立場からの進言をこそ、彼と一歳しか違わない、このうら若い女性に求めたものだったのである。ミッターマイヤーが全幅の安堵と信頼を以て、この人事を歓迎したゆえんだった。

『幕僚総監代理』任命と共にヒルダは中尉待遇を与えられ、今は元帥府の正式なメンバーの一人としてラインハルトに近侍する身である。宰相首席補佐官の任も解かれていないので、午前中は宰相府、午後は元帥府とラインハルトに付き従う毎日も以前と変わっていない。元帥副官任務をシュトライト少将とリュッケ中尉に引き継いだ

のが僅かな変化だった。

「キルヒアイス上級大将閣下がいらしています」

「ああ、もうそんな時間だったな」

「五分遅れました。申し訳ありません」

彼が帝冠を戴く時、帝国軍三長官を兼務すべき赤毛の若者は、現在元帥府の上級大将首座としてラインハルトの側から離れている時間が長い。きびきびした歩調で元帥執務室に歩み入ってくる鋼のサーベルを思わせる強靱な長身は、長い病臥の痕をほとんど留めていない。

僅かに、鮮やかな赤毛の下の若々しく引き締まった容貌が、やや暗く憂愁を思わせる影を帯びている。その理由は、ラインハルトには明らかだった。彼と彼の親友にとって欠くべからざる女性……ラインハルトの姉アンネローゼが彼らの側にいないのだ。

わたくし

「先帝の寵姫である私をあなたの方の傍らに見出す時、人々は必ずその後ろに先帝の姿を見出すことになるでしょう」

身を退き、自らフロイデンの山荘への幽囚の身となることを望む理由を、アンネローゼはそう語った。

「何を馬鹿なことを言うんですか！」

最初、姉の言葉とは言え反発を禁じ得なかったラインハルトだったが、彼女の言葉が一定の真実を含むことだけは認めないわけにはいかなかった。

『銀河帝国皇帝エルウィン・ヨーゼフ二世陛下、誘拐さる。帝国政府、並びに帝国軍は総力を挙げて、行方を追い求め申し上げるものの、なお、その御所在は不明』

帝国政府の発した一報が、帝国内を震撼させたのは、この七月。ランズベルク伯アルフレット、元帝国軍大佐レオポルド・シューマツハラを首謀者とする、旧貴族連合軍の残党が皇帝の寝所に侵入して七歳の幼帝を拉し去った事件である。新無憂宮の一部をすら平然

と損壊させ、あまつさえゼツフル粒子の無制限な使用で、皇帝の居室一画まで焰に包むことすら厭わない強引なやり方は、『穏和な貴公子』とされたアルフレットや、『理性の人』シューマツハ大佐の世評を真っ向から否定するものだった。

このことあるを、ある程度までは予測していたラインハルトですら、『これはわたしに対して仕掛けられた戦争であり、わたしは局所戦で敵に敗れたのだ』と述懐したほどである。事件の裏には、なお余喘を保っていた旧門閥貴族の反ローエングラム・レジスタンスのネットワークが存在したとの噂もあり、事実、帝国軍が総力を挙げてその行方を追い続けたにも関わらず、エルウィン・ヨーゼフ二世の所在は杳として知れなかった。宇宙暦七九八年、帝国暦四八九年七月六日、所謂『帝国の最も長い夜』事件である。

『エルウィン・ヨーゼフ二世陛下、ご還御。玉体つつがなくあらせられるも、御還御後、御不例』

帝国政府が、皇帝の身柄確保を発表したのは実に二週間後の七月

二〇日。発見場所は戦没者記念墓地の、とある貴族一門の墓所の前とされたのだが、その直後から奇怪な噂が囁かれ始め、様々な尾鰭を身にまといながら帝国中を回遊し始める。

曰く、『還つてきたのは真物の皇帝ではない。偽物だ。エルウィン・ヨーゼフ二世を誕生時から世話してきた女官の一人が、これは皇帝ではないと叫ぶのを聞いた人間が何人もいる』。また、皇帝を発見し、第一報を入れたのがヒルダであったことから、『あれはマリンドルフ伯爵家がローエングラム公の意を受けて密かにエルウィン・ヨーゼフ二世を新無憂宮から連れ出したのだ』との憶測を呼び、これに『連れ出した幼帝を、マリンドルフ伯爵は密かに毒殺し、その身柄を入れ替えて発見したのだ』との尾鰭が付いた。発見された時に、幼帝の誘拐実行犯と見られる貴族の一人が遺体で発見され、その葬儀をマリンドルフ伯爵家……正確にはヒルダが主宰したことも、この噂を助長した。

皇帝すり替え説を更に強化したのは、新無憂宮の警備責任者だっ

たモルト中將の自決である。モルト中將は、皇帝が誘拐されたとき  
れる七月六日の翌朝、自宅に戻って自裁を遂げているのだ。曰く、  
『モルト中將は、皇帝がすり替えられたことを知り、自らが生命を  
断つことで、すり替えをなかったことにしようとした』——と。

『皇帝陛下は既に御還御あらせられ、新無憂宮にてご療養遊ばされ  
あり』

帝国政府の追加発表も、こうした噂を抑えるにあたってはさして  
力がなかった。

還御を発表してから二ヶ月近くして、ラインハルトが帝国宰相の  
名で公表した皇帝への処遇……エルウィン・ヨーゼフ二世を帝都郊  
外の皇帝別邸に移して、侍医団と養育チームを付け、専門的な治療  
と教育を授けるものとし、期間を当面一〇年とする、とした  
発表も、噂の広がりにより油を注いだ格好になった。

「見ろ、やはり皇帝は真物じゃない。ローエングラム公は皇帝をす  
り替えて、禅譲の形を取って皇帝の座を篡奪する準備を整えたのだ」

尾鰭は尾鰭を呼ぶ。ある船乗りは、帝都からフェザーンへ向かう定期船で、皇帝らしい少年の姿を見たと言い。ある帝国軍の兵士は、新無憂宮の地下迷路を探索中に、泣き叫ぶ少年の悲鳴を確かに聞いたと証言した。皇帝が発見されたとされる戦没者記念墓地の一角では、『出る』との噂も流れ、これまた『金茶色の髪をした、背の高い女が立っているのを見た』との目撃証言が続出する。

帝国政府は、皇帝別邸で療養中のエルウィン・ヨーゼフ二世の映像を公開し、皇帝が真物であり、療養中であることも事実である旨を発表し続けたが、一旦根を張り、茎を伸ばし、葉を茂らせた流言飛語を刈り尽くすにはなかなか至らなかった。

「もう良い。放置せよ。皇帝の安危と所在、健康状態についてはこれまで通りに定期的に公開するに留め、特別な扱いは一切止めよ。噂など気まぐれなものだ、飽きられれば忘れられる」

別に業を煮やしたわけではないが、ラインハルトは断を下し、エルウィン・ヨーゼフ二世に関する特別報道の一切を中止させた。同

時に、帝国内にまだ、彼らが既に『旧王朝』と呼び捨てているゴールデンバウム王朝への盲目的な、それだけに根強い支持が残存していること。その鏡像として、ゴールデンバウムを称する一切への強烈極まる反発が存在すること。その二つに思いを致せば、姉の言葉に真実を見出さざるを得ないラインハルトだった。

この日、キルヒアイスを迎えて開かれた会議の出席者は、ラインハルトとキルヒアイスに加えて、ロイエンタール上級大将、オーベルシュタイン、ヒルダ、それに元帥副官としてのシュトライト少将。  
フローテングリユッペ

艦隊集団の訓練状況報告に加え、そうした帝国内の社会状況への対応策検討もそのテーマに含んだ会議だった。

訓練状況に関しては憂慮すべき点は何もなかった。既に三個艦隊集団による訓練は苛烈と称し得るレベルでの激しさで続けられており、艦隊将兵の練度は確実に上昇している。ラインハルトの手によって、除隊を望む者は帰郷させ、軍務の継続を望む者に対しては、これまで奴隷同然と言われてきた待遇を大きく改めた。既にリップ

シュタット戦役の結果として、貴族としての地位と階級を笠に着て、ただ横暴なばかりで無能な士官は一掃されている。空席となった士官の席を埋めるのに、ラインハルトは下士官、時に一般兵士からの抜擢を躊躇わなかった。

結果として帝国軍艦隊は、量的に充実したのみならず質的にも急速な改善を見始めており、将兵の士気も急激に上がりつつある。

「この艦は、『ブリュンヒルト』の直衛艦にもらおう」

席上、ラインハルトが指し示したのは『ノルデンⅢ』という重巡航艦だった。かつて、ラインハルトは『ノルデンⅢ』を指揮して同盟領ヴァンフリート星系へ侵入し、困難な任務を果たして帰還したことがある。思い出深い艦と言えた。ラインハルトにとってやや残念なことに、副長のロイシュナー中佐を初めとして、当時の搭乗員のほとんどは他の艦へ転出していた。

ラインハルトが顔色を改めたのは、キルヒアイスがもたらした別の報告だった。

事実としては、これまでの対処にも関わらず、『皇帝替え玉説』を中心とする噂はいつかな鎮静の方向へは向かっていなかったのだ。むしろ、日を追って様々なもつとらしい説明や、それらしい証言などを伴うことで、噂はいつの間にか半ばの事実として帝国の人々の口から耳へ、耳から口へと渡り歩き始めているという。

「噂が消えないどころか、さらに広がりを持ち始めている背景には、反ローエングラム公の勢力が完全に消滅したわけではない実情がある」

オーベルシュタインの言葉が、ラインハルトとキルヒアイスの表情から微笑を拭い去った。

「反ローエングラム公の勢力……卿の妄想ではないのか」

ロイエンタールが、遠慮の衣も会釈の手加減もなく、言葉の刃を振り下ろした。オーベルシュタインは素っ気なく首を振っただけだった。

「別に旧貴族に限らず、旧王朝の制度の中で不当な恩恵を貪ってきた。

た官僚や平民の間にも、旧勢力に対する心情的な支持が維持されており、そうした感情が皇帝誘拐を可能ならしめる一因となったとも言えましょう」

未だ玉座に座すルドルフ・フォン・ゴールデンバウムの末裔を、当然のように『旧王朝』と呼び捨てるのは義眼の総参謀長にのみ可能な無造作さだった。帝国の一切の実権がラインハルトの手に移り、エルウィン・ヨーゼフ二世がいずれ金髪の覇者に譲り渡す帝冠を一時的に預かっているに過ぎないことは自明である。現時点では、帝国の誰もが彼と認識を共有しているにしろ、オーベルシュタインのゴールデンバウム王朝に対するこの態度は、先帝フリードリヒ四世時代から一切変化していない。認めるにしろ、嫌うにしろ、オーベルシュタインが、ラインハルトの覇業の上で欠くべからざる存在の一人であることは周囲の認識の一致するところだった。

「話がくどい、卿らしくないな。何か言いたいことがあるなら、はつきり言え。時間の無駄だ」

「御意」

軽く一揖し、オーベルシュタインは続ける。まずキルヒアイスの表情が強ばり、ヒルダの顔色も嫌忌で青ざめた。

「要するに、皇帝誘拐時、ひいては誘拐後に皇帝を二週間にわたって隠しおおせた組織がある。その組織に関わった人間を組織的に摘発させろということだな」

ロイエンタールの声は獰猛な唸りに似ていた。

「よりによって、あの内国安全保障局とやらを使ってか？」

「その通りだ」

当たり前ではないか……それが、オーベルシュタインの反応だった。

「これはまっとうな司法組織の仕事ではない。旧権力の協力者を暴き、合法・非合法にこれを始末する。秘密警察の存在意義はそこにあり、そこにしかない」

「わたしに創業の粛清を行えというのか、オーベルシュタイン」

ラインハルトの声は、敢えて平静を保っていたが、内面に発火点寸前の怒気を孕んで微かに揺らいで響く。

「わたしにルドルフと同じになれと——？」

「同じではありません。非合法と申し上げたのは言い過ぎでありました。ことはあくまで合法に進めるつもりです。主体的な判断に拠らず、法律に則つてのみ、ことを進める計画です」

「どのような法律だ。社会秩序維持法か？」

ラインハルトの実権掌握と同時に廃止された法律を、ロイエンタールは口にした。

「すでに廃止された法に基づいて摘発を行うのでは、主体的判断に基づく恣意的な処断と誹られても反論が叶うまい」

「では——？」

「対敵通牒防止法だ」

「対敵——？」

「そうだ。具体的には敵から金を受け取っていた者を摘発するのだ。」

これであれば、金の出所と、その受け取りの事実さえ押さえておけば十分の証拠になる。たかが金のこととは言え、金額次第では重罪も有り得る。その上、別に重罪に処する必要性もないのだ」

オーベルシュタインが主張したのは、ナンバー2不要論と並んで、

彼の持論として知られることになる『官僚組織の破壊後の再建』  
スクラップ・アンド・ビルド  
論である。

「帝室がゴールデンバウム王朝の頭脳であり、心臓であつたとすれば、軍は肉体であり、王朝を支えた官僚組織は国家のDNAそのものだ」

オーベルシュタインは言う。統治の効率だけを考えるなら、当初は旧王朝の統治組織をそのまま組み込んで活用するのが最も短時間でローエングラム体制を軌道に乗せる方法だろう、と。

「しかし、旧いシステムの記憶を遺した官僚組織を使い続ければ、ローエングラム体制という新たな革袋に、ゴールデンバウム王朝の残滓を孕んだ官僚組織という旧く濁った酒を盛ることになる。害は

いずれ、袋と酒の双方に及ぶ。あらゆる機会を捉え、酒を新しくする努力を惜しむべきではない」

良い機会である。皇帝誘拐をサポートした組織は帝都星を出ることはない。範囲は限定されている。罪状も明らかであり、かつ、帝国最大の帝都の統治システムに抜本的な粛清を行うことができる。粛清とは言え、大量の刑死者を伴うものではない。精々、関係者を公職から永久に、または一時的に逐い、空いた席にローエングラム体制支持者を据えることができれば、それで済むのだ。

スクラップ・アンド・ビルド

オーベルシュタインの『官僚組織の破壊の後の再建』は、無論、これで完成するものではない。帝国内の統治組織を完全に入れ替えるには、戦時体制という非常態勢の維持が絶対に必要である。既にして帝国内には公然たる敵対者が存在しない。戦時体制を継続するために必要な、ローエングラム体制に対する公敵を求めるなら、それは自由惑星同盟を称する叛徒以外にはあり得ない。

ラインハルトが苦い顔になりつつ、キルヒアイスに視線を走らせ

たのは、オーベルシュタインの主張に一定の理を認めたからに他ならない。

「キルヒアイス、卿はどうか？」

「反対です。理由が三つあります」

「何だ、それは？」

「一つには既にこの事件は一段落ついたことになっており、今更に軍がその背後関係を洗うのでは、帝国の司法当局への一般民衆の不信を買うことが一つ。さらに、この捜査の主体を内国安全保障局に委ねることは、かつての社会秩序維持局の再来を思わせ、ローエングラム体制への不信感を煽る恐れがあること、これが二つ目」

「三つ目は、例の噂か？」

問うラインハルトに、キルヒアイスは肯定の意を示して頷いた。

例の噂、つまり皇帝替え玉説である。

「改めての捜査が、愚にもつかない噂に裏付けがあるかのような錯覚を与えてしまいます」

エルウィン・ヨーゼフ二世は英雄でも、名君でもない。自我の抑制を知らず、異常な暴力によってしか自らを主張できない七歳の少年でしかない。だが、五〇〇年にわたって帝国を閲してきた一族の最後の系譜を嗣ぐ存在であるのは事実なのだ。ラインハルトに言わせれば『奴隷根性』でしかないかも知れない。多くの民衆にとって、五世紀にわたって皇帝は彼らの主人であり、支配者であつたのだ。そうした存在への一種の『英雄生存願望』に似た一般民衆の感情が、エルウィン・ヨーゼフ二世へ向けられるとすれば、それは容易にローエングラム体制への反感にも繋りかねない。

「御説ごもつともだ、キルヒアイス提督。しかし、考えておかねばならない事実がある」

オーベルシュタインが指摘したのは、この会議に先立つ一〇月一日に起きた事件だった。一〇月一日朝、新無憂宮の一面が何者かに襲撃され、皇帝誘拐犯の主犯二人ランズベルク伯とシューマツハ大佐を二人ながらに奪われるという事件である。

直ちに帝都全域に厳戒体制が布かれたものの、先の皇帝誘拐事件同様、犯人も、二人の収監者の行方も杳として知れない。

「この事実は、なお、帝都内に旧王朝支持者の組織が一定の力を持つて残存していることを示している、と私は考えている。キルヒアイス提督の反対理由は確かに正論ではある。しかし、事件として一段落着いたことになっていたとしても、主犯二人が脱走したのだ。改めて背後関係を洗うとするのは充分に説得力のある理由だろう。内国安全保障局への不信も分かるが、彼らには法律を厳守させ、違反者は厳罰に処す。これで逆に内国安全保障局に対する帝国臣民の視線を和らげる効果を期待できよう。第三の理由への反論を述べる」とすれば……」

青白い光を帯びた義眼が、赤毛の青年を見据えた。

「皇帝替え玉説を信じ、あるいは信じた振りをして、噂の拡大に手を貸している者こそが、実は今回の摘発の対象者と重なることになり、と私は推察している。敢えて摘発を行うことで、噂の発生源と

流布の手段を二つながらに封じることにも叶う。それに、こうした摘発で統治組織を徐々に刷新していくことで、民衆が我々の背後に旧王朝の影を見なくなっていくだろう。そうしてこそ、新たなローエングラム体制は、ゴールデンバウムの後継者ではなく、その完全な打倒者として立つことができる」

キルヒアイスの顔色がさつと赤くなり、それから蒼くなった。オーバーシュタインが殊更に口調を緩め、その一方氷の刃を繰り出すようにやや語気を強めたそのフレーズは、まさにアンネローゼが自らの隠棲の理由とした、そのままの言葉ではないか。

ヒルダがはつとしたようにキルヒアイスを見、それからオーバーシュタインに視線を転じる。見る見るその表情も血の気を失ったように白くなった。

「卿の自作自演でないのならな」

一同がはつとして振り返るほどに、それは悪意を帯びた言葉だった。六対の視線が集中する先で、左右異なる眸に嘲弄のさざ波が揺

れて見えた。

「謂われのない非難は心外極まる」

「卿の主張にとつて、余りにも事件のタイミングと内容が都合良すぎる。卿が直接やったとは言わぬが、卿の子分の、あのラングとやらの仕業としても、私は驚かな」

「もう止めよ、ロイエンタール。卿の言わんとする所は分かるが、それとて証拠あつてのことではあるまい」

金銀妖瞳が一瞬、刃物に似た光を湛えてラインハルトを薙ぎ、直ぐにその光を消した。

「それは……御意であります」

「また、そうして卿らが非難を応酬しあつてみたところで、何かが解決するというものでもない、違うか？」

キルヒアイスを見、ヒルダに転じた蒼氷色の視線は、あるいは僅かな躊躇いを含んでいたかも知れない。

ヒルダが応じた。まだ蒼白な顔色のままである。初めて、それに

気づいたラインハルトの眉間に驚きとも、困惑ともつかぬ縦皺が浮かんだ。

「検挙は、明白な証拠がある場合に限ること。それと、内国安全保障局には直接の逮捕権限を与えないこと。容疑者の逮捕は必ず司法当局者が行い、内国安全保障局の人間はその場に立ち会ってはならないこと……こうした条件を付けてはいかがでしょうか」

ラインハルトは即答しなかった。ヒルダをして、そこまで顔色を変じさせる理由を自らに納得させかねさせたのだが、彼女の言葉の意味が腑に落ちると同時に、黄金の髪が大きく縦に揺れた。

「良い考えだ、フロイライン。オーベルシュタイン、卿の具申を許可するが、内国安全保障局には直接に容疑者を逮捕する権限を与えてはならぬ。必ず、証拠に基づき、司法当局者の手で逮捕させよ。どのような容疑であつたとしても、逮捕と同時に『法の外へ置く』ことは許さぬ。それを為した者は、たとえ卿であつたとしても、わたし自らが処断する。良いな？」

オーバーシユタインは、あるいは『甘い』と呟いたかも知れなかったが、見えたのは半白の髪が頷く形に動いたことだけだった。

「御意」

☆☆☆

「どうしたのだ、お前らしくなかったぞ、今日は」

それがラインハルトの第一声だった。多忙を極めているローエン  
グラム元帥府である。会議の後、ラインハルトには、内務省と典礼  
省の官僚を呼んで旧貴族領の再編に関わる煩雑な法的問題を聴取す  
る会議が待っており、これはどちらかと言えば帝国宰相の職務に属  
する内容であつたため、ヒルダはラインハルトに従つた。

フラインブルベト

キルヒアイスはロイエンタールと共に『恐るべき冬』作戦の細部  
調整会議に赴いた後、艦隊の整備や補充、兵站線の拡充に関する打  
ち合わせで技術総監部、艦政本部、後方勤務本部から統帥本部への  
訪問をこなさなければならなかった。漸くこの日の予定を総て消化

し、元帥府を退出できたのは既に深更を回った時刻だった。

その元帥府の玄関でキルヒアイスを待っていたのが黄金の獅子旗を立てた大型地上車であり、キルヒアイスが姿を表すと同時にその窓から顔を突き出したのがラインハルトだった。

「ラインハルトさま！」

「遅いぞ、キルヒアイス」

「申し訳ありません」

「まあいい、俺も今着いたばかりだ……どうせ同じ方向だ。乗っ  
いけ」

この時期、二人は新無憂宮の一面にある高級将校用の官舎に住ま  
いを置いている。ちなみに二人の官舎は隣同士である。

地上車の後部座席にはラインハルト一人だった。あるいはヒルダ  
を伴っているのではないかと思っていたキルヒアイスは、微かな失  
望と、やや深い安堵を感じている。

官舎へ戻り、専任のコックが用意しておいてくれた夜食とワイン

を前にした時、ラインハルトが待ちかねたように放ったのが「どうしたのだ」の第一声だったのだ。

「オーベルシュタイン参謀長の意見具申のことでしょうか？」

「そうだ」

「お嫌だったのでしょうか、裁可されるのが」

「ああ、嫌だった」

ワインを大きく傾け、夜食を一口、口に運んでから、ラインハルトの口調が苦くなる。

「何と理由を付けてもあれは肅清だ。フロイライン・マリィンドルフが上手く条件を付けてくれたから良いが、それでも勝手なことをやる奴は必ず出てくる」

「ですが……確かに参謀長の主張されることにも一理はありますし……」

「だから、どうしたんだと聞いてるんだ、キルヒアイス。フロイラインの意見だって、本来ならお前から出てきてもおかしくなかった

はずだ。確かにオーベルシュタインのやり方は綺麗じゃない。お前の口出しを止めようとして、姉上の言葉をそのまま引いてきたんだからな」

「では……却下なされば良かったではないですか」

「キルヒアイス、姉上の口まねをしたからと奴の具申を却下することはできることじゃない。それも確かだ」

「え……ええ。そうですね」

キルヒアイスには分かっている。かつて、ラインハルトはキルヒアイスを指して、『ゴミ箱を覗き込んでも、その奥に美を見出す』と評したことがある。オーベルシュタインの、ある意味の正論、真つ向からの政治的論理に対して、ラインハルトはキルヒアイスにキルヒアイスらしい反論を望んだのだ。オーベルシュタインの『理』をねじ伏せるには及ばなくとも、キルヒアイスによるもう一つの『理』との間で妥協を見出せれば、意に染まぬ裁可を下さねばならぬ不快さも幾分かは軽減しよう。さらには、我が半身と決断を共に

する心地よさも期待できる。

にもかかわらず、キルヒアイスは沈黙を守り、ラインハルトは、不快さ……正確には、ヒルダが正確に察したような、その精神の深奥で起きている軋みを伴った痛みから免れる道を得られなかった。

痛みが残した精神の澱こころのようなもの、それを言葉として吐き出したのが、「どうしたのだ」の一言であつたに違いなかった。

「申し訳ありません、どうも疲れていたようです」

それが真実ではないことを、キルヒアイス自身が誰よりもよく知っていた。オーベルシュタインがアンネローゼの言葉を引いた時、我が半身と我が身を呼ぶ親友に、必ずしも真実を告げることのできない痛みを、キルヒアイスは確かに感じたのだ。

「……まあ、復帰からまだ三ヶ月だからな」

彼とアンネローゼは、七月の皇帝誘拐事件の時、まさに皇帝が拉し来られた場所にいた。事件の主犯たちが最初から狙って彼ら二人

を巻き込んだのだ。絶体絶命の窮地に追い込まれたキルヒアイズとアンネローゼは、しかし、間一髪駆けつけたラインハルトによつて救われたのだが――事件が解決していく過程で、キルヒアイズはアンネローゼとの間に、他者に公然と告げることでできない関係を持つてしまったのだ。

無論、キルヒアイズはそれが許されざる罪であるとか、後ろ暗い犯罪行為であるとかとは思っていない。彼にとつて神聖なすべてのものに賭けて、自分は誤ったことをしたのではないと信じているし、アンネローゼも想いを共有してくれた。

にもかかわらず、オーベルシュタインの口からアンネローゼの言葉が出た時、彼は我が手に抱き締めたアンネローゼの素肌の暖かさと滑らかさを確かに思い出してしまっていた。

オーベルシュタインの意図が、まさにそうして彼の動揺を引き出すことにあったことも、分かりすぎるほどに分かつていた。キルヒアイズがアンネローゼとの関係を想い、アンネローゼの身の危険を

思えば、正面からの反論を控えるだろうと。あのたった一夜のできごとを、内国安全保障局の局長席に座しているあの男……ハイドリッヒ・ラングは知っているのだ。当然、オーベルシュタインの耳にも入っているに違いなかった。

オーベルシュタインにしてみれば、キルヒアイスとアンネローゼの関係をラインハルトの前で暴くことなどに興味はないだろう。彼にとつて重要なのは、旧王朝による統治システムを破壊して、来るべきローエングラム王朝のそれに再編すること。卑劣と誹られようと、卑怯と難じられようと、結果が総てである。結果を出せば、目的は果たせる。手段を選んで、目的を達し得なければ、残るのは失敗の実績のみである。

アンネローゼが自ら身を引いたのも、キルヒアイスとのことを公然たるものにするには余りに周囲の条件がそれに相応しくないこと、そのことに気づいていたからだ。一五歳の時からずっとアンネローゼは彼らを守ってくれた。今度こそ、彼女を守ろうとして、またし

でも守られてしまったのだ。キルヒアイスの忸怩たる思いがそれだった。

「どうしたんだ、キルヒアイス？」

ふと気づくと、食事の手も止まっていたらしい。ラインハルトが不思議そうに彼の顔を覗き込んできていた。

「本当に疲れているみたいだな」

「え、いいえ、大丈夫です……ところで、ラインハルトさま、お身体の調子はどうです？」

できるだけさりげない調子を装ったつもりだったが、やはり自然さを隠しきれなかったらしい。ラインハルトの表情に不機嫌そうな影が横切った。

キルヒアイスの知る限り、ラインハルトはここ一ヶ月ほどの間に二度、熱を出している。一度はガイエスブルグのワープ実証実験が成功裏に完了した直後、旗艦『ブリュンヒルト』艦上でのことである。さほどの発熱でもなく、軽い風邪ではないかとの診断だったが

念のため、翌日に予定されていたガイエスブルグ機動要塞の完成記念式典を一日延期したのだが、それがたまたま流布していた噂を煽り立てる結果を招こうとは、キルヒアイスにも思いもよらぬことだった。

『ガイエスブルグには、ローエングラム公を仕留め損なつたアンスバツハがまだ徘徊している。まだヴァルハラへの門をくぐらずにしぶとくローエングラム公を狙っているのだ』

『俺は見た。ガイエスブルグの例の大広間の前でだ。俺は前にブラウンシュヴァイク公の私兵部隊にいたから知っているが、あれは確かにアンスバツハ准将だつた』

『あの大広間を訪れられた直後に、ローエングラム公がお倒れになつたそうだ。まさか、アンスバツハがいたんじゃないのか』

噂自体、大したものではない。多くの犠牲と流血を見た戦場では珍しくもない。『出る』というのだ。旧門閥貴族四〇〇〇余家が集結し、リップシュタット戦役の敗北とともに、多くの貴族がライン

ハルトへの呪詛と怨嗟を残して、ヴァルハラへと去っていったのがガイエスブルグである。噂が出なければかえっておかしいほどのものとさえ言える。

ガイエスブルグでの噂が他と異なっているところがあつたとすれば、目撃証言の具体性だった。キルヒアイスが重視したのは、少なくとも数百人が目撃者として名乗りを上げたこと、その中に戦場での縁起担ぎとはあまり縁のない高級将校が複数含まれていたこと。そして、『目撃』された相手が他ならぬアンスバッハ准将であつたことだった。アンスバッハを知るはずもないある兵士達が描写した、その人物の容貌は、まさにキルヒアイスが生死の境で至近の視野に焼き付けた彼の男に酷似していたのである。

根も葉もないと笑い飛ばせば、それまでのことだったが、キルヒアイスには無視できなかった。これらの噂は、一つを誤れば、噂を囁きあっている一般将兵たちの、ラインハルトの常勝への信仰を根底から覆しかねない危険性を孕んでいる。ラインハルトに戦場での

常勝をもたらすのは、彼自身の天才であることは間違いない。しかし、兵たちの、戦場の軍神としてのラインハルトへの信仰に亀裂が入った時、常勝の神話もまた過去のものとして崩落への道を歩むかも知れないのだ。

キルヒアイスは思う。彼はアンネローゼに約束した。必ず帰ると。ラインハルトと共に。その誓いを無に帰す恐れのあるものは、他愛のない噂話として無視して良いはずはない。

キルヒアイスは決断し、僅かにベルゲングリューン中将一人のみを伴い、目撃証言の集中するガイエスブルグ深部を訪れた。ラインハルトが二度目の高熱を発して倒れ、今度は宰相府詰めの医師に入院を勧奨される事件が起きた時、キルヒアイスはこの調査からの帰路にあった。

アンスバツハ准将の亡霊の正体そのものは子供だましだった。一定の命令に従って多少気の利いた受け答えをする自動応答システムと、それに連動したホログラム映像でしかなかったのだ。キルヒア

イスに衝撃を与えたものがあるとすれば、そのシステムを準備し、ガイエスブルグに出没させた人物がアンスバツハ自身にほかならなかったことだった。

『ローエングラム公はゴールデンバウムの大半の皇帝陛下よりも有能で勤勉だ。しかし、この先、何十年も有能で勤勉であり続け、帝国の統治のみに自らを献身させ、かつ卿との友情や姉との生活を保ち続けることなどが人として可能なことなのかどうか、卿は考えてみたことがあるか。人は疲れるのだ。ローエングラム公一人、例外で有り得ると卿は本気で断言できるか。ローエングラム公は人にあらず、超人であると卿は真実信じているのか』

それは、アンスバツハ本人がキルヒアイスに向けて遺した今際の言葉。あるいは、呪いそのものだったと言えなくもない。

絶句するキルヒアイスに、アンスバツハの映像……あるいは亡霊と言うべきかも知れない……は言葉を重ねた。

『大帝陛下とて、人としての疲れの挙げ句にその後半生を終えられ

たと、卿は考えてみたことはないのか。ローエングラム公が、同じように人としての疲れと迷いの中で、大帝陛下と道を同じくするかも知れないと、その可能性を思ったことがないと、卿は心から誓えるか？』

ラインハルトの発熱と病臥さえなければ、キルヒアイスにとってアンスバッハの言葉を世迷い言と笑い飛ばすことができただろう。発熱が一度だけなら、単なる偶然と無視して顧みなかっただろう。

『バルバロッサ』を駆つて帝都星へ帰還する直前、ラインハルトの再びの発熱と昏倒を告げるヒルダからの緊急電は、キルヒアイスの心臓を氷の刃で貫き通したのだ。

「何処も悪くないぞ。この間はたまたま疲れが溜まっていただけだ。心配してもらふほどのことはない。フロイライン・マリィンドルフも色々言ってくれていたが、本人が何ともないと言っているのだ。これ以上、確かなことはあるまい？」

再びワイン・グラスを傾け、ラインハルトはキルヒアイスの危惧

を笑殺する。

「でも、今、仰いました。疲れが溜まっていた、と。今まで、ラインハルトさまが疲れなどという言葉を口にされたことはありませんでしたから」

「それはお前だつて同じだろう。お前が疲れた、なんて言うとは思つてもいなかったぞ……だが、まあ、仕事が増えているのは認めるし、何と言つても病み上がりだからな」

ラインハルトはグラスを揺する。たくまざる優雅な動きに、まだ半分近く残った白ワインが澄明な光の漣を揺らめかす。

「国を奪おうというのだ。この程度のことは当然ではないか」

「一二年です、ラインハルトさま」

僅か一二年なのだ。彼らが出会い、アンネローゼが後宮へ拉し去られ、ラインハルトがキルヒアイスとともに、ゴールデンバウム王朝の打倒を誓い合った一〇歳の時は、僅か一二年の時を隔てた極く近い過去の出来事にほかならない。その一二年の間に、無力な市井

の少年だった二人は帝国の最高権力者と、その腹心たる上級大将の地位に駆け上り、一〇歳の幼さのみに可能だった無謀なほどの誓いを現実のものに変えたのだ。

だが、彼らの為すべきことはまだ終わってはいない。過去の亡霊を完全に歴史の中に埋葬し、新たな帝国と、おそらくは人類にとっての未来にとっての責任を全うすること。無論、帝国の支配を為しおおせたところで足を停める選択も可能だろう。だが、なお上るべき高処が視野にある限り、彼らがその翼の羽ばたきを停める謂われは何処にもない。

「まだ、アンネローゼさまもわたしたちの許へは戻って来られていません」

それもまた然り——と言うより、それこそが彼らにとつても何よりも重みを持つ事実だった。アンネローゼが彼らの許へ戻り、あの『黄金の時』を再び三人の共有の時とすることが叶わねば、誓いが果たされたとは到底言うことはできないはずだった。

「それまでの間、ラインハルトさまの健康に僅かの不安も抱きたくありません。わたし一人ではなく、アンネローゼさまにとつてもそうであるはずです」

アンネローゼの名を出す時、胸奥深くに疼く痛みをキルヒアイスは敢えて無視した。

「……わかった」

ややあつてラインハルトが頷くの、キルヒアイスはほつと息をつく。時として意見を違えたことはあつたとしても、最後には必ず分かり合えた。それは今も変わっていない——そう信ずることができる。

「ドクトル・バウアーシュミットか？」

ラインハルトが口にしたのは、前回、彼が宰相府で発熱・昏倒した時の当直医の名だった。フランツ・ペーター・ヨハンネス・バウアーシュミット。国立オーディン文理科大学医学部の準教授であり、ある種の疾病の研究について高い評価を受けている若手の研究医だ

が、世渡りがあまり上手くないらしい。研究医であり、本来その任に充てられるはずがないにもかかわらず、しばしば宰相府の当直医を勤めている。

前回の発熱時、バウアーシユミット医師はラインハルトに精密検査の受診を勧めている。

「特に気がかりがあるというわけではありませんが、急な発熱というものは必ず何かしらの原因を秘めているものです。何ごともなければ良し、何かあっても早期に発見できていれば打つ手は幾らもあります」

バウアーシユミット自身、確たる不安を抱いているわけではないらしく、特に執拗というわけでもなかった。稀に宰相府でラインハルトと顔を合わせると、ラインハルトが受診すると言って受けなかった簡易検査だけでも受けるようにと医師らしい調子で勧める。キルヒアイスが、バウアーシユミットの言葉を耳に留めるようになったのは当然だった。その言葉が、ガイエスブルグでアンスバッハの

亡霊が口にした不吉極まる未来図絵と結びつく時、キルヒアイスはバウアーシュミット医師の漠とした不安を杞憂として笑い捨てることができなくなった。

「ええ、そうです」

「……ドクトル・バウアーシュミットがこの次に宰相府詰めになるのはいつだ？」

言葉に先行した僅かな沈黙が、ラインハルトが親友の言葉を真剣な吟味の俎上に載せたことを示していた。

「……直近ですと、来週の月曜です」

「分かった」

根負けした、というわけでもなかったのだろう。ラインハルトは頷いた。

「その時に用意してきてくれるように伝えておいてくれ。前の時も、器具を用意すればここでも受けられると言っていた。宰相府の医務室で……そうだな、一時間も予定を空けておけば充分だろう」

「わかりました。ドクトル・バウアーシュミットに連絡を入れておきます」

ほつとして、キルヒアイスはほとんど中身の減っていないかったワイン・グラス口に運ぶ。芳潤な液体が咽喉から滑り落ちていき、胸郭を熱く灼くのが心地よかった。ラインハルトもそうだが、キルヒアイスもさしてアルコールの量は多くない。

新任の士官達は、赴任先の上官や下士官たちから手荒な歓迎を受けることが多い。多くは虐め、いびり、時にしごきに類するものだが、無謀なほどの酒量を消費するどんちゃん騒ぎも当然のように含まれている。そうした騒ぎを経ることで、アルコールへの耐性のないもの、あるいはごく低い者でも相当量までのアルコール摂取に耐えられるようになるのが普通だった。

が、彼ら二人は多くの士官達の経験する、こうした通過儀礼とは無縁であるか、ほぼ疎遠なままに戦場での経歴を積み重ねてきた。生意気すぎる『金髪の孺子』と『その腰巾着』への嫉視と反感は強

く、配属された部署で彼らを待っていた対応に敵意と憎悪の含まれていなかった例の方が稀少だった。彼らを『どんちゃん騒ぎ』に誘おうなどという奇特な上官や同僚がいるはずもなく、僅かな例外だったレンネンキャンプ大佐麾下の部隊では、当のレンネンキャンプ自身がそうした羽目を外した騒ぎを好まなかった。前線での乾杯や招待された晩餐会を除けば、二人が初めてアルコール付きの夕食を口にしたのは一八歳の時、リンベルグ・シュトラークの下宿においてである。

その後、成年を迎え、広範で強大な権力を手にした地位に対する酒席の数も増えたとは言え、二人の酒量はさして上がりもしなかった。

時計の短針が左への傾きを大きくし始めたころ、用意された夜食の皿がすべて空になり、ワインの小瓶も底に澱を残すのみになった。キルヒアイスは立ち上がり、皿を片づけ始める。放っておいても、翌朝には従卒が片づけるに違いないのだが、二人ともこうした作業

に手を惜しむという習慣が薄い。

「……叛徒ども、というか同盟のことだが――」

二人して、食器を厨房の食洗機に放り込んだ時、ラインハルトが切り出したのは、キルヒアイスが胸に納めていたもう一つの話題だった。

「和戦、いずれを採るかですね？」

「ああ、そうだ」

ラインハルトの、象牙細工を思わせる指先がパネルを操作すると、食洗機が小さな唸りをあげて動き出す。明日の朝、従卒とシェフは、元帥閣下に後かたづけをさせたことに気づいて真っ青になるかも知れない。もつとも、二人に下がって休むよう命じたのはキルヒアイスののだし、その程度の非礼を咎める狭量さはラインハルトとは无缘である。

既に深更を回り、午前で表される時間帯に入っている。後日の話題とすべきかと思っていたキルヒアイスだが、ラインハルトがこの

件での意志決定を急いでいるのであれば否やはなかった。

「コーヒーでも淹れましょうか？」

「面倒だ。冷蔵庫に何かあっただろう、探してみてくれ」

政戦両略、および政治経済一般について鋭利極まりない切れ味と容赦のない辛辣さを併せ持つ年若き帝国宰相にして元帥は、私生活に於いてはことほどさように安直である。敢えて異を唱えてコーヒーを淹れる手間をかける理由もない。冷蔵庫コンテナに入っていたミネラル・ウォーターのボトルをぶら下げ、キルヒアイスは居間に戻った。

「いずれ、皆に諮るつもりだが、お前の意見を先に聞いておきたい」  
「和平を」

迷うことなく、キルヒアイスはその言葉を選ぶ。ラインハルトの、描いたように形の良い眉が大きく動くのが見えた。

「理由は？」

「四つあります」

一つには、同盟との和平が成功裏に終われば、戦費として費やされるべき膨大な国費を、国内の再建と辺境の開発に充てることが叶う。さらに、オーベルシュタインの論法を借りるならば、新たなローエングラム体制が旧王朝とは異なることをはっきり内外にしめすことができ、特に国内の支持を強化することができる。

「……これは些か申し上げにくいですが、こちらから和平を申し入れば、同盟は更に自らを弱める道を歩むことになると思います。これも帝国にとっては好都合な結果になります」

「辛辣だな」

「ええ、もちろん、この点に於いては参謀長にも、同意をしてもらえと思っています」

帝国サイドから和平の申し入れがあれば、必ず同盟国内は分裂する。それが、同盟の『政治指導者』と直に接したことのある経験から、キルヒアイスが導き出した結論だった。彼らの多くは必要以上に帝国への敵意を露わにし、殊更にキルヒアイスに対する居丈高さ

を周囲に誇示しようとのみしているように彼には思われたのだ。一年余り前、イゼルローンの捕虜交換式典で言葉を交わした同盟の女性政治家……ウインザーなる人物の高慢極まる表情と言動は、汚物を面上に浴びせられる不快さを抜きにしては記憶から呼び覚ますことさえできない。

アーレ・ハイネセン以来の理想……ルドルフ・フォン・ゴールデンバウムに始まる銀河帝国の政治体制の否定……を体現した態度だとは、なぜか思えなかった。キルヒアイス自身がアーレ・ハイネセンなる人物や、その理想なるものに通曉しているわけでもないが、現実には同盟の政治家と接した記憶と印象は、そうした知識を必要としなかった。多くの門閥貴族たちと共通する、権力に寄生する者特有の腐臭を、キルヒアイスは確かに彼らから感じ取ったのだ。

「現在の同盟政府は、単に人気取りで和平を拒否しようとするだろうと言うんだな？ 一方で、彼らの現状を見て、ここは和平すべきだと考える連中も現れる——それで、その後、どうする？」

政治家達がどう強がろうと、同盟の民衆が彼らの煽動に乗ろうとも、実際に同盟の国力は衰亡の一途を辿っている。アムリッツアの大敗北で艦隊機動兵力の過半を喪失し、更には昨年の内乱騒ぎで更に正規兵力を減じている。キルヒアイスの手許に集められた情報では、同盟軍の制式艦隊兵力は、ヤンの第一三艦隊を除けば、第一艦隊と整備中の二個艦隊の合わせて四個艦隊弱でしかない。アムリッツアへの動員を免れていたもう一個の制式艦隊、第一一艦隊は、昨年の内戦でクーデター派についた結果、ヤン艦隊に撃破されたと言  
う。

要するに、現時点での帝国軍に対して三分の一にも満たない機動兵力の整備状況であり、しかも、戦力補充に不可欠な国力もまた衰退の一途を辿る状況にある。

「この状況下で我々が和平を、つまりは現状維持での戦争状態の凍結と正式の外交チャネルの設置を申し入れたとします。これを受けた、同盟国内の国論はまっふたつに割れるでしょう。最初の内は、

意見の深刻な相違というレベルでしようけれども」

おそらくは対帝国強硬姿勢を装う、現在の主流派が主導権を握って戦いの継続を決めるだろう。和平派は逼塞を余儀なくされるが、同盟内部には帝国も決して戦いのみを望んでいないとの情報は確実に浸透する。

「つまり、『フインブルベト恐るべき冬』の前に一回目の和平折衝の打診をするというのだな」

「そうです」

「彼らが折衝の開始を拒否してきた時点で、『フインブルベト恐るべき冬』作戦を発動すれば、同盟の国内には確実に恐慌が起きる」

「それが心理的契機というものになり得ます」

辛辣な笑いを浮かべて、ラインハルトはキルヒアイスの肩を軽く叩いた。

帝国軍の主力が雪崩を打ってフェザーンへ侵攻し、フェザーン星

系およびフェザーン回廊宙域を一举に制圧する。主流派は、自分たちの先見性のなさを暴露し、さらに同盟市民は自分たちがどれほどまでに軍事的に脆弱な土台の上に立っているかを改めて思い知らされることになるだろう。

「その時点で、もう一度和平の使者を送るのだな？」

「はい」

特に辺境宙域、フェザーン回廊やイゼルローン回廊に近い宙域の有人星系が同盟政府からの制御を脱して、帝国への和平を求めている可能性がある。帝国としては、こうした勢力と手を結び、融和的な外交を展開していくことで、同盟政府の分裂を更に促していけばよい。

「お前からそんな案を聞くとは思っていなかったな。オーベルシュタインならともかく」

「参謀長ならとつくにその程度のことは考えておられるでしょう」  
確かに考えているはずだ。しかし、オーベルシュタインが必ずし

も自分の案に同意するとは、キルヒアイスには思えない。オーバーシュタインはあくまで同盟全土の武力制圧と、全面的な無条件降伏を最終的な目的として主張するのではないか。それが数年単位の征服戦を必要とするとしても、むしろ、あの義眼の参謀長は数年単位の大規模な軍事作戦の展開と、それに伴う帝国内の挙国体制を望んでいるのではないか——キルヒアイスにはそう思えるのだ。

「帝国軍は主力を以てフェザーンを制圧し、一方イゼルローン要塞方面にも大規模な兵力を出して、ヤン・ウェンリー・提督の動きを封じます。そうして、一年ほども時を費やせば、同盟は必ず分裂するでしょう」

帝国との和平を求める一派と、絶望的な抗戦に同盟全土を投げ入れようとする一派と。帝国は和平派と結んでその自治を保証し、返す刀で抗戦派を制圧すれば良い。重要なのは、和平派にヤン・ウェンリーを必ず取り込むことだ。わずか三分の一の兵力とは言え、ヤンの用兵能力は優に五個艦隊に匹敵する。彼と正面から戦えば、多

くの将兵を失い、場合によりラインハルト自身ですら危地に立つ恐れさえ出てくる。

ラインハルトの安危以上に、キルヒアイスが和平の優先……あるいは和戦両略併用に拘るのは、その完了までに費やされるべき犠牲の量と時間だった。

「ヤンを含む同盟軍と、同盟領において戦い、完全に制圧するにはおそらく一度の征戦では不十分でしょう。少なくとも『フライングブルベト恐るべき冬』規模の作戦を二度から三度行い、最短でも三年、最長では五年余りを要するものと考えられます」

翻つて和戦両用策であれば、一年余りをかければ、同盟は熟柿のようにラインハルトの手許に落ちて来るに違いなく、失われる費用、資源、人材もまた比較のしようもないほどに少なくて済む。

キルヒアイスが確かに帝国軍三長官を兼務するに留まらず、ラインハルトが至尊の地位に就いた際に宰相として侍するべき資質の所有者であつたことを証明するのは、戦後の統治にまでその視野が及

んでいたことだ。帝国への敵意に満ちているであろう同盟の民衆を直接統治するのではなく、和平派の旧同盟統治機構によつての間接統治が可能になるはずだった。彼らの統治に際して、彼らの信奉する民主共和制と称する政治制度を許容する。帝国、ひいては征服者への憎悪は、その鋒先を見失う。

キルヒアイスの統治者としての辛辣さは、同盟市民の怒りの鋒先を、ハイネセン以来の理想と矜持を、敗北の泥濘に投げ捨てた旧同盟政府首脳達へ転じさせることも、この間接統治の狙いの中に含めたことだった。『我々は外敵に敗れたのではない。内なる敵に、背中から裏切りの一突きを浴びせられて膝を屈したのだ』——一つを誤れば、危険極まりない結果を招きかねない囁きだが、同盟市民をして彼らの統治者こそが真に憎悪すべき者、ある意味でルドルフ的なものの体現者であつたことに気づかせるには十分だろう。

期間と、失われるリソース、そして戦後の処理……いずれもがラインハルトの、統治者としての負荷を大きく下げる。ラインハルト

ラインハルト

が、ルドルフのような『統治者としての疲労』に見舞われる可能性を大きく下げるに違いない。キルヒアイスにとって何よりもそれが重要だった。ただ、この時のキルヒアイスはまだ明確には意識していない。ラインハルトが敵としたのはルドルフ的な恣意に基づく専制であり、その具現であるゴールデンバウム王朝を倒した時、ラインハルトにとって自由惑星同盟は旧王朝と同列の敵として論ずべきではないと言うことに。同盟が、あくまでアーレ・ハイネセンの理想を体現する存在であればという留保条件はつくにしても。

ラインハルトは再び大きく頷いた。

「お前の意見は分かった。同盟と直ちに戦端を開く必要がないことは俺もお前と同じ意見だ。近い内に、この件を諮る。用意をしておいてくれ」

「はい、ラインハルトさま」

ラインハルトがキルヒアイスの腹案を受け入れるつもりであることは直ぐに分かった。しかし、それを帝国としての正式な対同盟戦

略として認知させるのは簡単ではないことも分かっていた。更なる戦いの場を求める主戦派の軍人達もある程度の不満は漏らすだろうが、キルヒアイス自身、同盟との間に一戦もなく、外交のテーブルの上だけですべてが決するとまでは樂觀していない。短期間で終わるにしても、連続する激烈な戦いが彼らを待っているに違いないのだ。

むしろ、最大の障壁となるのがオーバーシュタイン参謀長に違いない。キルヒアイスはそう思う。正面からの議論で負けるとは思わなかった。問題があるとすれば、『理』以外の、それも心理的な、キルヒアイス自身の囚われだろう。

何度か躊躇い、ミネラル・ウォーターのボトルを一本空にしてから、キルヒアイスは切り出した。

「——ラインハルトさま……アンネローゼさまのことですが……」  
やや曖昧な口調になったためだったのかも知れない。ラインハルトの、輝かしい黄金色の眉が、急に翳りを帯びたように見えた。

「分かっている」

「は——？」

「フロイデンの真冬は厳しすぎるからな……姉上には、冬の間だけ麓の別邸に移って頂くことにしようと思っているが——」

「え——？」

完全に話題がずれている。思いがけない話題に、キルヒアイスは切り出そうとした言葉……彼とアンネローゼが、まだラインハルトに打ち明けていないある事実を告げる言葉を見失った。

「俺自身が許可しなければ、俺自身も姉上とは直接には連絡しない……そう決めたのは俺自身なんだ。しかし、許可するにも理由がない」

この金髪の若者が、時に妙なところで律儀で自身を律するに厳格すぎることをキルヒアイスは知っている。この時もそうだった。

本来、キルヒアイスはここで話題を引き戻すべきだった。『それはそうですが、今、お話ししようとしたのはそのことではありません』

ん』と切り返した上で、話すべき事を話すべきだったのである。去る七月一九日の夜、エルウイン・ヨーゼフ二世が戦没者記念墓地で発見される前夜、彼とアンネローゼの間にあつた出来事のことを――この時のキルヒアイスが、ラインハルトからの問いかけに先に応じてしまったのは、出会ってから一二年、常にラインハルトの補佐としての立場にあり続けた経験から来る反射的なものだったと言えるよう。

「……では、フロイライン・マリーンドルフにお願いしてみてもうでしようか。フロイラインには、アンネローゼさまをフロイデンまでお送り頂いています。フロイラインの厳冬期の気候に鑑みて、冬季の居住地の移動の命令を伝えて頂くように、と」

「命令？ 俺が姉上に命令するのか？」

「形の上でも、アンネローゼさまにフロイデンへ移られるように、帝国宰相としてお命じになったのはラインハルトさまです。ですから、アンネローゼさまへのお願いではなく、宰相としての命令とい

う形でないとおかしくなります」

「そ、そうか……分かった。そうだな、フロイライン・マリーンドルフに伝えてもらうのは良い考えだ。明日にでも話をすることにしよう」

遅くまで済まなかった——ラインハルトに送られて官舎を出る。隣接する彼自身の官舎までは数十メートルの距離だったが、一〇メートルおきに親衛隊の衛兵が佇立し、道路もまた昼とは言わぬまでも、深夜とは思えぬ明るさを保っている。帝国首都の灯りは、満天に広がるはずの無数の星々を飲み込み、視野に入る星の煌めきは微かだった。だが、銀河は厳然としてそこにあり、そして彼らの征服を待っている。

「もうすぐだ、もうすぐ、銀河は俺たちのものになる」

それがお休みの言葉だった。豪華な黄金の髪を翻した友人に、キルヒアイスは遂に口にすべき言葉を飲み込んだまま立ち尽くすことになった。

ラインハルトが、対同盟の政戦略決定のために会議を招集したのは、翌週の月曜日。奇しくも、ラインハルトがバウアーシュミット医師による診断を予定したその当日である。会議には、ラインハルト自身を含め、キルヒアイス、ロイエンタール、ミッターマイヤー、オーベルシュタインら帝国軍の最高首脳に加え、初めてマリンドルフ伯爵フランツが國務尚書代行としての立場で出席していた。これは、武断的な性格の強さで知られたローエングラム体制では異例のことだったが、これが一つの慣例となり、以後、帝国の最高意志決定の場への文官の列席が慣行となる。同時に、ローエングラム王朝における初代の國務尚書の座が、マリンドルフ伯爵に対して用意されたことを示す、象徴的な出来事とも言えた。

「すでにフェザーンへの軍事的作戦発起は既定のものとして決している。卿らに諮りたいのは、その後のことだ」

ラインハルトは些末な議題を延々と討議することを好まない。官

僚の末端の人事にまで口出しを止めなかったと言われるルドルフとは異なり、大局に影響のない判断については部下への権限委譲を躊躇わない。会議冒頭、ラインハルトが最大の懸案を最初に議場に供したのは当然のことだった。

「最初にわたしの腹案を述べておく。異論があれば、遠慮なく述べてもらいたい」

ラインハルトの視線を受け、キルヒアイスは用意した資料を出席者の端末に表示させた。オーベルシュタインが青白い光を帯びた義眼を、やや離れた席からはロイエンタールが左右異なる瞳から冷やかな視線を送り込んでくる。

「——同盟に対して和を申し入れるというのか？」

口火を切ったのはロイエンタールだった。

「その通りです、ロイエンタール提督」

「和平使者を送ると言っても、別に膝を屈しようと言うわけではない」

「……いや、この案に異論を唱えたいわけではないのだ、ミッターマイヤー。確かに膝を屈するわけではないし、帝国のさしのべた手を振り払うというのであれば、叛徒どもに戦いを挑む名分も得られるというものだからな」

「では——？」

ロイエンタールの視線がキルヒアイスを離れて、横に滑る。氷の刃を思わせる右目とサーベルの靱さつよをはらんだ左目が、それぞれに異なる光を湛えて、義眼の参謀長の横顔を突き刺した。ミッターマイヤーの目が案ずるように長身の美丈夫と、『ドライアイスの劔』と称される男との間を左右に動いた。

「……参謀長には、すでにこの案をご承知か？」

半白の髪がゆつくりと否定を示して横に動いた。

「ロイエンタール提督には、資料を事前に読まれなかったと見えるが？」

「読んだ。卿も当然、目を通していると思うが——？」

「その意味では、事前に承知していたと言っても誤りではない」

ロイエンタールの表情に僅かな苛立ちが浮かぶ。ロイエンタールが問いたかったのは、おそらくラインハルトが事前にオーベルシュタインにこの案を諮ったのか否かだったのだろう。オーベルシュタインもまた、察してわざとはぐらかしたと言つて良い。

「いつ、この内容を知ったかは問題ではあるまい。大方針として、叛徒どもに接するに最初に武をもつて当たるのか、和をもつて接するのか、この点こそ議論すべきと小官は考えるが、ロイエンタール提督はいかがか？」

「——その点で異論はない。では、卿はあくまで第三者として、この場にいると言うことなのだな？」

「何を確認しているのか、さっぱり分からぬが？ そのような言葉の遊びは時間の無駄ではないか……小官としましては、基本的に本案で問題ないかと考えます」

オーベルシュタインは視線をロイエンタールから、ラインハルト

に向け変える。

「案ずべき点があるとすれば、我が方の最初の和平提案に対して、叛徒どもがあつさり応じてしまう可能性であります」

「その可能性は確かに否定できない。しかし、その後、我が軍は  
フインブルベト

『恐るべき冬』作戦を発動する。その際の叛徒どもの反応については、むしろ卿の方がよく見えているのではないか？」

「……一旦は和平の手を結ぼうとしたとしても、我が軍がフェザーンに入れば、今度はそれを和平に名を借りた騙し討ちだと煽り立てる輩が出て来て、最終的には叛徒政府の主導権を握る結果となる……」

ロイエンタールの声に必要な以上の皮肉の成分が含まれているように感じたのは、キルヒアイスの錯覚だっただろうか。しかし、言葉の内容はキルヒアイスの提案への完全な支持だった。

「いずれにしても叛徒が分裂を起こし、その一方との戦いは不可避であるという点には異論がないし、より少ない犠牲でより完全な勝

利という戦略の基本にも叶う方針であることも確かです」

「実戦部隊の長としては、本案に賛成するというのだな？」

「御意。ただ、その際にヤン・ウェンリーとは戦い得ぬ結末となるやも知れませんが……」

もう一度、色の異なる視線がキルヒアイスを凝視し、それからラインハルトに転じた。ラインハルトは小さく笑った。

「不満か、ロイエンタール？」

「不満を抱く者、皆無とは言えますまいが……戦いとは勝ち易きに勝つもの。要なくして、ヤン・ウェンリーのような雄敵と戦場に見えるのは愚かと言うものでありましょう。ミッターマイヤー、卿はどうだ？」

「帝国軍人たる者、命ぜられれば如何なる敵にも立ち向かう準備と覚悟はできています。しかしながら、慎重と怯懦、敢為と暴勇の違いを弁えることも、武人としてあるべき姿と信じます」

ロイエンタールの言葉を肯定するミッターマイヤーに、ラインハ

ルトは軽く頷き、もう一度、オーベルシュタインを見る。その表情に微かな驚きと意外さとが浮かんでいるように、キルヒアイスには見えた。

ふ、と視線を感じ、キルヒアイスはすばやく目を走らせる。末席近く、病的なねつい目付きで視線を注いでいた人物が、ふいとその目を逸らせる。健康的な肌の色と、小柄で大きな頭の八割方がはげ上がった、栄養の満ち足りた赤ん坊のような印象の男は見間違いない。内国安全保障局長ハイドリツヒ・ラング。

『対敵通牒者』の摘発は順調に進んでおり、ラングはその功を賞され……ラインハルトが決してラングの人物自体を評価しているわけでないことを、キルヒアイスは知悉していたが、同時にラインハルトが功に報いるに罰をもつてするような不正に平然たり得るひととなり

為人でないことも理解している……国内治安維持の責任者の一人としての列席を許されているのだ。

「よかろう。では、大方針としてこの案を採用するとして、叛徒ど

もへの使者の人選をせねばならないが――？」

「キルヒアイス提督を正使とし、ルッツ、レンネンキャンプ両将を副使としてはいかがでしょうか？」

オーベルシュタインの提案に、室内がざわめいた。ラインハルトでさえ、やや虚をつかれた表情に、その蒼氷色の目を瞠ったほどだった。

「キルヒアイス提督は昨年、捕虜交換でイゼルローン要塞へ赴いており、ヤン・ウェンリーとも面識があります。ルッツ、レンネンキャンプの両提督にとっては、ただ兵を動かすだけではない経験と識見を積む良い機会と考えます」

「お許しがあれば、小官も同行したくありますが、いかがでしょうか？」

「ロイエンタール提督には、帝国軍の実戦部隊を統括する立場として、軽々しく帝都を離れてもらっては困る」

「これはしたり。帝国軍のナンバー2たるは小官ではなく、キルヒ

アイス提督ではないか？」

「ナンバー2、ナンバー3などを論じているのではない。ここは適材適所を論じているに過ぎない」

「なおさら気に入らぬ。小官が、叛徒への、あるいはイゼルローンへの使者として相応しくないと、卿はそう言うのだな？」

「そうは言っていない。ロイエンタール提督にはどうしてもヤン・ウエンリーと対面したい理由でもおありか？」

「帝国軍全軍、ヤン・ウエンリーの顔を直に見たいと思わぬ者はおらぬだろう。何しろ、半個艦隊でイゼルローンを陥落し、アムリッツアから見事に脱出し、叛徒内の内乱を半年で鎮めて見せた男だからな」

「——もう良い。やめよ、ロイエンタール、オーベルシュタイン」

ラインハルトの、鋼の鞭を思わせる声が響き、金銀妖瞳と義眼の間に漂いかけていた帯電したかのような空気が一瞬に霧消する。出席者たちの中には溜めていた息をそっと吐き出した者もいたほどだ

った。

「キルヒアイスを正使とし、ルッツ、レンネンキャンプの両名を副使として和平交渉打診のために叛徒領、つまりイゼルローン要塞へ赴かしめる。ロイエンタール、卿はキルヒアイス不在の間、

フインブルベト

『恐るべき冬』作戦の最高責任者を代行し、全軍を束ねよ。これはローエングラム元帥府としての決定だ、良いな」

「御意」

艶やかなダークブラウンの髪が静かに動き、主君の命に服するべき意思を示した。オーベルシュタインは何事もなかったように視線を端末に戻し、次の議題を促すラインハルトの声が響いた。

「よ、宜しいのでありますか、参謀長閣下、あのような、あのような決定をそのまま受け入れられるなど……」

会議後、執務室へ戻るオーベルシュタインに背後から追いつ

て来たのはラングだった。

「どういう意味だ？」

オーベルシュタインは脚を停めようとしない。決して足の速いオーベルシュタインではないが、小柄でしかもどちらかと言えば肥満体に近い上に軍人でもないラングにとつては、付いていくのはなかなかの難行なんぎようだった。

「叛徒どもに和平の提案をするなど、有り得ぬことです。帝国にとつて最大の仇敵であつた叛徒に対してですぞ」

「叛徒ゆえに手を結べぬということであれば、ありとあらゆる内乱はいずれかの殲滅をもつて終わらねばならん。そうした例が史上に幾例あつたか、治安維持の専門家たる卿が知らぬはずもないと思うが？」

「それは……そうであります、しかし、あれは元帥閣下の腹案と言ふよりも、おそらくはキルヒアイス提督があのような策をお取り上げになるように元帥閣下を説いたものに相違ありません。参謀長

閣下にすら、一言の事前の相談もなく、いきなり会議の場であのような……これでは閣下の面目は丸つぶれではありませんか。それに、幼なじみというだけでキルヒアイス提督の私見を優先しておとりあげになるなど、公私混同も甚だしいと言わざるを得ません！」

「私の面目など、潰れようがどうしようがどうでも良いことだ。要はそれが有効かどうかだけだ」

「それであれば、それであれば——！」

ラングの、僅かに耳の回りに残った茶色の髪が激しく振り回される。禿頭を光らせた汗が飛び散り、さすがにオーベルシュタインは一步を退いて軍服が染みの被害を受けるのを避けた。

「あの策が効果を示し、わずか一年そこそこで叛徒が鎮まつてしまったのでは、閣下のなさろうとしたことが半分もなし得ないではありませんか」

「——そして、内国安全保障局長としての活躍の場も自ずから縮小され、卿は一介の局長として世を終わる以外になくなる……しかし、

身の程知らずの望みを抱いているのでなければ、それで十分ではないか。卿とて旧王朝で重臣の名を頂いた一人であつてみれば、ただ生命長らえたばかりか、帝国の幾分かを左右し得る立場を得られた幸運を思ふべきではないのか？」

秋霜に似た一言は、ラングの心臓を正確に貫いたらしい。赤ん坊のようにつやつやとしたピンク色の顔色が見る見る青ざめ、怯えた小動物を思わせて、埋め込まれたような両目が白目を見せて丸くなる。

オーバーシュタインはラングの表情の変化など、日射しが僅かに翳ったほどにすら注意を払おうとはしなかった。ラングを見据えつつも、無表情に微かに青白い光を帯びた義眼は、ラングの禿頭を透過して、その背後の壁面に注がれているかに見えた。

「政治、戦争、そして外交。いずれにしろ、相手があると言うことだ。こちらの思うようにすべてが動けば、歴史に学ぶ必要などない。何事も相手あつてのことだ。キルヒアイス提督の策は、なるほど最

も効果的だ。しかし、それは我らにとって最も効果的であるというに過ぎぬ。キルヒアイス提督は若い。若さが視野を遮るとすれば、まさにその一点に他なるまい」

「……では——!?」

言葉の意味が理解に達した瞬間、にラングの顔色が戻った。両目が、今度はある種の嗜虐性を帯びた喜色を浮かべて何度も瞬く。しかし、オーベルシュタインには、ラングの喜びに花を添えてやる意思はなかった。

「何事も始める前には成功も失敗もせぬものだ。我らは、いずれに転んだ時も帝国にとって最善を生むよう務める。それだけではないか、ラング局長。卿も同じ考えていると、私は信じている」

「も……もちろんであります。私の使命はあくまで帝国に背く輩を見出し、その力を削ぐことにあります。ですから……」

「では、卿は卿の任務に専念せよ。履き違えをしないことだ。帝国政府もローエンングラム元帥府も、卿の栄達のためにあるのではない。

それを見誤った時、卿は自らの不明を悔やむことになる。いや、悔やむだけの時間は与えられぬと思うことだ」

冷徹なる義眼に見据えられ、ラングの額に、先ほどとは異なるタイプの汗が浮かび上がった。唯一の至高者に話しかけるような、と評された莊重な低音に、あろう事か微かな震えを帯びさせて、ラングは安っぽい玩具を思わせる仕草で頷く。

「わ……わかりました。我が身に替えましても、任務に精励致しますでありましょう、誓って、誓いまして……」

この日の会議に付随する細やかな挿話は、ラインハルトが検診……正確には簡易的とはいえ、バウアーシュミット医師による精密検査を受けたことだった。

「俺はどこも悪くない。何で精密検査なんか受けなくちや行けないんだ？」

一度はキルヒアイスの勧めを受け入れたラインハルトだったが、自身の健康に自信のある若者らしい我が儘、あるいは医者嫌いはラインハルトも市井の少年達と変わるところはなかった。

「あの、すでに予定が入れてありますけれど？」

キルヒアイスの一瞬の困惑を救ったのがヒルダだった。彼女が示したのは帝国宰相・兼・帝国軍最高司令長官としてのスケジュールであり、会議後の三時間が『ドクトル・バウアーシュミットによる健康診断』として確保されていたのだ。無論、ラインハルトのスケジュールをやりくりして空きを作ったのはヒルダであり、依頼したのはキルヒアイスである。

「参ったな、スケジュールの空きができたなら他の予定を入れると  
いうこともできたはずではないか」

僅かに抵抗を示してみせはしたのだが、ヒルダに理詰めで説かれれば、ラインハルトとて白旗を掲げるにやぶさかではなかった。

「ですから、バウアーシュミット医師をお呼びしました。私は、こ

れも閣下にとつての立派な予定だと考えます。帝国の政治と軍事の最高責任者として自らの健康を維持し、管理する。当然の義務でこそあれ、なすべきことをなさずに怠けているなどと考えする必要はございません」

話を聞き、キルヒアイスは感心し、安堵した。なるほど、ラインハルトさまをああい風に説くというやり方もあるのか——が感心であり、ラインハルトが他者の意見を受け容れる度量を維持していることが安堵だった。正確に言えば、ヒルダのやり方がラインハルトの為人を理解した上でのものであること。それが、より大きな安堵感と呼んだと言ふべきだった。

ひととなり

いずれにしても、この日、ラインハルトはバウアーシュミット医師の検査を受けた。ちなみにこの事実、キルヒアイスの他にはロイエンタールとミッターマイヤー、そしてオーベルシュタインの三名にのみ報されている。ただし、バウアーシュミット医師によるラインハルトの診察の事実自体は公表され、その理由も『一〇月初旬

の突発的発熱の経過確認のため』とされた。バウアーシュミットは宰相府詰めの当直医を長く務めている。彼が呼び出されてラインハルトを診察すれば、隠すことは不可能だった。

ついでながら、ラインハルトの受診後、元帥府の大將以上のメンバー全員もバウアーシュミット医師の問診と診察を受けており、後に、幹部メンバーの定期受診は元帥府での慣行となるに至る。そうした巧みなカムフラージュもまた、ヒルダの発案だった。

機密事項とされたのは『精密検査』の内容のみであり、これについても詳細を知るのはバウアーシュミット医師ただ一人。彼が専攻する特定の病理分野に関わる検査であり、検査結果が流出したとしても、意味するところを把握できる人間は帝国全土でも一握りもないだろう。

細やかな、だが、この後の銀河の歴史を大きく左右する、それは出来事だった。

## 皇帝亡命

帝国内外を震撼させた『皇帝誘拐事件』と『帝国の最も長い夜』に際して、本来なら主導的立場にあるべきでありながら、結果的に完全に疎外される立場に追い込まれたのがフエザン自治政府である。特定の人名で代表させるならば、自治領主アドリアン・ルビンスキーと、彼の首席補佐官であるルパート・ケッセルリンクの二人を上げれば充分だろう。

帝国暦四八九年七月八日、在帝国弁務官ボルテックからは『皇帝誘拐に成功』の連絡が入った。が、その後の連絡が途絶え、彼らにこの次第が報されたのは七月二〇日の帝国政府の発表によってだった。

ケッセルリンクからの報告に、ルビンスキーは珍しくもその精悍な容貌を歪めた。

「要するに、ボルテックが完全にローエングラム公に吞まれていたということだな。ローエングラム公との折衝に成功したと言っていたが、実際には完全に折衝を拒否されての誘拐を強行した挙げ句に、逃げ切れずに皇帝を奪回された……とそう言うことか」

「ええ、ボルテック弁務官の報告が怪しい旨は、既にご報告してあったはずですが」

ケッセルリンクの入手した情報では、憲兵隊に呼び出されて帝国宰相府へ赴いたボルテックが、行きの上機嫌さとはうってかわって死刑囚さながらの顔色で戻ってきたということだった。にもかかわらず、ボルテックはローエングラム公との折衝に成功し、七月初旬を目処に皇帝を誘拐してフェザーンへ送るとの報告を寄越していた。「……ランズベルク伯もシューマツハ大佐も、その身柄を拘束されることはなかったが、なるほどローエングラム公、食えんことをする。わざと泳がせて、皇帝の誘拐だけは実行させたか」

「当然、我がフェザーンの関与を糾弾してくるでしょうね、帝国政

府としては。つまり、最初からフェザーンの首の根を押さえるのが、あの坊やの狙いで、ボルテック弁務官は罍をかけにいつて、まんまとローエングラム公の罍に首まで締め上げられてしまった、とそういう顛末です」

明らかに面白がっている口調でケッセルリンクは続ける。何でも分かつているかのごとき自治領主の表情が、驚愕と狼狽にほころびる瞬間を今か今かと待ち受けているのだ。彼にとつて、ルビンスキーは忠誠を誓うべき上司であつたが、同時にその失敗を待ち詫びるべき競争相手でもあり、更には憎むべき――

ケッセルリンクの無表情の仮面に亀裂を穿つたのは、ルヴィンスキーの次の言葉だつた。

「ところで補佐官、シュミットバウアーという名に心当たりがあるか？」

「シュミットバウアー……ですか？」

冷たい汗を、ケッセルリンクは脇の下に感じている。知っている

どころではなかった。

事件のお膳立てを進める中、彼は二人のシュミットバウアーと出会っている。一人は、コルネリア・ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアー子爵夫人。彼が進めていた皇帝誘拐の計画を、在フェザーンの亡命貴族レムシャイド伯自身の口から聞き出したこと、実行犯に擬されているシューマツハ大佐に接触を持つなど、無視したい動きがケッセルリンクの触覚に触れてきたのだ。

それなりの白兵の使い手とは聞いていたが、たかの知れた子爵家の令夫人であつてみれば、死と暴力の脅迫をもつてすれば、簡単に排除できる。そう信じたケッセルリンクの考えを、彼女はあつさりと覆して見せた。逆に死の脅迫に屈したのはケッセルリンクであり、彼女はまんまと逃げおおせ、そのままフェザーンから姿をくらましてしまったのだ。

コルネリア・ゲルトルーデの消息を知るために、さらには彼の監視下に置くために、ケッセルリンクが捕らえたのが彼女の母親であ

るゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアー男爵夫人だった。良家の奥方以外の何者にも見えぬ男爵夫人に、今度は暴力と凌辱の脅迫をもって臨んだケッセルリンクだったが、再び目論見は水の泡と消えた。男爵夫人は、既にコルネリア・ゲルトルーデが帝都に発っていることと、ケッセルリンクの強請が決して実を結ばぬことを明言してのけた後、何の躊躇いもなく自らの生命を断った。自治領主府の中で若くして栄達した身を誇るケッセルリンクですら、呆然となるほどのあっけなさだった。

いずれにしても『シュミットバウアー』の名はケッセルリンクにとって鬼門だった。特にコルネリア・ゲルトルーデは、皇帝誘拐の企みを隅々まで知り、その上でフェザーンの制御を完全に拒否して動けるだけのフリーハンドを確保していた。そして、ケッセルリンクほどの男が、シュミットバウアー男爵家の系譜には完全に無知だったのである。極秘の裡に男爵夫人の遺体を葬った後、シュミットバウアー男爵家についての詳細を調べ上げたケッセルリンクは愕然

と目を見開くしかなかった。『帝室のために身を挺せよ』——大帝  
ルドルフのたった一言のために、初代ヨーゼフ・フォン・シュミツ  
トバウアー侯爵以来五〇〇年にわたって、ただひたすらにゴールデ  
ンバウム王家にのみ忠誠を誓い続けた一族。そんなものが実在する  
などとは、フェザーン人の一人としてのケッセルリンクには到底信  
じがたかった。

しかし、現実には自らも確実な死を前にして平然と微笑していた  
コルネリア・ゲルトルーデ。そして、自死に際して一瞬の躊躇も、  
一片の恐怖も見せなかったゲルトルーデ・フォン・シュミツトバウ  
アー男爵夫人。二人を目の当たりにした経験は、ケッセルリンクに  
事実を受け入れる以外の選択肢を許さなかった。コルネリア・ゲル  
トルーデが帝都に赴き、皇帝誘拐に介入すること。その結果が決し  
てフェザーンにとって好ましいものとはならないことを、彼は察し、  
それゆえにこそシュミツトバウアーの存在をルビンスキーの視野に  
曝さぬための努力を惜しまなかった。逆に、シュミツトバウアーが

介入した結果の責任のみが、この憎むべき上司に科せられる結果になれば、これは願ってもない結末だった。

だが、今、ルビンスキーは禁断のその名前を口に出している。口の端に皮肉っぽい笑いまで貼り付かせて。意図は察し得ぬまでも、ケッセルリンクにとって好ましいものであるはずはない。

ケッセルリンクは無表情の鎧を守り通した。二三歳という年齢にしては驚異的と評して良い自制心と言えた。

「さあ、知りませんね。帝国の貴族ですね、その名前からすると」  
「『コルネリア・ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアー。子爵夫人。シュミットバウアー家の最後の一人にして、最期までただ一人皇帝に侍し、死す』——」

放り投げられてきた書類が、狙ったようにケッセルリンクの前のテーブルに落ち、ページが開く。帝都で執り行われた、ある葬儀を報じる文書だった。添付された立体写真を前に、ケッセルリンクの額に微かに汗が浮いた。

「最期までただ一人皇帝に侍し、死す？」

「そうだ。遺体が、皇帝……つまりエルウィン・ヨーゼフ二世とともに発見された。つまり、このコルネリア・ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアーなる人物は皇帝の誘拐に関与していた、ということになる。これはおかしなことだな。私はこの件に関して、まだ一度もシュミットバウアー家の関与を耳にしたことがない」

「ランズベルク伯、あるいはシューマツハ大佐あたりが独断で、協力相手を探し出したのではありませんか」

「ランズベルク伯にそれほどの才覚があったと、君は本気で信じているのか、補佐官」

ルビンスキーの、底光りのする目が正面からケッセルリンクを見据えた。内心はどうあれ、ケッセルリンクの表情にも動揺は浮かばなかった。

「シューマツハ大佐も、貴族でもないのにあの若さで大佐まで進んだ男です。ランズベルク伯は、足こそ地面には着いておりませんで

したが、門閥貴族の一員としてそれなりの人脈は持っていたはずで  
す」

「——だから、私の耳にもシュミットバウアーの名は入ってこなかつたと言いたいのだな、補佐官」

ランデスヘル

「自治領主、僭越なことを申すようですが、皇帝の誘拐は失敗したと見なして善後策を考えるべきではありませんか。シュミットバウアーなる人物がどう関与したにしても、それをここで論じていても何にもなりません」

ケッセルリンクは強引に話題を切り替える。ルビンスキーが、彼とシュミットバウアーとの経緯についてどの程度を耳に入れているかは、そのなめし革を思わせる厚い皮膚の表層からは全く読みとれない。万一にもルビンスキーが何もかもを知り、ケッセルリンクがぼろを出した瞬間に断罪の一撃を打ち込んでくるつもりであるとするなら、同じ話題を長く続けているのは危険極まりなかった。

「君の言うとおりではある、補佐官。ここでシュミットバウアーな

る人物について議論を交わしていても、一フェザーン・マルクのメリットもあるわけではない」

ケッセルリンクにとつて些か意外なことは、ルビンスキーがあつさりと彼の言葉に賛意を示したことだった。

「善後策を……と言ったからには、何か腹案があるはずだな。聞かせてもらおうか？」

直截な切り返しが、一瞬ケッセルリンクを絶句させる。苦し紛れの逃げ口上など、先刻お見通しと言うことであるらしい。ここではどろもどろの状態に陥れば、失敗の責任はシュミットバウアーの動きを抑えられなかった補佐官にありとして、ケッセルリンクを処罰して口を拭うつもりなのかも知れない。

「最悪なのは、我がフェザーンの関与を帝国に、特にローエングラム公ラインハルトに知られてしまったことです」

半瞬の沈黙を先行させた後、ケッセルリンクの口調はあくまで自信に溢れている。『口を拭う』——胸裡に浮かんだその一言が、ケ

ツセルリンクにあることを気づかせたのだ。

「例えばボルテック弁務官、あるいは——そうですね、この私、ケッセルリンク補佐官の独断で皇帝誘拐なる陰謀が企まれたが、自治領主府は全くあずかり知らなかった……こんな言い訳が、あの金髪の孺子に通じるとは思えません。トカゲの尻尾を切り落として口を拭うことなど許されないわけです」

「——その通りだ」

ルビンスキーの反応は再びケッセルリンクの予想を裏切った。

「そんな子供だましの通じる相手ではない。ボルテックの折衝が失敗した時点で、ローエングラム公はフェザーンを悪意ある対手として認識したと考えるべきだ。ローエングラム公が敢えて、皇帝誘拐を実行させたのは我がフェザーンに対して、逃れられぬ大義名分を手にするため……そう見るべきだな」

「大義名分……ですか？」

応じながらケッセルリンクもまためまぐるしく頭を回転させてい

る。幾らかからずに結論に達した時、さすがにケッセルリンクの表情が微かに歪んだ。

ランデスヘル

「帝国が、フェザーンを攻撃する、と仰るのですか、自治領主？」  
「それ以外の結論にたどり着いたというのなら、理由を聞かせてもらえるかな、補佐官」

「いえ、閣下のお考えと同じです。フェザーンを攻撃するつもりがないなら、ボルテック弁務官だけでなく、ランズベルク伯、シューマツハ大佐らを泳がしておくはずはありません。誘拐を防ぐつもりなら、こちらの台本を示したところで、弁務官をその場で捕らえた上で、弁務官自身の証言としてそのような陰謀があったことを公開すればいいわけですから」

「建前上、フェザーンは皇帝の特許によって成立している自治領だ。その自治領が皇帝を誘拐しようとした。自治の特許の取り消しには十分すぎる理由だ。帝国側から見れば、これは攻撃ではないというわけだ。皇帝に不敬をなした臣下に対する懲罰、あるいは治安の紊

乱者に対する警察行動に過ぎない」

逞しい肩を軽く竦めて見せ、ルビンスキーは執務机を離れる。緩やかな歩調は、フェザーンの市街を見下ろす展望窓の前で止まった。既に日が落ち、薄暮は夜の闇に舞台を譲り渡している。一〇億を超える人口を擁し、四〇〇億の人類社会でも最大の経済力を誇るフェザーンの首都にとって夜は一日のある時間帯を指し示す言葉でしかなく、地平線までを埋め尽くすかのような人工の灯りは、フェザーン人の活動がまったく緩むことなく続いていることを示して余りあった。

そう、政治でも軍事でもなく、経済力という武器で全人類社会を絡め取り、実質的に支配しているのはフェザーンである。その事実には、帝国も同盟も全く気づいていなかった——これまでは。

既に、ジークフリード・キルヒアイス上級大將がローエングラム公ラインハルトに対して同盟への和平共存に向けての意見具申を行ったとの情報が彼らの手許に入っていた。もし、キルヒアイスの意

見がラインハルトの容れるところとなつて、帝国が同盟と手を結ぶ一方で、帝国が皇帝誘拐未遂の罪を問うてフェザーンへなだれ込む。フェザーンにとって最悪の悪夢である。レオポルド・ラープ以来一二〇年余り。歴代の自治領主府の営々たる努力は一瞬にして水泡に帰すだろう。

ルビンスキーはケッセルリンクを振り返つた。

「——なぜ、私が皇帝の誘拐を計画したか。善後策を考えるとすれば、そこまで遡つて考えるべきだな」

「は——？」

「考えろ、と言つたのだ、補佐官。君の腹案を——だ。よい案を出してくれれば、使つてやつてもいいぞ」

キャビネットからシドラ・ウイスキーの瓶を取り出し、緋色の液体を二つのショットグラスに注ぎ分ける。一つを机の端、ケッセルリンクの立っている側に滑らせてから、ルビンスキーはもう一つのグラスを手に席へ戻つた。グラスを口に運ぶでもなく、そのまま両

目を底光らせてケッセルリンクを見つめる。

その間も、ケッセルリンクは必死に頭を巡らしている。ルビンスキーの『なぜ、私が皇帝の誘拐を計画したか』という言葉、それにシドラ・ウイスキーの強い香りが触媒として働いたのかも知れなかった。ある思いが脳裡に閃き、それがケッセルリンクの肺腑を貫くように縦横に走った。

「レムシャイド伯はエルウイン・ヨーゼフ二世の顔を詳しくは知らないはずだ」

「その通りだ。レムシャイド伯がエルウイン・ヨーゼフ二世に会ったのは、確か即位の儀式の時だけだ」

ルビンスキーの応答が、ケッセルリンクに自らの考えが正鵠を射抜いたことを確信させた。

ローエングラム公ラインハルトとリヒテンラーデ公を左右に従えた……あるいは二人に連れられた……七歳そこそこの子供を、式典の会場で遠くから見たただけなのだ。それから既に二年近い。子供の

顔は変わるものだ。

「レムシャイド伯と面識のない、七歳くらいの子供がいる亡命貴族を探します」

「いや、それは私がやろう」

「しかし——」

「レムシャイド伯に会い、帝国は皇帝を奪回したと言っているが、実は皇帝の身柄は我が手にあると伝えてきてくれ。伯に無用の疑いを抱かせないようにだ」

「分かりました——しかし、帝国は繰り返し、皇帝の奪回と身柄の確保を公表し続けるでしょう。帝国側にも手を打つ必要があると思いますか？」

「確かにその通りだが、そちらの手当も私がやる。君は、当初の計画通りにことを進められるよう、準備を整えてくれれば、それでよい」

「分かりました」

深々と一揖しつつ、ケッセルリンクは察している。おそらくボルテック弁務官を初めとするフェザーン弁務官事務所は帝国政府と軍の制圧下に置かれて機能を停止しているはずだ。それで、帝国はフェザーンの帝国内に於ける動きを抑えたと確信していることだろう。だが、フェザーンには表裏二つの顔がある。ルビンスキーが裏の顔を通じて、帝国サイドに工作の手を伸ばし直そうとしていることを、ケッセルリンクは確信した。

自治領主府を退出し、ケッセルリンクは数千光年を隔てた宙域の『地球』なる惑星と、その惑星を治めている奇怪な組織のことを思い浮かべている。その端正な顔に、微笑が酷薄な影を刷いた。ルビンスキーのかつての愛人であるドミニク・サン・ピエール。彼女を使って酒と薬に溺れ込ませ、事実上彼の手駒となり果てている、とある人物のことを思い出したのだ。あの駒を使えば、ルビンスキーが思い描いているであろう、『帝国侵攻後のフェザーン復活』劇を主演するのが、ルビンスキーではなくて彼ルパート・ケッセルリンク

クであるということも十分に有り得るはずなのだ。

ルビンスキーが私邸に戻ったのは、その日の深更も回った頃である。食事は外で済ませてきた旨を伝えて使用人たちを遠ざけると、その足で奥まった一面に向かう。厚い遮蔽シールドに完全に包まれたその一室に入ると、ルビンスキーの精悍な表情が微かに強ばった。通信装置のスイッチを入れ、暫く待つ。皮膚が僅かに帯電したような感覚が、部屋そのものが通信機として機能し始めたことを示した。

グラント・ビショップがいかに

「総大主教猊下、ルビンスキーでございます」

『——何用か、ルビンスキーよ。皇帝の誘拐にしくじった言い訳でもするつもりで余を呼び出したか』

重々しい鐘の音にも似て跳ね返ってきた声は、半ば叱責の響きを帯びていた。『シリウス戦役』に敗れ、全人類の総帥たる地位から、

一切の資源を失った荒廃の辺境一惑星に転げ落ちた惑星<sup>ほし</sup>。荒れ果てた、かつての人類の故郷を治める宗政一致の組織、地球教を束ねる

ブランド・ビショップ

奇怪な老人。それが総大主教であり、ケッセルリンクですらその正体を知らぬ、ルビンスキーの真の主人だった。

地球教の情報収集能力には軽視しがたいものがある。地球教そのものが帝国・同盟双方に広く拡がっており、かつそれぞれの政府で相当の地位にある人物にも、その影響は及んでいるのだ。

「恐れ入ります、総大主教猥下。言い訳を申し上げる意図など毛頭ございません。今日、お呼び立て致したのは、今回のしくじりをしくじりのままで置かぬための手だてを打つため、猥下のご許可を仰ぐためにございます」

『申してみよ』

「帝国首都における地球教徒組織を動かすご許可を頂きたくあります」

一つは、可能ならばゴールデンバウム王朝の血筋につながる少年を一家に持つ旧門閥貴族との接触。今ひとつは、エルウィン・ヨーゼフ二世の行方についてある噂を広げること。さらに、帝国に囚われているはずの人物を帝都から脱出させること。

応答は微かな嘲弄の波を帯びていた。

『替え玉を使おうというのか、愚かなことを』

「愚かではございません、猊下。お聴き下さい——我らが皇帝の誘拐を企てた理由をお考え下さい」

『帝国と同盟を更に深刻に憎悪し合わせ、一層の戦いを招くためと聞いた。そうして彼らを共倒れさせシリウス戦役以来の統治の枠組みを崩壊させる。そのためであろう。秩序の破壊と混乱は、民衆に精神的な抛り所を求めさせ、地球への回帰を求める動きをより加速する結果を招くであろうゆえ』

「要は、両国の間に更なる憎悪を植え付けられれば宜しいのです。亡命するのが真の皇帝であろうとそうでなかりと関係はございま

せん。両国政府の首脳が、それと信じること。皇帝を誘拐した真の犯人が同盟であると、帝国の政府が信じること。これでございます」  
『愚か者め、であれば最初から替え玉を立てれば良からう。帝都に於いてあのような騒ぎを起こす必要がいずこにあつたと申すか？』  
「帝都にて皇帝の誘拐が企てられた。この事実を事実として知らしめる。特に帝国政府の首脳と、さらには同盟の為政者どもにでございます。最初から身代わりを立てたのでは、両者の間に一層の憎悪をかき立てることは叶いません」

『――』

僅かな沈黙。ルビンスキーの言葉を総大主教が吟味し、その是非を判断する一瞬の空白。ルビンスキーの額にも冷たい汗が浮く。総大主教が彼の言葉を『非』と判断し、自治領主足らざる存在と断ずれば、彼の自治領主としての地位は一瞬に砂上の玉座に変わる。地球教徒の情報収集能力に加え、総大主教自身の情報分析と判断の能力は軽視しがたいレベルにある。評価を誤る愚を犯せば、代償はル

ビンスキー自身の生命となるに違いなかった。

『よからう、ルビンスキーよ。汝の願いを今一度、容れてやろう』  
数千光年を隔てた惑星からの声が、ルビンスキーに安堵の息をつかせたのは、かなりの時間を経て後だった。あるいはルビンスキーの錯覚だったかも知れないが、それでも数分以上の間があつたのは事実だった。

「有り難き幸せにございます、総大主教猥下」

『礼は無用と考えよ。ただ、今一度、訊く。そうして帝国と同盟を全面的に戦わせたとしても、フェザーンも汝も今の地位を保てまい。一時に難を逃れるとしても、そのままでは汝も永久に浮かび上がりはすまい。いかにして地位を取り戻すつもりか』

「既に帝国にも、同盟にも十分の手駒を確保しております。それぞれ、今直ちにでも、最高の地位にある人物に近づける立場の手駒にございます。彼を使うことで、どのような者がこの戦いに勝つにせよ、最後に地に立つ者は私となることでございましょう——」

ルビンスキーが幾つかの名を挙げて示すと、やがて胸郭の震えるような吐息に似た応答が返ってきた。

『ルビンスキー——』

「は——」

『再び地に立った時、総ての民をして地球を精神の支配者として仰ぎ見せしめる、それが汝に与えられた使命であることを忘れるな。忘れた時、汝には間違いなく死が訪れよう』

幾重にも鐘を撞き重なるような重々しい思考が、さしものルビンスキーにすら背に粟立つものを感じさせた。先代自治領主ワレンコフや、銀河帝国皇帝マンフレート二世だけではない。地球教徒の凶手がその身に及んだ支配者の数は、おそらくは片手では足りない。

ランデスヘル

フェザーン自治領主の地位を嗣いだものだけに与えられる、血塗られた銀河の裏面史である。

「恐れ入ります」

『今ひとつ——デグスヴィイがこと、心得ておるか？』

その固有氏名が、もう一度ルビンスキーの額に汗を浮かばせた。フエザーンの連絡役、あるいはルビンスキーの監視役として地球から送り込まれてきたデグスヴィ主教が最近になって失踪した。彼の現在の状況、誰がどのような目的で彼をその状況へ追い込んだのかについてはとくにルビンスキーの耳に達している。ルビンスキーの鼓動を数パーセントではあるが跳ね上がらせたものがあるとするば、総大主教が既にデグスヴィ主教の背教を知っていたことだった。裏の事情がどこまで知られているかは分からぬにしても、総大主教と地球教本部を侮るのは得策ではない。

「無論にございます」

『デグスヴィめは破門に処した。あの者にはなお伝わってはおらぬであろうがな』

総大主教の声は、可聴域ぎりぎりの低く重い余韻引いて、ルビンスキーの聴覚に轟いた。直接の声ではなく、総大主教の思念を音声に換えたに過ぎないと分かっているとお、ルビンスキーですら物理

的な圧力を感じずにはいられなかった。

「デグスヴィ主教の処置につきましては私が万全を期するでありましょう。総大主教猥下にはお心安くあられますように」

『ならば良い——汝も言ったとおりに、我らは最高権力者と呼ばれる者どもの身边にも容易に接し得る。だが、これは何も帝国と同盟に限ったことではない。よく心得よ。汝の生命は、汝の殊勝さのみが守るであろう』

コンソールのLEDが消え、通信の終了を告げた。思わず、ルビンスキーは大きく吐息をつく。知らず、額と背に冷たい汗を感じたが、その表情は直ぐに普段のルビンスキーの精悍で不遜なそれに戻った。

「フェザーンも汝も、今の地位を保てまい……か」

総大主教の言葉を反芻した口許が皮肉な微笑に歪んだ。総大主教は誤っていない。全人類を巻き込む時代の激変が、一人地球だけを埒外に放置することは有り得まい。いや、正確には放置させないと

言うべきだろう。あれほどの情報を手許に集め、分析の能力をも兼ね備えるかに見える総大主教、あるいは彼のスタッフが、我が身に関することには、分析も判断も正確さを欠いているのが笑止である。隙であると言うべきかも知れなかった。

思い、ルビンスキーは薄く笑う。鍛え上げられた白刃というより、厚重ねの剛刀めいた笑いだった。誰も彼もが、他の誰よりも先が見え、あらゆることを見越していると自負している。しかし、詰まるところは誰もが己の目の届く限りの未来図に向け、これまた独りよがりの思惑を思い描いているのに過ぎないのだ。帝国も、同盟も、地球教も……そして、おそらくはルビンスキー自身も。放縦に張り巡らされた無数の細い糸が絡み合い、捩れ合って、いつしか一本の紐となつて寄り合わされていくように、人の歴史とはそうして織り上げられていく。誰も、その織り目を予め読むことも、ましてや思うがままに意匠を凝らすことなど叶わない。人の身で歴史を我が手に握るなど、途方もない思い上がりに過ぎないのだ。

とは言え……ルビンスキーは笑う。敢えて歴史とは言わないが、権謀も策術も巡らせる面白みがあるというものではないか。誰かの……それが自分自身であつてさえ……描いた図面の通りに動き、彩られていく歴史の何が面白いといえるだろうか。

歴史と言ひ、社会と言ひ、その動きが予想の範囲を大きく超えた時、人は時に『奇跡』と呼び、あるいは『偶然』として片づけようとする。いかなる出来事にも人の思惑があり、自らの視野に限りがある以上、それを超えた他者の動きの結末までを予見することは叶わないことを十分に知るはずのルビンスキーでさえ、時に『偶然』を口にせざるを得なくなる瞬間がある。

八月半ばの朝、ルビンスキーの許にその知らせをもたらしたのはケッセルリンクである。

差し出された報告書を一瞥し、ルビンスキーは太い眉を大きく跳

ね上げた。滅多に見せない驚きの表情である。

「『ロシナンテ』がフェザンに着いた。それも客人を伴って、だと？ これはどういふことだ？」

フェザン船籍の『ロシナンテ』号が、実は亡命希望の密航客を最上客とする独立商人の船であることは、フェザンでも多くは知られていない。知られていれば、ボルテックとケッセルリンクが、『ロシナンテ』のボーメル船長に皇帝エルウィン・ヨーゼフ二世を帝都からフェザンへ護送する契約を依頼するはずもない。七月二〇日の帝国政府の発表により、運ぶべき先客を迎え入れることができず、『ロシナンテ』とフェザン自治領府との契約は自動的に破棄されたはず……ケッセルリンクは無論のこと、ルビンスキーですらそう考えていたのだ。無論、抜け目のないフェザン商人のボーメルであつてみれば、他の亡命希望者を代わりにフェザンに案内しているかも知れないが、その場合にはボーメルがケッセルリンクにコンタクトしてくるわけではないのである。

「今、確認を取らせていますが……客人は、幼児一名、男性二名と若い女性一名の四名。ボーメル船長からは、帝国軍の封鎖が長期にわたったために遅くなったが、契約通りの客を運んできたことと、早急な客人の引き取りを要請する連絡が入っています」

「偽物ではないのだな？」

ルビンスキーの念押しに、ケッセルリンクは否定の動作で応じた。「『ロシナnte』号は登録されている情報と完全に一致します。ボーメル船長他、乗組員の内、一〇名をチェックしましたが間違いないく本人です。それに、連絡に添付されたキーワードも、ボルテック弁務官から連絡のあったものと照合します。つまり、船と乗組員はほぼ間違いなく真物です」

若い補佐官が言外に含ませた意味を、ルビンスキーは正確に理解した。船と乗組員は真物。では、彼らの運んできた貨物はどうか。うか。

「ボーメル船長たちは、彼らが何を運んできたかは知りません。割

の良い貨物を上手く運んできたと思つてゐるでしょうし、事を荒立てる必要はないと考えますが、いかがでしょうか」

「そうだな」

ルビンスキーの判断も速かつた。

「では、荷の受け渡しに行つてきてくれるか、補佐官。荷の到着が遅れたのだからな、ボーメル船長には氣の毒だが、契約に従つて報酬は減額させてもらえ。荷が使えるものであつても、なかつてもだ」

「荷が使えるそうでない場合、私の判断で処分しても宜しいでしょうか」

「そうだな……いや、待て。取り敢えずは例の場所へ護送しろ。ここを急ぐ必要があるまい」

「分かりました」

一礼し、踵を返しかけるケツセルリンクをルビンスキーは呼び止めた。

「思い当たる節はあるか？」

「は——？」

ほんの一瞬、ケッセルリンクの端正な顔が歪む。ルビンスキー以外であれば見逃してしまうに違いないほんの僅かな表情の動きに、自治領主は部下に気取られぬほどの動きで頷いた。

「何のことでしょうか？」

「いや、何でもない。急いでくれ」

ケッセルリンクの背を見送り、ルビンスキーは小さく唸る。ケッセルリンクは上手く隠しているつもりだろうが、彼には何もかもが開かれた紙の上に描かれた絵のようにお見通しだった。ケッセルリンクがシュミットバウアー家と接触していた事実までは掴んでいなかったが、帝国貴族の消息にも通じるルビンスキーにとつては、その名を聞いただけで充分だった。ケッセルリンクはどこかでシュミットバウアー家に計画を知られたのだ。帝国政府ではなく、ゴールデンバウム王朝の血筋そのものにのみ絶対の忠誠を捧げるシュミットバウアー一党である。皇帝を誘拐し、利用する。そのような計画

を耳にすれば、阻止するか妨害するか、いずれにしても大人しく黙っているはずもない。

先の同盟領でのクーデター騒ぎに先んじて、帝国から同盟へ流れ込んだ、二億帝国マルクもの巨大な現金の動きも、当然ルビンスキーの視野には入っていた。

「さすがだな、ローエングラム公ラインハルト。金がなくば、動く者も動かんことをよく知っている。それにしても思い切りよく遣ってくれたものだ」

その時はその程度の印象に過ぎなかったのだが、送金の仲介をしたのがシュミットバウアー子爵夫人コルネリア・ゲルトルーデの夫ヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタールであったことは迂滑にも見逃していたのだ。フェザーンの巨大銀行が帝国と同盟間での送金の際、仲介者に支払う手数料は、銀行が受け取る送金手数料の三〇パーセント。国家のレベルから見れば誤差に近い金額だが、個人から見れば天文学的な金額だった。

送金を行つた北　星　銀行に照会したが、自治領主の権限をもつても、フェザン最大の銀行から情報を引き出すことはできなかった。が、それでもシュミットバウアー子爵夫人コルネリア・ゲルトルーデがフェザン亡命後に、夫の巨額の遺産を手にしたことは確実だった。ケッセルリンクが、これも迂滑にも皇帝誘拐の計画を知られてしまった当の相手が彼女であることを、ルビンスキーは確信していた。

「つまり……嫌がらせか」

嫌がらせというよりも明確な意思表示だろう。皇帝をフェザンの随使には委ねない。皇帝を物のように帝都から拉致し、フェザンの思惑の許に道具のように遣い捨てる。そんなことは決して許さない――

おそらくは、帝都で逼塞していた旧貴族の誰かを金で籠絡したのだろう。その子弟を皇帝の替え玉に仕立てて、フェザンへ送り込む。誘拐に成功したとして嬉々として迎え入れたフェザンの……

おそらくはケッセルリンクを、コルネリア・ゲルトルーデはメッセージを叩き付ける相手と想定し、彼が似ても似つかぬ相手を見出して仰天することをさえ、見通していたに違いない。

ルビンスキーの表情が皮肉な微笑に動く。であれば、自分は思いもかけず、シュミットバウアー子爵夫人コルネリア・ゲルトルーデの思惑通りに、ケッセルリンクを迎えにやってしまったということだ。ただ、ケッセルリンクが到着した客人が偽物であると既に知っていたことだけは想定外であつただろうが。

「いや……想定の内か。面白いことをしてくれる」

ならば、この『客人』の扱いはさらに注意を要する。迂滑な扱いをすれば、決定的な場面で彼らがとんでもない爆弾に変じることもあり得るというものではないか。例えば、同盟領へ亡命させ、公衆の面前に出たその瞬間に、この替え玉に『自分は皇帝ではない。ただの帝国貴族の子供だ』と暴露されたりしたら——それで一切が瓦解するというものでもないが、混乱の収拾には手を焼くことになる

だろうし、ルビンスキーの計画も大きく狂う。更には総大主教にこの事実を知られれば、計画どころかルビンスキーの地位と生命も保証の限りではなくなるに違いない。

では、ケッセルリンクの言うように『使えない荷』として『廃棄』すべきか……一瞬、脳裡に浮かんできた考えを、ルビンスキーは直ちに却下する。ケッセルリンクは軽く見ているが、相手はシュミットバウアーである。『廃棄』されるケースをも想定して、この替え玉を仕立てたと見るべきだろう。

「考え過ぎかもしれないが、考え足らぬよりは良からう」

いずれにしても、自分たちも『替え玉』を用意しようとしたのだ。シュミットバウアー子爵夫人がそれなりの人間を用意してくれたと言うのであれば、これは利用しないというのも不経済である。地球教徒の組織を通じて、帝都で適当な貴族を探させてはいるが、七月の事件以来、帝都の警備はルビンスキーの予想以上に急速に強化されていた。不可能ではないにしても、適当な候補者を得られるまで

にはまだ数ヶ月はかかると見なければならず、下手をすれば帝国軍のフェザーン侵攻が先になる恐れすらあった。

危険は承知の上である。しかし、シュミットバウアー家の最後の一人もヴァルハラへの門をくぐった。ルビンスキーともあろう者が、死者の立てた策を恐れて目前の駒を動かせぬというのでは笑止の限りである。ただし、保険はかけておく必要はあるだろう。

ルビンスキーは手を伸ばし、ウイジ・フオーン映話のボタンを弾く。

「私だ。同盟の弁務官事務所に連絡を入れ、ヘンスロー弁務官のスケジュールを確保してくれ——そうだ、自治領主府として弁務官とお話したい事項がある。ケッセルリンク補佐官が訪ねると伝えてくれ」

ランデスヘル

回線の向こう側で自治領主の命令を肯う声が応答する。ルビンスキーは一旦映話を切ると、今度は別の番号を打ち込んだ。

今回は回線が繋がるまでに若干のタイムラグがあった。回線がつか

がり、ルビンスキーが名乗ると、応答する声に驚きが混じり、要件を告げると今度はあからさまな拒否を示す調子に変わった。

「――間違えないで頂きたいな。これは相談でも依頼でもない。いつから君は、自治領主府からの命令を拒否できるようになったのかね？」

ルビンスキーの声に圧力的な響きが濃さを増した。映話のスクリーンに向こう側からの声は急速に抵抗を弱め、やがて啼くような声で応諾を示した。

「――では、宜しく頼む。期待させてもらうぞ。君に限って、私の期待を裏切るなどとは思っておらんからな」

ルビンスキーは立ち上がり、軽くこめかみを揉んでから唇の端を釣り上げた。胸裡に興奮がある。一国、いや三つの国を賭けたゲームがこれから始まる。

「さあて、勝ち残るのは誰だ？ 帝国か、同盟か、地球教か……それとも――」

ケッセルリンクが自治領主府に戻り、『ロシナンテ』から『客人』<sup>10</sup>を引き取り、とある場所に案内し終えたこと。ボーメル船長とは、所定の期日に遅れた分を賠償金として差し引いた上、報奨金を現金で支払ってきたこと。ボーメルが『遅れは自分の責任ではなく、遅れてきた客人たちの責任であると主張したことなどを告げたのは、その日の夕刻のことだった。ケッセルリンクは契約書の、『どのような事情にも拠らず、フェザーンへの到着が遅れた日数に対して別途定める比率に従って報奨金を差し引くものとする』との条項を指摘して、ボーメルの抗議を跳ね返したと言う。

「同行してきた女の方は帝都で雇った小間使いで、こちらはボーメル經由で報酬を支払う手はずになっています。まさか、ボーメルがピンハネすることもないでしょうし、そうしたところで知ったことではありません」

「ボーメル船長についてはそれでよい。無用に譲歩すれば、こちら

の足許を見られる。余程に重要な『荷』だったのだろうとな——で、その肝心の『荷』はどうだった？」

いつになく回りくどいケッセルリンクの口調で、すでにルビンスキーはその回答を察している。

しかし、ケッセルリンクの回答はルビンスキーの意表を突くものだった。

「使えます」

「使える？」

「使えますが、極めて扱いにくい『荷』です」

ご覧下さい——ケッセルリンクは、抱えてきた書類ケースから数葉の書類と立体写真を取り出して執務机に並べた。書類に目を走らせ、立体写真を凝視したルビンスキーの表情が微かに鋭くなった。

立体写真の主は、年齢の頃七、八歳に見える、黄色い髪と尖った顎、茶色の瞳をした少年……と言うにはまだかなり幼い印象を与える子供だった。

コンソールを操作し、公開されているエルウィン・ヨーゼフ二世の写真を表示させる。

「良く……似せたな」

事情を知らなければ真物のエルウィン・ヨーゼフ二世かと思まごうばかりに似ている。強いて言えば、ケッセルリンクがもたらした写真の方がやや顔の輪郭に柔らかさがあり、目の光や肌の色つやも良いように思われるが――

「ええ、よく似ています。私も一瞬、帝国が嘘の発表をしたのかと思ったほどでした」

珍しくケッセルリンクの声が本音を漏らしている。だが、この『少年』が真物のエルウィン・ヨーゼフ二世でないことを彼は知っていた。なぜなら――

「同行してきた二人ですが、ランズベルク伯でもシューマツハ大佐でもありません」

「――では、誰だ？」

「帝都のフェザーン弁務官事務所の三等書記官二名です。ボルテック弁務官の命令で、このガキ……いや、子供に付き添ってフェザーンへ戻るよう指示されたそうです」

「ボルテックが……か。なるほど、やってくれる」

一瞬、ボルテックがローエングラム公ラインハルトの指示、あるいは強請に従って、偽物の皇帝に部下を付き添わせた可能性に思いめぐらしたルビンスキーだったが、直ぐにその可能性を否定する。この期に及んでラインハルトがそのような策を弄する必要性はない。また、『替え玉』などを用意してフェザーンに送り込むというやり方が、あの金髪の孺子の性格に相応しくない。むしろ、シュミットバウアーの一族がボルテックを脅迫した、あるいは、あるいはボルテック自らがこの策に協力したと考える方が、何もかも辻褄が合う。

「補佐官、君にやってもらいたいことがある」

「はい……ですが、自治領主」

ランデスヘル

「何だ？」

「何故、この『荷』が使い難いか、その件を報告していません」

「——話してみるがいい」

一瞬躊躇い、ケッセルリンクはその一言を告げる。今度ははつきりとルビンスキーの表情が陰しくなり、それから、不意にその表情が哄笑に溶け崩れた。

「なるほど、そこまで徹底してくれるとは——な！」

「本人は自分がエルウィン・ヨーゼフ二世だと言い張っていますが……これは幾ら隠しても隠し切れません」

やはり闇から闇へ葬るべきではないか——ケッセルリンクが言外に匂わせた提案を、ルビンスキーはあっさり無視した。

「分かった——では、補佐官。今度は私の番だ。オヒギンズ記念医科大学にヤゾフという医者がある。彼を訪ねてくれ。要件はこれから話す。それが済んだら、レムシャイド伯だ。土産はヤゾフが渡してくれる手はずになっている」

ケッセルリンクは一瞬咂然としたように見えたが、直ぐに一切の表情を消した。

ランデスヘル

「では——自治領主、予定通りに進めると？」

「そうだ」

ルビンスキーは嘯くように応じる。鋼を剪ち切る口調が、執務室の天井に跳ね返って響いた。

「この程度で私が諦めるなどと思ってもらっては困る。この程度の、それも既にヴァルハラに住人となった人間が仕掛けた罠など、罠の名にすら値しない。いずれ、事実が明らかになったとしても、その時には、もうそんなことは問題にできる余裕など誰にもありはすまいよ」

「確かに……」

「レムシャイド伯にことの次第を伝えたら、次は同盟のヘンスロー弁務官だ。こちらは今週の内に済ませてくれ。早い方が良い」

「ヘンスローですか？」

ケッセルリンクは敬称を省略する。ルビンスキーは薄く笑い、非礼を咎めなかった。

「ああ、そうだ」

「ヘンスローにできるのは、精々同盟政府へのメッセンジャー・ボーイですが、どんな台詞を伝えさせるのですか？」

「今回のことでは同盟には道化になってもらわねばならん。同盟政府の上の方はまったく案じるには及ばないが、警戒すべき要素が皆無というわけではない。君にならわかるだろうが——」

僅かの沈黙を先行させ、ルビンスキーの意を了解したケッセルリンクは小さく頷いた。

「分かりました。お任せ願えますか？」

「任せよう」

ランデスヘル

「ありがとうございます、自治領主……ついだと申し上げては何ですが、帝国の例の男のことはいかか致しましょう。本人はあれで節度を保っているつもりでしょうが、ガイエスブルグの件が成功して

以来、増長の気配があまりにもあからさまです。ローエングラム公とて、いつまでも見過ごしには致しますまい。彼が捕縛され、背後関係を洗われるようなことになる、些か厄介です。そろそろ処理すべき時期と考えますが」

「あの男はまだ暫くは使える。汚れた駒でも、我々の動かせる駒であることには違いない。あと半年やそこらは有効に動いてもらう途を考えているし、処分するならその後だ」

命ずる側、命じられる側、ともに人ではなく物を語る口調が露骨なまでに酷薄だった。

「わかりました。では、いつでも例の書類が帝国の官憲に渡るよう手はずだけは整えておきます」

翌日、早朝に自宅を出たケッセルリンクは、オヒギンズ記念医科大学でのヤゾフ医師との短い面会の後、空港へ足を向けた。レムシ

ヤイド伯邸のあるイズマイル地区は首都から地上車では半日ほどの距離がある。

ケッセルリンクの訪問に、レムシヤイド伯は驚きと喜び、それに疑惑と困惑の緋い交ぜになった表情で出迎えた。

「これは補佐官、何か緊急を要することでも起きましたかな？」

開口一番、レムシヤイド伯の口から漏れた言葉が、ケッセルリンクの苦笑を誘った。彼が招じ入れられた応接間の窓からも、彼が空港から駆ってきたジェットヘリが見えていた。

「左様です。緊急の、しかも、重大なご報告をお持ちしました」

ややもつたいを付けたケッセルリンクの言葉に、レムシヤイド伯は色素の薄い目を一瞬眇めるようにして、それからはつとしたように見開いた。

「——ひょっとして、陛下のことが何か!？」

「ええ。ですから、御身辺をお騒がせすることを承知の上で、あのような手段を取りました。どうか、ご容赦願います」

「それは良い。卿がそのような手段を使つてでも私を訪れるべきだと判断されたのだ。それだけの意味のある知らせを携えてこられたのだと思うが……？」

頷き、ケッセルリンクは、『皇帝が無事にフェザーンへ到着し、現在自治領主府の保護の許に入っている』旨を告げた。

ケッセルリンクの報告が終わると、レムシャイド伯は呆然として補佐官を凝視し、しばらくは呼吸をすら忘れたように見えた。フェザーンのメディアは帝国・同盟の双方に開かれている。『皇帝誘拐』に関する帝国政府の発表はレムシャイド伯の耳にも繰り返し入っている。ケッセルリンクは何度もレムシャイド伯を訪れ、帝国政府の発表は事件の真相を取り繕うための欺瞞に過ぎないと説明してきた。実際には皇帝はフェザーンの手の許にあり、ただローエングラム公による厳戒体制のために帝国脱出が遅れているだけなのだ、と。

その証拠として、ケッセルリンクが挙げたのが、新無憂宮警備の責任者だったモルト中将の自決であり、ラインハルトによるエルウ

イン・ヨーゼフ二世の離宮幽閉であり、帝都で根強く囁かれている『皇帝替え玉』の噂だった。

フエザーンのメディアも商業ベースである以上、その報道のバランスは常に人々の関心の強さに左右される。事件以来、フエザーンにおいても『皇帝替え玉』に関する報道は日々にその量と頻度を増しつつある。背景には自治領主府からのそれとは異なる指囁があつたことも事実だが、ケッセルリンクにはそんなことを伯に話す気はさらさない。

「——し、しかし、帝国政府は……あの金髪の孺子は、皇帝陛下を奪回したと、そう発表しているが……」

「何度も申し上げておりますが、伯、ローエングラム公としてもむざむざ皇帝を奪われたなどとは公表できませんまい。事實は、エルウィン・ヨーゼフ二世陛下はこのフエザーンにおいでになっています。私も昨夜、お会いして参りました」

「な……んと……しかし、まさか——」

「万一のことに備え、恐れ多いことではありますが、このような手段で確認を取ってきた次第です。本来なら昨夜の内にお知らせに上がるべきところでしたが、この件で手間取ったがために、今朝になつてしまったという次第で、しかも、あのような無粋なお訪ねの仕方を含ねばなりませんでした」

携えてきた書類とメモリ・カードを差し出しながら、ケッセルリンクは注意深く、レムシャイド伯の反応を観察する。テールブルの上に置かれた古びた書類に視線を走らせ、レムシャイド伯は目を丸くした。

「こ——これは……」

「恐れながら、故マンフレート二世陛下のDNA情報を含む医療データ。それに、エルウィン・ヨーゼフ二世陛下のDNA情報との照合検査結果です。どうぞ、ご覧になって下さい」

「う……うむ……」

「帝都では恐れ多くも『皇帝陛下の替え玉』などという噂が立って

いると聞き及びます」

「それは……私も聞いた」

「ローエングラム公は切れ者です。そうした噂を敢えて流し、予め新無憂宮の御座所に皇帝陛下の影武者などを配置しておくなどという悪辣な手段を取るかも知れない。我々が案じたのもその点でありました。陛下ご本人と信じてお連れ申し上げた相手が、真つ赤な偽物では笑うに笑えませんか」

実際には『皇帝替え玉』の噂も、それにまつわる様々な流言飛語の類の大半も、ルビンスキーが密かに手を回して流しているに過ぎないことを、ケッセルリンクは知っていた。既に弁務官事務所をラインハルトに抑えられた今、ルビンスキーがどんな手段を使つて、そうした裏工作を進めているのか——ケッセルリンクは、とある場所に軟禁状態にしてある人物を思い浮かべた。地球教のデグスヴィイ司教は、まだ自治領主府と地球教の関係の総てをケッセルリンクに漏らすことを拒否してはいる。が、ルビンスキーが帝国と同盟双方

の社会の裏に張り巡らした地下茎の名が地球教であり、宗教組織に名を借りたサイオキシン麻薬ほかの非合法薬物の密売網であることは確実だった。

さらに——ラインハルトによるフェザーンへの懲罰出兵と、それにとりまが失脚が確実となつてさえ、ルビンスキーが復権に確信を持つ理由の一つが、地球教を介した両国政府首脳とのコンタクトに違ひなかつた。政治権力と宗教、および非合法薬物。この三つが相互に親密な関係を取り結んで来たことは、人類の長い歴史が語るところである。

「これは——!!」

ケッセルリンクの注視の中、レムシヤイド伯の表情が疑惑から驚き、動揺から遂に歓喜へと変化していく。唇の端に浮かんだ嘲笑を、ケッセルリンクはそれと気づかれぬ内にすばやく押し隠した。

「故マンフレート二世陛下との直接の血縁関係が存在しない確率は六八兆二三〇〇億分の一……と!？」

「つまりは、ほぼ間違はなくゴールデンバウム王朝のお血筋を引くお方だと言うことです」

「素晴らしい、実に素晴らしい。大神オーディンも照覧あれ、やはり正義はこの世にあったのだ！」

危うく吹き出しそうになった失笑を、ケッセルリンクは間一髪のところを抑え込んだ。マンフレート二世の医療データがオヒギンス記念医科大学に残されていたのは事実だ。『エルウィン・ヨーゼフ二世』のDNA情報照合を行ったのも事実だ。そう、ルビンスキーから『要請』を受けたヤゾフ医師の手によって。

実際——四八二年もののワインの用意を命じるレムシャイド伯に向かつては謹直な表情で恐縮して見せながら、ケッセルリンクの内心は嘲笑に満ちている。ゴールデンバウム王朝下の貴族は互に通婚し、皇帝の子女を内室、あるいは養子として迎え入れる例など珍しくもなかったはずだ。あの『荷』がいずれかの貴族の子弟であれば、第二七代のゴールデンバウム王朝皇帝との血縁関係は、あつて

当たり前ではないか。

ヤゾフ医師はその意味でほとんど嘘は書いていない。唯一『直接の』の一語を除いては。逆に言えば、その一言を記入することこそが、ルビンスキーからヤゾフへの依頼内容に他なるまい。

「——して、いつ陛下とお会いできるのだ？」

ワインのグラスを交わすと、レムシャイド伯は大きく身を乗り出した。

「一両日中には必ず……いいえ、そうですね、明後日の午後五時に、ホテル・シャングリ・ラにお越し下さい。できる限り一人で。私をご案内致します」

「有り難い。これで大帝陛下にもヴァルハラで申し開きができるというものだ。私が帝国の危難に、見て見ぬふりをして我が身一身の安全をのみ図ったわけではないことを」

事実そのままではないか——ケッセルリンクは内心にせせら笑う。本心からゴールデンバウム王朝お大事と思うなら、リップシュタツ

ト戦役の時にガイエスブルグへ駆けつけることもできたはずだ。何しろ、戦役初期、フェザーンからガイエスブルグに至る宙域は完全に貴族連合軍の制宙権下にあった。いや、その宙域がラインハルト軍の制圧下に入っただけなのは、キフォイザーでリッテンハイム侯がキルヒアイス上級大將に惨敗して後のことである。レムシャイド伯にその機会は幾らでもあった。しかし、伯はフェザーンを動かさなかった。彼が『我が身一身の安全をのみ図らなかつた』かどうかは、その事実を見れば自明というものではないか。

リップシユタツト戦役のことは措くにしても、今回にしてもレムシャイド伯が何をしたか。すべてをフェザーンに任せて、自分はこの居心地の良い亡命先でただ吉報をまつていただけだ。待っているものが死以外に何者もないと知っていて、なお敢えて帝都に向かつた貴族もいたというのに――

奇妙な感覚に、ケツセルリンクは苦笑して頭を振った。冗談ではない。こんなところで、あのくそ生意気な女を思い出すとは思わな

かった。馬鹿な女だ。どれほど皇帝に尽くしたところで、何の報酬があるわけでもなかっただろうし、第一、レムシヤイド伯にしたところでシュミットバウアー子爵夫人の名を覚えていのかどうかも怪しい。

シュミットバウアー子爵夫人の名を挙げ、その名に記憶があるかどうかを問うてみたい衝動を、ケッセルリンクは辛うじて振り捨てた。レムシヤイド伯に無用の警戒を起こさせるだけのことである。

「伯、まだことは最高の機密に属します。亡命政権の成立に向けて、どうしても自由惑星同盟の同意を取り付けねばなりません。今、秘密が漏れましたなら、何もかもが台無しになってしまいます」

「それは分かっている——ただ、フェザンとしては、どのように話を進める予定でいるのかだけは聞かせて貰えるだろうか」

「安んじてお任せ頂きますように。フェザン……と申しますか、フェザン自治領主府が自由惑星同盟の最高責任者と直接話を付ける手はずになっております。詳しいお話はできかねますが、共に口

ーエンegram公を敵とするという点で、必ず亡命政権と同盟は共通の利害を見いだせましよう」

「補佐官、その亡命政権だが――」

亡命政府という呼ばれ方は本意ではないから、正規の名称を早く取り決めておきたい。できれば、正式名称を『銀河帝国正統政府』としたいと言うレムシャイド伯の申し出が、ケッセルリンクに再び蔑如べつじょの思いを抱かせる。亡命政府は亡命政府だ、他にどういう呼び方があるというのか。呼び方を変えれば、それで何らの実質が得られると本気で信じているのだとすれば、この男もまた五〇〇年続いたゴールデンバウム王朝の皇帝と大貴族絶対の信仰の中で理性を摩滅させた一人に違いない。あからさまに言えば、レムシャイド伯がその程度の人物であると見切ったからこそ、ルビンスキーは彼を選んだに違いないのだ。

表面はあくまで謹直、かつ恭しく、ケッセルリンクは頷いて見せた。

「よい名前だと思います。自治領主にはその旨を申し伝えます」

亡命してきた皇帝に付き添っているはずのランズベルク伯アルフレット、およびレオポルド・シューマツハ元大佐の名を、ケッセルリンクは最後まで自らは口にしなかった。彼らは帰還していない。当たり前前のことで、彼らは皇帝の拉致に失敗し、ローエングラム公に捕縛される身となった。

もし、レムシャイド伯が彼らの安危に言及すれば、彼らが貴い犠牲となつて皇帝の帝国脱出を成功させたのだ——との作り話は、ケッセルリンクの脳裡に用意されていたのだが、レムシャイド伯は最大の功労者であるはずの彼らをすら、すでに視野の内から追い払つたのかも知れなかった。他者に恩を感じる意識の極度の希薄さは、帝国の大貴族の通弊である。『銀河帝国正統政府』首班としての地位、さらには皇帝を擁して帝国へ帰還して帝国宰相の座に着く。ケッセルリンクから見れば、愚者の夢に過ぎない野望が、伯の内心を占め切っているのかも知れなかったし、それはそれで構わなかった

レムシヤイド伯から『銀河帝国正統政府』の閣僚候補者名簿を土産代わりに受け取り、ケッセルリンクは首都に舞い戻った。ジェットヘリの上で、ルビンスキーに第一報を入れ、追加の指示を受け取ると、ヘリを今度は同盟弁務官事務所の入っているビルへのり・ポートへ下ろさせた。

在フエザン同盟弁務官のヘンスローにとって、ケッセルリンクの訪問は奇襲に近いものだった。まして、その要件が償還期限の切れた五〇〇億デイナーの同盟国債に対する即事償還の要請であったとすれば……である。フエザンに対する事実上の全権大使としての立場にもかかわらず、ヘンスローにとって意味があるのは地位に伴う報酬の金額と、弁務官としての権限だけだった。報酬と権限に伴う責任も、責任を果たすために必要な知識や情報の収集についても、ヘンスローにとっては完全に無縁のものとしか見えていな

かった。

「自治領主府にもすでにクレームとなっておりす。本来、直ちに償還をお願いすべきところでありすが――」

実際には五〇〇〇億デイナールどころではない。金融機関のみならず、フェザーンのあらゆる階層が購入した同盟国債で既に償還期限に達しつつあるものを合わせれば、優にその一〇倍から二〇倍に達しよう。

とは言え、ケッセルリンクが持ち出した『直ちの償還云々』は、この外交官もどきを混乱させ、狼狽させるためのはったり過ぎない。本来はそれだけの金額を、いきなりフェザーン・マルクの現金で償還しろと要求する必要はない。返せもしないものを返せと要求したところで、いたずらに混乱を招くだけで、ダメージはフェザーンに跳ね返ってくるだけのことだ。ケッセルリンクにとって意味があるのは、その程度の経済のイロハすら弁えていないヘンスローの無能さと、自らの無知を恥じもしない愚劣さだった。

五〇〇〇億ディナールという数字は、ケッセルリンクの目論見通りに見事にヘンスローの心臓を直撃した。輪郭にしまりのない顔が見る見る青ざめ、額に汗が噴き出してくるのを小気味良く眺めてから、ケッセルリンクはさらに止めの言葉を繰り出す。

「おや、ご存じではなかったと？ 困りましたね、同盟の弁務官ともあろう方が。前任者の方にも何度も早期の償還検討をお願いしていたのですが、その件は後任者と詰めて欲しいと言われておりましてね。何もお聞きになっていないと？」

「いや、つまり……その、一時にはとても……その……」

「一時にとは申ししておりませんよ、弁務官殿。しかし、これだけの金額です。同盟政府に償還計画の早期立案をご依頼頂いていないとすれば、これは弁務官としての重大な失態ではありませんか？」

「そ……それは……」

「場合により、弁務官ご自身に対して、責任追求の訴訟、あるいは同盟政府への告発をも検討せねばなりません」

ケッセルリンクはヘンスローが全身の水分を汗にして額から頬に吹き出させるのを、猫がネズミをいたぶる気分で観察する。生粋の官僚ですら、個人レベルの責任から逃れられない状況に追い込まれると、蛇に睨まれたカエルも同然に思考能力を失う。ましてや、ヘンスローのような男を窮地に追い込むことなど、ケッセルリンクにとっては児戯にも等しい。

「いかがですか？」

「いえ……あ……その……つまり……」

「無理と仰る？」

「は——どうしても、一時には……五〇〇〇億ディナールなどと言う巨額の償還は……」

わざと数十秒の沈黙で、既に頭の中を真っ白にさせているだろうヘンスローの顔色をさらに蒼白に追い込んでから、ケッセルリンクは不意に頷いて見せた。

「——分かりました」

「は——？」

「確かにこれは無理でした。同盟政府の財政能力を遙かに超えた要求であることは重々理解しております。自由惑星同盟は、我がフェザーンにとっては大切な盟友であり、取引先でもあります。我が自治領が正当な権利行使を控えておりますのは、偏に貴国に対する信頼と友情の証明である<sup>あかし</sup>とご理解下さい」

「か、感謝に耐えません……」

「——ただし……」

ケッセルリンクが吐き出した逆接の接続詞に、ヘンスローは再び顔を引きつらせる。完全にヘンスローが罠に陥ったことをケッセルリンクは確信した。嘲笑う思いで言葉を継ぐ。

「それも、貴国が安定した民主国家である限りにおいては、です」

「それは……我が国の政治的安定に、フェザーンが不安を抱いていると、そう解釈して宜しいのですか？」

「それ以外のことを申し上げているように聞こえますか」

ローエングラム公ラインハルトが同盟に対して和平の打診をする  
とすれば、フェザーン経由ではなく、イゼルローン経由を選ぶ可能性が著しく高い。理由は簡単だ。ラインハルトがフェザーンを信頼する謂われないが、イゼルローン要塞を指揮するヤン・ウェンリーは何度もラインハルトに戦場での苦杯を喫せしめた。逆説的に聞こえるかも知れないが、優れた軍人であるラインハルトの目には、戦場での強敵は戦場の外では信頼すべき交渉相手に映るに違いない。ケッセルリンクの前で脂汗を流しながら、顔色を赤から青、さらには土気色に変えている在フェザーン同盟弁務官。さらに、『歩く風船』とあだ名される駐在武官ヴィオラ大佐。対フェザーン外交と並んで、対帝国情報の収集と分析、同盟にとって命綱ともいふべき職務への関心に、日々の昼食後の飲み物よりも低レベルの優先順位しか与えていないような連中だ。ケッセルリンクが投げ与えてやっている、十分に操作され、同盟の為政者にとって好みの内容ばかり

となった情報の断片を嬉々として右から左に流しているだけの彼らに較べて、ヤン・ウェンリーは危険すぎる。

以前はそれほどでもなかったが、例のクーデター後、一度はクーデター派についていたはずのバグダッシュ中佐がヤン艦隊の情報収集・分析に一定の地位を占めるに至ってからは様子が変わっている。イゼルローンからは不定期に情報収集艦が帝国領に入っているし、特にイゼルローン要塞から同盟首都に送られる帝国情勢分析の精度が急速に上がっている。今年初め、イゼルローン回廊の帝国サイド出口近くの宙域で帝国軍のアイヘンドルフ分艦隊が、ヤン艦隊との遭遇戦を演じて敗退している。ヤン艦隊の新兵訓練中の不期遭遇戦として発表されているが、アッテンボロー分艦隊が帝国領の偵察と情報収集をその主任務としていたとしてもケッセルリンクは驚かない。

同盟のメデシアの一部は、帝国サイドを無用に刺激する軍事行動としてヤン提督を非難する動きを見せたが、ケッセルリンクから見

れば噴飯ものだった。イゼルローンは安全な後方基地ではない。常に敵国の状況を把握し、敵軍の動きを監視していなければ、不意を撃たれて狼狽するのは同盟サイドなのだ。惚けるほどにも平和な時期が続いていないにもかかわらず、同盟のメディアは早くも『平和惚け』し始めたとも言うべきだろうか。

ランデスヘル

自治領主ルビンスキーが、ヘンスローとの会見を急がせた理由がそこにあつた。同盟にあつて、少なくともヤン・ウェンリーは皇帝誘拐事件の真相を察している。更に都合の悪いことに、おそらくは自由惑星同盟にとって真に敵すべき相手が誰かという点も洞察している。つまり、ゴールデンバウム王朝の銀河帝国だ。

ローエングラム公ラインハルトが使者を送り、和平への打診を行えば、ヤン・ウェンリーは喜んで仲介の労を取るだろうし、『皇帝の亡命』などをすんなりと認めるはずもない。

「無論、現時点ではヤン・ウェンリーは一介の同盟の軍人というに過ぎない」

それがルビンスキーの結論に違いなかった。一介の軍人とはいえ、ヤン・ウエンリーの名は同盟に於いて高すぎる。皇帝の亡命から、レムシャイド伯のいわゆる『銀河帝国正統政府』の樹立は完全な秘密の水面下で遂行する。ヤンの出る幕はない。しかし、帝国からの和平の使者について、ヤンの影響力と発言力には無視し難いものがある。

ケンプ艦隊にアッテンボロー分艦隊の動きをリークする一方で、同盟の主要メディアを指嗾して、『無用に帝国を刺激し、軍事的な衝突を引き起こした』としてヤンを非難させた。いずれも背後で動いたのはフェザーン自治領主府である。自治領府の一員として、ケッセルリンクが同盟の主要メディアを嘲笑う権利があるかどうかについては異論の余地があると言うべきだろう。

「——例のアルテミス之首飾りですが、あの攻撃衛星一二個すべてを破壊する必要が果たしてあったでしょうか？」

「……そう言われて見れば」

「あれは、ヤン提督が後日ハイネセンを攻略する際の障害となるべきものを早めに排除した、その可能性を否定できますまい」

もはやケッセルリンクに糸を握られた操り人形宜しく、がくがくと頷くばかりのヘンスローに、我がことなれりとほくそ笑むと同時に、同盟政府の愚かしさに軽侮を禁じ得なかった。そうした政府首脳を無条件に信じ、『選挙』とやらで『民主的な自分たちの代表』を選んでいると信じ込んでいる、同盟市民の救いがたいまでの愚昧さに対しても――。

ひとえ

「偏に同盟政府に対する好意で申し上げるのですが、ちがうならちがうで、ヤン提督から直接弁明をお聴きになった方が宜しいかと思えます」

ヘンスロー弁務官が本国政府に対して緊急電を発信したのは、その日の内のことだった。曰く『ヤン提督に反政府クーデター企図の疑い有り』。傍受の報告に、ルビンスキーは無論のことケッセルリンクも一顧だにする必要性を認めなかった。彼らはこれから、『銀

河帝国正統政府』という砂上の楼閣を、同盟という名の砂浜に積み上げなければならなかった。ヘンスローごときが、ケッセルリンクの甘言に踊って同盟政府の足許にどのような穴を掘り開けようと、既に彼らの関心事ではあり得なかった。

☆☆☆

ランデスヘル

フエザーン自治領主ルビンスキーが皇帝エルウィン・ヨーゼフ二世の同盟への亡命と、レムシャイド伯ヨッフェンを首班とする『銀河帝国正統政府』の樹立に関する申し入れを行ったのは、七九八年の一〇月であるとされている。

後世、多くの史家たちの関心の焦点となり、さらに無数の小説家、あるいは二次創作者がテーマとして採用しているのが、なぜこの時期に同盟政府がエルウィン・ヨーゼフ二世の亡命を受け入れ、『銀河帝国正統政府』なる傀儡政権をでっち上げてまで、ローエングラム公ラインハルトによる新体制の帝国と正面からの対立の途を選ん

みち

だかという点である。

宇宙暦七九九年から数年間にわたって帝国と同盟双方の社会を巻き込んだ混乱によって関係者の多くがその途上で人生の中断を強いられたことと、特に同盟政府側の公文書の大半が故意と事故によって失われているため、このテーマに対して回答を出すのは容易ではない。

従つて、宇宙暦七九八年の九月末、同盟首都とフェザーン首都を結ぶ一本の超光速通信回線を介して行われた会談の内容を知ることには、『神の視点』を持たぬ限り不可能だった。回線は、同盟とフェザーンの、いかなる公的機関をも結ぶものではなく、通話に要する費用は甚だ不法な方法によって両国の政府機関のあつかう膨大な数字の中に紛れ込まされた。通話の記録さえも、通話を制御するシステムに故意、あるいは偶然によって作り込まれた狭間の中に取り落とされる仕組みだった。

『——直接にお話できて、はなはだ光栄です、最高評議会議長閣

下』

電子的な変調を経て、完全に声は変えられていたにしても、独特の抑揚と力感に富んだ口調は、何よりも明らかに声の主を語っていた。

国家の危急に際して権力者のみが利用可能な避難所や、秘密の口座、連絡網などは、国家という組織が成立して以来、一般市民、あるいは臣民の間で囁かれ続けた一種の『都市伝説』である。これらの伝説の多くは、根も葉もない、まさに伝説として笑殺され、あるいは公的には否定されて、その存在が証明されたことはない。この回線もまた、同盟とフェザーンの為政者の間で一致した利害関係の結果として設置された、いかなる公文書にも実在を記載されていない、言ってみれば伝説の存在だった。

居心地のよいソファに長身を沈めていた、もう一人の通話者は思わず、その端正な眉をつり上げ、そして唇の端をほんの少し上向きに反らせた。昨年のクーデター事件以来、彼の有力な支持者となっ

たとある組織から、この通話の希望を伝えられた時から、既に彼は相手の予想はついていた。

ハインセンとフェザーンの間には、両国の元首が直接に通話し合える『ホットライン』が設けてある。公式の場では、既に数え切れぬ回数、彼は『彼』と直接に語り合った経験があつた。少なくとも、口調と抑揚を聞き誤らぬ程度に、その声を聞き慣れるに十分なほどには。

ランデスヘル

「これは——意外ですな、自治領主。このような時間、このような場所、このような手段で、私と内密な用談をご希望とは……それとも、五〇〇億ディナールの国債の償還を是非にもという要求でしようかな。そうであつたとしても、同盟としては古くからの言い回しを借りてお答えするしかありません……無い袖は振れぬ、と」

『ご存じであつたと思いますが、我がフェザーンは現実をのみ見ます。同盟に袖どころか着るべき衣服すらろくに残っておらぬ事くらいは先刻承知の上です』

「ほう——？」

一度持ち上げかけたグラスを、トリューニヒトはテーブルの上に戻した。

「どうやら、アルコールを口にしつつお聴きできる内容ではないようですね？」

回線の向こうで、相手が微かに笑う気配が伝わってきた。

『ただのアルコールなどより、事実の方が遙かに人を酔わせる力を持つことだけは請け合ひましょう——同盟とフェザーン、あるいは帝国、つまり人類総ての命運を左右するような話……かも知れませんが。さて……この回線も無料でない以上、無駄話に時を費や

もと

すのは我がフェザーンのモットーにも悖ることであってみれば、評議会議長閣下にはお話をすぐにでも聞いて頂く必要がある』

ランデスヘル

ランデスヘル

「宜しいでしょう、自治領主。では、自治領主——」

相手が『評議会議長閣下』を連呼する意図を察したのかも知れな

い。トリユーニヒトもまた、『自治領主』の単語を繰り返した。

「お話とやらを伺いましょうか？」

『銀河帝国皇帝エルウィン・ヨーゼフ二世を自由惑星同盟へ亡命させる準備が整った。閣下には、皇帝の亡命を認め、併せて帝国貴族の亡命者を構成員とする『銀河帝国正統政府』……つまりは亡命政府の同盟に於ける樹立を認めて頂く』

「――!?」

政治、あるいは政治の名を借りた『取り引き』の場で、ヨブ・トリユーニヒトがこれまで対応に窮して絶句した例は、あったとしても極少だった。そして、この時はその稀少な事例に該当した。一瞬、あるいはそれ以上の時間、トリユーニヒトは応対の言葉を脳裡に繰る余裕すらなく、空白な表情のままソファの中で硬直していたのだから。

『――いかが、ですか、評議会議長閣下』

トリユーニヒトが驚きから我に返り、さらに耳にした言葉を吟味

して、自らの利害に及ぶ範囲を見積もり、計算する。その時間までを予め予測していたのだらう——ルビンスキーが通話を再開した時、トリューニヒトの表情から驚きは消え、露骨なほどの打算のそれに取りつて代わられていた。

「これは……これは……銀河帝国皇帝と銀河帝国正統政府ですと。

自治領主には冗談がお好きなようだ。我が国の成り立ちを、まさか自治領主にはご存じない、などということはありませんまいに」

『知つての上での提案であることくらいは、閣下にはお分かりのはずだと思つていますぞ。先刻の五〇〇〇億ディナールの国債の件は、まあ、瀬踏みとご了解して頂くとして、同盟が深刻な財政危機に陥つてゐることを、我がフェザーンは十分すぎるほど心得ているところですよ。何しろ、帝国と並んで、同盟はフェザーンにとって最も重要な投資先だ。万が一にも投資が焦げ付くようなことがあつてはならない。そのような政治的情勢を許すような事があれば、私は明日にも自治領主の地位を逐われるどころか、ただちに投獄の憂き目を

見るでしょう。それは些かご免蒙りたいですから。是非、同盟には今後も生き延びて、有望な投資先で会って頂きたいわけだ』

「それはご厚意ありがたいが……現実をしか見ないフェザーンであれば、銀河帝国皇帝を亡命させることで、どのようなメリットがあるか、お聞かせ願えぬ限りは、諾否をお答えできませんね」

トリューニヒトの応答に、ルビンスキーは数瞬の沈黙を置いた。

トリューニヒトが『メリット』と言った際、その受益者を敢えて省いたことにルビンスキーが気づかぬはずもなかった。トリューニヒトが、数千光年の距離を隔てて、回線の向こう側に立つ人物の気配を読むことができたならば、あるいは露骨なほどの嘲笑と、ある種の失望を感じ取ることができただろう。無論、トリューニヒトにそのような能力はなく、実際、彼以外の誰にも不可能なことだった。

『メリットは三つある。同盟のみならず、当然のことだがフェザーン、ひいては私個人にとっても大きなメリットを得られるが故に、この件について私自身が敢えて主体となって動いたものと心得られ

たい』

「三つ——？」

トリユーニヒトの、無数の選挙民を魅了する笑顔が、この時は誰もいない空間に向けられた。

『先ほど五〇〇〇億ディナールの国債を云々させて頂いたが、要するには同盟の財政は崩壊寸前ということだと、フェザーンでは了解されている。閣下がいかに同盟の市民に笑顔を振りまこうとも、財政の再建は笑顔でも口先でも解決の不可能な、現実でのできごとだということくらい、閣下もご承知でありましょうな』

トリユーニヒトの表情が微かに動く。浮かべたままだった微笑が、そうすると奇妙に歪み、コントラストの強い室内の照明の中、その端正な容貌を奇怪な仮面、あるいは古代の祭祀場を飾る陰惨な彫像を思わせる陰影で彩った。

「——それは、我が国内の内政事項ですぞ、自治領主」

『しかし、貴国の国債の多くは我が国が買い入れている以上、フェ

ザーンは同盟に対する債権者でもあります。債権者が、投資先の組織のトップに対して、有効な投資からの回収を要求するのは正当な権利に属する。賢明なる評議会議長閣下にはご理解頂けると信じているが……それよりもまず、私の提案をお聴き頂きたいが、いかなかな？」

「——これは失礼した。是非にもお聞かせ願いたい、自治領主のご提案とやらを……」

『今、フェザーンの多くの金融資本が、先の帝国に於ける内戦、いわゆるリップシュタット内戦で滅亡した帝国の大貴族たちから運用と管理を委ねられた膨大な資産を保有しています』

「——？」

『帝国……つまりローエングラム公ラインハルト元帥を中心とする現在の帝国政府は、これらの資産に対する所有権を主張し、フェザーンに対して全面的な返還を求めて来ている。今のところ、フェザーン、というか全フェザーンの統一した意思ではないが、基本的に

フェザーンの各金融資本は、帝国政府の要求には応じていない。ここで、閣下にご注意頂きたいのは、建前上、フェザーンは独立国ではない。あくまで帝国の一領域を、我が初代自治領主ラープが、皇帝からの特許状をもぎとって自治を確立したというにすぎないと言うことです。帝国が宗主権を盾に、これら資産の返還を強いた場合、フェザーンには法的には抵抗すべき術がないということ』

「後学までに、その資産の総額をお聞かせ願え……ますかな、自治領主」

魚が針にかかった——ルビンスキーは、あるいは内心で喝采したかもしれない。概算ですが……と前置きしてルビンスキーはある数字を並べる。トリューニヒトをしてさえ、十数秒の沈黙……欲と打算と、ある将来を仮定した場合に彼が獲得できるはずの賞賛と権力の交錯する未来図を描くだけの時間……を強いるに十分すぎるほどの巨大な数字。ルビンスキーが提示して見せたのは、エルウィン・ヨーゼフ二世の亡命と、それに伴う『銀河帝国正統政府』の樹

立と承認が、その数字をフェザーンにおける帳簿上のものではなく、同盟の財政での現実の数字に変え、かつその功績をトリユーニヒトに帰するための経済的なクロバットだった。

『無論、これらの資産の管理と運用はフェザーンの手に残して頂く。同盟は財政の再建を果たし、かつ閣下は危機に瀕した同盟の財政を立て直した史上最大の功労者としての名声と実績を得る——この功績は、アスターテ、アムリッツアでのヤン・ウェンリー提督の戦功をすら霞ませるに充分……ではありませんかな、閣下、これが私の言う、三つのメリットです。一方、我がフェザーンは帝国からの無償の貴族資産返還請求を拒否できる理由を得るわけだから、実質的な損失は何もない。その上、同盟が皇帝の亡命を受け入れることで、帝国との間にはなお軍事的な緊張が維持、と言うか軍事的にはより緊張度が高まる。これは、評議会議長たるあなたにとって好ましからざる政治情勢ではないはずですね』

「確かに……魅力的な提案ですね、自治領主。だが、まだ判断する

には早そうだ」

『ほう？』

「帝国がそれでおとなしく引き下がりますかね。一応、貴国からの情報では、帝国はまだしばらく国内の再建に手一杯だと言うことだが、私は文官なのですよ、自治領主」

『ふむ……？』

「軍人というものがいかに度し難く、目先の状況だけで暴走しがちかということをも骨の髄まで知り尽くしている。たとえば、アムリッツアへの無謀な出兵がそれだ。私はあの時期での帝国への侵攻など無理と信じていたが、結局、軍部に押し切られた」

回線が一瞬沈黙に陥る。トリューニヒトが察したか否かは別として、確かにルビンスキーの苦笑する気配があつた。裏の事実はともあれ、表面上、少なくとも同盟市民の信じている『真実』がトリューニヒトの言葉通りであることを、ルビンスキーもよく心得ている。同時に、帝国軍の『暴発』に際してトリューニヒトが何を真に案じ

ているか。その程度のことを察するのは、ルビンスキーにとつては掌を指すのとさして変わらない。

「その結果が現在の同盟の苦境だ。帝国軍が政府の掣肘を無視して、暴発しないという保証がない限り、ご提案はリスクが高すぎる。いかなる外交に際しても軍の暴走への対処は忘れてはならない、これが文官としての当然の心得でありましょうから」

『これは——評議会議長閣下の慧眼には恐れ入った。なるほど、保証ですか？』

「さよう、保証です。安全の……」

『では、今ひとつの提案をさせて頂こう。閣下のお求めになる保証に叶うかどうか、お聞き願えようか？』

「聞かせて頂きましょう」

声こそ変調されていたにしても、ルビンスキーの独特な抑揚を伴った声が数分にわたって室内の空気を震わせる。その声が一区切りした時、トリューニヒトの表情も一変していた。

『いかがでしようかな、閣下？』

「検討に値するご提案は頂いた、と考えます、自治領主。皇帝の亡命にとまなうメリットに関する点に於いては」

トリューニヒトが『保証』についての提案に触れなかったことに、ルビンスキーも気づいたが、不意に話題を切り替える。

『そう言えば、帝国軍は貴国に対して攻勢の準備を進めておるようですな』

「攻勢ですと？ これは異な事を仰る。フェザーンからの情報では、まだ向こう五年間は、帝国は内戦からの立ち直りで精一杯で、本格的な我が国への攻勢など到底不可能だということでしたか？」

相手がケツセルリンクであれば、ルビンスキーは相手のナイーブさに嘲笑と哄笑を併せ浴びせたに違いなかった。トリューニヒトは決して愚かでもなければ低脳でもない。したたかな政治的動物であり、タフな交渉相手であることを認めるにやぶさかではない。ゆえにこそ、あの役も立たないヘンスローとやらいう弁務官などを無視

して、直接のチャネルを敢えて使ったのだ。

だが、国内はともかく、トリューニヒトは帝国の国内情勢に関する情報ソースを持たない。トリューニヒトが無能なのではない。現在、同盟政府内部では『向こう五年間、帝国は国内再建で手一杯』との意見が主流である。これは、事実というよりも、自身が国内の再建で忙殺されている同盟政府官僚の願望に過ぎない。実際には、五年すれば同盟が立ち直れるという明確な見通しがあるわけではない。むしろ、五年すれば自分はこの件についての担当から離れていくだろうとする、官僚特有の責任逃れ、あるいは問題の先送りの結果だったとも言える。

にもかかわらず、一旦、担当者レベルで政策化されると、何段も設けられたチェックの機構は官僚同士の暗黙の了解の許に無効化され、これに反する情報は中間段階で握りつぶされる。政府官僚にも絶大な支配力を持つトリューニヒトと言えども、いや、支配力に自信があるからこそ、そこから上がってくる情報は、ある程度まで鵜

呑みにせざるを得ないのだ。結果として、彼の手許に達するのは、そうした願望のフィルタによつて濾し残された情報の残骸でしかない。

一方、フエザーンにとつて情報は生き残りのためには必須の武器である。自治領主府が官僚主義に陥つて情報を選び好みしようとしても、情報の選別能力は商人たちの方が遙かに高いのだ。彼ら商人に影響力を行使しようとするれば、自治領主府は極めて高い情報処理能力を要求される。質では商人たちには勝てない。情報戦での自治領主府の優位さがあるとすれば、情報の量と範囲、さらには分析力と情報自身に対する敏感さ。それらがルビンスキーの最大のカードであり、トリューニヒトが決して手にできない切り札でもある。

『攻勢にも色々あります。今回、帝国がもくろんでいるのでは、戦艦による攻勢ではない』

「軍事的な攻勢ではない——と？」

『さよう……』

ルビンスキーは嗤い、カードを投げつけた。

『平和的攻勢と言う奴です。あなたではなく、ヤン・ウエンリーを  
対手とした——評議会議長閣下としては、大いに興味をお持ちにな  
るべき話題かと思うが？』

## ギヤラルホルン・序曲

帝国暦四八八年、帝国ではリップシュタットの内戦が戦われ、同じく宇宙暦七九七年を迎えた自由惑星同盟では救国軍事会議によるクーデターが全土を混乱に巻き込んだ。全土を巻き込んだ騒乱の年が明け、両国は国内の情勢を一変させた混乱からの立ち直りに全力を注ぎ、つかの間の平穏な時を過ごしているかに見える。

一方で、この翌年から人類社会の総てを巻き込むことになる巨大な政治的・軍事的変動を前にして、確かに底流は大きく動き始めていた。フェザーンにおいては、皇帝エルウィン・ヨーゼフ二世……それが本物か偽物かは措くとして……の同盟への亡命という、政治的な曲芸、悪く言えば途方もない詐術が準備され、確実に同盟をその謀詐の腕の中に掻き込むとしていた。

帝国では、ローエングラム公ラインハルトによる独裁体制がほぼ

確立する一方、皇帝が一時的にとは言え誘拐され、さらに皇帝の居城たる新無憂宮の一部が爆破され、警備責任者のモルト中將が引責自決するという大事件に見舞われている。七歳の皇帝は間もなく身柄を確保され、その後、『病氣治療のため』として郊外の離宮にその居を移した旨が公表されたが、神聖不可侵の皇帝がとにかくも誘拐され、二週間近くに渡って行方不明になるという前代未聞の事件である。余波は大きく、帝国政府が繰り返し返した報道や声明にかかわらず、『皇帝がすり替えられた』とする囁きは、高くなりこそすれ、一向に治まる気配を見せなかった。無論、これは自然発生的なものではなく、後日判明したとおり、フェザーン自治領府の指示のもとに、帝国全土に地下茎を張り巡らしていたある組織が意図的にばらまき、広めた事実無根の噂にすぎなかったのだが――

一方で、ラインハルトにはそうした噂に拘泥する意思もなければ、必要性も認めなかった。彼は皇帝の代理人、あるいはすでに皇帝その人に成り代わる存在として帝国を導かなければならなかった。門

閥貴族を打倒し、ゴールデンバウム王朝の皇帝を相応しからぬ玉座から逐つて、姉アンネローゼを取り戻す。一〇歳の日に立てた誓いは、すでにほぼ果たされたと言つて良かったが、かれにはなお為すべきことがあつた。

「皇帝誘拐を指唆した罪を問い、フェザーンの自治権を剥奪して帝国に併呑する」

これは既に確定された方針であり、四八九年一月四日から一〇日までの一週間に実施された演習は帝国軍史上空前の規模のものとなつた。これは、キルヒアイス上級大將を査閲總監に、ロイエンタールとミッターマイヤーが実戦部隊を指揮、その麾下にビッテンフェルト、ワーレン、ミュラー、ケンプ、レンネンキャンプ、フアーレンハイトの六人の大將が参加、動員兵力は六個制式艦隊の基幹部隊三万余隻、兵員四一七万二三〇〇人余。演習であるにもかかわらず、一〇〇人余りの死者と負傷者・行方不明者数十名を算するという苛烈なものとなつた。

「かつての門閥貴族は復権を諦めていない。エルウィン・ヨーゼフ二世の誘拐を試みたのも、ゴールデンバウム王朝への忠誠の意思などによるものではない。彼らはただ、かつての不正を制度化した社会での富と特権とを取り戻したい、ただそれだけなのだ」

ラインハルトがことさらに煽動したわけではない。ラインハルトの治世下で、かつて宮廷と政府の忠実な伝言機関でしかなかった報道メディアはその制約を解かれ、積極的にかつての彼らの支配者への武器に抛らざる攻撃手段としての役割を務めるようになっていた。彼らは、『皇帝の替え玉』説ですら、その真相の究明や報道よりも、旧貴族系の『謀略』を証立てる材料としての利用を選択した。

「門閥貴族どもの残党を倒せ！ 奴らの復活を許すな、平民の権利を守れ」

「貴族どもの共犯者フェザーンを倒せ！」

前者は、今や『臣民』から『市民』へ変貌しようとしている一般平民の間から公然と叫ばれ、一方後者は事情の詳細を知る帝国政府

内部でわき起こった声だった。特に前者は短時間の内に爆発的な広がりを見せ、帝国全土で平民の青年達が帝国軍の徴募事務局に押しかけるという騒ぎまで引き起こしたほどである。

そうした中で、旧貴族に対する公的・私的の監視は日ごとに強化され、並行して内国安全保障局に対する密告・誣告の数も鰻登りとなった。

これら告発の処理を委ねられたのは内国安全保障局長ハイドリッヒ・ラングだった。既に、ラングの主導下に、フェザーンの北星銀行に開かれた秘密口座から、合計で数百万帝国マルクもの現金が、旧門閥貴族の末裔を初めとして、帝都内の有力者や中堅、および実務レベルの官僚に流れ込んでいることが突き止められていた。皇帝誘拐事件後もなお、彼らの多くが口座へのアクセスを許されており、百万帝国マルクを超える現金が引き出されていたのである。

直接の現金授受が確認された人物は合計で一〇〇〇人近くに上り、ラングからの報告を受けた司法当局が一斉逮捕に踏み切ったのは帝

国曆四八九年末のことである。政府要職者の中にも摘発者は少なくはなく、彼らの総てが公職の一次的剥奪の処分を受け、空席はローエングラム体制支持の意思を確認できる人物をもつて埋められつつある。オーベルシュタインの言葉で言うならば、帝国政府から旧王朝のDNAが次第に取り除かれ、ローエングラム体制の新たな血による入れ替えが急速に進んでいた。

加うるに、こうした告発の裏付け調査と直接・間接の捜査がラングの内国安全保障局にゆだねられることになった。ラインハルトは明らかに危惧を示したが、オーベルシュタインは『<sup>アー</sup>aには<sup>アー</sup>aの、<sup>ベ</sup>bには<sup>ベ</sup>bの使い道がある』として押し切った。

ロイエンタールは露骨に、キルヒアイスやミッターマイヤーは内心に、それぞれ危惧を抱きつつ、内国安全保障局長ハイドリツヒ・ラングの活躍ぶりを注視していたが、彼ら三人とてもこの時期のラングの動きには異論を挟み得なかった。

ラングは、積極的に憲兵総監部と司法省双方に情報を開示し、明らかに誣告に対しては誣告者への厳罰をもって望む一方、根拠ある告発を受けて検挙された旧貴族やその同情者に対しても公正な法の保護を与えることを躊躇わなかったのである。それどころか、ラインハルトは、ラングの文字通りの不眠不休の精励ぶりに対して、感状を与えるところにも、内国安全保障局の人員増加と権限の強化を認めたほどだった。

この時期、ラングの手によって反帝国・反ローエングラム、あるいは旧貴族派として摘発・処断を受けた者は、少なくとも一万人。一説には二万から三万に達すると言われている。『ローエングラム王朝、創業の暗黒』——ラインハルトによる独裁体制に、殊更に否定的な視点をとる史家たちが、帝国暦四八九年後半の一時期を指してそう名付けることになる所以である。

「反ローエングラム派掃滅の最前線に立ったのがハイドリッヒ・ラングである、ただそれだけの理由で、この時期のローエングラム体

制を否定するのは正しくない」

一方で、そう反論する声もある。確かにローエングラム公ラインハルトの支配体制はリップシュタットの戦勝で確立した。しかし、彼の支配が真の意味で帝国の末端にまで達し、その後の対フェザーン、および対自由惑星同盟の大規模な軍事行動を可能にするだけの支配基盤を鞏固なものとして完成させたのは、まさに『ローエングラム王朝、創業の暗黒』である——と。

「ゆえに、その生涯の結末が故に、ラングをして単なる佞臣、奸臣として切り捨てる立場は決して公正に歴史を評価する態度とは言えない。無論、ラングがどのような内心を胸裡にしつつ、この時期の徹底的な忠勤ぶりを示していたかは別である。しかし、それを忖度するのは文学の役目であり、史学が注目すべきは彼の為した結果のみである」

この指摘は一面の真実を含むものであり、事実、ラインハルト自身のみならず、キルヒアイスが主宰した『フラインブルベト恐るべき冬』作戦研究プ

ロジエクトも、オーベルシュタイン総参謀長が参画・主導する『賊軍財産整理委員会』、財政と民事を担当するカール・ブラツケ、オイゲン・リヒターに至るまでが、帝国内になおその残滓を残していた旧門閥貴族による実効支配力が、四八九年後半に至ってほぼ消滅したことを認めている。具体的には、作戦研究に際しての情報漏洩が激減するとともに、国内に隠匿されていた旧貴族の財産回収が急速に進む一方で、辺境宙域に至るまでの徴税システムが一举に健全化した。ブラツケの言葉を借りれば、『跳躍的に』帝国の財政状況が改善したということである。

フラインブルベト

帝国社会の抜本的再建と、『恐るべき冬』、およびそれに続くべき史上最大規模の軍事作戦に伴う膨大な財政支出が可能となったこと。これまで、ラインハルトに対してさえも前者の優先を譲らなかつたブラツケとリヒターも、ついにそれを認めるに至つたのである。こうして迎えた一二月。既定の方針となつていた和戦両略……フエザーンへの軍事的侵攻と、自由惑星同盟への和平攻勢の実施につ

いて、ラインハルトの手にはその実施の時期を定める、完全なフリーハンドのカードが握られていたのである。

ヒルダが、『大演習』から帝都に帰還したばかりのキルヒアイスから、突然の訪問を受けたのは、帝国暦四八九年も押し詰まった二月六日。帝国政府と軍首脳を招集しての戦略会議……対同盟、およびフェザーンの最終的な作戦発起が下命されるべき会議を二日後に控えた深夜のことだった。

「ご用があれば、こちらから出向きましたのに？」

聡明さでは人後に落ちないヒルダだが、この時はさすがに表情の選択にわずかな困惑を覚えずにはいらなかった。宰相府では帝国宰相付き首席秘書官であり、元帥府では幕僚総監代理の肩書きを帯びている。キルヒアイスの訪問を受けたのは、幕僚総監代理のオフィスで、宰相府のオフィスが秘書官補佐と数名のスタッフとの共用

であるのとは異なり、執務室とも言えるような個室である。いつものことだが、ラインハルトとの仕事が終わるのは、深更とは言わな  
いまでも決して早い時間ではない。彼女を除く他のスタッフは既に  
退出しており、キルヒアイスが副官も連れずに訪ねてくるのには些  
か相応しくない時刻とも言えた。

自らドアまで出迎えたヒルダに、キルヒアイスもまた当惑の色を  
隠せない様子だった。

「あ……ああ、そうでしたね。わたしのオフィスに来て頂いた方が  
良かったかも知れない」

「これからでも出向きますけれど？」

キルヒアイスが否定の身振りで答えるまでに数秒の間があり、そ  
れが再びヒルダを驚かせる。彼女の知る限り、キルヒアイスはライ  
ンハルトにも劣らぬほどに決断が早く正確である。キルヒアイスの  
副司令官であるベルゲングリューン中將が『戦場で逆上<sup>あ</sup>ったキルヒ  
アイス提督を見たことがない』と言っていたのをヒルダは覚えてい

た。そのキルヒアイスが数秒とはいえ、判断に迷うこととは一体……？

「いえ、ここでお話しした方が良さそうだ。お時間は取れますか、フロイライン？」

「ええ、今日の仕事はほとんど終わっていますし、あとは中を片づけて帰るだけになっていますから」

「長くは取らせません。わたしが訪問したことは、公式の記録に付けておいてください」

当然のことである。職務は完全に変更されているとは言え、幕僚総監と言え、かつては帝国軍に四人しかいなかった元帥の一人が勤めていたほどの要職なのだ。それに宰相首席秘書官は、帝国の最高権力者に最も近いスタッフと見做される。かてて加えて、ヒルダの父マリーンドルフ伯フランチも國務尚書への就任が内定している。第三者から見れば、マリーンドルフ伯爵令嬢ヒルデガルトは帝国の最高レベルの政治的決断を左右できる存在と映るに違いない。



そうした『政治的存在』が、これも帝国軍の指揮系統の頂点に脇侍する上級大將と非公式に会談などといった政治的事件を起こすべきではない。いずれ腹を探られることになるかも知れないが、公的な訪問として記録に残すべきだった。

ヒルダの人としてのおかしさがあるとすれば、深夜と言っている時間帯。妙齡の独身女性である彼女が、彼女一人を在席者とする彼女自身のオフィスに、彼女と同年代の、こちらも独身男性のキルヒアイスを迎え入れる。その点への第三者的な視点を完全に欠いていたことだった。マリーンドルフ伯が時々、冗談交じりに嘆くように『自分が女性であると言うことだけは忘れてまう』  
と言うことなのかも知れなかった。

無論、この時のヒルダの脳裡には前者の危惧はあっても、後者に関する懸念のかけらもない。そして、それはキルヒアイスも同じだった。

『要するにキルヒアイス提督の視野に恋愛対象の女性として映ずる

のは、グリューネワルト伯爵夫人だけだったのだ』

揶揄半分に評する史家が現れる所以だったし、それは半ば以上の真実だった。

日誌にキルヒアイスの訪問を記入してから、ヒルダは室内に飲み物の用意が一切ないことを思い出した。まったく使わないわけではないが、スタッフがいるわけでもなく、長時間を在席するわけでもない。必要があれば、第二副官室から適当にコーヒーなり、ミネラル・ウォーターなりを運んでもらっているのだ。

微笑つて飲み物の饗応を謝絶したキルヒアイスだったが、一転して表情が硬くなる。長身を座に沈めるなり、内ポケットから一通の封書を出した。

「読めと仰るのですか？」

「ええ。これが、今夜お訪ねした理由です」

封書を受け取る。既に開封済みであること、国立オーディン文理科大学医学部の紋章の印字された封筒であることに気づいた。

「これは――？」

問う視線を無言で跳ね返される。読めば分かると言うことらしい。封筒の中には数葉の、これは学生が使うようなレポート用紙だった。今時珍しく手書きだった。わざとなのか、活字体ではなく読み辛い筆記体を使っている。走り書き、あるいは時間を盗んで大急ぎで書いたのかも知れない。

幾らも読み進めない内にヒルダは自分の顔色が変わるのを感じた。ゆらゆらと足許が揺れ、やがて崩れたフロアに飲み込まれていくような、気味の悪い崩落感覚に全身を掴まれる。十分に空調の効いた室内なのに、肌に冷気を感じた。

「ドクトル・バウアーシュミット……ですわね？」

キルヒアイスは微かに顎を引く。必要最小限度の動作で肯定を示した。青い目が小さく動いて、最後まで読み進めるように促す。ヒルダはレポート用紙に視線を戻した。

漸く読み終わり、ヒルダは軽い目眩を覚えつつも、視線をキルヒ

アイスに転じる。感じの良い、赤毛を戴いたそのハンサムな容貌が、この時は硬く凍って見えた。

「いつ……ですか？」

「今日、ドクトル・バウアーシュミットに廊下で手渡されました。あとで読んでくれ、と言われて」

「キルヒアイス提督以外のどなたかが、この内容をご存じでしょうか？」

「いいえ。今は、他には写しもなく、いかなるシステムストレージの記憶域にも電子情報としては残していない。今のところは、その一通と、あとはドクトル・バウアーシュミットの頭の中にだけある情報だということです」

「ローエングラム公も？」

「ローエングラム公にも、まだ中身はお知らせしていません。一応、精密検査の結果は出てきていて、診断可能な範囲ではローエングラム公は完全な健康体であるというのが、文理科大学病院としての公

式所見として、明日にも元帥府に通知されるそうです」

「……でしたら、なぜ……」

小さく呻くように呟き、ヒルダはもう一度レポート用紙に目を落とした。

レポート用紙に記された内容は、バウアーシュミット医師によるラインハルトの精密検査結果に関する所見だった。

『現時点で公式に診断できるいかなる基準によっても、ローエングラム公は健康体であると結論づけざるを得ない』

書き出しは何の変哲もない診断所見だった。その一文の後に続く、逆接の接続詞さえなかったならば。

『しかし——』

ヒルダはもう一度目眩を覚えて額を押さえると、ブルー・グリーンの目を赤毛の若者に据えた。

「ローエングラム公に再検査をお受け頂くおつもりですか。そのために、わたしからも説得して欲しいと？」

「可能だと思われますか、フロイライン。今の時期、ラインハルトさまに……」

言葉は穏やかだったが、ラインハルトをその名で呼んだことで、ヒルダはキルヒアイスの動揺を察した。

しばし、考えに沈み込み、ヒルダはゆっくりとかぶりを振る。今の時期、帝国がフェザーンと自由惑星同盟に対して本格的な行動を起こそうとしている今の時期。その時期に、ラインハルト……帝国の最高権力者にして独裁者に、健康上の理由から精密検査の再検査を受けさせる。オーディン文理科大学病院は、帝国の医学界でも最高の権威だ。前回の検査も、簡易化されていたとはいえ大学病院としては可能な限りのレベルでの精密検査であったはず。その検査ですら確認ができず、さらなる精密検査を要するような疾病にラインハルトが冒されているかも知れないなどと内外に知れたなら……

ヒルダをして顔色を変えさせ、おそらくはキルヒアイスを困惑の淵に突き落としたバウアーシュミット医師の診断は、まさにその点

だった。

断言はできない。確率から言えば、ゼロではないという程度に過ぎないが——バウアーシュミットの書簡はそう前提した上で、ある可能性を告げるものだった。これまでの研究の中で、バウアーシュミット医師は、極めて稀な症例しか収集されていないものの、激烈な症状を示すある種の疾病の存在に気づいている。

「ローエングラム公が……？」

ラインハルトがその症例に当たる、とはバウアーシュミット医師は書いていない。医師の表現をそのまま借りれば、『確率から言えばゼロではない。行きずりに買った宝くじが一等賞に当選している確率の方がまだ高いかも知れない』というものだった。

余りにも症例が稀少すぎることと、一応はバウアーシュミット医師の専門分野に分類されてはいるものの、それすら症例に気づいているのが帝国内でも彼だけであることから、これまで何度か提出した正規の研究費申請は総て却下されて来たという。ゆえに、この疾

病が遺伝性を持つのか、ウイルスや細菌に拠るものなのか、それともまったく別の原因を持つものなのかすら分かっていない。分かっているのは、この病が多発性血管炎を起こし、それが複数の臓器に対する炎症を引き起こすこと。炎症が間歇的に、徐々にその間隔を狭めながら繰り返して発症し、ついには全身性の激烈な血管炎と内臓炎にまで進行した結果、患者の生命をほぼ一〇〇パーセントの確率で奪うと推測されていることだけだった。

さらにバウアーシユミットは書いていた。

『万一、万々一にもローエングラム公がこの症例に該当するとしても、再検査でそれと確定することは不可能であると考えられる』つまり、ラインハルトに再検査を受診させる機会を得られたとしても、結局は同じ結果しか得られない。バウアーシユミットの主張するところはそれだった。その上で、彼はキルヒアイスにある要請を提示してきていた。

グリューネワルト伯爵夫人アンネローゼに、ラインハルトが受け

たのと同じ検査を受診してもらいたい。これが一点目であり、今ひとつはこの未知の疾病に対する本格的な研究を立ち上げるために、何らかの形で研究予算を認めてもらいたいというものだった。

「これは……」

ヒルダは、アンネローゼ自身から、彼女とキルヒアイスとの間にあったことのすべてを報されていた。それゆえに、キルヒアイスが、彼にしてあり得ないほどの迷いの表情を露わにした理由を察せずにはいられなかった。ことが現在の帝国の最高権力者の健康に関わる問題だということではない。他ならぬラインハルト、彼の親友であり、半身であり、今現在の彼の存在理由の総て……無論、アンネローゼを併せてのことだが……の生命に関わるかも知れない問題だったからだ。

万一、万々が一にでも、ラインハルトが実際にこの未知ともいふべき病に冒されているとすれば、今、バウアーシュミット医師からの依頼を却下することは、ラインハルトの生命を救う機会を我自ら

手放す愚行を犯すことになる。

だが――

「アンネローゼさまに公式に受診頂くのは困難だと思いますし、ローエングラム公にそうしたご命令を出して頂くのも難しいでしょう」

ヒルダが最初に応答したのがその言葉だった。

「その通りだと思います」

ことは、ラインハルト個人の健康問題ではなく政治に属するからだ。秤にかけられるのは、帝国の最高権力者の健康と、嫌な言い方だが『先帝の寵姫』に対する処遇ということになる。前者に対する影響度が極めて低い以上、後者に何らかの変更を与える必然性を、オーベルシュタインたちが認めるはずもない

可能性がゼロではないレベルと聞いた時点で、医師の意見具申など握りつぶすに違いない。アンネローゼへの件についても却下以外の判断はあり得ない。宝くじに当たる程度の極少の可能性の、さら

に幾つかの選択肢の一つを潰すため、ただそれだけの理由で、アンネローゼに対する『幽閉』措置に例外を作るなど、到底考えられない、と。それであれば、戦場で『ブリュンヒルト』が直撃弾を浴びる確率の方が遙かに高いだろうし、あるいは、ガイエスブルグの時のように、暗殺者の手がその身辺に伸びてくる可能性の方がさらに有り得べき事態であり、そうした事態への対処検討が優先されるべきだと。

ヒルダ自身、政治レベルでことを判断するなら、オーベルシュタインの考えを支持せざるを得ない。キルヒアイスがラインハルト自身に諮っても、ラインハルトから返ってくる答えは同じだろう。もつと言え、アンネローゼに直接事情を説明してみても、アンネローゼが首を縦に振る可能性は低い。アンネローゼは自身を徹底的に

ラインハルト

非政治化させることで、弟やキルヒアイスの立場を守ろうとしてきた。彼女が、その立ち位置を、ラインハルトの命に対するあからさますぎる違反を犯してまで変えようとは、ヒルダにも思われな

かったのだ。

ラインハルトは優れた軍人であり、為政者である。彼が最も嫌うのは不正さであり、公私の混同だった。ゴールデンバウム王朝の歴代皇帝の内、私的な好みで政治を差配し、臣僚を登用・罷免した者の多くが、最終的には帝国を疲弊のどん底にたたき込む暗君となり、あるいは深紅の天蓋で覆い尽くす暴君と化した。ローエングラム元帥府に属する者にとつて常識以前の知識である。それゆえ、ラインハルトもまたオーベルシュタインの判断を良しとするに違いない。ヒルダとしても、そう結論づける意外に選択の余地はなかった。ヒルダが、最初の一言の後、再び沈黙を守ったのは簡単な理由からだった。彼女がわざわざ語る必要などない。彼女が自らの考えを開陳するまでもなく、この聡明で識見に富んだ青年なら、バウアーシュミットの書簡を読んだ時点でヒルダと同じ結論に達していたに違いないのだから。それでも、敢えて訪ねて来ずにいらなかったキルヒアイスの想いを、ヒルダは正確に理解できた。公的、政治的

に途を塞がれているのであれば、個人として私人としての途を探れないか。ラインハルトのことについて、キルヒアイスがそうした相談をできる相手は、かつてはアンネローゼ一人だったのだろうし、今はアンネローゼも彼の傍らにはいないのだ。

そう考え、ヒルダはある危惧に突き当たった。一瞬、口にするのを迷ってから、真っ直ぐに青い目を見つめた。強すぎるブルー・グリーンの視線に、キルヒアイスの両目が戸惑ったように何度も瞬いた。数百万帝国マルクの単位だが、キルヒアイスにも帝国軍副司令長官としての機密費が割り当てられていることを、ヒルダは知っている。彼女の考えが正しければ、キルヒアイスがやろうとしていることは危険すぎた。軍事的には不敗の驍将たるキルヒアイスだが、政治的には二二歳の若造でしかない。ヒルダの脳裡を様々な考えが、もの凄い勢いで流れ過ぎ、そして一点で停まった。

「キルヒアイス提督、帝国軍副司令長官としての機密費を流用しようとなさっていませんか？ ローエングラム公にも無断で」

ヒルダは危惧が推測ではなく事実だったことを知った。本当に滅多に見られない狼狽と驚きの緋い交ぜになった表情。それが確かにキルヒアイスの面上を過ぎったのだ。

「フロイラインには嘘を吐けませんね。そんなことまでお話しするつもりではなかったのですが——」

「それでドクトル・バウアーシュミットが首尾良く研究を完成できれば良し。ローエングラム公がそんな病気ではいらつしやらなかったらそれも良い。万一の時は、ドクトルの研究が完成していなくとも、何らかの保険にはなる。もし、無断の機密費流用が明らかになつてしまった場合は、キルヒアイス提督個人が責任を負えば、それで済む。そうですね？」

「それでラインハルトさま……いえ、ローエングラム公。それにアンネローゼさ……グリューネワルト伯爵夫人の健康が確保できるのであれば、わたしの立場など安いものです——」

キルヒアイスが右手を差し出す。察して、ヒルダはバウアーシュ

ミット医師からの書簡をその掌に載せた。内ポケットに封書を仕舞い込んだキルヒアイスは、軽く頷いて立ち上がった。

「機密費云々のことは忘れてください、フロイライン。あなたに迷惑がかかります。本当はお訪ねすべきではなかったと思いますが、フロイラインにだけはローエングラム公の身の上に関わることを隠しておきたくなかったです」

バウアーシユミット医師の、宝くじの一等賞に当たるよりも低い可能性が現実のものとなった時、ラインハルト個人に対して意を尽くしてくれる一人になって欲しい。最初の内、おそらくはヒルダのオフィスのドアをノックした時まではキルヒアイス自身、自らがなぜヒルダを訪なおうとしているのか曖昧なままだったのだろうけれども、それが今のキルヒアイスの意思に違いなかった。

頷き、ヒルダは暖めていた考えを口にした。キルヒアイスが敢えて採ろうとしている、危険すぎる選択肢を免れさせるにはこれしかない。

「バウアーシュミット医師の研究予算の件ですが、父と相談してみます」

「それは――」

一瞬目を瞠り、それからキルヒアイスはヒルダの意図を悟ったらしく頷いた。リップシュタット後の様々な制約を受けるようになったとは言え、マリーンドルフ伯爵家はかつての大貴族の一員であり、マリーンドルフ星系を領有するだけでなく隣接するカストロプ星系とキンメル子爵家の財産をも管理する立場にある。動かせる資産の大きさから言えば、上級大将の機密費の比ではないのも事実だ。マリーンドルフ伯が、資産の投資先として未知の疾病研究を選ぶのは、伯爵家の私的な活動であり、公的な咎めを受ける謂われはない。表向きには――

「――それと、グリューネワルト伯爵夫人は近い内にもう一度お訪ねする予定ですから、その時に、ドクトル・バウアーシュミットからの要望はお伝えてするだけはおきます。あとは、伯爵夫人ご

自身のご判断と言うことになると思いますから」

「ありがとうございます、フロイライン」

キルヒアイスは深く頷いた。目を上げた時、その青い目が浮かべていた色は単純な感謝のそれだけではなかったし、察し得ないほどヒルダも感性を鈍磨させてはいなかった。

「いいえ。ローエングラム公の御為、ひいては帝国の未来のためですから」

ヒルダが、敢えて公的なテーマに話を振ったのは、それ以上、会話を続けることへの警告だった。キルヒアイスが訪れてから既に二〇分余りが経過している。これ以上、音声記録も取らない『公的な』会談を続けるのは危険すぎた。ヒルダにとっても、キルヒアイスにとっても。

ヒルダには分かっていた。父マリーンドルフ伯にバウアーシュミット医師への出資を依頼するとしても、ある程度まではあの書簡の内容は話さざるを得ない。自分もそうだが、父もまた、極秘に類す

る事項を弁えた上で平然と振る舞えるほどの政治的器用さを誇れる  
ひととなり

為人ではない以上、慎重の上にも慎重さが必要だった。

オーベルシュタインの冷然たる視線、左に氷、右に鋼の皮肉な微笑を浮かべるロイエンタール、何人かの顔を思い出しながら、ヒルダは軽く首を回した。今夜のキルヒアイス提督との会談内容……どう記録すべきか、もう少し時間を取る必要がありそうなのは否定できない事実だった。

一二月八日に行われた会議の詳細は正史の記すとおりである。会議に参集したのは、ラインハルトを初めとして、キルヒアイス、ロイエンタール、ミッターマイヤー、そしてオーベルシュタインの四名の上級大将。これにシュトライト少将とリュッケ大尉、幕僚総監代理と宰相首席秘書官としてマリィンドルフ伯爵令嬢、帝国政府を代表する形で國務尚書代理マリィンドルフ伯爵、財務尚書カール・

ブラツケ、まだ制式にその部署は設けられてはいないにしても、近未来に於ける民部尚書オイゲン・リヒターが加わった。

実戦部隊からは一名の大将、ミュラー、ビッテンフェルト、ケンプ、ワーレン、ルッツ、シュタインメッツ、レンネンカンプ、アイゼナツハ、メックリンガー、およびウルリッヒ・ケスラーが列席。これにラインハルトの親衛隊長であるギュンター・キスリング大佐が陪席し、出席者は二三名。帝国政府と軍の首脳すべてを一堂に会せしめたと称してさしつかえなかった。

席上、ラインハルトはキルヒアイスを正使、ルッツとレンネンカンプを副使に任じ、自由惑星同盟への『平和攻勢』の第一波としてイゼルローン要塞へ発せしめる旨を宣言した。

「自由惑星同盟はおそらく、この申し出を拒否する。彼らの拒否が公然のものとなった瞬間に、わたしは同盟への宣戦を布告する。同時に、イゼルローン要塞に向けての攻撃を開始する——ロイエンタール……」

主君の指名に応じて立ち上がった金銀妖瞳の美丈夫に、ラインハルトは蒼い劔を思わせる視線を閃かせた。

「卿は『霜』フロスト集団を隷下に入れよ」  
フロスト グリユツペ

「『霜』集団とは、ガイエスブルグ機動要塞と同要塞に駐留する制式一個艦隊を意味する。ロイエンタールの金銀妖瞳が微かに訝しげな色を浮かべたが、直ぐに納得に取って代わった。

「キルヒアイス上級大将に同行させるのでありますな？」

「そうだ。ガイエスブルグには卿の『雪』シュネー集団を随伴させ、イゼルローン回廊の手前で停止させよ。キルヒアイス上級大将ほかを回廊へ送り出したあと、その宙域で待機せよ」

「御意」

「同盟の和平拒否が平和裏に行われるとは限らぬ。その場合は、使者の収容に意を尽くせ。イゼルローン要塞への攻撃開始は卿の判断に委ねる。ただし、攻撃を担務するのは『雪』シュネー集団のみとする」

ロイエンタールは大きく頷く。陽動であることは分かっていたが、いずれにしても先陣は先陣である。

「なお、ルッツ、レンネンカンプの両名はそのまま『雪』シュネーでロイエンタールの指揮系統下に入り、要塞攻撃に参加せよ」

「御意！」

ラインハルトは視線を動かし、別の部下を視野に入れた。

「ケンプ、それにミュラー。卿らは『雪』シュネー集団の後方に待機し、

イゼルローン要塞への攻撃開始と共に『霜』フロスト集団を再度、卿らの指揮下に入れよ」

「御意……」

「キルヒアイス、卿は『霜』フロスト集団とともに、イゼルローン回廊方面を離れよ。向かう先は——」

ラインハルトが一瞬言葉を切り、会議室内に静寂が満ちた。誰もが、その後に続く言葉を予想し、おそらくは銀河の歴史を変えるこ

とになるであろう瞬間を聞き漏らすまいとしているかのようだった。意識してではないのだろう、ラインハルトの面上に優しいほどの微笑が浮かび、その言葉を紡ぎ出した。

「フェザーン回廊だ」

再びどよめき。

「ミッターマイヤー！」

どよめきを圧して、ラインハルトの声が飛ぶ。ミッターマイヤーが立ち上がり、均整の取れた体軀を深く折り曲げた。

シュートルメン  
グリユツペ

「卿は『嵐』集団を指揮、ロイエンタールからの増援要請を待ってイゼルローン回廊方面へ進発する。その準備を整えよ。本来はわたしの直率であるべきだが、今次作戦では時間が重要だ。卿は『嵐』集団の主力を以てフェザーン回廊、およびフェザーン宙域の制宙権確保、および惑星フェザーンの自治領主府と統治システムの制圧をその任として与える。疾風ウォルフの指揮する『嵐』集団、

ウォルフ・デア・シュートルム

その疾風ぶりを見せてもらおう」

ラインハルトの言葉に、ミッターマイヤーは顔を上げ会心の微笑を浮かべる。

「御意！」

「わたしは直属の艦隊、およびキルヒアイス上級大将の艦隊と共に  
シュトールメン

『嵐』集団と行を共にするが、途上、キルヒアイス上級大将と  
フロスト

『霜』集団の合流を待つてから、  
シュトールメン『嵐』集団に後続する」

ラインハルトは笑顔になる。キルヒアイスやアンネローゼに見せるような邪心のない、透き通った微笑ではない。鋭気に満ち、覇気のオーラをまとった、先鋭な野心家の笑いだった。ロイエンタールの指揮下にイゼルローン要塞を攻囲するのが三個艦隊約五万隻。ミッターマイヤーに従い、フェザーン回廊になだれ込む七個艦隊に、ラインハルトとキルヒアイスの直属艦隊が引き続き、さらにガイエスブルグ機動要塞とケンプ、ミュラー艦隊が全部隊の後衛を守るこ

とになる。動員兵力一四個制式艦隊。兵力にして、三〇〇〇万を上回る、空前の大動員。一昨年、自由惑星同盟が企てた帝国領侵攻作戦でさえ、その動員兵力は八個制式艦隊約一〇万隻に留まる。

笑顔を収めると、ラインハルトは片手を上げて合図した。キスリングが敬礼で応じて一度室外へ姿を消す。戻ってきた時、既に一同にも馴染みの深い一人の男性を伴ってきた。

「改めて紹介の要もあるまいが、ミッターマイヤー、ヘル・ニコラス・ボルテックには卿に同行してもらう。フェザン回廊へ、さらにはフェザン宙域への水先案内人として、だ。無論、案内料が無償というわけにはいかないが」

参集した誰もが特に驚きは示さなかった。ボルテックの変節と帝国、正確にはローエングラム陣営への寝返りは既に彼らにとつては周知の事実だったし、ボルテックが何を売り、帝国が何を買ったかも機密ではあっても秘密ではなかった。

「懸念ありとすれば、皇帝の誘拐事件からかなり時を経ているとい

うことです。才覚豊富なフェザーン人を無条件で信じるというリスクは措くとしても、です」

礼儀正しい無礼さでボルテックを見つめながら、ロイエンタールが意見を口にした。

「ヘル・ボルテックはどう言われるか知りませんが、大多数のフェザーン人がヘル・ボルテックと意見を同じくするとは小官には思われません。いざ、回廊に入ってみたはいいが、フェザーン人に回廊を封鎖され、突破に時を浪費してしまう恐れもあります。また、一度はフェザーンを制圧したとしても、回廊宙域を帝国側・同盟側双方から封じられれば、我が軍はフェザーンに孤立する羽目になる」

「その時は我が軍の武力を以て封鎖を突破すればいい。フェザーン

は金を持っているが、軍事力は大したことはない。『嵐』シュトルメン『集団

の兵力……いや、我が黒色槍騎兵艦隊だけでも突破に何日もかかるなどとは考えられないぞ」

「卿の意見ももつともだ、ビッテンフェルト提督」

ロイエンタールの声には、僚友の単純さへの揶揄、あるいはその短截さへのかすかな羨望が含まれていたかも知れない。

「ことはフェザーンだけではない。時を費やせば、我が軍の動きは同盟にも知れるだろう。フェザーン回廊の我が軍による制圧は、同盟にとつても国家存亡の危機に繋る。それに、同盟としてもフェザーンに恩を売りたいだろう。フェザーン回廊の帝国側宙域で同盟軍艦隊と遭遇戦ともなれば、こちらは兵力の優勢を生かせず、同盟はフェザーンからの補給を期待できる。難戦になるぞ」

「ゆえに卿が動くのだ、ロイエンタール」

ラインハルトの声には、ロイエンタールたちの議論を歓迎する響きがあった。本質的に戦場での駆け引きを好むラインハルトである。戦略・戦術上の議論は、それがどのような場であれ、拒絶よりも受容の方向に心が動くのだ。

「御意であります、小官が対手とすべきはヤン・ウェンリーです。

フェザーン商人の商魂ではありません」

ボルテックが裏切っている。七月の皇帝誘拐事件からすでに半年近い。その程度の情報を、フェザーンの黒狐が掴んでいないとは信じられない。いや、さらに穿ってみれば、ボルテックが開いて見せたフェザーンへの門は、あるいは待ち伏せの罠への一本道かも知れないではないか。ボルテックが二重に裏切っている可能性もあるだろうし、ボルテック自身は帝国に資するべく動いていたとしても、ルビンスキーの方がボルテックの裏切りをさえ逆手に取るような策を用意していないとも限らない。

「卿の主張には聞くべきところがある」

それがラインハルトの結論だった。

「フェザーンの黒狐に策ありとしても、それを撃ち破り得るだけの将帥と兵力、資源を用意したのが今次の作戦である以上、本作戦は当初の計画通り決行する。卿らがわたしの期待に応えてくれると、わたしは信じるが？」

蒼氷色の視線に見つめられ、ロイエンタールは最敬礼でこれに応え、ミッターマイヤーもまた蜂蜜色の髪を前後に大きく動かした。他の諸将や政府首脳達がこれに倣うのを確認し、ラインハルトの視線はオーベルシュタインからキルヒアイスへ移る。キルヒアイスが微かな笑みで答えるのに、ラインハルトはほんの少し頷を引いて応じた。

再び、視線をボルテックに戻す。ボルテックは、彼の背後に佇立するキスリングに支えられて、辛うじて姿勢を維持しているようにすら見えた。

「ヘル・ボルテックについて言えば……」

再びラインハルトは微笑う。凍てついた、氷の碎片をまぶしたかのような、美しくも見る者の背を凍らせる氷点下の微笑に見据えられ、ボルテックは瘡おこりのように全身を震わせた。

「言葉にただけのことはしてもらう。できれば、帝国は卿を礼を以て遇しよう。結果が卿の言葉に見合わなければ、それがいかなる

事情によるものであったとしても、卿の生命を以て償ってもらうことになる。今更、念を押すまでもないことだがな」

額から頬に噴き出す汗を拭うこともできずに棒立ちになるボルテックから、すでにラインハルトの関心は離れていた。壇上から列席者を大きく見渡し、宣言する。

「改めて卿らに伝える。本作戦の作戦名は『フインブルベト恐るべき冬』」

金糸を思わせる前髪を指先で跳ね上げ、ラインハルトの言葉はほとんど音楽的なまでの響きを帯びた。

「来るべき『ラグナロック神々の黄昏』に至る前哨の戦いである。卿らの精励と献身に期待する」

ルッツとレンネンカンフを伴い、キルヒアイスが『バルバロッサ』で帝都を離れたのはその翌日のことである。キルヒアイスだけではない。ロイエンタールも旗艦『トリスタン』を駆ってマールバツハ

「トラーバツハ宙域、ガイエスブルグ機動要塞とその随伴艦隊の待つ宙域へと向かい、ミッターマイヤーは帝都星衛星軌道で彼を待つ帝国軍の大艦隊と合流する。『大演習』に参加した六個艦隊の基幹兵力が、そのまま『人狼』に従い、ローエングラム星系にほど近いヤヴァンハール星系へと向かう。

バイオウルフ

『我と共に来たれ。宇宙は我らと共にあり』

帝都星衛星軌道、ヤヴァンハール泊地への行を共にすべく接近してきた漆黒の巨艦『王 虎』に向かつて『人狼』から信号が

ケーニヒス・ティーゲル

バイオウルフ

放たれた。

バイオウルフ

バイオウルフ

「『人狼』に返信。我、了解す——『人狼』に同航、帝都星軌道を離脱せよ！」

ケーニヒス・ティーゲル

ビツテンフェルトが、その豊かすぎる声量で『王 虎』ブリッジを満たした。ヤヴァンハール泊地には、既に六個艦隊の全兵力が整備を完了して待機しており、ミッターマイヤーとともに帝都を

離れる兵力と合すれば、その総兵力は戦闘艦艇だけで八万隻を上回る。ラインハルトの命令一下、この巨大な兵力がフェザーン回廊に雪崩れ込んだ瞬間、銀河の歴史はその様相を一変するのだ。ダゴン宙域会戦以来一五〇年、この先さらに一〇〇年も続くかと思われた、人類社会を三分した危うい均衡は瞬時に破れ、新たな銀河帝国……ローエングラム王朝による全人類の統治への道を開くことになるだろう。ミッターマイヤーも、そしてビッテンフェルトも、彼らがまさに宇宙の歴史と共にあり、紛れもなく新たな歴史を作り手であることを過たず実感していたのである。

## 来訪者

帝国において、銀河の歴史が濁流となつて動き出そうとしていた頃、フェザーンと同盟はなお小春日和とも言える微睡<sup>まどろ</sup>みのただ中にある。ガイエスブルグ機動要塞の完成とその実証実験の成功、帝国軍艦隊主力による大演習、ヤヴァンハール、およびマールバツハ・トラーバツハ宙域への帝国軍艦隊の大集中などは、ヤン艦隊がイゼルローン回廊の出口まで伸ばした情報収集の触手にこそ、かすかに触れては来ていた。フェザーンの有力商人や一部の情報通などは帝国軍の大動員が迫ってきている事実を掴んではいた。

利に聡く、利益につながる情報への敏感さでは人後に落ちないはずのフェザーン商人たちですら、帝国軍の動きはさしたる感懐を呼び起こさなかった。彼らにしてみれば、これまで一五〇年、帝国と同盟の間で繰り返されてきた年中行事が再開される、ただそれだけ

のことだったのだ。

ひとたび戦端が開かれ、戦闘が激烈さを増していけば、戦場での消耗に伴う大きな物資と資金の動きが起こる。かつて、バルン・カウフが一夜にして巨額の資産を積み上げた奇跡の再来も期待できるところだったが、両国の確執がすでに恒例行事化しているのと同様、濡れ手に溢れるほどの粟を積み上げるべき利権も、その受益者を固定してしまい、第二のカウフが現れる可能性は、ある商人の言葉を借りれば『駱駝が針の穴を通るほど』に極小化されているのだ。

「またかよ、よく懲りないもんだぜ」

ハイネセン

故郷のフェザーンを離れ、同盟首都で遠く噂を耳にした元独立商人の一人が吐き捨てた一言は、そのまま大多数のフェザーン人の気分を代弁するものだったと言って差し支えない。

そして、自由惑星同盟の反応は多くのフェザーン商人よりも遙かに輪をかけて鈍重さを極めたものだった。

ヤン艦隊からの情報に対してネグロポンティ国防委員長の反応は一貫していた。

「また、ヤン艦隊からの与太情報かね。私は忙しいのだ。そんないい加減な情報で私の時間を無駄にしないでくれ給え！」

一方、在フエザーン弁務官ヘンスローと駐在武官長のヴィオラ大佐からも、帝国軍の動向に関する報告はなされてはいたものの、内容は極度に緊張感を欠くものだった。曰く、『帝国軍はイゼルローン要塞への攻撃を準備中のものの如し。ただし、本格的な軍事行動の再開は早くとも宇宙暦八〇〇年中期以降となるものと思われる』。報告を受け、ネグロポンティは我が意を得たりとして何度も頷いたと伝えられる。

「ほうれ見るがいい。やはり帝国軍は内乱の痛手からはたちなおっておらんではないか。もういい加減にありもしない軍事的危機とやらの妄想で私の神経を悩まさないでくれないかね」

ネグロポンティ自身の発案なのか、彼をその地位に据えた人物が、

この『再建のための平和期』に軍部への影響力を拡大しようとした結果のいずれかは判然としない。一二月、クブルスリー大將が『健康上の不安』を理由に統帥作戦本部長を辞任。副本部長のドーソン大將がその地位を引き継いだ。

「軍人としての経歴でははるかに閣下の後塵を排する身ではありませんが、指揮系統上は閣下と言えども我が隷下に服して頂きます」

着任の挨拶で必要以上の倨傲さを装ったドーソン中将改め大將に對して、ビュコック大將もまた自らの自らの穩和さと寛容さの許容量が限界を超えたことを隠そうともしなかった。

この時期、第一四艦隊と第一五艦隊の整備状況は、その任に当たっていたウランフの弁では『一応の数は揃ったとは言っても、訓練度合いは良く言つて七〇パーセント、下手をすれば五〇パーセントを少し超えた程度』に過ぎなかった。が、ネグロポンティは『帝国軍の脅威が遠ざかっている現在、不要不急の制式艦隊整備への優先順位は下げられるべきだ』と主張。結果として、ウランフは両艦隊

の編成と整備、訓練に関する任を解かれた。

「冗談ではない。まだ、あの二個艦隊合わせてやつと帝国軍一個艦隊と戦える程度でしかないというのに！」

せめてモートン、カールセンの両少将を中将に昇任の上、両艦隊の司令官として正式に任命して今後の整備を継続させるべきだとするウランフの意見書は、しかし、おそらくはドーソンのレベルで握りつぶされたようだった。両少将の昇任は見送られ、『当面の仮人事』として両艦隊の『臨時先任指揮官の呼称を許可する』という人を小馬鹿にしたような辞令が与えられたに留まった。

「いずれ、自分たちの傀儡に名誉職として司令官を名乗らせるつもりじゃろうて」

苦々しげに吐き捨てたが、それが決して被害妄想の暴走した結果としての結論ではないこともまた、ビュコックはよく心得ていた。それだけに一層苦々しさが募り、さしもの同盟軍の宿将も、こうなると分かっていたらフオークにクブルスリーが撃たれた後、辞退せ

ずに自分が統帥作戦本部長の任を負うべきだったかと悔やむ日々だった。

僅かにビュコックが胸をなで下ろしたのが、ウランフの処遇と第一艦隊の扱いだった。帝国軍の今後の攻勢に対抗すべく、イゼローン回廊の後背宙域への予備兵力駐留を進めるべし。それがかねてからのビュコックの主張だったが、今回漸くこれが認められる形で、エル・ファシル宙域への補給基地増設と駐留部隊としての第一艦隊の派出、そしてウランフの第一艦隊司令官への正式就任が決定された。一二月二四日のことである。

「これは……クリスマス・プレゼントですか？」

ジョークとも言えなくもない口調のウランフに、しかし、ビュコックは苦々しく首を振った。

「いいや、厄介払いじゃろうて」

ハインセンにはパエッタの第一艦隊と、近い将来に子飼いの提督をトップに据える予定の第一四、および第一五艦隊が常駐する。こ

れで首都の守りは完璧である。ゆえに、扱いづらいウランフは遠くイゼルローン回廊方面に飛ばしてしまおう方がいろいろと都合が良い。ウランフの表情がさすがに苦くなった。ビュコックの原案では、第一一艦隊の予備として第一四と第一五艦隊を交替でイゼルローン方面へ半常駐させることになっていたが、それも『首都の守りを手薄にしすぎる』との理由で却下されている。

「つまりビュコック閣下を孤立させようとしているのですな」

「そうじゃよ。儂にクブルスリーの二の舞を舞わせようとしておるのじゃろうが、そうは問屋が卸さんよ。よいよいになるまでこの椅子にしがみついてやって、やつらが、もういいからいい加減辞めてくれと泣きついてくるまで頑張つてやるだけのことじゃよ」

「泣きつかれたら、お辞めになるのですか？」

「いいや」

寧猛そうに鼻を鳴らし、ビュコックはウランフの言葉を否定した。自分の存在が奴らにとって鬱陶しいものである限り、奴らの視界か

ら消えてやる親切など、死んでもやってやるものか。

七〇歳を遙かに超えている老将に相応しからざる意気軒昂たる鼻息に、やっとウランフは安堵の息をもらした。

「にしても、間に合つて良かった。できれば年明け直ぐにでも艦隊と共にエル・ファシルへ赴いてくれ。折角の年末年始を慌ただしいことで済まんが」

「ということは、年明け直ぐ、とお思ひですか？」

ウランフの省略した言葉を、ビュコックは正確に理解した。頷き、手許の端末を切り替える。

「ヤン艦隊の……何と言つたかな、あの口髭の男」

「バグダッシュですか？」

「そうじゃった。そのバグダッシュからの報告と、それから情報部の、あの亡命者の少佐……ベンドリングか。その二人が一致して帝国軍の本格的な攻勢が七九九年の年明けとほとんど時間差なしに始まると分析しておる」

「本格的……ですか」

「第一次動員が三個艦隊約五万……これはおそらくオスカー・フォ  
ン・ロイエンタール上級大将の指揮する部隊。次が、五個ないし六  
個艦隊。総指揮はキルヒアイス上級大将、もしくはローエングラム  
元帥の直率……これはベンドリング少佐の意見じゃ」

表示されたレポートに視線を据え、ウランフは唸る。逞しい長身  
が軽く震えたのは、ウランフとしては認めたくはないものの、恐怖  
を伴う戦慄に違いなかった。少なく見積もっても帝国軍八個艦隊は  
一〇万隻を越えるだろう。

「全部で八個、または九個……ですか。我々がアムリッツアに動員  
したものを上回りますな！」

「こんな話をすれば、また政治屋どもは戦いは数でするものではな  
いとか何とか、聞いたようなことをほざくのじゃろうが……しかし  
な、ウランフ提督。確かにイゼルローン要塞を相手にする場合、戦  
いは数だけではできません。それがどうも不安なんじゃよ」

「つまり……八個ないし九個、艦艇数にして一〇万隻以上。それだけの兵力を、ただ『トゥール・ハンマー』になぎ倒させるためにイゼルローン回廊に布き並べるような馬鹿を、あの金髪の坊やが選ぶかどうか、ということですね」

「あるいはヤンなら、何か別の意見があるのかもしれないのだが。いずれにしても、来年は我が国は建国以来最悪の年になるかも知れん。それが、どんな最悪なのかは分からんが、いずれにしてもあの若い人には無事でいてもらわねばならんのだ。そのためにも貴官が一刻も早く、イゼルローンを支援する態勢を整えてくれる。それが最大の急務ということになるというわけじゃよ」

「私は決して救国軍事会議を認めるわけでもありませんし、グリーンヒル大将の選択が正しかったと言うつもりもありませんが……」

さすがにウランフの表情にも苦悩が強かった。グリーンヒル大将にしても、第一一艦隊を指揮したルグランジュ中將にしても、動機においては決して誤った地点をその出発点としていたわけではない

はずだった。手段に措いて大きく誤り、結果に至っては最悪となったことは事実であるにしても。

「分かりました。可及的速やかに第一艦隊を動かします。ビュコック閣下には申し訳ありませんが、どんなことがあっても、その席にしがみついていてください。閣下がそこに居座っておられる。それだけが私と、多分、ヤンにとっても唯一の救いなんですから」

「あの若いのはもっと危ないさ」

言葉とは裏腹に、老将の口調は軽かった。

「儂が辞めれば、ヤンはいそいそと辞表を出して、憧れの年金生活とやらに入りたがりじやろう。儂も苦勞するが、ヤンにもそうそう簡単には樂をしてもらうわけには行かんからな」

「それは……そうですね」

苦笑して、同盟軍最高の智将に関するビュコックの觀察を、ウラシフは肯定した。ふと、その表情が動いたのは、ビュコックが端末に表示させていた報告書の署名を目にした時だった。ヴェンツェ

ル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリング情報部少佐。その名が連想を呼び、彼が前職から異動した直後に発令されたある人事異動を思い出させたのだ。ベンドリングが保護者となっている亡命者の少女と同様、亡命者として士官学校に入学し、優れた成績で卒業していった士官候補生のことだ。

異動の対象となつたのは、今年初めに士官学校を卒業して第一四艦隊に見習い士官として配属され、その後正式に少尉に任官したばかりの若い亡命者だった。卒業時の席次は戦略研究科首席。亡命後苦学して士官学校に首席入学し、ヨブ・トリューニヒトの発案による青少年栄誉賞を受賞したクリストフ・ディツケルである。

「難しい人物ですな。育て方を誤ると第二のフォークになリかねない。上手く育ってくれば、少なくともルグランジュのような、生真面目さと用兵能力を兼ね備えた人物にはなってくれるでしょう。これは、育てる側の責任が大きいですな」

彼を、いわば日の当たる部署ではなく、第一四艦隊に配するよう

上申したのも、ディッケルを直接面接したウランフだった。

この人事への風当たりは強かった。戦略研究科首席であり、『自由惑星同盟青少年栄誉賞』受賞者であるディッケルが、編成途上の補充艦隊の、それも分艦隊の幕僚部に配属されたのである。

これまで、同盟軍では戦略研究科のトップクラス卒業生をスーパー・エリート扱いし、超スピードでの昇進の対象者としてきた。かつてのマルコム・ワイドボーンしかり、アンドリュー・フオーク然りである。彼らに倣っていれば、ディッケルも既に参謀中尉として統帥作戦本部、あるいは制式艦隊の作戦参謀部に籍を置いていても不思議ではない。

「折角の優秀な士官候補生ではないか。第一三艦隊に配属し、次世代の艦隊司令官、あるいは作戦参謀としてヤン・ウェンリーの下につかせるべきではないか」

最終的に人事権を握る国防委員会や、あるいはビュコック、ウランフの幕僚からそうした意見は少なからず出されたのだが、ウラ

ンフは無言で首を振っただけだった。最後にはクブルスリー、ビュコックの両大將がウランフの意見に賛成し、ネグロポンティ国防委員長もしぶぶこの辞令にサインしている。

「ヤンの下につけたとしても、素直にあの若いのに私淑するような男ではない、ということかね？」

ウランフの意図を正確に理解したビュコックの問いに、ウランフはただ苦い頷きを重ねた。ウランフが、あり得べきディツケルの未来像として、かつて最も信頼する同僚であつたボロディンや、七三〇年マフィアに名を連ねた元帥達の名を敢えて上げなかつたからだ。そのディツケルに、ウランフがその職を離れると同時に異動辞令が出された。正確には、クブルスリー大將が統帥作戦本部長を辞任し、ドーソンがその地位に就いた直後のことである。異動先は統帥作戦本部の作戦研究部。異動後は中尉に昇任すると言う。

ウランフは眉を顰めずにはいらなかつた。ドーソンが、国防委員長や評議会議長の、軍部に於ける遠隔操作のスピーカーでしかな

いことをウランフは知っている。ドーソンに、こんな気の利いた人事操作を行えるはずはない。この異動の裏にトリューニヒト、あるいはネグロポンティの動きがあり、彼らがディツケルを何らかの手駒として利用しようとしている。自明だった。

『青少年栄誉賞』の一件で、ディツケルがあざとく利用されただけと思っているのは一部の人間に過ぎない。少なくとも、ディツケルにとつて評議会議長は、彼の境遇に同情し、その努力を認め、顕彰してくれた恩人に間違いない。一方、トリューニヒトにしてみれば、軍部の中で使える手駒は多いほど良い。戦略研究科首席卒業生という経歴は、ディツケルをして極めて使いである駒たらしめるのではないか。

ビュコックに告げるべきかどうか……一瞬迷つて後、ウランフは些細な人事のことでビュコックの労苦を増やすべきでないとの判断に傾いた。同盟社会も同盟軍も、完全な崩壊の淵に沈み込む一歩手前で辛うじて踏みとどまっている。ビュコックの裁量を必要とする

事案は山のようにあり、しかも絶えることはない。一介の士官候補生……今は正式の少尉だが……の不自然な人事に心を煩わすことのできる時間は極少のものでしかないはずだった。

今は一介の中尉に過ぎない。背後にその手が本当に動いているとしても、ディッケルが本当にトリューニヒトの手駒として動き出すのは、まだまだ先のことに違いない。今後、ディッケルがフオークのように異常な昇進を重ねるようであれば、それなりの顧慮も必要だろう。

しかし……ウランフは誤っていたのである。

宇宙暦七九九年一月。自由惑星同盟に亡命して七年目の新年を、グレーチェン・ヘルクスハイムは相変わらずの多忙さの中で迎えた。二月早々には、グレーチェンは士官学校を卒業し、士官候補生として訓練艦隊に配属されることになる。通常、二週間近くを与えられ

るはずの年末休暇もわずか四日、一二月三一日から一月三日までに削られた。

最終レポートの仕上げが大詰めになつて、ほとんど休んでいる時間はなかったが、それでも元旦の夜にはベンドリングが、グレーチェンお気に入りのレストラン『コテージ・オブ・レッド・ノーズ赤鼻亭』

ディナーに夕食の予約をとつておいでくれた。三日には、休暇が削られたために、テルヌーゼンに帰郷できなかったロツティが家族へのプレゼントを選ぶのに付き合つて、細やかなニュー・イヤ・ショッピングを楽しむこともできた。後にして思えば、まさに嵐の前の静けさだったし、グレーチェンは長くこの休暇のことを忘れることはなかった。

「——グレーチェン、いる？」

短い休暇を終えた一月四日夜。そのロツティが、相も変わらず図書室に立て籠もっていたグレーチェンを探しに來た。

「ん——何？」

振り返ったグレーチェンの眼差しはやや昏い。公式記録では間もなく一八歳を迎えるが、豊かだった頬がやや薄くなり、紫水晶の瞳が時として小昏い影を宿すようになっていく。彼女を支持する、あるいは彼女のファンである同期生たちは『綺麗になった』と誉めるが、グレーチェンに反感を持つ連中は『目つきが、性格そのものに陰険になった』と陰口を叩いている。

きついといって良い視線を投げつけられ、丸い眼鏡の奥の黒い瞳が柔らかに微笑んだ。

「恐い目してるよ、グレーチェン」

「え……そ、そう？」

「忘れなさいなんて言わないけど、グレーチェンにそういう目で睨まれるのは嫌だな」

グレーチェンは慌ただしく何度か目を瞬く。しばたそうすると、きつく凝った眸の光が和らぎ、一七歳の少女らしい柔らかさが戻ってくる

グレーチェンがどう変わろうと、ロッティの方は一向に変わらない。そう思うと、何か胸の内側が暖かくなる。

ロッティの『忘れなさいとは……』云々は、昨年九月の事件のことだ。サイオキシン麻薬中毒末期で中枢神経に異常を来した中毒患者数名が、士官学校首都校女子寮に乱入した事件。グレーチェンとロッティは彼らに襲われ、その時にグレーチェンは彼らの内の一人を射殺している。

初めての殺人だった。

「いずれ、わたしたちは人を殺すことになるんだ。直接か間接か、早いか遅いかの違いだけだ。わたしの場合は、たまたまそれがちよつと早くなって、しかも直接だっただけだから、気になんかする必要はないし、してもいいない」

ロッティは黙って笑うと、黒髪の頭を左右に振った。そうやって一々反応するのが、もう『気にしています』と言うのと同じだ。端麗さよりも暖かさが第一印象に来る親友の表情がそう語っているの

を見て、グレーチェンは白旗を揚げる。あの時一七歳……正確な物理年齢を言えば一六歳でしかなかった……の少女にとつて、直接トリガーを引いた銃で人命を奪うシーンを目の当たりにするのは決して小さな衝撃ではない。相手がすでに『人』と呼べる存在ではなかったにしても。

「気を遣わせた？」

「ううん」

もう一度笑い、ロッティは要件を切り出す。面会者が来ている。

「面会者？ だって、もうそんな時間じゃないだろう？」

グレーチェンの眉が不審そうに動いた。既に午後一〇時近い。

「そうなんだけど、相手が士官だから」

「士官？」

「ええ。同盟軍の士官が公務で候補生に会いに来る場合、校長の許可があれば時間外でも面会が許されるそうよ……メッセンジャーの子と途中で会って、あなたへの面会者だって聞いたから代わりに伝

えに來たの」

ロツティはちよつと眉間に皺を寄せた。何かを思い出そうとする時の彼女の癖だ。

「クリストフ・ディツケル中尉。統帥作戰本部・作戰研究部付き作戰參謀。任務上の用件で、グレーチエン・ヘルクスハイムへの面会を希望したい……そうよ」

「クリストフ・ディツケル？」

グレーチエンも亡命者である以上、その名に記憶がないわけではない。彼女よりも二年の先輩であり、昨年度、士官学校を首席で卒業した。一年卒業が繰り上がったことで、彼女がディツケルに続き、二年連続で首席卒業生が帝国からの亡命者になるのではないかと囁かれている。

「そのディツケル中尉が？」

「用件は、会ってからでなければ話せないそうよ。候補生が中尉を余り待たせない方が良くと思うけれど？」

頷き、グレーチエンは席を立った。

「ヘルクスハイム候補生、私は君に戦略研究科首席卒業生になってもらいたい」

グレーチエン・ヘルクスハイム候補生です……敬礼しての自己紹介を終えるか終えないかのタイミング。前置きもなくぶつけられた一言に、グレーチエンは目を瞠った。

グレーチエンの、ディツケルの第一印象は悪いものではなかった。鍛えられた長身と分の厚い筋肉質の体躯。美男子ではないが、目鼻立ちは生真面目そうに鋭角的であって、女性の視点から見てもそれなりに魅力的だ。帝国では平民出身であり、亡命に際しては彼女同様、家族のすべてを失い、その後苦学して士官学校に首席入学。そのまま四年間、首席を守り通して卒業した。経歴もまた、ディツケルの人柄に好意を抱く理由には十分だ。

「は——？」

公務での面会と聞いていただけに、グレーチエンが面食らったのは当然だった。ディッケルの言葉は、彼の希望、あるいは願望であつて、同盟軍中尉としての公務に当てはまらうとはとても思えない。「君は首席卒業生になりたくないのか？」

「——なりたいです」

たたみかけられ、さすがにグレーチエンの声に棘が混じつた。なりたいからこそ、こうして睡眠時間さえ削って課業に取り組んでいる。いきなり訪ねてきた中尉殿のお相手に潰している時間が惜しいくらいに。

きつく引き締まつたグレーチエンの表情に、彼女が反論を飲み込んだのを察したのかも知れない。ディッケルの表情が幾分和らいだ。「良い返事だ、ヘルクスハイム候補生。私が統帥作戦本部に所属していることは知っているな？」

「はい、中尉。知っています」

「私が亡命者であることも。君と同じに」

「ディツケル中尉のことは有名です」

グレーチエンの応答が意に叶ったらしい。ディツケルは頷く。さりげなく面会室の中を見回すのは、これからが本題であることを知らせるつもりなのだろう。無論、面会室にはグレーチエンとディツケルしかない。

リーグ・ダス・ゼーファルケン

「海 鷹 会 という会がある。それに参加しろ」

「中尉？」

聞いたことのない固有名詞に、グレーチエンの目が一層険しくなった。

「お話が見えません」

リーグ・ダス・ゼーファルケン

「反問は不要だ。海 鷹 会 に所属するんだ。そうすれば、戦略研究科首席の座が手に入る。それだけではない。卒業後は、統帥作戦本部への任官を約束する」

「中尉？」

「我々は亡命者だ」

ドイツケルの声が低くなった。一度は生真面目なそれとして好意か、あるいは好意に近いものを抱いた目つきだったが、今はグレーチェンに最も不快な記憶を呼び覚ます、ある種の彩りを帯び始めるのに気づいて、それと分からぬように奥歯を噛みしめた。喻えようもなく不快な記憶。一昨年のクーデター。テルヌーゼン衛星軌道基地で、彼女を一方的に『裏切り者』呼ばわりし、重傷を負わせた救国軍事会議の兵士の、あの口調とおなじ響きだ。

グレーチェンは右手で胸元を押さえた。気のせいかも知れなかったが、あの時の戦傷跡がずくりと鈍く深い疼痛を伝えてきたような気がした。

「我々がどんな思いで祖国を捨てて亡命を選んだかも考えずに、帝国出身者だ、亡命者だと蔑む連中。この国はそんな連中で一杯だ」  
「しかし、中尉。同盟はわたしたちを受け入れてくれました。士官

学校にも、その実力さえあれば入学し、中尉のように士官学校首席卒業生として表彰しさえしてくれるではありませんか！」

「上辺はそうだ。君も、いままでは感じなかったはずだ。士官学校の中は、まだ建前の通じる世界だ。だが、これからは違う。このまま何もしなければ、どうなるか教えてやろう、ヘルクスハイム候補生」

たとえ成績上は戦略研究科首席となっても、必ずそれを辞退するよう圧力がかかってくる。自信たっぷりドイツケルは言い切った。自分の時もそうだったから——と。

「ブランドン候補生か、彼に首席、具体的には卒業式での卒業生総代の役を譲れと言ってくる。校長のシェフェール中将自らが、だ」  
「……」

「その次は任官だ。統帥作戦本部や艦隊司令部、あるいは制式艦隊の作戦参謀部、そんな配属先が回ってくることはない。よくて第一四か第一五艦隊の戦闘集団司令部付き、下手をすれば辺境の補給基

地司令部付きで何年も放置されるのがオチだということだ」

「海鷹会に入れば、希望する部署へ行けると仰るんですか、中尉」  
「そうだ」

「海鷹会が人事権を持っているとでも？」

「君は貴族の出身だったな、ヘルクスハイマー伯爵令嬢マルガレータ」

「その名で呼ばないでください」

「伝手とかコネという言葉がどういうものを学んだ方が良い。確かに同盟軍の人事権は国防委員会にある。だが、そうした組織は人が構成している。そうした人たちの中には亡命者も数多く含まれているということだ」

「それと、わたしがヘルクスハイマー伯の娘であることと何の関係があるのですか」

「ヘルクスハイマー伯ほどの大貴族なら、伝手にしてもコネにしても求められる側であって、求める方にまわることにはあり得なかった

だろうからだ」

「ドイツケルは口数の多い人物ではなさそうだった。彼自身、第一四艦隊の分艦隊司令部付きだったものが、突然のように統帥作戦本部へ異動したらしい。それもまた海鷹会とやらいいう組織の力だというのだろうか。」

「チャンスには前髪はあっても後ろ髪はないと言うぞ。逃して後悔するな、ヘルクスハイム候補生」

グレーチエンでも迷う時はある……と言うより、この時の彼女は自分の年齢から来る限界を痛いほど感じていた。彼女の人生経験はわずかに一七年に過ぎない。世の中から言えば、まだ小娘と言つていい年齢。普通なら、やっと高等学校の生徒であり、両親の保護の許に世の中の風の冷たさとは無縁でいられたはずの年頃だというのに。

だが、グレーチエンを捉えたのはそうした理不尽さ、あるいは不

リーグ・ダス・ゼーフアルケン

ハイ・スクール

運への不満ではない。むしろ、自身への忸怩たる思いだった。

「一七歳……か」

ある思いが、グレーチェンの胸裡を熱くした。あの者……今のロード・エンGRAM公ラインハルト、それにジークフリード、ジークフリード・キルヒアイスと初めて出会った時、彼らはまだ一六歳ではなかったか。僅か一六歳で、彼らは同盟領深くに侵入し、亡命途上にあった彼女と彼女の一族を捕らえ、最大の軍事機密を奪回して去っていった。今の自分は、もうあの時の彼らよりも年上でさえあるのだ。

彼らなら、ラインハルトなら、あるいはジークフリードなら、このような時にどう判断するだろう……思い、グレーチェンは心の中で激しく頭を振った。違う。あの時、自分は自分を父の娘、ヘルクスハイマー伯爵令嬢としての矜持で支えた。キーコードの引き渡しを拒めば、あるいは拷問や薬物で、肉体も精神も取り返しからだ　こころのつかないほどに壊されてしまうことになるかも知れなかった。一〇歳の自

分にそこまでの覚悟があつたわけではない。彼らの前に頭を下げ、取り引きを申し出る気にはどうしてもなれなかつた。なぜなら、自分マルガレータ・フォン・ヘルクスハイマーであり、他の誰でもなかつたから。

硬く強ばつていたグレーチエンの頬が緩んで、浮かびあがつた微笑を、ディツケルは奇異なものでも見るかのように注視した。

「何を笑っているのだ、候補生」

「失礼致しました、中尉」

意識して笑みを消し、グレーチエンは真つ直ぐにディツケルを見つめる。初めて、ディツケルが微かな狼狽を浮かべて視線を、ほんの少しだけ逸らしたような気がして、グレーチエンは意識せず、もう一度微笑つた。ラインハルトやジークフリードは、決して彼女の視線から目を逸らすことはなかつたというのに。

グレーチエンが微笑つたのは、彼の言葉に欺瞞があると直感したから。それと、彼がなお、同盟の社会が今のまま続くと、そう信じ

ていることへの滑稽さだった。特にラインハルトとジークフリードのことを思い出した瞬間、彼らが為したことと為そうとしているだろうこと。それらと、眦を決した形相でディッケルが力説する、海鷹会とやらの存在の落差が、知らず彼女の頬を緩めさせたと言っている。

ラインハルト・フォン・ローエングラムは既に帝国を制圧した：  
：とヴェンツェル・ハインリッヒは言っていた。銀河帝国皇帝に準

じる、いや、凌ぐだけの権力を手中にした時、あの者が大人しく帝

ラインハルト

ラインハルト

国領土の経営だけで満足しているはずもないではないか。あの者が為そうとしていることが、形として現れた時、グレーチエンにとって戦略研究科首席卒業などはもとより、配属先や階級ですら余りに小さな問題となってしまうに違いないのだから。

もう一つ、グレーチエンが思い出したのは、同盟の国父アーレ・ハイネセンの言葉だった。権利には義務が伴う。ハイネセンはそう

言わなかったか。海鷹会とやらに属することで得られるべき権利を、ディッケルは事細かに説いた。しかし、それらの権利を得るための義務を何も語らなかった。語れなかったのか、語ることが不利に働くと判断したからなのか。いずれにしても、そうしたディッケルの態度そのものが海鷹会がまともな組織ではないと証するようなものだ。

淡い色の金髪を左右に振りやつて、グレーチエンは今度は意識しての微笑みで、その端正な表情を飾った。

「折角のお勧めですけれど、ディッケル中尉。お勧めには従えませんが」

「なに——!?」

「戦略研究科首席の座は自分だけの力で手に入りたいですし、任官先がどうあろうとも、わたしはその任地で力を尽くします。海

鷹 会 のことは聞かなかったことにさせて頂きます。公的な組

ダス・ゼーファルケン

リーグ

織なら、候補生であるわたしが何も知らないのは不自然ですし、私的な組織であるなら、公務によってお話に来られたはずの中尉が職務規定違反をなされたことになります」

「――」  
「同じ亡命者として、敬すべき先輩であり、先任者である中尉がそのような不名誉なことをなされたなどと、わたしは信じたくありません」

その間もグレーチエンは目を逸らさない。その言葉を言い切ることが、短期的には自分にとって酷く不利な状況を作り出すことになるのかも知れない。分かっていたが、妥協はできなかった。ここで自分を枉げてしまったら、その機を得た時に、彼ら、を真っ直ぐに見つめることができなくなる。グレーチエンにとっては、そちらの方が恐ろしかったし、どうしても受け入れることができなかった。

――損な性分ですね、グレートヒエン。

呆れたように首を振る保護者に、グレーチエンは心の中だけで頭を下げた。済まない、ヴェンツェル・ハインリッヒ……と。

ディツケルは視線を逸らした。そのまま、グレーチエンの視線を真っ直ぐに迎え入れることはなかった。

「分かった、ヘルクスハイム候補生。君の判断は判断だ。それをとやかく言うつもりはないが、馬鹿なことをしたと悔やむことになるぞ」

「仰っている意味が分かりません、中尉」

立ち上がり、直立不動の姿勢を取る。これ以上、言葉を交わす意思のないことを示す拒絶の姿勢だった。無表情だったディツケルの頬が紅潮し、ほんの一瞬、その厳つい顔が怒りに歪んだように見えた。

「覚えておけ、候補生！」

「覚えておきます、ディツケル中尉」

敬礼——さらにディツケルの顔が歪み、それから再び完璧な制御

を見せて無表情に戻った。グレーチェンの視野に残像を残すほどに鮮やかな答礼の後、ディツケルの姿は面会室から消えた。

ディツケルの捨てぜりふが現実のものとなったのは、その一ヶ月後である。

卒業式の日程が決まった時、グレーチェンは校長のシェフェール中將に呼び出され、繰り上げ卒業生徒の総代をブランドンに譲るように命じられたのだ。

「私が亡命者だからでしょうか」

ある程度の予想はしていたから、グレーチェンは激昂こそしなかった。毛を逆立てた猫科の猛獣めいて光る、アメシスト紫水晶の瞳に凝視されたシェフェール中將は、落ち着かなげに視線を宙にさまよわせたのだ。グレーチェンは軽い失望に胸を噛まれるのを感じる。ここにも一人、正面から彼女の目を見られぬ人がいる。

「聞き給え、ミス・ヘルクスハイム。ここは自由の国だ。信条や出身で処遇を左右されるなどと言うことはあつてはならぬことなのだ」  
「では、何が理由でしょうか。理由を聞く必要がないと言うことであれば、こうして出頭をお命じになる必要もないことと思ひますが」  
「いや、つまりだな……今回のこの命令は、君の出自に対して何らかの偏見を示したものではないと言うことを言っておきたかっただけだ。これは、政府の方からの指示なのだ」

「そう言うことであれば、了解致します。特に私に異論があるわけではありません。わざわざ、ご説明を頂き、感謝の極みです」

言い切つたグレーチェンだったが、それがディツケル、ひいては海鷹会からの報復、あるいはそれに類するものであることを察するには充分だった。

さらに海鷹会は、それだけでは済まさなかつた。

卒業式を間近に控えた一日、再びシェフェール中將に呼び出されたグレーチェンは、内示されていた第一艦隊への配属が取りやめ

になったことを告げられた。

「ルエヴェト宙域……ですか？」

再び閃紫の視線に曝される羽目になったシエフェールは、最初からその目を見ようとしなかったし、最早グレーチェンもこの上官に何も期待しようとはしていなかった。

フェザーン回廊にほど近いルエヴェト星域。その前進偵察基地J1二七の駐留艦隊旗艦付き作戦士官。それがグレーチェンに提示された、最初の赴任地だった。駐留艦隊と言っても三〇〇隻に満たない中小艦艇があるだけで、基地全体を合わせても兵員は一〇万に欠ける。

かつては、この宙域には少なくとも二個から三個の制式艦隊が常駐し、万一にもフェザーン回廊を突破した帝国軍からの奇襲を受けないよう警戒にあたっていたものだという。しかし、イゼルローン要塞が建設され、主要戦場がイゼルローン回廊の同盟側出口が中心となるに連れ、フェザーン回廊出口の防禦はなおざりにされるよう

になった。アムリツツア以降、極端な兵力不足に陥った同盟軍は、この方面の警備を手薄のままに放置せざるを得なくなつた。

「これは、フェザーン方面の防備強化の一環なのだ」

シエフェール中将の口調は、いかにも言い訳めいて弱々しく語尾を掠れさせていた。

「最優秀の戦略研究科卒業生を配備するのだからな」

グレーチエンにとつて最大の意外事は、ティフリー・ブラントンが彼女と同じく、このJL二七基地をその最初の配属地としたことだった。第一艦隊作戦参謀への配属を断り、敢えてイゼルローン回廊、またはフェザーン回廊方面を志願したという。

それならいつそイゼルローンの第一三艦隊に配属すれば良いのに……とグレーチエンなどには思うが、どうやらトリユーニヒト議長はヤン・ウェンリーに対して、なにやら含むところがありそうだった。お気の毒にね——ゆえに、ブラントンに向けるグレーチエンの視線は自然に同情の微粒子を交えることになる。

こうして——歴史の大転換点を前にして、グレーチエン・ヘルクスハイムは、その最大の激流を受け止める宙域に自らの身を置くことになったのだが、それは同盟政府の思惑と運命の偶然の目がはじき出した気まぐれな数字の結果ということだった。

☆☆☆

同じ頃、イゼルローン要塞のヤン・ウェンリーの許には、自由惑星同盟政府からの召還命令が届いていた。

超光速通信のホットラインで、ネグロポンティ国防委員長から直接の命令を受けとったヤンは、その命令を文面化したプレートを数分余りも見つめていた。心配そうに見つめる副官のフレデリカ・グリーンヒルの視線に気づいて微笑って見せた。

「呼び出しを受けたよ。ハイネセンまで出頭せよとさ」

「なにごとでしょうか？」

「査問会に出るように、だと。どうも私の記憶にはないが、こいつ

はどういう代物か知っているかい、大尉？」

「軍法会議はともかく、査問会などと言うものは同盟憲章にも同盟軍基本法にも規定がありません」

「超法規的存在ってやつかな」

「つまり、恣意的なもので法的根拠を持たないということですよ」

フレデリカの言葉にヤンは黙って頷いた。法的根拠はなくとも、法制度上、あるいは同盟軍の指揮系統上、国防委員長は軍政・軍令のトップにある。その国防委員長がヤンにハイネセンへの出頭命令を出すこと自体は、立派に法的根拠を持つ。喩え、査問会がネグロポンティ委員長、あるいは彼の背後にある誰かの極めて恣意的な意思に基づいて開催されるものであったとしても、だ。

ヤンが呼び集めたのは、要塞事務監のキャゼルヌを初めとして、防禦指揮官のシェーンコップ少将、参謀長のムライ少将、副参謀長パトリチエフ准将、分艦隊司令官アッテンボロー少将、メルカツ客員提督の他、フレデリカとユリアン、それにバグダッシュ中佐の

九人だった。

「基本的に私に好意的なものではなさそうだ。無用に政府を刺激するのは止めておこう。グリーンヒル大尉には同行してもらおうが、ユリアンにもイゼルローンに残ってもらう」

異論のありそうなユリアンに、ヤンは素早くたしなめる視線を送った。

「誰か適当な護衛の人材をみつくりてくれないか、シェーンコツプ少将」

「知勇兼備の私ではいかがですか」

「聞いていなかったのかな、少将。私は事を荒立てたくないと言っただよ」

「この時期に提督をイゼルローンから離すのは大変な愚策だと思いますが」

シェーンコツプがルイ・マシユンゴ准尉を推薦するのを待っていたように、口を切ったのはバグダッシュだった。一昨年のクーデタ

ー以来、バグダツシュは文字通りにヤン艦隊の耳目を担当する者として、合法非合法を問わず内外からの情報収集を続けている。同盟軍の他の組織が完全に感覚を鈍磨させた微睡み……バグダツシュに言わせれば昏睡の中に陥っている間、ヤン艦隊が帝国とフェザーンの動向に関する豊富な情報の集積に成功したのはバグダツシュの功績だった。

「帝国軍は急速に戦備を整えています。明日にも行動を開始するかも知れません。そんな時期にヤン提督に要塞を空けろと命じるなど、非常識の極みでしょう」

「で、そういうお前さんは、この呼び出しの裏を調べていないのかね」

シエーンコップの指摘に、バグダツシュは小さく唸った。

「はつきりとは分かりませんがね。裏で動いているのはフェザーンだろうと思いますね。フェザーンの自治領主府がしきりに弁務官とコンタクトしているらしいと聞いています。連中があることないこ

とを同盟政府に吹き込んだ結果がこれだったとしても驚きませんね」  
「で、この査問会の意図は何だと思う？」

「フェザーンのですか？ それとも同盟政府の？」

「両方だ」

肩を竦め、バグダツシュは視線をヤンに向けた。自分は情報の収集屋であり、言ってみればコンピュータの入出力装置のようなものだ。そんな外部装置に、情報の分析を求めないでくれ。彼の表情はそう言っていた。

「同盟政府の意図は……さあ、分からないな。バグダツシュ中佐は、こんな時期に、といったけれど、ひよつとするとこんな時期だから、かも知れないし」

「どういう意味です？」

「それが分かったとしても、拒否はできないだろう。虚栄と背徳の都へ行かざるを得ないらしいよ」

半ば冗談めかした口調で断を下し、ヤンは不在中の駐留艦隊運用

の代行を依頼し、アッテンボローには万一の際にはメルカッツの指揮に服するようにと指示する。

「そうですね。ヤン提督がメルカッツ提督を信頼なさるのですから、私もメルカッツ提督のことはヤン提督同様に信頼させて頂きます。信頼に応えて頂けると幸いです、メルカッツ提督」

聞きようによつては無礼極まりない、そのくせ全幅の信頼を示したとも言えなくもない表現で、アッテンボローはヤンの指示を肯った。メルカッツは小さく頷き、『期待に応えられるよう務めよう』と応じた。要塞全体の指揮は、次席指揮官のキャゼルヌが執るものとして、ムライとパトリチェフはそのままキャゼルヌの補佐に入ることになる。

「……それでヤン、一つだけ聞かせてくれ、さっき『こんな時期だから』と言ったように聞こえたんだが」

ヤンの指示が終わると、念のためがと前置きしてキャゼルヌが口を開いた。

「あれはどういう意味だ？」

ヤンはため息をついた。査問会への召還命令を見た瞬間、ヤンはその意図に関する幾つかの仮説を組み立てていた。どうやら、最悪の仮説が最も高い可能性をもっているようだったのだ。できれば話さずに済ませたかったのだが……

「根拠があるわけではないんですけどね、バグダッシュ中佐の言うように、フェザーンと同盟政府の思惑が一致してこの命令になったとしたら、意図は一つでしょう。私を要塞から引き離すことです。こんな時期だからこそ」

これもヤンらしく軽い口調で放たれた一言を、一同は暫く理解できないようだった。真っ先に理解の淵に手をかけたのはメルカツツらしかつた。表情の動きの少ない、眠そうにさえ見える風貌が動き、細い目が睜られたのは明らかに驚きだった。

「ヤン提督、卿の言いたいのは……」

「ええ」

それ以上の言葉を押しとどめ、ヤンはもう一度、メルカッツに頷いて見せた。

「ですから、後のことをお願いします。くれぐれも、目前の状況だけで判断されぬようお願いします。メルカッツ提督なら、軽々に敵に乘せられることがないと信じてのお願いです」

驚きの表情を、メルカッツは明らかな怒りに変えたようだった。長年、この沈毅な老提督に伝えてきたシュナイダーですら、メルカッツのこんな表情は目にした経験はない。彼がその場にいれば、必ずそう証言したに違いなかった。

宇宙暦七九九年一月三日、ヤン・ウエンリーはグリーンヒル大尉とマシユンゴ准尉を伴い、巡航艦『レダロ』で同盟首都へ向かって出発した。内外の情勢を勘案し、最大巡航速度による航行でハイネセン到着は一月二二日が予定された。『レダロ』では航続距離に問題が出るが、対策としてエル・ファシル宙域で第一艦隊の補給部隊と会同する手配がなされた。その際、新たに第一艦隊を指揮す

ることとなつたウランフ中将との会見も予定に入り、ヤンとしては『虚栄と背徳の都』への旅路に細やかな救いを見出す思いだつた。

そうして、ヤンがイゼルローンを離れた、その一週間後の一月一日のことである。

回廊内の哨戒航行に当たつていた戦艦『ユリシーズ』ブリッジで、艦長のニルソン中佐は飛び込んできた緊急電に目を剥いた。

「こちら銀河帝国軍戦艦『バルバロッサ』。和平交渉のため、イゼルローン要塞への入港とヤン・ウェンリー提督との会見を希望する。繰り返し……」

それがギャラルホルンの奏でる旋律の、最初の第一小節であろうとは。この時の同盟では誰一人、夢想だにしなかった。

## 信すべき未来

「ルエヴェトのJL二七基地ですか……」

グレーチエンの保護者……ヴェンツェル・ハインリツヒ・フオン・ベンドリング少佐は、彼女の任地を耳にした時、口にした料理に味の好みを遙かに超過した香辛料が使われていた時のような顔をした。

「うん……それで、ヴェンツェル・ハインリツヒ、リーグ・ダス・ゼーファルケン海鷹会

のことだが、わたしは馬鹿なことをしてしまったのかな」

「そうですね……世間一般的に言えば、若気の至りとか、甘過ぎ、とか言うんでしょうね」

「やっぱり、そうか。でも、ヴェンツェル・ハインリツヒ、言い訳はしないぞ。これはわたしの選択だから」  
チョイス

「分かってます。ただ、この海鷹会について言えば、あなたの選択

は大きくは誤っていない、私はそう思いますね」

「そなた、また、わたしだからと目が甘くなっているのではないのか」

「そうではないですね。私だとしても、この誘いには乗りませんよ。まあ、相手が私なら、ディツケル中尉ももう少し言い方を変えたでしょうけれど。要するに、中尉はあなたを甘く見ていた。一七歳の小娘、それも帝国貴族のお嬢様だと思って半分は馬鹿にしていたということなんでしょうね」

ベンドリングもグレーチエンと基本的には同じ判断だった。海鷹会なる組織に所属することで得られるメリットを、ディツケル中尉は熱心に語ったが、そうしたメリットを得られるための義務をまるで語らなかつた。

「契約の本質は双務ですからね。権利を得るには先ず義務。こちらのメリットを得るには、まず相手にもメリットを与える規定になっていなければ。そう考えると、ディツケル中尉のお話は一方的にあ

なたばかり有利な片務契約です。これは契約ではなくて、詐欺です」  
「わたしばかりが有利だと、詐欺になるのか……ああ、そうか、こ  
ちらがたつぷり良い思いをさせてもらった辺りで、『世の中に無料  
というものは絶対にないのね』と言い出すわけだな」

「どこから取ってきたんですか、その言い方は？」

ちよつとおどけめかしたグレーチエンの言い回りに顔をしかめた  
ものの、ベンドリングは彼の被保護者の聡明さと明晰さとを祝福し  
た。彼の考えが正しければ、『世の中に無料ただというものは絶対にな  
い』どころではないのだから。

「グレートヒエン、この場合の代償は金銭とか地位とか、そうした  
ものではないと思いますね。勘ぐり過ぎかも知れませんが」

「わたしの生命いのちか？」

ずばりと言い切られ、ベンドリングは絶句する。グレーチエンは  
笑ったが、目の光の強さはそのままだった。

「つまり、何かの捨て駒にされるといふことだろう。それも軍の任務というわけでない、誰かの都合を満足させるために、絶対に拒否できないようなところに追い込まれてしまつて、犬死にするしかないなる……違うか、ヴェンツェル・ハインリツヒ」

「ご明察……ですね」

ベンドリングは言う。情報部で少佐と言えば一定以上の枢機にも関わることになる。その彼の耳にも、海鷹会などという組織が入つてきたことは一度もない。同盟軍情報部でのベンドリングの立場は非常に微妙で、機微な情報が余さずに手許に入つてくると言うことはないが、軍の人事を左右できるような私的組織があれば、その動きが目に入らないことはほとんど考えられないのだ。まして、亡命者を組織したような、軍内部の団体が実際に存在していたならば、情報の破片としてでもベンドリングの目に触れることになったはずである。

「それにディツケル中尉は平民出身です」

「そう言う言い方は嫌いだ、ヴェンツェル・ハインリツヒ」

「そうでないのです。中尉のような、言ってみれば自分の力だけを信じて上へ上がっていかうとするような人物が、同じ亡命者とは言っても、門閥貴族に連なるあなたや私に、そうした便宜を、単なる好意だけで申し入れてくるはずはありません」

帝国からの亡命者は、出身ごとでの排他性が強い。ベンドリングの説明にグレーチェンは納得した。

「それにしても、そなた、人が悪くなったのではないか。昔はもつと率直な人柄だったと思っただけ」

「この国にいて、しかも指導者達を間近に見ていれば、誰だって人が悪くなりますよ」

ベンドリングは苦笑した。

「それで、ルエヴェトですが……」

「ポレヌトよりも更にフェザーン回廊寄りだ。七年前もそうだったそうだが、フェザーン回廊の出口宙域に哨戒部隊を出しているのは

ＪＬ二七だと聞いた」

とは言え、問題は任地だった。海鷹会の罾からは逃れたとしても、ＪＬ二七基地にはベンドリングを浚面にさせるだけの問題があった。「そうですね」

五年前、ラインハルト・フォン・ミューゼル中佐率いる『ヘーシユリツヒ・エンチェン』は任務遂行の過程で多数の同盟軍艦艇を沈めている。その過半がＪＬ二七の駐留部隊であつたとすれば、グレーチェンは、間接的には彼女が友軍の仇と考えている部隊に赴任することになる。

ベンドリングの表情を歪めさせたのは、しかし、そんなことではなかつた。ＪＬ二七の艦艇を沈めたのはグレーチェンではなくミューゼル中佐である。グレーチェンに危害を加えて、五年前の復讐を果たそうなどと言うほど、精神の歪みと気の長さを同居させた偏執者がＪＬ二七に今も残っているとは思えなかつたからだ。

それよりも、ベンドリングが気にしているのは、おそらくはグレ

ーチェンの直属上官になるべき人物だった。

「ジョー・ゲニユタ・ヒラーデ大佐？」

「アムリツツアの生き残りです」

「アムリツツアから生きて還ったなら英雄ではないか」

唇を嚙んでから、グレーチェンはやや上目遣いに紫水晶の目を光らせた。士官学校時代に随分上背の伸びたグレーチェンだが、残念ながら身長ではどうしても彼女の保護者には届かないようだった。

グレーチェンには、ラインハルトのように『自分を置き去りにして自分だけ背を伸ばすのか』などという苦情を申し立てるつもりもない。むしろ、自分がベンドリングよりも背が高くなったりすれば、保護者としての彼への信頼の想いと視界との整合がつかなくなつて困惑してしまつただろう。

「その目をしないで下さい、グレートヒエン。怖いですよ」

「そなたでも怖いというのか」

弱つたな、これでは嫁の貰い手に困つてしまうぞ……などと呟く

のは、グレーチェンがベンドリングを相手にした時だけの冗談である。半分は本気だったのかも知れないが。

「ヒラーデ大佐ですが、ひどい亡命者嫌いです」

アムリッツアからの生還者と言えば聞こえがよい。実際には、血気に逸るの余りに艦列から乗艦を突出させすぎたのだ。そこを敵の駆逐艦の群れに横撃され、宙雷を束にして叩き込まれたのだという。一瞬に焰に包まれた艦から、辛うじて脱出したヒラーデを出迎えたのは、一面の白眼視だった。何しろ脱出できたのは彼一人であり、艦長としての当然の義務である総員退艦命令すら出していなかった。彼を救命ポッドに押し込み、脱出させたのは従卒の少年兵だったが、その少年兵を伴おうとすらしなかったヒラーデが、生命惜しさに真っ先に逃げ出したと非難されるのは謂われのないことではなかった。ここで反論を慎めば、まだ救いがあったのだろうか、ヒラーデは沈黙を守れなかった。複数の雑誌、オンライン・ニュース、そして自費での出版。自己弁護と言い訳に満ちた発言を繰り返せば繰り返

すほど、ヒラーデに向けられる蔑視は強まり、同盟軍での待遇は悪化した。

「その結果がJL二七への左遷……か」

「……悪いことにヒラーデ大佐からすると、彼をそうした境遇に陥れたのは帝国軍であり、亡命者はその帝国人だから、彼の仇敵の同類だ、とこういう論理になるようです」

「ヴェンツェル・ハインリッヒ……」

ちよつと困つたように眉を寄せ、うなじの半ば辺りまで伸びている淡い金髪を、グレーチェン右手で梳き上げた。左右に髪を揺らせて、唇を尖らせた。

「それではまるで、テルヌーゼンの基地の……何とか言う指揮官――」

「アルノルドシヨン大佐」

「そのアルノルドシヨン大佐と同じではないか。わたしにどうしろというのだ」

「生きて還ってきてください」

「うん——？」

「あなたのいない同盟などに居続ける意味などありませんからね。あなたに万一のことがあったら、私はこの国を見捨てますよ」

グレーチエンは目を丸くした。

「ヴェンツェル・ハインリッヒ——今、何かもの凄いことを言われたような気がするのはわたしだけか？」

「そうかもしれません」

柔らかい表情を崩さずに言つてのけるベンドリングに、グレーチエンはため息をついた。僅かに、その頬が紅くなっていた。

「分かった。絶対に生きて還ってくる。何年くらいだと思ふ？」

今の状況、つまり同盟が崖っぷちに指先をかけただけの状態で生き延びることのできる期間は——問うグレーチエンに、ベンドリングは黙って右手を突き出した。人差し指と中指が示したのは無論Vサインではなかった。

「最大です。下手をしたら、この半分でしょう」

「分かった……だから、ヴェンツェル・ハインリッヒ、そなたはハインセンにいてくれ。わたしについてくるようなことはしないでくれないか」

「——と言うと？」

「でないとながたしが帰るところがなくなってしまう。そうだろう。わたしはともかく、変なところへ異動してしまったら、身動きがつかなくなるのはそなたの方だ」

「行動の自由を確保しておけ、ということですね」

「そなたは嫌だろうけれど、わたしに何かあった時、ヘルクスハイマー伯爵家の資産の処分はそなたに任せる。そう手続きをさせてくれないか」

「私がどうかなくなってしまったら、その時はどうすれば宜しいですか？」

「お返しかな？」

「そうですよ」

しれつとした顔で顔を背けるベンドリングに、グレーチェンはふつと吹き出した。

「そなたがいなくなってしまうたら、資産などどうでも良い。諦めて無一文になっても構わないし、その時は……そうだな」

ふつと真顔に返って、グレーチェンは言葉を切り替えた。今のところは士官学校の授業以外では余り使う機会のなくなっている  
帝國公用語  
母国語だった。

「その時は、あ、あの者に頭を下げて、わらわ妾を宮廷の侍女にでも使ってもらおうでしょう」

ローエングラム公

「あなたを侍女に使うだけの無謀さが、彼の人物にあれば、ですけれどね。あなたにしても大人しく仕えるつもりなどないのでしやう？」

「ああ、その通りだ。それに、あの者の宮廷なら、侍女といえども仕えるのは楽ではあるまい。『でもしか侍女』ではとても務まるとは思えぬ」

同じく帝国公用語で応じ、顔を見合わせた二人は同時に笑い出した。待ちかまえる前途が決して明るいものではない。むしろ暗黒と言っていいことを二人は知っていた。しかし、それでも、グレーチエンにとつても、またベンドリングにとつても、将来は信じるに値するものだった。互いが無事でいてくれる限りは、必ず——と。

*To be Continued.*

